

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
文久三年六月ノ二止

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
(紙数一―三枚)の記載あり〕

目録

- 英艦隊前ノ濱海ニ廻航国書ヲ提出ス
- 安田助左衛門日記鈔
- 英国々書ニ対スル答書
- 艦隊ノ挙動六月二十八日
- 在館琉球人避難
- 英艦隊薪水魚卵ノ類ヲ買ハムト乞フ及ヒ刺客人名
- 和平破レムトス六月二十九日

市來正右衛門寺師次右衛門書翰

市來静里寺師宗道へ与ル書

四文銭新鑄布告

全国一般米価高直

江戸在邸岩下方平外国事件報告ノ大意

当時ノ雜記道島正亮紀事鈔

薩州功罪判案

所司代牧野備前守殿へ差出候書付写

薩州之罪案

鹿兒島灣内各所砲台装置ノ砲数

国父久光公御旗本隊

三八八 英艦隊前乃濱海ニ廻航国書ヲ提出ス

六月廿八日晴微
東風

夷艦ハ卯ノ前剋頃ヨリ蒸氣ヲ立テ、辰下刻頃拔錨ノ形

況ナリト告ク、間モナク前ノ濱へ廻航シ、辨天・新波

戸兩砲台ノ前面七八丁許リノ所ニ投錨ス、

七艘ノ中大軍艦一艘、所謂旗艦ブレカツト舶ト見ヘタ

リ(凡五六十間ト見ユ、砲門ハ左右二段ニ、
凡廿四門ヲ開ク、艦名ユラニユースト云フ)四艘ハ三十余間、長短

各差アリ、砲門左右五六乃至四五門ヲ開キタリ、二艘

ハ所謂砲艦小形ニシテ二十間内外、砲門ハ左右二門ヲ開キタリ（開ク処ニ依レハ、一艦隊ハ大小八艘ナリ、然ルニ二艘ハ支那上ノ海ヘ去ル廿三日発航セリトシテ報告或ハ運搬ノ為ナリシト云フ）

七艦共ニ投錨シ、暫時ニシテ脚舟四艘ヲ以テ上・下町

海岸近ク乘廻リ、浅深測量ヲナセリ（成内ニハ、乗入ラズ）、投錨ス

ルヤ来意ヲ問ハンカ為メ、折田平八（御軍役）・伊地知正治（安齋）

・今藤新左衛門（造士館 助敷）・重野厚之丞（御庭方）・今藤・重野ノ四名、彼ノゾシ・ニールカ乗ル処ノユラユス（所謂旗ト記ス）

艦ニ到ル、ゾシ・ニール其他ノ将校、或ハ通弁官等数名面接ス、先ツ彼ノ国書ヲ伝へ、而シテ回答ハ

今ヨリ二十四時間ヲ限り、若経過セハ書面ニ記シタル

処分ニ及ハントノ趣、如何ニモ傲慢ノ語ヲ述ヘタリ、

此時折田・伊地知曰、現今我君公霧島ニアリ、二十余

里ヲ隔ル道程ナルカ故、急速ノ回答ニ能ハスト謂テ、

其書ヲ領掌シ帰陸シタリ、国書左ノ如シ、

薩摩公松平修理大夫殿下江、又留守中ナラハ其撰政、

又ハ薩摩・日向・大隅・琉球諸島ノ政府ヲ綜理スル

上官江

一千八百六十三年八月十三日

在日本不列顛公（使）子館ニ於テ

去年九月十四日（我文二年 八月廿一日）、東海道金奈川近辺ニ於

テ、殿下ノ親父タル島津三郎ノ行列中ニ在リテ、其

乘輿脇ニ列シタル者、兵器ヲ帯ヒサル且無罪ノ英吉利一商人（編者曰ク、異本ニ士官ト記セリ、然レトモ此ニ記スカ如ク、商人ナリシト云フ）ヲ殺シタル事

ハ、殿下ノ既ニ能ク知ル処ナリ、又同時ニ右家臣、右商人ノ同伴人ナル英国紳士二名及ヒ婦人一名ヲ襲撃シ、紳士二名ハ大傷ヲ蒙リ、婦人ハ漸ク逃レ得タル事モ又殿下ノ能ク知ル処ナルベシ、

死（Charles Jenox Richardson） チャールス・レノクス・リッチャルドソン
重傷（Woodliffe Charles Chard） ウィルリアム・クラーク
同（William Marshall） ウィルリアム・マーシャル
ボーラ（Borahag） デール夫人

此事変ハ、大ニ英吉利政府及ヒ其国民ニ辱ヲ被ラシメ、文明諸国ノ同感ヲ起シ、且ツ愁傷ノ感覺ヲ生セシメタリ、大君（御軍家） 政府ハ、我英吉利女王ト平和懇親ノ条約ヲ結ヒタリ、故ニ予ハ篤ト熟考ノ上、大君政府ニ島津三郎ノ從者中ニ在ル其罪人ヲ速ニ拘獲シ、且ツ又之ヲ死刑ニ処スル事ヲ讓メタリ、

予カ如斯寛典ハ、我政府ニ於テ承諾シ、且ツ大君政府ニ於テ之ヲ受謝シタリ、

若シ此殺害騒動之時ニ当リテ、此ノ堪忍ノ所置ヲ行

ハスンハ、島津三郎ヲ生捕ニシ、且ツ直接ノ応報ニ由リ之ヲ殺害スルニ至ルナラン(編者曰、倭機ノ言語、臣ト、シテ誰カ奮懣セザランセ)、此不慮ノ變動ヨリ既二十個月ヲ経過シタリ、因テ余ハ已ニ本国政府ニ詳細之ヲ報告シタリ、又大君政府ハ時常大君ノ要求ニ従ヒ、殿下ヨリ右罪人ヲ拘獲シ、糺問処刑ノ為メ、之ヲ江戸ヘ送り来ルヘキ事ヲ余ニ通知セリ、然レトモ殿下ノ領國ニ於テ、直接ニ大政府ノ(幕府ヲ云)威権ヲ被ラス、且大名ノ受ル一二ノ特権モアレハ、殿下ハ江戸政府ヨリ罪人ヲ江戸ヘ送り出スヘキ命アレトモ、之ヲ輕ンシ之ヲ拘獲スルコトナキヲ以テ、大君政府ハ止ムコトヲ得ス、英人殺害ノ償ヲ為ス能ハサル事ヲ本国政府ニ報告セリ、其後余ハ本国政府ヨリ、此事件ニ関スル所置ノ訓令ヲ受ケタリ、

大君政府ハ貴國ノ法ニ準シ、殊ニ国歩ノ艱難ニ臨ミ、諸藩臣ノ為セル罪過ニ関シ、大名ヲシテ其冀望スル所ニ従カハシムルコト能ハス、

然レトモ英吉利人ヲ殺シタル事ニ関シテ、大君政府ヨリ日本國ハ一独立国ナレハ、其大政府ヲ經由シテ償金ヲ出シ、其臣民中誰人ヲ論セス、為セシ罪過ヲ

謝セサルヘカラス、

余ハ本国政府ノ訓令ニ従ヒ、条約上ニ於テ外國人通行ヲ許シタル道路ニテ、殿下ノ臣下ヲシテ英吉利人ヲ殺害セシニ抛リ、大君政府ヘ償金ヲ出シ、且ツ其謝罪状ヲ余ニ贈ルヘキ事ヲ要求セリ、

大君政府ハ直ニ承諾セリ、然レトモ又大英政府ハ、殿下此罪人ト認ムヘキ大罪ヲ犯シタル者ニ相当ナル刑罰ハ、決シテ免レシムル理ナシト断決ス、故ニ余ハ、政府ヨリ殿下ニ左ノ事件ヲ要求スヘキノ訓令ヲ受ケタリ、

第一条

リチャードゾンヲ虐殺シ、及ヒ其同伴者タリシ婦人・紳士ヲ攻撃シタル犯罪者ノ首級ヲ、英国海軍將校一二名ノ目前ニ於テ、直チニ糺問シテ之ヲ死刑ニ処スル事、

第二条

虐殺ニ遇ヒタル者ノ親戚、及ヒ当時纒カニ身ヲ以テ虐殺ノ刃鋒ヲ免レタル者ニ分与スヘキ金額、二万五千磅ヲ領掌スヘキ事、

以上英吉利政府ノ要求セル此ノ二条ハ、余殿下ニ告

知スルヤ否ヤ、直チニ殿下ノ承諾スヘキ処タリ、若シ又殿下ニ於テ之レヲ承諾スルコトヲ肯ンセス、又ハ之レヲ怠リ、又ハ之レヲ避クルニ於テハ、日本海ニ在ル英吉利海軍一艦隊ノ將官ハ、兵力ヲ以テ其要求ニ従ハシムルヘキ充分嚴酷ナル方法ヲ採用セントス。（編者曰、癸丑開港以來、薩府ハ外夷ノ勢艦ニ畏怖怯懦ナルカ故艦隊艦、則チ斯ノ如キ暴慢備傲ノ言ヲ以恐嚇ス、奮勇セサルヲ得サルナリ）英吉利軍艦ノ艦長ハ、此書簡ヲ渡スノ任ヲ受ケタレハ、余ヨリ殿下ニ照会セル要求ノ箇条ヲ詳細了知セリ、故ニ殿下若シ承諾スレハ、時日ヲ定メ、艦長ヲシテ其實行ヲ監守シ、之ヲ拒マハ、其他軍艦ノ着到（編者案スルニ、他ノ軍艦ノ着到云々虚言モ亦甚シ、其証ハヲ待チテ、戰爭後數日ノ後一隻モ横濱又ハ鹿兒島ニ來リシコトナシ）直ニ戰端ヲ開クヘシ、故ニ殿下此書簡ヲ領手セハ、之レニ載セタル事件ヲ能ク熟考シテ所置ヲ行フヘシ、予ハ此書簡ノ主義ヲ改正論議スル權力ヲ有セス、恐惶謹言、

在日本英吉利代理公使

Edward St. John Keith
I・シント・シヨン・ニール

此書簡ニ対シテ、我カ藩庁ヨリ左ノ書簡ヲ送レリ、

一來翰之趣相達ス、生麥一条ニ付申立ラレ候事件、往復ニテハ（往復云々、書翰ニテハ往復ヲ云フ）弁知致シ難キ義有之候間、

明廿九日午剋、他国人應接公使館（御養屋内客屋ニ於テ應接ノ予備アリタリ）
ニ於テ、事理明白之應接ニ及ヒ度候ニ付、水師提督其余重役ノ面々、上陸アランコトヲ乞フ、

一 貴国各船江番船二隻宛附添置候間、薪水其有合之品希望ニ任セ指シ送ルヘシ、是レ我法ニテ其方へ便スル礼節ナリ、

一 前条不便ナラサル用ニ備へ候間、端舟等ヨリ上陸アルニ於テハ、我国人騒忙如何ナル失礼ニ及ハンモ難計ニ付、前広案内致シ置ク処ナリ、

六月廿八日

薩州政府

斯ノ如ク上陸ヲ促シタルモ他ニアラス、要求スル処ノ条件、一トシテ允容スヘキニアラサルカ故、渠モ亦必ス暴慢ノ挙動ニ及フハ疑ヒナシ、加之鎖攘ノ大令ヲ發セラレ、既ニ長州ニ於テハ、事ヲ開キタルカ故、本藩ニ於テモ到底措クヘカラサルニ臨メルニ因リ、長官ノ輩ヲ上陸セシメ、悉ク刺殺セントノ策ヲ設ケ、論判ノ名ヲ以テ上陸ヲ促シタリト雖モ、點智ノ輩承諾セサリキ（御養屋客屋ニ於テ應接セント、其設ヲナシタリ、伊地知宗之丞、専ラ此事ニ預レリ）、

〔旧邦秘録文久三年五（東京大学所蔵）にて校訂〕

三八九 参考 安田日記鈔

文久三年六月廿八日

屋七艘共前ノ濱へ乗入、船配ニテ碇泊、応接有之、

三九〇 英国々書ニ対スル答書

六月廿八日

国老川上但馬(次通、本有)ヨリ英国代理公使江回答書左ノ如シ、

一殺害セシ者ヲ搦取り、死罪ニ処スヘキ義ハ尤之事ニテ、人命ヨリ貴キハナシ、故ニ直ニ拘獲シ、相当ノ罪ニ処スベシ、然レトモ足下ノ知ル通り、日本国中近來ハ諸侯ノ意互ニ齟齬シ、或ハ是レヲ秘シ置者アリ、其証拠ニハ、昨年ヨリ頻リニ探索スレトモ、今ニ捕獲セズ、且人数モ一人ニ非ラスシテ、種々遁避ノ術ヲ尽スト見ヘタリ、固ヨリ江戸ト京都ト親睦ノ為ニスル者ニテ、私意毛頭ナケレハ、主人ヨリ命シタルニ非ラサルハ疑ナカルヘシ(編者曰、生妻ニ於テ殺害スヘキ者カ專断ナルヲ明察、命令ヲ下サレタルニ非ラス、扈從タルノ語ナリ)殊ニ国法ヲ犯シ亡命セル者ハ、死刑之罪ナルカ故、若シ探索吟味之上死ニ処スヘキ時ハ、長崎・横濱等へ滞在ノ軍艦ニ此事ヲ達シ、夫々見分ヲ受クヘシ、若シクハ此事ニ就テ昨今ノ猶予ナケレ

ハ、不止得以前ヨリ罪アル者ヲ(編者曰、他ノ罪人ト者口罪人トハ則チ斬殺者ヲ云フ)偽リ、足下ノ眼ノ前ニテ刎頸セバ、足下等其面貌見知りナキカ故、実ノ罪人トモ思フヘケレトモ、斯ノ如ク足下等ヲ欺クハ、固ヨリ祖先(頭註)祖先ノ前後ニ脱字アラシカアラサルナリ、

一日本政府ノ事ハ、専ラ江戸政府ニ從フヘキ事、固ヨリ足下等ノ知ル処ニシテ、諸侯ハ其指揮ニ從ツテ進退ヲ受ル者ナリ、然ルニ多年來條約ヲ交ヘシ事モアル由ナレトモ、其條約中ニ諸侯往來ノ節ハ、假令幾數里往還(ヲカ)ノミ免許アリト雖モ、其來往ヲ妨ケテモ宜シト云フ事ハアルマシキ事ナリ、假令ヒ若クハ足下ノ国ニテモアレ、我國ノ如ク數多ノ從者ヲ從ヘテ往來スル時ハ、普ク制禁アルニモ係ラス、是ヲ犯サハ、衝キ倒スカ又打殺スカセサレハ、其国主ノ往來モ成リ難カルヘシ、勿論前ニ云フ通り、人ヲ殺スノ罪ハ大ナルカ故、之レヲ殺スヘキコトハ足下モ同意ナル故ニ、此事ハ承引ナルベシ、諸侯ヲ指揮セル江戸ノ政府ニテ、從來重キ国法ノ事ヲ條約ニ載セスシテ、猥リニ諸侯ノ過トスルハ、政府ノ不行届ナルヘシ、政府ノ罪カ、又太守ノ罪カ如何シ、判断アルヘシ、

〔宋〕(前卷文久二年八月第 卷何書參看) 』

一 此事ニ就テハ重大ノ事件ニ候間、江戸政府ノ重職ト我國ノ重役ト立合ノ上、足下ニ論判セサレハ、此所ニ片論スヘカラス一(一時ノ答詞トモ云ヘシ) 』

一 妻子養料ノ事ハ、其後ニ論定スベシ、

一 幕府ヨリ貴国軍艦渡来ノ儀、已ニ蒸氣ヲ以我レニ令

セシト云フ(編者曰、喜入探津ヲ汽船ヨリ下覽センメタルヲ、是ハ曾云フナラン、戦争後十余日ニシテ着艦シタリ)、

テナキ事ナリ、右様ノ虚言、恐クハ我ヲ瞞カス所以

ト思ハル、若シ其言ヲ証セントナラハ、閣老ノ書翰

アルヘシ、見セ玉ヘ、此等ノ事ニテ大ナル反覆ノ事

多シト思ハレタリ、何トモ不審ニ存スル事ナリ、足

下ニ於テハ決シテ不審アル事ナキヤ、

一 我政府ニテハ、江戸政府ノ命ニ従フ事大切ナレハ、

何事モ江戸政府ノ命ニ從ヒ処置スヘシ、

右來翰之趣ニ基キ、事實ヲ以テ誠実ノ意ヲ示ス、

文久三年六月廿九日 川上久也但馬花押

大英国代理公使ジャルゼ・ダフエール

兼總領事コンシユル・セネラール

イ・シント・ジョン・ニール

足下ニ報ス、

(同上書五にて校訂)

三九一 艦隊ノ挙動

六月廿八日

斯ノ如ク彼暴慢無礼ノ挙動ニシテ、到底平穩ニ歸スヘ

カラサル形勢ナルヲ以テ、各砲台ハ素ヨリ要衝ノ地ニ

ハ兵ヲ配リ、或ハ応援ノ兵ヲ備ヘタリ、而シテ姫君方

ハ玉里邸ニ遷座セラレ、砲声ヲ聞ヒテ花尾山ヘ避座セ

ラル、ノ準備ナリ、 太守公 国父公ハ各陣所ヲ巡視

セラレ、而シテ御本宮ヲ上ノ平ナル島津久也彈正カ宅ニ据

ラレタリ(此時 照国公御神、牌モ護セラレタリ)、

御巡覽筋 太守公ニモ前以テ二ノ丸ヘ入ラセラレ、

国父公ト御同様、二ノ丸御本門ヨリ御出馬、 国父公

及公子方ハ二ノ丸御本門ヨリ御出、御城下ヨリ島津又

八郎加治木邸前ヨリ枅形筋、其他各所巡覽セラレタリ、

扈從ニハ小松帯刀(清應)・御側役島津主殿(久善)・山口直記(利紀)・中山

中左衛門(実善)・大久保一藏(利通)其他御近習大小吏、或ハ本田彌

越(清生)右衛門・木場傳内等ハ御使番役ニテ、令字ノ差物ヲ携、

歩騎數百騎列伍嚴肅タリ、

三九二 在館琉球人避難

六月廿八日

在館琉球人ハ開戦計ヒ難キニ仍リ、避去スヘキ旨諭達セラレタリ、依テ上下共ニ伊敷村不動院(鹿児島市)へ避居シタリ、(同上書にて校訂)

三九三 英艦隊薪水魚卵ノ類ヲ買ハムト乞フ及ヒ

刺客人名

六月廿八日

英艦ハ薪水魚卵及ヒ果物ヲ買ハンコトヲ乞ヘリ、因テ其乞フ処ノ品ヲ与タリ、茲ニ於テ又一策ヲ施シ、旗艦ノ長官其他ノ艦長ヲ誘ヒ、上陸セシメ襲殺セントハ、我カ壮士輩ノ望冀スル処、中ニモ奈良原喜左衛門等(藩)切望シナリ、故ニ尚類請シテ鳩マサルナリ、要路ニ就テ頻願スルコト数回ナリ、其策タルヤ誘フテ揚陸セシメ、通街又ハ応接所ニ於テ悉ク刺殺セントノ計策ナリシカ、渠上陸ヲ肯ンセサルヲ遺憾トシ、又策ヲ転シ、彼乞フ所ノ果物肉類ヲ携へ、各船ニ搭入シ、而シテ為ス事アラント頻請セシニ、其冀望ニ任セラレシカハ、壮士等ハ雀躍欣喜、進ンテ其策ニ預ランコトヲ請フ者又多シ、実ニ壮ナリト云フベシ、其計画ノ如キハ、武技得達勇敢ノ壮士ヲ撰ヒ、一艦七八名乃至十余名各短剣ヲ携へ、

果物或ハ卵肉ノ類ヲ売与セン姿ニ窺シタリ、先ツ旗艦ニハ奈良原・海江田等乗リ入り、艦將及ヒ公使ヲ刺シタルノ相凶ヲ揚クヘシ、其時各艦ニ乗リ入りタル壮士モ一同起テ、其他將校ヲ撰テ刺スベシ、敢テ水兵等ニ目ヲ注クコト勿レト、或ハ波戸内ニ伏セタル輕舸数艘ハ、夷艦ノ駭騒ヲ見テ直チニ乗リ出シ、砲発スベシトノ計画ナリ、

編者曰、当時ノ説ニ、此策タルヤ甚タ拙劣ニシテ、彼レヲ知ラサルノ甚シト、或ハ一艦將及ヒ公使ノ數名ヲ斬殺シ得ルモ、他日ノ大患際涯ナキハ論ナシ、或ハ西洋各国海陸二軍ノ法規嚴ナルヲ知ラサルニ出タル蒙昧ノ太甚シキ者ナリ云々、是ノ論タルヤ、當時ノ情実ヲ知ラサルノ言ニシテ、時勢人情ノ弁識ナシト謂フヘシ、壮士等カ身命ヲ擲棄シ、此ノ策ヲ用ン事ヲ頻願シ止マサルハ、彼暴慢無礼ノ書意或拳動、一トシテ忍ヒ難キニ非ラサランヤ、策ノ巧拙ハ姑ク置テ、其忠誠勇奮真ニ愛スヘキニアラスヤ、一般外國ノ事情ニ疎ク、加之上

朝廷ヨリ下匹夫ニ至ル迄、鎖攘ヲ以テ国是トシ、大令ヲ下サレシ際、士庶共ニ競フノ時ナリ、斯クノ如ク

ナルカ故、巧拙ノ論ハ今ニシテ下スヘク、當時ニ於テ下スヘカラサルナリ、若シ之ヲ刺シ得ルトキハ、必シモ勇敢猛策ト称セラル、ヤ必セリ、和漢洋古今斯クノ如キ計策ヲ以ヒテ、事ヲナシタルモ少カラス、然ルヲ況ンヤ倨傲無礼ノ挙動、到底戦ハサルヲ得サルニ臨メリ、茲ヲ以テ計策ノアラン限リハ、巧拙ニ関セス施サ、ルヲ得サルノ際ナルヲヤ、

此時七十余名ノ壮士等ハ、二ノ丸内ノ演武場ニ集会シ、為サントスル処ノ議ヲ開キタリ、各決死ノ輩ナルカ故、其論甚タ熾ニシテ沸クカ如ク譬フルニ物ナシ、実ニ数百年來綿々愛養ヲ受ケ、国家ノ為メ殊死ナス事アラントスル形況タル、傍聞スルモノ涙ヲ流サ、ルハナシ、議終リテ一同勇威凜々トシテ、海岸指シテ出發シ、小舟數艘ニ乗入り、果肉ノ類ヲ積ミ、夷艦ニ向テ漕キ出セリ、水軍隊ハ計画ノ如ク装置ノ砲ニ装薬シ、夷艦内ノ動揺ヲ見テ砲發セント、櫓楫ヲ取テ相待チタリ、夷艦ニ向ヒシ七十七名ノ人名、左ノ如シ、

奈良原喜左衛門

海江田武二信

毛利喜平太

土橋休五郎

淵部群平

川上助八郎

山本矢次郎

四本十左衛門

永山喜之介

嶺崎半左衛門

飯牟禮喜之介

石原直左衛門

最上才二

折田喜次也

町田六郎左衛門

内山伊右衛門

平山龍助

湯地休左衛門

川北新九郎

大野四郎助

上村善之丞

岩元勇助

有馬熊次郎

春山越右衛門
 房村猪之次
 大山彌助應
 帖佐彦七
 井上直次郎
 和田八之進
 古川直次郎
 西郷信吾道從
 篠原冬一郎幹國
 平田平六
 鈴木源五左衛門
 鈴木壮七
 久留助四郎
 川上十郎太
 園田與藤次章成
伊集院兼寛脱力
 志岐藤九郎
 山口仲吾
 八木新七
 吉田清右衛門清甚

基太村萬之介
 江夏喜藏
 木藤市介
 門松喜兵衛
 林矢之介
 久留矢之介
 鎌田五左衛門
 大田八郎
 赤塚源六
 仁禮平輔景
 是枝辰二
 柴山龍五郎景綱
 池上四郎左衛門
 松元直八
 中島矢次郎
 河野四郎左衛門
 法亢英介
 甲斐宗之進
 永山休清
 貴島卯太郎

重久直哉

永山彌一郎

中山吉太郎

大橋八郎右衛門

坂元彦右衛門

床次正蔵

山口鐵之介

和田五郎

新納源四郎

大山彦助

黒江喜右衛門

平山喜八郎清

大迫喜右衛門清

上村(整兵衛)

総人員七十七名、十一名ヲ以テ一組トシ、内一名ヲ什長ト定メ、七組ニ分チ、足輕六十名ヲ七分シ、之レヲ附屬トシテ夷船一隻毎ニ乗リ入ルノ計画ナリ、

此人員二ノ丸ニ於テ 太守公 国父公拝謁ヲ允サレ、而シテ酒杯ヲ御前ニ賜ヒ、懇遇最モ厚シ、各感激シテ退キタリ、而シテ二ノ丸演武館ニ於テ、木場傳内ノ

書ヲ朗読シ示タリ、

生麥事件ニ付テ、島津三郎ヲ初メ一類之者不殘、英人立会ノ上首ヲ刎候様致度、又政府之威勢ヲシテ其事難相成候ハ、十万ポントステルリシクテ政府ヨリ差出可有之、又其他薩州ヨリハ、生麥ニ於テ横死シタル英人ノ妻子養育料三万ドルヲ受取ルヘク、若シ之モ相拒ムニ於テハ、即時ニ戦争ニ可及ニ付、政府ヨリ重役一名、是非ニ英国軍艦ニ乗組有之度、此段御頼存候也、

二月十九日

右書面今十九日差出シ、二十四時間返答可致ト之申立ニ候得共、アトミラール厚意ヲ以テ指伸候趣ニ候、御挨拶被下度、此剋限相過候ハ出入船ヲ止メ、ボンハルデメントヲ以テ江戸市街ヲ焼払可申、此儀旗章(Colours and Emblems)

ヘ対シ条約ニ対シ、無拠此期ニ相及可申候事(編者曰、二月十九日横濱ニ於テ、幕吏ニ渡シタル者ナリト云フ、又聞ク如ニ依レハ、鹿児島ニ於テ同文意ノ書ヲ呈出シタルヲ、松木安右衛門翻譯シタリトモ云フ、何レカ真ナリヤ、書中臣子トシテ忍ヒサルノ文言アルカ故、当時伝播流布セシモノニ非ラサルカ故、其実ヲ知ル者曾テアルコトナシ、茲ニ記シタル者ハ江戸在邸控下カ物ニ送致シタル者ナリト云フ、考フルニ此書ヲ刺客人員ヘ朗読シ示タル者ニシテ、別ニ鹿児島ニ於テ出シタルニ非ラザルヘシト信ス、前ニ記シタル妻子養育金、或ハ斬殺者ヲ刑セヨ云々等ノ文ハ、鹿児島ニ於テ出シタルヲ、松木カ翻譯シタル者ナラン)

壯士等此書意ノ無礼ナル大ニ憤懣握腕シ、聽テ果肉ノ

類ヲ小舟ニ搭シ、賈人ニ扮シ七艘ノ側ニ至リ、果肉ヲ示シ亮ラン事ヲ手示ス、猾夷其機ヲ察シ、敢テ搭艦ヲ許サス、每艦悉ナ梯ヲ引キタリ、只旗艦ノミ許シタルニ依リ、奈良原・海江田其他五六名搭入シ(旗艦ノミ乗艦セシメタルハ返輪ヲ携ヘタル故ナリ、防護ノ敵ナリシハ、返輪投テノ際モ、抜劍、他ハ返輪ヲ携タル者五六名、左右前後ニアリタリト云フ)、他ハ拒ンテ允サ、ルノミナラス、適々搭シタルモ艦中一室ニ置キ、防護甚タ嚴、且ツ目的トスル提督及ヒ公使、其外上官ノ者ハ出逢ハサリシ故、微官ノ輩ニ手ヲ下スハ、素ヨリ無益ナルヲ以テ、奈何ントモスルニ術ナク、空シク帰陸セリ、自余ノ六艘ニ向ヒシ輩ハ、旗艦内ノ異状ヲ見テ、直チニ発スルノ計画ナリシカ、旗艦ニ向ヒタル輩帰陸ヲ見テ、各引キ揚ケタリ、六艘ノ刺客舟ハ各艦ノ側ニ至リシニ、舵ヲ転シ近付モ得サリシトソ、旗艦ハ刺客搭シタル後黄色ノ標旗ヲ揚ケタリ、各艦モ悉ナ応揚セリ、是蓋シ警誠ノ信号ナラン、

初七十名ヲ撰ヒタリシニ、伝聞頻願スル者アリテ、合計七十七名ニ及ヒタリ、此人員ハ皆劍法得達・勇敢必死ノ輩ナリ、中ニ就テ昨年四月伏見寺田屋ニ於テ、暴徒左袒ノ人員前非ヲ悔ヒ、困事ニ報シ、汚名ヲ雪カント事アルヲ待タリシカ、茲ニ於テ競フテ懇請シタル者ナリ、斯ノ如ク勇敢必死ノ人員ナルカ故、若シ策ナラハ、各艦長官ノ輩ハ悉ク刺殺セラル、ヤ疑ナシ、惜ヒ哉、

此時我カ砲台ハ、各艦ノ異動ニ注目シ每砲裝藥シ、点火機ヲ放ツノミ準備ヲナシ待チタリト雖モ、頃刻ニシテ、旗艦ニ乗込タル輩空シク引揚ケタルニ仍リ、其他六艘モ悉ク引キ取リタリ、是ヨリシテ味方ハ策ヲ転シ、彼戦端ヲ開ヲ待テ砲撃粉塵セント、益々兵備ヲ嚴整セリ、

英艦ハ此日未ノ下剋頃七艘共ニ拔錨シ、重富海ニ向テ航シ、申ノ中刻頃鹿兒島各所砲台ノ前面ヲ緩航シテ、旗艦一艘辨天砲台ノ前面十余丁ノ所ニ碇泊ス、其他六艘ハ櫻島横山・小池両村ノ沖ニ投錨シタリ(此ヲ第三碇、泊場ト云)、日没ノ頃ヨリ天候陰曇、雲色常ナラス、各艦上桅ヲ下シタリ、必ス大風雨ノ兆ナラント云ヘリ、夜中雨フリ、東北風漸ク強シ、

三九四 和平破レムトス

六月廿九日
上・下町市街ハ海岸近接ナルカ故、老幼婦女ハ避去ス

ヘシトノ論達ニ仍リ、各山手ノ方ニ家財ヲ運搬シ、老幼ヲ携ヘ避ケ行キタリ、二十八日ヨリ本日論達アルマテニ各避去シ、家ヲ守ルハ男子ノミナリ士分ハ多クハ依然老幼ノミ避ケタリ、市街ノ輩モ少シク發アル者、進シテ軍事ノ仕役ヲ乞フ者多シ、中ニモ海岸居住ノ輩ハ、水軍役卒或ハ兩波戸砲台ニ舟橋架設ニ從役シ、頗ル力シタリ、○弁天波戸新波戸共ニ舟橋ヲ架シタリ、弁天波戸ハ現今、如ク架橋ハ戰爭後築造セリ、斯ノ如ク開戦ニ三日前ヨリ決戦ノ準備ヲナシタル力故、砲声ヲ聞テモ驚駭スル事ナシ

三九五 市來正右衛門寺師次右衛門書翰

(六月廿九日)

御勇壯被為務、無此上奉大慶候、随テ私ニモ大元氣ニテ相勤、海辺之事ニテ少々予備モ仕置、手銃共揃置候事ニ御座候間、御安慮被遊可被下候、昨日ヨリ今日モ脚舟ヨリ海岸へ毎々渡來、淺深測量上陸場等モ見分之体ニ被伺申候、殊今夕方ハ七艘ナカラ國分近ク乗行、稍暫時乘廻リ、此方蒸氣船隱シ所モ見出シ、船近ク乗付候模様ニ相聞ヘ申候、夜入時分碇泊場相替ヘ、サクラ島前ニ公然罷在申候、禍心愈増長ニ相違有之間敷、明朝ハ多分争戦ト相成ハ顯然奉存候、(卷一七)御両殿様モ御子様方御一同、昨夜ハ市成ヘ被為入御止宿、今曉永吉之様御転宿候筈、昨晚方被仰出、昨日昼頃ヨリ大混雜候由、私ニモ昨夜ハ暮過ヨリ内分類合帰家、

取締向又ハ米穀手当、或子供之始末可申付ト之含ニ御座候処、上之園辺(船見市)ハ存外靜謐、下町或高見馬場辺等ヨリ迦レノ人モ多有之由、女更ナカラ公然相騒キ不申、大慶ニ御座候間、尚又詳ニ申聞、只今曉七時過帰局仕候、御安慮可被成下候、其序ニ永吉ヘモ丁度見舞仕候処、右次第御入之賦ニテ混雜中、少々下知ヲモ加ヘ置申候、如此ニ御座候間、果シテ明朝ハ争端相開ケ申ニハ無疑、將又真海子ヨリ永別之紙面昨日九時分被遣、誠ニ難忍事情ニ御座候、既ニ御決議之令有之、巷番船迄ハ被乘入候得共、風浪出帆不相叶、外船モ取止相成候由、最上殿(卷一七)ニモ昨夜俄ニ夷艦乘入刺客之命ヲ被奉、奈良原・海江田其他八拾四人・足輕四十人、小舟式艘ヨリ今九時分乘入之手筈御座候処、トフク乗セ付不申空敷被引取、興之醒タル次第之由、明日ハ多分外手段ニテ矢張刺客ニ被用候半ト被存申候、將又昨夜ハ御届向有之、二丸ヘ曉頃登城、永主人ヘモ面会、種々内情伝承仕候、憂患此事五六百年來、御国家モ又此時騷キ立、残念此事ニ奉存候、且又才姉サマヨリヒトヘモノ一枚御遣シ被成、只今私相携出勤仕為持差上申候、御受取被下度、御不如意之品ハ何ニテモ被仰下度、家

内之事ハ少シモ、御懸念不被遊候、御勉勵專一奉存上候、尤何方へモ迦サセハ不仕筋ニ屹ト申付置候、近所隣誰モ迦シ候人ハ無御座、何封度之彈丸ニテモ、中々届ク丁数ニ有之間敷ト胸算仕候間、是又其通御承知可被成下候、此旨早々奉得尊慮候、恐々謹言、

水無月廿九日夜七時過認

市來正右衛門〔朱〕「四郎旧名」

寺師次右衛門〔宗道、市來四郎広貫見〕様

風呂敷包一添

三九六 市來静里寺師宗道へ与ル書

五月廿九日之御尊書水無月廿八日慥ニ相届、難有早速拜読仕候、炎暑之時分弥御勇壮被遊御座、恐悦御儀奉存候、随テ爰ニ母上様初御宿元ニモ、御一同御無異被成御座候間、御消息可被遊候、私方ニモ不相替〔元効〕玄機罷過候付、御懸念被下間敷、先月申上候通、流行之麻疹御國中挙テ流行、当分共ハ府下凡半方之煩ニテ、市中ハ大抵為相落由候得共、武士小路最中ニテ誠ニ苦々敷次第、廿頃ヨリ以上之人ニハ別テ重症ニテ、死失之人不少、近隣ニモ余多死亡、氣味悪キ事ニ御座候、就中婦

人右年輩之人死人多ク、中原氏妻殿モ先日死去、氣之〔朱〕〔猶心〕

毒千万ニ御座候、伝承ニハ御座候得共、麻疹後熱症ト相聞得候、大方其通ト相聞得候、南林寺〔通兒島市〕杯ニハ此三十

日計之間ハ、毎夜三拾余之葬式ト評判有之、桶屋杯之

取込一方ナラス、容易ニ頼出シ不申由、三四ヶ年前之〔コレレ〕

コロレヨリモ今一段甚敷、夫故先日御仁慈ヲ以、窮士

其外へ御施葉・御施米等被仰付、薬用ハ各見込之療医

へ相頼、証文相受取、金蔵ヨリ跡以御払之賦ニ御座候、

難有次第ニ御座候、柳泉モ重症相煩ヒ至極難症之モノ〔朱〕〔有馬橋旧名〕

、由、併シ最早全快、一昨日方ヨリ出勤モ為致由、藤〔朱〕〔純深文〕

次右衛門殿ニハ老病ニテ、当月初メ方ニハケフ明日ト〔今日〕

見受候病体ニ御座候処、例之私療ニテキーナ・牛胆等〔キーナ〕

相用ヒ、不思議ニ偉効有之、最早快方之趣キ、先日月

代共被致、近日ヨリ出勤モ可致ト之事ニ御座候、暫時

ハ母上様別テ御心配被成候、其折ハ私家ニモ麻疹最中、〔朱〕〔宗徳幼名〕

健殿・於ヨイ殿・英久磨・於イサ外ニ下女下人一緒ニ

相応ノ煩ニテ、昼夜之看病中誠ニ言語ニ難尽心配仕候、

母上様ニモ右通ニテ御出モ不相叶、乍去何レモ無難ニ

快氣仕大慶仕候、初ヨリキーナ塩ニ開達劑相用ヒ、緩

々清凉劑トイタシ、其効如神、兎角其法ニ限り可申、

蘭家ハ都テ此通ニ御座候、漢家之謬レル事夥ク、就中左近允某・松山三渡杯申愚医多ク、菓殺之聞得モ有之候、此度ヨリ俗人モ少々ハ開悟イタシタル向ニ相聞ヘ候、私ニハ全ク療医相頼不申、初終手療ニテ無事大慶仕候、当年節季ハ今分ニテハ菓代無御座候、身軽ク可有之卜家内中大物笑ニ御座候、此度之人用ニ菓種三貫文ガノ計取入、凡千五百帖計ハ合菓仕候、利潤有之モノニ御座候、御一笑可被成下候、

一 毎々被仰下候通、唐イモ、相応ニ植付申候、何分発病中ニテ作人頼出シ不申、少々ハ時季取後残念ニ御座候、当年ハ近在杯ニモ一統其通ニテ、当分マテモ植付候人有之、殊ニ雨他事ナク旁不都合之年柄ニ候、必定百姓共ニハ其時分麻疹ニテ、全ク植サルモ有之由、右ヲ以考候ヘハ随分心スヘキ年ト申事ニ御座候、御遣シノ大瓢モ二三ツ最早成リ付候、大切ニ手入仕置候、其外菜園ハ兎ヤ角之出来ニ御座候、

一 御下国モ最早無余日相成、初之八月末ニハ御地御出立可被候ト之御都合付テハ、七月末迄ハ書状モ差上可申、(成脱之)左様御承知被成下度、母上様初折角御待被成候間、一日モ早く御下奉待候、毎之通前方出水辺ヨリ御状被遣

候ハ、子供ニモ水上(龜兒島市)辺迄御迎ニ召列可差上候間、左様御心得可被下候、

一 私出府之事ニ付、何レニモ断申出候含御座候得共、当今ニテハ粗忽ニ申出候テハ、時勢ヲ恐怖イタシ、断出候様ニモ世評ハ必定、上向ニモ其通モ難計候ニ付、八月方迄相待候ハ、御地之情態尚モ御落着可相成候間、差掛リ断申出候趣向付置申候、此度之京都守衛杯ニハ、実ニ麻疹ヤミ、クサリ居候人断申出候得ハ、其父兄親属ニ代リ被仰付、昨日磯永彌九郎殿ニモ守衛ニテ出立被致候、其同列ニ鎌田市兵衛ニハ、弟病氣ニ付断申出候処、市兵衛へ被仰付、一昨日被仰付昨日出立被致候、ケ様之世勢ニ御座候得ハ、先ツ〳〵念ヲ入切り今少シ時ヲ相待、何様ニ致手ヲ入候趣向ニ御座候、併シ今般(宗一)登様并中原殿ヨリハ、是非出府イタシ候様御勸被遣候、私ニモ如何様ニ致手足サヘ動候ヘハ、是非々々出府、都会之地ヲ早く見物イタシ候ハ、大ニ学問ニ可相成ト奉存候得共、何分無致方、併シ七八月方ニモ相成候ハ、何様ニ致決断仕度奉存候就テ、何レ之筋ニモセヨ尊兄様御事ハ、相成事候ハ八月月中ニハ御下着被遊候御都合共出来候得ハ、於私別テ難有奉存候、旁宜御勤考

被成下度奉願上候、若哉断申出候テモ御取上於無之ハ、
後之八月初方ニハ出足不仕候テ相濟間敷、彼是セキ立
候次第ニ御座候、

一 此度都之城死去ニ付、其代リニ知覽上京被仰付、明廿

九日出足之筈御座候、磯永殿ニハ戰兵ト申名目ニテ、
廿六日出立、同列十七人、仕長ハ西太郎兵衛、伍長ハ
木脇直八ニテ御座候、

一 三郎様モ去ル七日無御滞御光着之由、御同慶奉存上候、

只今頃ハ嘸々御取込之筈ト奉想像候、幕府モ追々御大
変革之向ニテ、近代御廢典之 御參内モ被仰出ニ相成
候趣之御書面モ一覽仕候、扱々

皇国之御運氣未地墜不申、又昇平之沢ヲ蒙之難有キ事
ト奉存候、殊ニ今般御差廻被下候武備御振張ニ付被仰

渡之書付、御国益会所等之一件一々感服ニ堪へ不申、
就中高秋帆先生之建白尤ニ余アリ、長州長井之上書モ

面白ク、時勢貫通之論ニ御座候、篤ト徹夜ニテ拝見、
磯翁へ差廻置申候、夫ヨリ永吉又ハ高橋殿・成田ウチ

杯へモ差廻可申候、左様御承知可被下候、

一 山藍之儀毎々被仰下、誠ニ赤面之至ニ御座候、当正月
天祐丸ヨリ差上候手当ニテ荷作迄仕、尔今其俣ニ有之

候、此度之廻船ニハ難積入旨承り、兎角船便ナラテハ
難相成御座候付、追々材木積船モ廻船之噂有之候付、
頼入差上可申、尤染付候ノハ早速手当致、近使ヨリ差
上可申候、

一 国産取シラへ方之儀ハ御尤之次第、兎角其筋有之度事
ト奉存候、追々取シラへ可奉申上候、当所ニテハ吉川・
中村之両老ニテハ、迎モ盛大之事ハヲモヒモヨラス、
矢張姑息之所置ニテ、何モ今形ニテハ出来申向無御座

候間、何レ御地ニテ手筋旁 三郎様入 御聴御取計被
為在度、当地ハ

上様御若年、執政ハ兼テ之御人物、財府ハ右之両老ニ
テ、何事モ御下リ之上ト申向ニテ、御財用モ殆ト尽シ
トスル之事ヲ傍觀イタシ居候モ同前ト相聞得候、右時

宜ニ御座候間、品建取シラへ可申上候間、御地ニテ篤
ト御手ヲ被召付被下度、且此度京師之御一条并御道中

之御物入、旁最早式拾万両程之御入費ト相聞得、是ハ
都テ大坂御新借ヨリ被弁候由ニテ、財府之人々手ニ汗

ヲ握リ居、此上江戸ニテ之御入用幾千ニ可及哉ト、物
之大小軽重モ不弁申合候由、是ヲ以後來御生財之筋千
變万化心配可致ニ、左ハナクテ、収情ノミニ御座候、

誠ニ可歎次第ニ御座候、匹夫々々モ困ヲ愛スルノ情ハ
丈ケ／＼有之事故、随分又ハ不拘人モ存分、或ハ計策
ハ取用申度モノニ御座候処、其筋之事杯ハ更ニ無之、
残念之至御座候間、何卒御地ニテ彼是ト御手ヲ被召付
被下度、

一皮革之一条ハ、先度モ申上候通無申分ヤリ掛ケ置申候、
〔卷一〕兩商門徒ニ落入、尔今罪状不被仰渡候付、甚込入仕合
ニ御座候、併産物方計ニテ〔西洋志〕鞆方支配被仰付、大坂御直
廻シニテ、牛皮壹枚七貫五百文ツ、ニテ、此漕百枚申
受被仰付、鞆方之上江戸・大坂其外へ差出候儀ハ勝手
之旨、以御証文被仰渡候付、兩商罪状相分次第第二ハ、
則ヨリ鞆方取掛、出来上り候ハ、直様百枚丈ケハ、御
地之様兩商之内一人、早々出府之手当ニ御座候得共、
未全手ヲ付不申、ケフハ／＼ト相待居候得共、罪之程
不相分慎中ニ御座候へハ、無致方御座候、併当月中ハ
最早打過候付、七月中旬迄ニハ何分相分、其上ハ町人
共之事故、科銀位ニテ慎御免ニモ可相成候間、早々為
取掛申度、折々掛合モ仕置申候、右之通御証文ニモナ
シ置候付、此上ハ御地之捌ケ方ノミノ事ニテ、当所ハ
如何様トモ取計方ハ出来可申候、因テ御国益方之方ハ

無御手拔、極御内密御手ヲ被付置可被下候、

右旁御受答且御安否伺、如斯御座候、時分柄御愛保
專一奉存候、恐々謹言、

水無月廿九日

静里拜上

正名尊大人

御左右奉呈

當時態之愚見

一 第一策ハ早ク長州ト離間之策ヲ用ヒテ、断然彼ト絶テ
テ普ク諸侯談判シテ、公論ニ属ヒテ事ヲ行候外ニ道ナ
シ、是吾カ名分ヲ正シ、天下之人心ヲ和スル之急務ニ
テ候事、

一 第二策ハ御出京之期限ヲ来二月ニ延テ、予メ京師之横
様・諸国之事情ヲ探索シテ、而シテ後静々ト御出京上
策之事、

但今世間紛擾疑嫌奸渦之中ヘウカ／＼ト出掛ケ、群
レ抽ンテ事ヲ執ラント欲シテハ、乱国之習ヒ禍生
ン事必然タリ、シカシ此策容易ニ行ルヘカラス、
故ニ佐土原侯・宮之城公ト篤ト尽力、国論一致之
〔卷一〕策可然哉之事、
〔島田國書久治〕

一 第三策、一大夫上京ニテ、摂政へ就テ建白ケ条ハ、

將軍復職委任之事、

但大事ハ諸侯一同之談判ニ出テ、共和之所置一家之

内裁ニ不出様、尤 叡旨相同等之事、

議事院杯之因循枯塞之所置ハ、断然打破ルヘキ事、

一 第四策、豊臣家之政ニ準シテ五大老職ヲ置キ、將軍家
摂政ヲ兼テ、重事ハ 勅裁ニ出ルヲ規トスヘシ、シカ
ラサレハ不行、又只管此ニテ 王政ニ復シテモ上古之
通り、

朝廷文武之威稜無之シテ、一日モ事行ルヘキニアラサ
ルハ勿論ナリ、

一 第五策、今之時勢俄ニ諸侯ヲ京師ニ大会スルハ、実ニ
乱端之基也、是迄モ幾度カ諸藩召ニ相成候得共、一ツ
モ其詮無之、今更何トシテ其詮可有之哉、稍以混雜、
内外之紛乱ヲ求ルモノ也、不出ニ如ハ無之時節也、

一 第六策ハ今当国疲弊、武器・銃士悉ク出京出払候跡、
若哉隣国へ変ヲ生セハ、空国ニシテ何ヲ以防禦之事ヲ
為サンヤ、看々敗走目前ニテモ、少モ於吾勝算無之事
也、且又京師ニオヒテ変アラハ、撰兵及ヒ武器等又悉
ク棄物トナリ、却テ敵之有トナラン事モ可慮事也、

三九七 四文銭新鑄布告

今回幕府新ニ鑄造シタル四文銭發行ノ令ヲ布レタリ、
文久四文銭ト通唱ス、形状・量重寛永四文銭ニ同シト
雖、銅質ハ大ニ劣レリ、価ハ旧四文銭ト同等ナリ、文
字ハ一橋慶喜公及ヒ川路左衛門尉力筆跡ナリト云フ、

三九八 全国一般米価高直

當時全国一般米価高直、本藩ノ如キハ金銭ノ融通滑沢
ナリト雖モ、穀類匱乏上下大ニ困タリ、是レ昨秋蝗虫
一風害ニ依テナリ、五月末頃ヨリ錢百文ヲ以テ、玄米貳
合七八勺乃至三合許ヲ買ヒ得タリ、故ニ政庁ヨリ兩肥・
筑其他ニ輸入ノ道ヲ謀ラレタリ、○全国拳テ売穀少ク、
其因テ起ル所以ハ、昨夏・秋ノ間蝗害風災ニ出ツト雖
モ、又一ツノ因由ハ攘夷ノ大令発セラレタルニ依リテ、
各藩ハ軍食ニ貯蓄シ、浪花輸出ヲ停メ、商賈ハ適々買
取リタルモ、事アルニ方リ機利ヲ得ントノ奸策ニ依レ
リト云フ、

三九九 江戸在邸岩下方平外国事件報告ノ大意

江戸在邸岩下(分平)佐次右衛門カ書牘ノ略ニ曰、神奈河居住(山)ノ船人重兵衛外一人、五月廿二日ノ夜浪人体ノ者宿所ニ押入り殺害シ、首ヲ同所小安村ニ梟シタリ、此者過日亜国船下關通行ノ時、水先案内ニ雇ハレタル者ナリトテ、其罪ヲ匡スノ趣ヲ揭示シ、以来外國人ニ雇ハレ、水先案内等ヲ為シタル者ハ、悉ク同様ノ刑ニ処シ、其罪三族ニ及フベシト記シタル由、是ヨリシテ外國人ノ雇ヲ恐レ、外夷ハ頗ル困難ナル趣ナリ云々、○生麥事件ハ英夷剛情、三ヶ条ヲ以テ切迫シ、幕府困難ヲ極メタリ、然リト雖モ幕府ハ此ノ一事ヲ以テ姑息ノ安ヲ得タリ、長州ハ馬關ニ敗戦シ、薩州モ不日ニ同様ナルヘシ、京師モ薩・長口ヲ嚙ミ、手ヲ引クニ至ラハ、朝廷ハ腕臂ヲ失ヒ、鎖攘ノ説ヲ止ムルニ至ルヤ見ルカ如シ、大小名ニ於テハ素ヨリ主張スル者ナシ、其時ニ至リテ浮浪ヲ及除シ、暴公卿ヲ黜ケ、幕府一手ヲ以テ京都ヲ警備シ、各藩士及ヒ浮浪輩ノ入京ヲ禁シテ、外夷ノ定約ヲ堅フスルトキハ、万世不動ナルヘシトノ定議ナリト云々、或ハ一橋殿ハ人望ニ乏シク、旗下中ノ惡ミ甚シク、到底在職ハ長久ナラサルヘシ、水戸殿ハ父君(公昭)ノ如キ材識モナク凡庸ノ人ナリ、閣老ニモ知

略材器少シクアルハ小笠原一人ニテ、(長行 老中後 唐津藩世子)板倉ハ尋常ノ大名ヨリ少シク宜シキトモ謂フヘシ、井上ハ小吏ノ材アリテ大人ノ材ナシ、其他小吏・勘定奉行・鑑察辺ニ少々人物アルカ如シ云々(此書牘月日詳ナラス、蓋五月末、六月初頃ナラン)

四〇〇 當時ノ雜記 (道島正亮紀事鈔)

サル人ノ嘶ニ、大目付以上御側役迄麻袴着用ニテ屹ト立候、御書付拜聞被仰付候由、御両殿様ニモ御上下被遊候由、全ク脇ヘハ不相知、是カ則前件ニイフ粟田口様・近衛様ヨリノ御書ニテハ無之ヤト致推量候、尤何方ノ便ヨリ参り候ヤト申候ヘハ、太田カ持越候半、大坂マテハ御國ノ様罷下手当ニハ無之、大坂ニテハ御國許ヘ罷下ルト申タル由、左候得ハ別テ隱密成事共ニテモ可有之哉、高橋家上京無之ヲ以テ見レハ、実ニサモ可有之ヤトヲモフ計ナリ、

四〇一 薩州功罪判案 此書類復字士剛号文 峯又穆菴之著ト云

薩州今昔之挙動、天下之議論紛々不一、蓋薩藩之心緒事業其功勳固ヨリ不少ト雖トモ、罪モ又甚シト云ヘシ、今窃ニ彼家之私見ヲ棄テ、細断分明ニ其功罪

之一案ヲ分シ、読者能々再復シ、前後本末ヲ照覽セハ、疑案之所モ一定シ、人心之向背モ自ラ分リ、公然タル由アラント云尔、

国勢衰弱、外夷猖獗ヨリシテ天下騷擾、四民困厄、遂

ニ八神州陸沈 宝祚ノ安危ニモ至ベクノ形勢、上下貴

賤トナク過憂深慮、多少之手段ヲ尽シ、就中薩州ノ儀ハ

名族大葉国富兵強ク、殊ニ贈權中納言順聖公ハ賢明達

識之聞ヘ有之、其臣士ニ忠慨義憤之人多シ(戊午前後日下部

村兄弟アリ)、是ヲ以テ天下有志ノ人、常ニ薩州ヲ仰ク事

ヲ計ルモノ多シ、不幸ニシテ中納言公没去アリテ、天

下ノ事日増切迫、禍乱將ニ興ラントス、然ル処今公修

理大夫公弱年ニ在乍ラ、国父三郎公子(公始周防、云、和泉ト

改、今三郎ト云) 享ケテ中納言公之遺志ヲ守リ、

皇威復興・幕政一新・夷狄掃攘之起本相立度ト、去ル

文久元年十一月、陽明近衛家江使者被差立、言上之要

山崗之勅(忠房公結婚事件ノ名ヲ以テナリ、使者中

略ハ、) 天朝之御危殆焦眉之如ク急ニシテ、和宮様無理ニ申下

シ奉リシハ、何程之邪謀モ難計、当今ニ至リ

天朝ヲ重シ幕府ニ背キ候ハ、判然タル人心ニテ、幕

府ノ心情難計、万一彼ニ先セラレ制ヲ受候テハ、主客

之勢トナリ嚙臍トモ復ラサルベシ、御一挙相成候儀、兵ヲ動シ候ト申気味ニテ、御安危ニ關係致候御儀ニハ候得共、御時節ニ付テハ不被為得止候御時宜、我等苟モ王臣トシテ、乍恐

皇国復古之大事業被為 在度ト懇願ニ候、就テハ供人

数召連不日上京、滞留仕守護仕候間、 勅使関東江被

差遣、一橋・越前出世ニ相成、尾藩・長藩・仙臺・因

州・土佐ニ各談合ニ及ヒ、

皇国之御為可抽忠勤、万一於関東遠 勅之廉相顯レ候

ハ、奸賊執政安藤速ニ可加誅戮旨被

仰出度、左候得ハ幕役共戰慄シテ

勅意ヲ守ルベシ、万一不軌ヲ謀候ハ、長藩之外水府

諸浪士四方ニ蜂起シ、義応可致ハ案中之勢ニ候、勿論

徳川家扶助・公武御合体之

叡慮ニテ、先君遺志モ其通ニ候間、御趣意貫度、乍併

不被為得止事儀致到来ニ於テハ、不被為及是非モ可有

之奉存候云々(委細ハ本文、併考ベシ)、其言公明正大、海内有志之者

ヲ奮興感激セシム、定テ此時ニ当リ、有志自然薩州之

義拳ヲ見聞シ、肥前・筑前・長州・久留米・岡ナトヨ

リ薩州江往来シ、其一発之日期ヲ企望スルモノ多シ、

其一証ハ筑入平野某壬戌四月 京師江言上ニ、鎮西有志之者密ニ義拳之儀談合候得共、義徒烏合之事ニ付、一大諸侯ヲ頼スシテハ不叶事ト存、既ニ去年十二月一書ヲ携、鹿兒島ヘ入込候処、一藩案外奮起仕居申候、即一封ハ修理大夫実父島津和泉江相達シ申候、其頃当春修理大夫出府之儀延引、当秋ニモ可相成之処其儀革リ、名代トシテ和泉出府ト申事ニ相決シ、此節上京之所ニ至リ申候、如此薩藩一國拳テ勤王之儀ヲ相決シ、西海・山陽・南海之有志如此奮起、或ハ亡命脱藩上京仕、京攝辺ニ潜居仕候者數多有之、追々不可止之勢ト云々、此条志士之奮起想見ニ堪タリ、壬戌ノ春ニ至リテハ、薩藩其外脱藩之浪士多ク、長州赤間關ニ集リ、(朱)一平ノ関白石正二郎日記參看) 粮米・船舶之用意嚴重ニテ、国父儀ハ四月上旬赤間關出帆、播州港ヘ罷向候折柄、薩藩及ヒ備前其外之藩士其他諸藩浪士前後ニ随從シテ、皆々京攝ニ登上セリ、国父京着之上、四月十五日朝廷江言上有之、九條殿并所司代退去之御所置、閣老久世上京之事、粟田・近衛・鷹司・関東一橋・尾張等慎解、一・越前侯登庸等懇願之末文ニ、右ハ罪科ノ有無全不存候得共、天下之風評且此節難波辺ニ決死充満致居候諸浪士之説ヲ承リ候処、

此御方々ヲ奉恨衆怒之帰スル処ニ候間、御所置無之テハ暴発目下ニ起リ、人心一和ト申処ニハ迎モ至間敷奉存候付、存慮之程叩心胆奉申上候云々、諸浪士之苦衷ヲ自家ノ身ニ引受、首トシテ奏聞ニ及ハレシハ、実ニ名藩之所置斯ク可有ノ次第ナリ、同十六日陽明家ヘ差出シ候書中ニモ、幕役共

勅諭ヲ遵奉不仕、外夷通商免許、剩ヘ正義之人々尽ク禁錮、庶人ハ死・流ノ刑ニ行ハレ候処ヨリ、浪士共奮起シ、不容易之企ニモ及候哉、今般私通行ヲ相待、事ヲ起シ候企ノ趣ニ付、精々利解為仕漸承伏仕候ニ付、今日參殿、

叡慮奉伺且所存建白仕候云々トモ有之ニテ、其情ハ被伺申候、

朝家ニモ薩州建白之趣一々御採用ニ相成、乃大原三位卿ヲ 勅使トシテ関東江被差下、国父モ東下ニテ、勅命之趣幕役江応接有之、其節長州・土佐杯モ兼テ勅王之志深候ニ付、同

御内勅ヲ賜リ、周旋忠勞ニ付、事実速ニ施行ニテ、皇威始テ嚴然之兆ヲ顯セリ、其後国父帰京之節、東海道生麥村ニテ英人隊伍中江障リ、無礼之拳動有之ニ付、

直様誅戮ヲ加へ、国是聊相立候、英人共哀訴之由ヲ以テ 幕府ヨリ下死人差出候様ト申付有之候処、八月下旬薩藩ヨリ書付ヲ以、行列ヲ切候者ハ討捨ト薩州之家風仕来ニ付、其辺ヲ以宜御断被下度、大勢之供廻リ当人吟味モ出来兼候ニ付、是非差出申候テ御取計難叶儀ニ候ハ、召連候人数不残差出可申、若夷人承引不仕候ハ、直ニ薩州へ罷越候様被 仰付可被下候、左候ハ、程能穩ニ相断、決テ 御国辱ニ不相成様取計可申候云々、其言以テ夷胆ヲ落シ、姦吏ヲ聳動スルニ足レリ、誠ニ以テ国父前後之勤方不一方ニ付

叡感不淺、出格之 叙慮ヲ以テ官位任叙等被 仰出候処、幕府ヨリ故障申立ラレ、其事停止ニ相成、継テ国父帰国ニ相成候得共、在京有名之諸侯合心戮力ニテ、終ニ將軍家上洛、盛典再興

鳳輦行幸之大儀施行、 君臣之分嚴然相立、癸亥年ニ至リテハ攘夷期限決定、 大樹公遵奉ニテ布令海内ニ及ヒ、確乎 皇威日新之形勢ニ至候、以前薩州ヨリ 朝廷・幕府江左之通届出、

昨十七日御届申上候通今日出京、着坂仕候処、英夷国許へ来之模様申来候、就テハ修理大夫在国之事ニハ御座候得共、未若年之故行届兼候儀モ有之、六百〔本〕「從來領地又ハ領国ト記唱シタルヲ御預リ云々ト脱唱ハ、善形公御恩政年来御預之王土、聊ニテモ彼力蹂躪ヲ受候テハ、御ノ際船メテ記サレタルヲ嚙矢トス」 国辱ハ勿論、奉対祖宗之神靈無申訳儀恐入奉存候ニ付、一日モ早ク帰国仕、守禦之策略十分ヲ尽シ必死

ニ防戦仕、夷賊一人不残加誅戮、数十代之朝恩奉報度赤心ニ御座候間、無抛早々出船仕候、當時於御膝下守衛ハ、大樹公御滞留之上諸国之大小名在京之事御座候得ハ、御手薄之儀モ被為在間敷ト午恐奉存候、且又關東応接之次第ニ依リ夷賊承伏仕候ハ、天下国家之大幸無此上御事ト奉存候、其節ハ速ニ上京仕、奉謝莫大之天恩度含ニ御座候、若免足御差留之朝命被為在候御事ヲ難計奉存候間、右之趣意宜御汲取被成下、御都合可然様御執成被仰上被下度、伏テ奉願候、以上、
〔孝明天皇紀 島津忠承氏藏本にて校訂〕

三月十八日 島津三郎

四〇二 所司代牧野備前守殿江差出候書付写

此度攘夷拒絶之御厳令承知仕候ニ付、夷船一艘ニテ

モ領内江碇泊候得ハ、不及応接加誅戮候心得ニ御座候、且時宜ニ寄り候ヘハ為夷賊征討、軍艦差渡候儀モ可有之候間、右之趣兼テ御聞置被下候様可申上旨申付候、此段申上候、以上、

松平修理大夫内

本田彌右衛門

左候テ防禦嚴重被相待候処、七月上旬英艦七艘鹿兒島へ入港、前年生麥村斬殺之一件ニ付、償金・下手人等之儀色々申出候処、薩人悍然不懼利解申渡候得共不聞入、乱妨之所業ニ及候ニ付、乃發砲轟々船將始メ死傷不少、直様横濱江引退候事ハ新聞紙ニ詳ナリ、是ニ於テ天下之有志ハ弥以力ヲ得、各掃攘之功ヲ相顯シ度ト日夜防禦、志氣奮興ス、是其功之洪赫ナルモノニシテ、天下信仰スル所ナリ、

四〇三 薩州之罪案 (著者全上)

然ハ則薩州昔年之一挙ハ、專順聖公之遺志ヲ守リ、(朱)「事實誤レ」皇威回復・幕政更張・浪士人心之向背ヲ定メ、夷狄条約ヲ破却スルニアリ、然ルニ右浪士去年隨從之節、薩藩有志數十人中合別以來モ有之哉ニテ、九條殿江推

參シ、酒井若州ヲ討伐シ、更ニ人心ヲ決定セシメント(忠義)

計リシ由、其事狂暴ニ似タリト雖トモ、其心ハ忠誠無

他ニ無相違、浪士之一挙誠ニ

叡慮ニ不被為叶、鎮靜被申付候儀ニテ、国父胸中能々(朱)「久光公ヲ云、以下皆全シ」

勘弁ヲ加ヘ候心跡之所ヲ判断シ、丁寧ニ誠飭ヲ加ヘ、

再度シテ不聞モ則目ノ当リ懇切ニ申諭候ハ、其藩人

ハ勿論、他之浪士ト雖トモ豈不当ノ事在ンヤ、不然シ

テ押方之者ヲ伏見江遣シ告諭、不承引之由ヲ以忽誅伐

ヲ加ヘ、残ル諸浪士ハ悉ク国元江掃シ幽囚申付、薩藩

へ依リ居候モノハ隱密ニ斬殺シ、他藩浪士ハ各藩ニテ(朱)「田中河内介ヲ云、是事タル久光公指揮ニ出タルニ非ラス、全ク小松、中山、堀等所為ト云フベシ、久光公親筆記」

追々嚴重申付候由、諸浪士共如何ニ心事相貫度存候テ

參看)

モ、国父上京之機ナカリセハ、鳥合之罪ニテ豈此会ニ

望ンヤ(功業平野某上書件見ルベシ、當時ノ形勢世人知ル所也)、国父モ浪士奮興ナカリセ

ハ、亦豈其名ヲ借テ闕下登城之時宜ニ至ルヲ得ンヤ(此スル処ノ如ク幾分平其考弁ス、効アリ)

ベシ、故ニ其事之精疎緩急ハ有之トモ、均シク同心勦

王之儀ハ公然タル事ニ候、今

叡慮之由ヲ以テ用捨ナク斬罪ヲ加ヘ、鎮靜ノ名ヲ借り

テ其功トナスハ、豈不情之甚ニアラズヤ、朝廷ニモ

固ヨリ

鞏固争乱ハ不被為好候得共、不得止時宜ニ臨ンテハ詮

方ナキ次第ト被為 思召候儀ハ、五月五日之浪士勤王之志ヲ以蜂起候ヲ被惱

叡慮候ニハ無之勿論ニ候得共、自然暴発等有之候テハ叡慮齟齬ニ付、御所置ヲ鎮静ニ相待候様ト云々、又五月之

勅諭ニ、山陽・南海・西国之忠士蜂起密奏云々、畢テ雖、出^レ于忠誠憂國之情一事甚激烈使^レ諭薩長之輩^一鎮^レ壓^レ其他云々トノ御文言ニテモ、浪士御憂惜之 思召ハ^マ、隱然文外ニ顯ハレタリ、乍去事ニ緩急アリ取捨御勘考モ有之事ニ付、鎮静之命モ下リ候事ニテ、此輩モ無理不当ニ 朝意ニ背反シ奉ランヤ、就中廿日岡藩小河彌^敏右衛門等へ御書渡之中ニ、小河彌右衛門一列当夏以来罷登リ、島津三郎勤 王之忠志ニ随從シ、戮力致居候段

叡感 思召候云々ト有之、右小河等ハ入薩致シ、先年国父登上之節随從、伏水人数ニ相加リ候由、
叡感之有所推察奉リ候へハ、伏水一条之如キハ如何計^マ欲 思召事カト奉存候、故ニ八月

御勅中ニ或ハ櫻田・東禅寺又ハ坂下等之一件、追テハ伏水一条ニテ致死亡候モノ共靈魂招集、以礼収葬セシ

メ、祭祀候様トノ

叡慮ニ被為在候云々トノ旨ヲ以テ、長門世子少将公ニ命セラレ、其方關東ニテ取計候様トノ儀ニテ、世子東下ニ相成候処、薩藩ヨリ伏水一条之者ハ主命ニ違ヒ、不忠之由ヲ以テ勅使大原三位卿へ中立矯

勅ニモ当^レリ候哉、私ニ刪去ニ相成候カシ、薩藩存意如何成次第二候哉ト、天下有志之人始テ背反之想トナセリ、夫主命ニ随ハサルモノハ、其事ノ是非得失ヲ不問蔽罪ニ処シ候モ、法令ニ於テハ去ル次第モ可有之候得共、忠節之魂ニ至リ候テハ、斧鉞之能ク制スル所ニアラズ、故ニ赤穂義人之名于今赫然知新^{本ノマ}、朝廷ニハ天地至大之御仁心ヲ以、是等之所深ク御案念被為在候テ、難有事仰出候上ハ、薩藩ニ於テハ弥以感動シ、彼者共一旦主命相背キ、不得止討果候へ共、其心事ハ実以可憐次第^宋「(一旦方向ヲ過リタルハ実ニ記スルカ如シ)」

御勅諭之旨不敢当候得共、彼者共地下瞑目、勿論薩藩ニ於テモ実以難有次第ト言上ニ相成候ハ、道并行^宋レ^如テ不相悖ト奉存候、然ニ一旦過刑ニ処シ候上ハ、徹頭徹尾罪名ヲ蒙ラセ、剩へ

勅諭再案ニ相成候次第、執拗我慢之甚ト云フベシ、加

(隱盛)

之現存之者西郷吉兵衛杯ハ薩州同志中ニテモ巨擘之由ニ候処、当伏水一件ニ付、国元へ送り其凶草留不相解由、是又 勅諭ニ扞格之様ニモ相見へ候、且又當時国父登上之節、諸浪士見聞之所意味違有之ニモセヨ、今・徒・之・儀・ハ天下之公論不可掩之理カ、既ニ八月三日脇坂閣老ヨリ薩藩留守居被召出、松平修理大夫・堀小太郎京都ニ於テ浪人共ヲ為騒立、对公辺不屈之所業有之ニ付、急度御沙汰可有之処、格別之訳ヲ以テ修理大夫手限嚴重可取計旨云々ト有之ニテモ知ラレタリ、然レトモ国父之深意モ有之ニヤ、右小太郎事、国父帰国之節火輪船へ為乗込本国江連帰、直様伊地知壮之丞ト改名申付、内々如元相用ヒ候由、必竟薩藩之舉ハ浪士憤怒之由ヲ以テ事ヲ起シ候所(功案中併考ベシ)、亥秋国父上京之節、九州諸藩江掛合之文中ニ、

輦下浪士掃攘不致テハ(當時ノ藩情、今日ノ耳目ヲ以テ見聞スヘカラサル節由アリ、編者モ筆ヲ取ルニ當ム)云々有之、全ク浪士ヲ以夷人同様ニ相心得候様ニモ相見へ、前後矛盾之次第不審之事ニ候、浪士トモ天下ニ有ルヤ草ノ地ニ生スルカ如シ、隨テ掃へハ隨テ生ス、癸丑以来之事可見而已、今日輦下ヲ掃へハ明日他所へ生ズ、他所ハ可也肘腋ノ本ニ生スルニ至ル、伏見一条其藩人多キニテモ知ベシ、今

薩藩之中伏見余党尚多カラン、尚モ心ヲ用ヒスシテ徒ニ輦下ニ着手ハ、却テ内過ヲ促スニ近シ、夫浪士固ヨリ不逞之徒多シト雖モ、太半慷慨激烈、捨生テ取義、去私テ就公

皇威回復、夷狄掃攘ヲ期スルニ在リ、其心ヲ不問、其跡ヲ追ヒ、徒ニ是ヲ艾夷セントセハ、千万世ト雖トモ豈掃蕩之期アランヤ(采「肥前公ハ謬ニ云當ラス薩ラスノ筆勳ナリ也」)、肥前公ヨリ薩州へ答書ニ、条理之正ヲ踏ミ、只管

(采「肥前ノ特意」)

皇家之御為、公武御一致之儀ハ御同意ト計ノ一言ニテ、浮浪士掃攘等ニ不同意之儀ハ文外ニ顯レタリ、薩藩ニモ実ニ浪士ヲ掃攘セント欲セハ、

叡慮ヲ遵奉シ、攘夷ヲ促スニ如クハナシ、左候へハ浪士輩ハ要衝之場所ニ屯集セシメ、敵愾之志專一ニテ、他ニ及イトマナク、

輦轂ノ下自ラ淨ラナラン、是ヲ不治テ善治ノ術ト云フ、且又亥六月姉小路卿暗殺之一条其事隱秘、委曲分明ナラサレトモ、會津ヨリ薩邸へ押掛藩人二人召捕之節、一人ハ自殺一人ハ奔脱等之次第ニ至ル、区々藩人之力(采「奔脱ハ誤聞」)ヲ以悖逆ヲ企シハ、主謀ノモノ指揮ナカリセハ、事ノ此ニ及フベキトモ不被思、是又一ノ疑案ニ屬セリ、然

レトモ攘夷之事ニ至リテハ、

叡慮確定之儀ニ付、薩藩ニ於テ固ヨリ異同ハ無之儀、強國英夷サヘ掃攘之事故、其後迎モ毫モ間断ハ有之間

敷ニ、豈計ランヤ去七月上旬、英夷退帆後阿墨利加舟

入港セシトキ、薪水食料ニ遣シ、丁寧取扱之趣、金門

新聞紙ニ見ヘタリ、抑又甚敷ハ十月神奈川ニ於テ、英

夷ニ和ヲ乞シ一条也、新聞紙ニ就テ考フレハ、亥十月

晦日神奈川ニ於テ、薩藩士官兩人英夷旅館ニ至リ、髮

方談判之上、償金渡方之期日取極メ、戌八月生麥ニテ

英人ヲ殺害セシハ、探索次第英夷役人之見分ヲ受ケ、

目前ニ於テ罪科ニ処セントノ条ヲ印紙ニテ相渡シ、償

金ハ幕府ヨリ借用渡シ方致セシ由、嗚呼此一事ニテ天

下之事遂ニ地ニ墜ルト云ベシ、抑近世天下之變動ハ何

ニ依テ起ル、

叡慮之深憂ハ何ヲ以テ然ルヤ、必竟ハ幕史上裁ヲ經ス

五国条約取替シ調印致候ヨリ、カ、ル切迫之時節ニ成

行キ、四民困窮朝夕ヲ不保ニ至レリ、乃薩州ヨリ壬戌

四月建白ニモ、幕役トモ

勅定ヲ遵奉不仕、外夷通商免許云々、執政安藤殿科被

仰付度、若違

勅之廉相頭候ハ、速ニ可加誅伐旨被為下度云々杯ノ

旨ニテモ、夷狄拒絶之儀モ了然タル儀、彼井伊・安藤

モ何ノ罪ソヤ、必竟ハ外夷ヲ親ミ、通商ヲ事トシ、

叡慮ニ背キ、夷人同様之奸賊共故、之ヲ惡ムハ即チ夷

人ヲ惡ムト同様ニテ、宜可然之理ナリ、今ハ即チ形ヲ

改メ、面ヲ変シ、夷人ニ和陸ヲ乞ヘ懇親ヲ求ムルハ尤

ニシテ、倣烏モノニ非ヤ、生麥斬殺之節、尚去三月モ

朝廷・幕府へ悍然タル届書ヲ出シ、幕府ヲ説明致シ乍

ラモ其罪人ヲ捕ヒテ、夷人ニ甘心セシメントハ何事ソ

ヤ、仮令夷人ヲ納得セシムルモ、幕府ヲ欺キ、

朝廷ヲ輕蔑スルヲ如何可申説也、英薩一件ニ付、幕府

ヨリ償金渡方ニ相成候事サヘモ、殊ニ

叡慮被為騷違

勅之罪不輕共、御沙汰下リ候付、幕府ヨリ多方御断申

立ラレ候次第、皆人ノ熟知スル所也、幕府ニモ攘夷ノ

儀ハ御間断ハ無之被存、公論之所在不得止御請被申上、

鎖港談判之次第ニ至リ候、薩藩ハ始終ノ得失ヲ承知シ

ナカラ

叡慮・幕議不及頓着、公然乞和懇心ヲ求ル次第、深謀

遠慮モ有之哉ニ候得共、國ヲ誤リ、

〔朱〕「先公ノ意旨ヲ云々、姑ク措ヒテ後ニ論スルアルヲ読ン
 敬慮ヲ輕蔑シ、先公之深意ニ悖リ、天下ノ股掌上ニ思
 弄シ候次第、豈筆舌之上ニ論説スルニ忍ンヤ、是其罪
 ノ大ナルモノニシテ、天下万世之疑案終ニ可掩モノヤ、

嗚呼薩之名族大葉ヲ以其功勲大ナル、彼力如ク明著ナ
 ルニ、一旦ニシテ利害得失之ト胸中ニ交リ、緩急用捨
 之説左右ニ起リ、竟ニ取利廢義不知不識 帝之則ニ背
 シハ、如何ニモ可惜次第ナラスヤ、伏テ願フ、天下在
 位之君子、名義順逆ヲ基本トシ、

皇威回復更張、夷賊殲滅、大事業ヲ振興シ、
 神祖在天之虛ニ対揚セン事ヲ、是レ余カ私言ニアラズ、
 天下ノ公論ナリ

〔原本誤謄脱落多シ、意ヲ以テ謄写スト雖トモ、猶善書
 ヲ得テ糺スベシ〕
 四〇四 鹿兒島湾内各所砲台装置ノ砲数

文久三年癸亥

十ヶ所砲台装置ノ砲数左ノ如シ
前記ニモ記スト雖モ、其後増置或ハ
 輕換シタルアリ、因テ重ネテ記
 ス、

- 砂揚場砲台大小十一門
- 八十斤短砲 一門
- 三十六斤短砲 二門
- 三十斤短砲 二門

- 二十四斤短砲 二門
- 二十拇忽砲 一門
- 十五拇忽砲 一門
- 十八斤砲 一門
- 六斤砲 一門

物主四番組々頭

島津織之介直

〔朱頭註〕「談合役旗預名糺シ記スベシ」

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

大門口砲台大小八門

- 三十六斤短砲 一門
- 二十四斤長砲 一門
- 十八斤砲 一門
- 十二斤砲 二門
- 二十拇忽砲 二門
- 二十九拇白砲 一門

物主三番組々頭

關山糺生金

談合役

(マ)

旗預

(マ)

屋久島波戸砲台此砲台増設

二十拇白砲

三門

六斤砲

二門

物主

町田少輔長久

談合役

(マ)

辨天波戸砲台大小十三門

八十斤短砲

一門

三十六斤短砲

二門

二十四斤長砲

一門

二十四斤短砲

二門

十八斤砲

二門

十二斤砲

二門

六斤野戰砲

一門

二十拇白砲

一門

二十九拇白砲

一門

物主一番組々頭

北郷數馬徳久

談合役

(マ)

旗預

(マ)

新波戸砲台大小十七門

二十四斤長砲

二門

同短砲

三門

三十六斤砲

二門

八十斤砲

一門

十八斤砲

二門

十二斤砲

二門

三十斤砲

一門

六斤野戰砲

二門

二十拇白砲

一門

二十九拇白砲

一門

物主五番組々頭

川上右膳賢久

談合役

郷田源八

旗預

園田新助

什長

井上源五左衛門

平岡八郎大夫

森喜藤太

伊地知徳四郎

新納十郎

猪俣休右衛門

祇園砲台大小十門

八十斤砲

三十六斤砲

八十斤砲

三十斤砲

二十四斤長砲

二十四斤短砲

十八斤砲

十二斤砲

二十九搦白砲

二十搦白砲

物主六番組々頭

島津権五郎久

談合役

〔肥後平九郎〕

旗預

〔中島助十郎〕

櫻島横山袴腰砲台大小四門

十八斤砲

十五搦忽砲

十二斤砲

小銃一隊

同島赤水村一名大小六門

十八斤砲

十二斤砲

十斤砲

六斤野戰砲

小銃一隊

野戰砲半隊七百百砲

同島鳥砲台大小三門

十二斤野戰砲

二門

六斤砲同

一門

惣物主

肝付左門兼兩

御軍賦役

大山格之介長綱

談合役

郡山一介

旗預

(マゴ)

沖小島大小十五門

三貫目砲

五門

百目車砲

十門

天山流式周発車砲ノ二種

青山愚知

水軍隊輕舸七艘十八斤砲各一門ヲ備フ

物主

仁禮舍人信仲

合大小九十八門

此十ヶ所砲台ハ、一門毎ニ彈藥九十發ヲ用意シ、尚ホ火藥局ヨリ多數運搬ノ予備ヲナセリ(戰争後ノ調査ニ、一門毎ニ放發ノ數四十發ニ上ラス、火藥ノ惣計ハ三千斤許ヲ費シタリトシ)

費シタリトシ)

此外ニ佐多・大小根占・垂水・山川(攝津郡)・指宿等ノ各郷砲台毎ニ五六門乃至四五門ヲ備ヘタリ、又御城下衛兵ハ左ノ如シ、

御本丸守衛一陣軍賦令ノ如ク小銃及ヒ砲隊ナリ

〔采付箋〕 物主其他ノ人名札シ、記入スベシ

〔采付箋〕 太守公御旗本陣御本陣ニ在リ

〔采付箋〕 物主其他人名札シ、記入スベシ

〔采付箋〕 二ノ丸守衛一陣上同

〔采付箋〕 物主其他人名札シ、記入スベシ

四〇五 国父久光公御旗本隊

物主

一番組々頭

村橋

昇成久

談合役

伊集院直次

旗預

園田與藤次

貝役

高島新藏

太鼓役

大脇彌五右衛門

仕長

永山直次郎

千田傳一郎

村尾源左衛門

能勢龍右衛門

有川十右衛門

長崎隼太

兵糧方

森田仲右衛門

西郷助右衛門

玉藥方

園田四郎助

宿割方

谷元六右衛門

一番組ヨリ六番組ニ至ルマテ、各一陣左ノ如シ、

〔采付書〕
「什・伍長人名糺シ、記入ス可シ」

一番組物主

島津壬生甫久

二番組物主

川上源十郎達久

三番組物主

島津良馬義久

四番組物主

川上直衛延久

五番組物主

島津頼母度久

六番組物主

高橋縫殿徳種

合兵員二千三百拾八人

此人員五十歳以下二十歳迄ノ壯健兵ニシテ、大小銃砲隊

ニ編制ス、軍賦令彙書ノ如ク、府内各砲台又ハ兩御旗本

兩城警衛等ニ配賦シ、其他ハ府内ノ要衝或ハ砲台応援ニ

備ヘタリ、

一遊軍人員詳ナラス

又諸郷兵応援ノ予定左ノ如シ、

出水

阿久根

野田

高尾野

山口市

大口

羽月

本城

馬越

曾木

高城郡高城〔川内市〕
 串木野〔川内市〕
 中郷〔薩摩郡〕
 鶴田〔薩摩郡〕
 薩摩郡山田〔薩摩郡〕
 伊集院〔薩摩郡〕
 樋脇〔薩摩郡〕
 鹿兒島郡吉田〔薩摩郡〕
 郡山〔薩摩郡〕
 田布施〔薩摩郡〕
 川邊〔薩摩郡〕
 加世田〔鹿兒島市〕
 谷山〔宮崎県東諸県郡〕
 綾〔宮崎県〕
 小林〔宮崎県〕
 須木〔薩摩郡〕
 加久藤〔薩摩郡〕
 高崎〔宮崎県北諸県郡〕
 栗野〔宮崎県〕
 馬關田〔宮崎県えびの市〕
 水引〔川内市〕
 高江〔薩摩郡〕
 東郷〔薩摩郡〕
 山崎〔川内市〕
 百次〔薩摩郡〕
 大村〔薩摩郡〕
 市來〔薩摩郡〕
 始羅郡山田〔薩摩郡〕
 伊作〔薩摩郡〕
 阿多〔薩摩郡〕
 川邊郡山田〔薩摩郡〕
 久志秋目〔薩摩郡〕
 高岡〔薩摩郡〕
 穆佐〔薩摩郡〕
 野尻〔薩摩郡〕
 飯野〔宮崎県えびの市〕
 吉松〔薩摩郡〕
 高原〔薩摩郡〕
 倉岡〔薩摩郡〕
 諸縣郡吉田〔薩摩郡〕

浦生〔給良郡〕

以上五十一ヶ郷朔日ノ夜迄ニ来集セリ、其人員凡八千五百人余、而シテ府下諸所ノ要衝ニ配賦セリ、○又私領モ応援且ツ領主護衛ノ為メ、一二隊乃至三四隊其分ニ応シ出兵シタリ〔御城下六組及ヒ諸郷私領或ハ足輕諸家々々來等、其人員一万五六千人ニ下ラス〕、諸郷・私領沿海ノ地ハ其所ノ兵員ニテ警衛シ、或ハ予テ令条ノ如ク応援ニ出軍セリ、○諸郷兵員ハ左ノ如シ、

出水千七百七十人

物主

島津又六郎明久

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

大砲隊物主

田尻〔薩摩郡〕務

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

阿久根三百八十二人

物主

高崎喜兵衛

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔出水郡〕
高尾野四百九人

物主

宮之原小膳
哲通

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔出水郡〕
野田百十二人

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

大口三百八十人

物主

新納波門世久

談合役

檢見崎四郎

旗預

〔ママ〕

〔川内市〕
隈之城三百五十二人

物主

島津隼人芳久

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

大砲隊物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

山口市
山野九十六人

(マ)

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

同上
羽月百十三人

物主

田中仲次郎

談合役

(マ)

旗預

(マ)

伊佐郡
湯之尾

物主

嶋津主 税武久

談合役

(マ)

同上
本城百八人

旗預

(マ)

物主

鎌田要人 治政

談合役

(マ)

旗預

(マ)

同上
馬越八十七人

物主

種子島加次右衛門

談合役

(マ)

旗預

(マ)

山口市
曾木九十二人

物主

(マ)

談合役

(マ)

高城郡高城三百七十三人

旗預

(ママ)

(ママ)

物主

(ママ)

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

大砲隊物主

細瀧 権 八

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

水引三百四十八人

物主

高田尚五郎

談合役

串木野二百四十五人

旗預

(ママ)

(ママ)

物主

(ママ)

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

高江二百十五人

物主

島津内 藏厚

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

中郷六十九人

物主

島津内 記敏

(ママ)

〔薩摩郡〕
東郷百七十九人

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

物主

猪飼

〔尚書〕
央

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔同志〕
鶴田九十三人

物主

向井新兵衛

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔同志〕
山崎九十二人

物主

薩摩郡山田百四十七人

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

物主

澁谷喜三左衛門峯貫

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔同内志〕
百次八十八人

物主

伊勢平四郎支貞

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔薩摩郡〕
大村二百七十七人

物主

〔ママ〕

談合役

川上郷兵衛

旗預

〔ママ〕

樋脇二百七十九人

物主

市田隼人賢義

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

伊集院三百八十九人

物主

菱刈柰之助徹隆

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

市來六百五十五人

物主

豎山武兵衛武利

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

大砲隊物主

豎山八郎器利

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

鹿兒島郡吉田二百七十九人

物主

福崎助七運季

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

文久3年(1863)

郡山(百鷹郡)三百三十八人

物主

北條 織(マモ)
衛利時(マモ)

談合役

(マモ)

旗預

(マモ)

伊作(同上)七百二十九人

物主

伊集院中二(兼直)

談合役

(マモ)

旗預

(マモ)

田布(同上)施五百七十四人

物主

有馬 舍人

談合役

(マモ)

旗預

阿多(同上)三百十五人

大砲隊物主

(マモ)

二階堂 藪(兼行)

談合役

(マモ)

旗預

(マモ)

物主

平田直之進

談合役

(マモ)

旗預

(マモ)

大砲隊物主

義岡 相馬(兼久)

談合役

(マモ)

旗預

(マモ)

川邊二百四十三人

物主

(ママ)

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

川邊郡山田五十八人

物主

島津藏人
命久

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

加世田千五百五十九人

物主

川上藤馬
久璋

談合役

白尾登五左衛門

旗預

〔前忍郡〕
久志秋月百七十八人

物主

(ママ)

伊集院静馬
久照

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

〔同上〕
坊泊百人

物主

山本孫兵衛

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

〔攝宿郡〕
穎娃三百二十人

物主

島津靱負
久倫

談合役

(ママ)

指宿百六十人

旗預

(マ)

物主

伊集院平治久

談合役

(マ)

旗預

(マ)

谷山五百八十人
(鹿児島市)

物主

川上龍衛久

談合役

(マ)

旗預

(マ)

山川八十二人
(指宿郡)

物主

町田内膳憲

談合役

長島六百七十人
(出水郡)

旗預

(マ)

物主

西郷八郎次

談合役

(マ)

旗預

(マ)

上飯島三百八十八人
下飯島四百八十八人
(薩摩郡)

物主

國分十右衛門

談合役

(マ)

旗預

(マ)

高岡六百七十三人
(宮崎県東諸県郡)

物主

(ママ)

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

大砲隊物主

上村直兵衛

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

綾百四十九人
(同上)

物主

(ママ)

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

穆佐百四十四人
(同上)

物主

伊集院伊膳成久

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

小林三百九十九人
(宮崎県)

物主

郷原 轉寛久

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

大砲隊物主

新納伊十郎

談合役

(ママ)

旗預

(ママ)

野尻百六十二人
(宮崎県西諸郡)

物主

川上正十郎

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

須木二百十九人
〔同上〕

物主

江田五郎左衛門

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

飯野二百二人
〔宮崎県えびの市〕

物主

大野多宮
〔南久〕

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

加久藤百二十二人
〔同上〕

物主

猿渡嘉左衛門

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

吉松百二十五人
〔始良郡〕

物主

伊集院周右衛門

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

福山二百五十三人
〔同上〕

物主

比志島静馬
〔南久〕

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

〔曾於郡〕
末吉二百八十六人

物主

〔マ〕

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

〔同上〕
松山百五十四人

物主

北郷浪江政久

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

〔宮崎県北諸県郡〕
勝岡八十六人

物主

〔マ〕

談合役

〔マ〕

旗預

〔曾於郡〕
財部百八十五人

物主

〔マ〕

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

〔宮崎県北諸県郡〕
高崎百三十一人

物主

坂元権之丞

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

〔同西諸県郡〕
高原百五十人

物主

島津矢柄敬久

談合役

〔マ〕

志布志曾於郡五百十九人

旗預

〔ママ〕

物主

末川久馬長

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

串良屏風郡二百四十人

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

大砲隊物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

大崎曾於郡三百九十人

旗預

〔ママ〕

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

高山屏風郡三百四十八人

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

大砲隊物主

〔ママ〕

談合役

相良喜三太

旗預

(マ)

内之浦百四十三人

物主

名越左源太貞盛

談合役

(マ)

旗預

(マ)

始良八十九人

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

櫻島五百九十一人

物主

肝付兵部兼

談合役

郡山一介

旗預

(マ)

物主

加藤権兵衛

談合役

(マ)

旗預

(マ)

敷根二百二十六人

物主

堀四郎左衛門起

談合役

(マ)

旗預

(マ)

田代八十四人

物主

川上左大夫賢親

談合役

同上
大根占八十七人

旗預

(マ)

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

同上
小根占百三十八人

物主

伊集院金之進
温久

談合役

(田原陶吉乙)

旗預

(マ)

(曾於郡)
百引八十一人

物主

(マ)

(鹿屋市)
高限五十人

談合役

(マ)

旗預

(マ)

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

(曾於郡)
恒吉八十三人

物主

平田 靱負
智政

談合役

(マ)

旗預

(マ)

(鹿屋市)
大始良八十一人

物主

鹿屋百三十五人

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

〔マ〕

物主

〔マ〕

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

〔垂水市〕
牛根百七十五人

物主

蒲生郷右衛門

談合役

諏訪八郎次

旗預

〔マ〕

國分八百四十八人

物主

樺山相馬要久

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

大砲隊物主

谷川次郎左衛門

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

物主

島津右近遠

談合役

〔マ〕

旗預

〔マ〕

物主

岩下新大夫

嘯啖郡四百十七人

談合役

(マ)

旗預

(マ)

物主

町田孫大夫

談合役

(マ)

旗預

(マ)

大砲隊物主

伊東正兵衛

談合役

(マ)

旗預

(マ)

(国分市)
清水五百十九人

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

大砲隊物主

郷原 巨東久

談合役

(マ)

旗預

(マ)

(鈴鹿郡)
栗野百二十人

物主

(マ)

談合役

(マ)

旗預

(マ)

(岡上)
横川百八十人

物主

鎌田愛大夫治政

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

踊二百十六人
〔同上〕

物主

鎌田十五
正政

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

溝邊百三十四人
〔同上〕

物主

土岐平大夫

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔朱頭註〕「人敷亂スベシ」〔ママ〕
始良郡山田

物主

四本休左衛門

談合役

伊東仙大夫

旗預

〔ママ〕

日當山百八十三人
〔同上〕

物主

吉井源七郎

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

倉岡八十九人
〔宮崎市〕

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔宮崎県えびの市〕
馬關田五十九人

物主

本田休兵衛

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔宮崎県西諸県郡〕
諸縣郡吉田七十二人

物主

上村直兵衛

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔丹属郡〕
佐多八十四人

物主

島津相馬久平

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔始良郡〕
帖佐四百五十九人

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

〔同上〕
蒲生七百六十人

物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

大砲隊物主

〔ママ〕

談合役

〔ママ〕

旗預

〔ママ〕

合二万五千八百四十六人

右諸郷九十二外城、五十歳以下二十歳以上ノ壮健兵ナ

リ、此九十二外城ノ内、沿海ノ分ハ其地ノ要衝ニ備ヘ、
〔無碍ノ地ハ近隣ニ援カズ〕
或ハ近隣ニ心援ニ出陣セリ、

私領兵左ノ如シ、

〔給良郡〕
加治木六百八十六人

島津岩松殿久至

日置百四人

北郷作左衛門久視

垂水四百四十五人

島津讚岐殿貴敦

〔百盛郡〕
吉利百十人

島津又六郎久明

〔指宿市〕
今和泉二百二人

島津安藝殿忠敬

〔薩摩郡〕
黒木五十一人

小松帶刀清廉

〔朱頭註〕
「実名札スベシ」

〔給良郡〕
重富二百七十一人

島津周防殿忠鑑

〔鹿屋市〕
花岡百三十人

島津隼人久芳

〔薩摩郡〕
入來百七十人

入來院寛寛

〔百盛郡〕
永吉九十八人

島津信濃久敬

〔朱頭註〕
「実名札スベシ」

都之城二千五十七人

島津元丸久寛

〔曾於郡〕
市成百五十七人

島津主殿久兼

〔薩摩郡〕
宮之城四百四人

島津圖書殿久治

〔緋宿郡〕
喜入三百三十四人

島津弾正久之

〔同上〕
蘭牟田百六十人

〔薩摩郡〕
佐志百四十二人

肝付左門兼両

〔枕崎市〕
鹿籠百八十七人

樺山相馬久要

〔内也〕
平佐二百十二人

喜入攝津高久

〔垂水〕
新城五十人

島津 壬 生清久

〔川辺郡〕
知覧百七十二人

島津 主 計治久

〔曾於郡〕
末吉・岩川百四十九人

島津 右 門久〔マユ〕
敬

〔百重郡〕
伊集院石谷二百十二人

伊勢 隼之介 周貞

〔鹿屋市〕
大始良南村百六十一人

町田 少 輔長久

合人数六千六百六十九人

鎌田 仙千代 雄政

外ニ種子島兵員千五百余人ノ壮健兵アリ、海上遠隔故出軍セス、

以上私領二十ヶ所各出兵シ、沿海ハ其地ニ備へ、無海ノ地ハ近隣応援ニ出軍シ、或ハ分隊シテ主人警衛ノ為メ出府シタルモアリタリ、
合計三万四千八百三十三人

此外五十歳以上、二十歳以下十六歳迄ノ兵許多出軍ス、之レヲ合計スレハ凡ソ三万六千余人ニ及ヘリ、

又此外ニ足輕或ハ諸座付士、或ハ寄合・小番・新番等ノ家來従軍セシ者多数アリ、之ヲ合計スレハ殆ント五万余人ニ及ヘリト云フ、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久三年七月ノ一

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」の記載あり
(紙数一〇二枚)〕

目録

- 舊邦秘録
- 市來寺師へ贈ル書翰
- 舊邦秘録
- 戦争当朝ノ報
- 舊邦秘録
- 英艦ト戦争長崎奉行へ届書
- 舊邦秘録

〔大小砲製造〕

〔破壊英艦小根占海ニ止リ航行スルコト能ハス〕

〔戦争ニヨル英国側死傷者〕

〔戦争ニ就テ我受ル所ノ損害〕

〔戦争ニ就テ彼ノ損害〕

〔佳節拝賀ノ式停止〕

〔戦争ニ就テ救恤〕

〔再襲ニ備フル準備〕

〔小根占海ニ碇泊シタル英艦引退〕

〔英艦放發シタル彈丸ノ数〕

〔造土館員建言〕

神瀬修築ノ建言

〔高橋縫殿ニ軍役奉行心添ヲ命ス〕

〔佐土原侯兵ヲ率ヒテ来麿〕

〔砲台新築令〕

癸亥七月八日英国ヨリ幕府へ差出シタル書外国新聞

英国艦隊横濱へ退去ノ報七月九日

舊邦秘録

久光公御上京ヲ促サル

言路洞開ノ令ヲ布レタリ七月十日

戰爭中敵彈來レル個所

再襲來準備達書

諸郷兵解散

久光公假棲買上

〔高津淡路転宿〕

英国艦隊戦況談究益

伊地知正治大久保一蔵へ与ル書翰

四〇六〔舊邦秘録〕

四〇六ノ一

七月朔日夷艦ハ情態異状ヲ顕ハシタルカ故、若シ暴慢無礼ノ挙動ヲナスニ於テハ、已ムヲ得ス至当ノ事ニ及

ハサルヲ得サルナリ、故ニ配兵ハ勿論、城中ハ焼具ニ

供シ、御対面所其他殿内壁・襖等ノ押絵ハ、名家ノ筆

跡由緒アルヲ以テ、略写ヲ命セラレタリ(假令ヒ燒焚スルモ、他日再建ノ参考ニ供

センカ、為ナリ)、斯クノ如クナルモ城郭海岸ニ近ク、彼レノ好的

ニシテ、焼亡無論ナルカ故、両御家老座(表・御勝手方、下所アリ)又

大目附座等概要ノ局々ハ、予テ火防ノ為メ床下ニ窞ヲ

設ケアリ、依テ帳簿類ハ悉ク此ニ収メタリ、而シテ廿

九日ヨリ、国老ヲ初メ吏員皆下町下会所ヲ陣トシ、該所

ニ在テ軍議ヲナセリ(二十七日夜ヨリ朔日昼時迄、国老三名(兩川、島津大應)及筆吏四五名城中ニ宿直ス)

四〇六ノ二

七月朔日ノ形勢

申ノ上刻ヨリ(島津茂久) 太守公

サレタリ、這ノ郭内ニアル遠望台ハ常盤山ノ半腹ニシ

テ湾内一望、交戦ノ場ハ悉ク眼下ニアリテ、御本營適

当ノ地形ナリ(公子圖書殿 備後殿 安芸殿、八尾町御飯屋ニ在陣セラレタリ)

新上橋・西田橋ノ二橋ニハ、予備隊又ハ門葉ノ人自兵

ヲ備ヘ(新上橋座ニハ島津主殿長男又七郎白兵百余名ヲ以テ陣ヲ掘ヘ、十二歳ノ少年ナリ)、西田橋記ニハ島津又二郎同シク固メタリ)

千眼寺ヨリ西田町ニハ両御旗本隊在陣セリ、

城内ニアル宝器・文書ノ類モ、悉ク火防ヲナシタリ、

四〇六ノ三

七月朔日

本日開戦ニ決定セラレシ故、上・下両町内居住ノ婦女老

幼ハ避乱スヘキ旨諭達セラレ、依テ各山手ノ方ニ避ケ

行クモアリ、思々ニ立退キタリ、其時浄光明寺ノ靈牌

肖像ハ、同寺ノ末寺下田村(花野村福泉寺カ) 寺ニ、南林寺ノ尊像ハ

草牟田隆盛院ニ、福昌寺ノ各尊牌・肖像ハ伊敷村妙國

寺ニ、不斷光院ノ尊牌及護國權現社ハ、真證院ニアル

末寺ニ遷座セラレタリ(各其寺院主カ、遷座シ奉レリ)、又諏訪社祭ニ付テ、

頭殿・居殿ハ例年ノ如ク戸柱ノ仮屋ニアリシカ、社司

本田力手ヲ以テ吉野村雀ヶ宮ニ避ケラレタリ、

四〇六ノ四

七月朔日

午刻頃御旗本物主島津右門久敏、知各砲台ヲ巡リ演達、
曰ク、過刻再度ノ応接アリシニ、彼傲然兵端ヲ開カン
トスルノ形勢ナリ、因テ其準備ヲナシ、命令ヲ待ツヘ
シ、敢テ妄動スル勿レトナリ、茲ヲ以テ各砲台ハ命令
ノ下ルヲ今ヤ遲シト相待チタリ、此時每砲各九十発ヲ
準備シ、猶彈藥・器械ハ集成館火薬局ヨリ運搬ノ手順
最モ整備セリ、

四〇六ノ五

七月朔日

隊外ノ人ハ遊軍トシ、各所砲台或ハ両城警衛其他要衝
ノ地ニ備ヘタリ、十五歳内外五十歳以上ノ者ハ、兵員
ニ加ヘサル軍制ナリト雖モ、懇願シテ隊員ニ加リタル
モ寡カラス、
遊軍隊ハ大門口塩濱及ヒ砂揚場ヘ出張シ、上陸ニ備ヘ
或ハ市街巡邏ヲナセリ、

四〇六ノ六

七月朔日

巳ノ上刻頃各砲台ヘ御軍賦役田代宗次郎ヲ以テ達曰ク、本日

応接ノ形況ニ依テ開戦否ヤノ分ル、処ナリ、平穩ノ談
判ニ至ラハ、夷艦ニ白旗ヲ揚クヘシ、若シ否ラサルニ

於テハ開戦ト心得ヘシ、然リト雖モ命令ヲ待タス、妄
リニ砲発スヘカラスト敵達シ、各陣ヘモ同シク達シタ
リ、

砲台其他各衛兵ハ、去ル廿七日ヨリ持場々々ニ在リテ、
守備怠ラス、暑熱蒸焼ニ等シ、慰勞ノ為メ日々葛水ヲ
賜ヒタリ、

四〇六ノ七

七月朔日

此夜中櫻島赤水村沖・神瀬ノ間ニ水雷三個ヲ沈メタリ、
技術者ハ宇宿彦右衛門・大山彦助・川上六郎三名ナリ、

四〇七 市來寺師ヘ贈ル書翰

御細書之御趣詳ニ奉承知、一々御尤至極御同意奉存候、
右ニ付早速一策相用置申候、事之成否ハ不奉存候得共、
仰之通国家安危ノ分別ニ御座候間、中々可差置事ニ無
御座候、扱又過刻下町御軍賦役出張所ヘ届向有之、喜（兼永）
之助殿被出候間席ニ事情聞合相成候処、此方ヨリ手

出シハ、決テ粗忽之儀無之様分テ被仰出、彼方ヨリ及砲発候ハ、相当ニ可致トノ事ニ候由、(卷一)尤当后海辺ヘモ今日モ相見得候付、御軍役方ヨリ御達之趣ハ、タトヘ上陸イタシ乱暴ニサヘ不及候ハ、カマヘテ輕忽之儀屹ト有之間敷、取締向之儀ハ集成館申談、堅固ニ取計候様ト之儀共ニ御座候間、此方之儀ハ既ニ其筋之手当イタシ、五拾人程之人数モ有之候間、御懸念被下間敷届申出置候、右通ニテ何分穩之方ニ相成候ハ必定、然シ七時分ニ船之方砲門ヲ開候旨、(鹿兒島市)祇園洲台場ヘ島津走走付、御達ハ有之候得共、彼方ヨリ不出内ハ、決テ打申間敷トノ事ニ御座候、又刺客人数モ三十人計ハ為乗込由ニテ、(津波)ミニストル・コマタント兩人ヲ目当ニテ船中ヲ探シ候ヘ共、終ニ見出シ不申、トフ〜手ヲ束テ罷歸リ、誠ニ大幸厚運之至ニ御座候、依テ八半時分刺客之組ハ都テモフハ御用無之、御暇ニテ帰家仕候由、先々國家之大幸トモ可申欵、又七時分伊地知壯之丞・(貞豐)同正治被乗入旁応接有之候処、其折ハ兩人ノミ乗セ付、外ハ一人モ不乗付、其時ハミニストル・コマタントトモ緩々面会、無程用事済、兩人ノ衆ハ被引取、(本)早速市成屋敷之様被罷出、行キ付クト直ニ御小納戸ヲ以、粗

忽之働不致様ニトノ趣被仰遣候由、先右通之事情ニ御座候間、(卷一)趣可申哉、併シ刺客杯乗入候付テハ、渠モ心根ヲ察シ候半、如何可相成哉、放砲薬ヨリ相開候上ハ無致方、夫ノミ之事ニ御座候、尤唯今遠見仕候ニ、出帆之体更ニ無之、公然罷在申候、何分明朝ニ相成不申候テハ相分リ申間敷候、今晚ハ御閑暇被為入候ハ、(本)御同道、御見物カテラニ夜入時分ヨリ御出被成間敷哉、此旨草々奉得御意候、以上、

七月朔日
 二伸、喜之介殿ニハ彌九郎殿ヘモ緩々面会有之タル由ニ御座候、至極之元氣ニ御座候由、為御安慮御伝ヘ可被下候、

四〇八〔舊邦秘録〕

四〇八ノ一
 七月二日

例年ノ如ク諏訪社神事太鼓踊興行セリ、然ルニ英船ハ櫻島海ヘ碇泊シ、殊ニ掃攘ニ決定セラレシ故、各砲台或ハ諸所衛兵ヘ達、神事踊例歳ノ如ク頭屋其外ニ於テ興行スルニ就テ、開戦命令ノ太鼓ト過マルコト勿レ、敢テ輕卒ノ挙動アルヘカラスト嚴達セリ、神事踊ハ例

年ノ如ク頭屋ハ興行、終リタル頃砲声ヲ聞キ、御城下
其他寺院巡行ハ停メタリ、

四〇八ノ二
七月二日晝

英艦五艘ハ、我汽船天祐・白鳳・青鷹ノ三艘、重富脇(給良部)

元浦ニ碇泊セシヲ質取セント(廿九日論判不調ナルカ故、開戦ニ決
定セラレ、汽船三艘ハ脇元海ニ碇ラ

シ、放免ノ障礙ナキヲ要シタリ、○此命令下レル時、松木安右衛門ハ山中左衛
門ニ向テ曰ク、船ヲ廻ラスニ於テ、重富沖ハ彼ノ艦ヨリ一望ニアリ、寧ロ彼方目
視セサル地ニ廻スヘシ、思フニ今夜東方分海ニ入り、而シテ松島瀬戸ヲ乘リ抜
キ、山川岬ヲ出、坊泊等辺迄廻ラスヘシト謂フ、中山駕テ曰、脇元浦ニ廻ラスモ
遺憾トス、然ルニ遠ク坊泊迄通レントスルハ、快憶ノ名ヲ負フヘシ、汝等身ノ安
泰ヲ謀ルノ言ナリ云々、松木モ返スノ語ナク退キ、重富海迄廻ラシタリト云フ、
(後日寺島親話)○英艦碇泊場ニ進航セルハ、我艦、我三艘ノ乗員モ
台衛士等知ル者ナシ、夜中加之晦暗ナルカ故ナリ、

近接シタル時初メテ知り、驚愕セリトソ、而シテ直チ
ニ我水汽船ニ密接スルヤ否ヤ、夷人ハ熊手様ノ器ヲ以
テ已レカ汽船ニ緊着シ、数十名同名ニ乗入タルカ故、(時カ)
天祐丸士官本田彦十郎ハ抜刀シテ拒ントセシニ、短銃
ヲ以テ射ラレタリ(屍ハ海ニ投)、其他機関者・水夫等抵抗

セントスル者ハ悉ク縛シタリ、松木・五代(松木・五代カ孝
動嚙々ノ説ハ後
ニ記)ハ哀ヲ乞フテ縛ヲ受ケ、彼力艦ニ遷シタリ、三艦

乗員ノ中ニモ海中ニ飛ヒ入り、重富脇元浦ニ揚陸シタ
ルモアリ、然シテ夷艦ハ我水汽船ニ緊着シ、櫻島ノ碇
泊場ニ引致シタリ、此レ二日卯刻頃ノ事ナリキ(我汽船天
祐丸ニ)

ゲラントト唱フ価金拾貳万円、青鷹丸シルチヨルチギリ価金四万円、コンゲス白
鳳丸価金八万五千元、○松木・五代ハ賊艦中、我カ砲台ニ装置ノ砲數及ヒ口徑其
他兵衛ノ數ヲ問ヒシニ、二十九寸臼砲ノ裝置アルヲ告ク、艦行ハ各艦ニ信号ヲ以
テ通シ、攻撃ノ航線ヲ變シ、砲台ニ接近スヘキヲ令シタリトソ、臼砲ノ彈道ハ高
度ニ放チ、甲板ニ墜撃スルヲ以テ要トス、故ニ口徑ニ応シ距離ノ
定度アリ、砲台ニ近接スルトキハ彈着適度内ヲ航線スレハナリ

四〇八ノ三
七月二日

朝ヨリ天氣隱曇、東風強ク雨ヲ含メリ、大風ノ兆ナラ
ント咸人注意セリ、英艦モ大風ト認メタルニヤ、朔日

晚景櫻島小池村ノ前面ニ碇泊場ヲ転シ、各艦桅樞ヲ卸
シタリ(艦樞ノ第一段ヲ皆卸シタリ、斯ク桅樞ヲ下シタルハ、大風ノ兆ヲ認
ムタル時ナリト云フ、○旗艦ノ一艘ハ松島嶺山ノ前面ヨリ西ノ方、鹿兒
島トノ稍中間ニ碇泊シタリ、他ノ六艘ハ小池村ノ前面、海浜ヲ去ルコト凡六、
七丁ノ所北ヨリ南ノ方平行シテ碇泊セリ、艦ト艦トノ距離凡三四丁計ナリ)、
已ノ下刻頃、五艘ノ英艦ハ重富ノ方ヨリ櫻島ノ方斜ニ

航シ、其内三艘ハ我水汽船三艘ヲ挽テ航シタリ、我カ
各砲台或ハ諸衛兵ハ是ヲ見テ忿懣切齒、直チニ放發セ
ントスルヲ、物主ハ嚴シク制止シ、命令ノ下ルヲ待チ
タリ、重富ヨリハ早馬ヲ以テ注進ス、此由 聞召サレ、

事茲ニ至ルヘキハ予メ期セラレタルカ故、速ニ掃攘ノ
令ヲ下サレタリ、依テ御側役島津主殿(久懸)ハ祇園台場ニ、
中山中左衛門ハ辨天・新波戸ノ両台場ニ、(久懸)大久保一

藏ハ砂揚場ニ、御軍役奉行新納次郎四郎ハ大門口台場
ニ、御軍賦役等ハ各所ノ衛隊ニ伝令ス、此ノ時各砲台

ニハ二三日ヨリ司ル処ノ砲ニ装薬シ、点火スルノミ
ニ準備シ待チタルニ、目前我カ汽船挽キ去ラル、ヲ見
テ、^(砲)握腕憤踏シテ、命令ノ下ルヲ今ヤ遅シト待タリ
シ故、聞クヤ否ヤ直チニ点火シタリ、于時七月二日午
上刻頃ナリ(砂揚場砲台初ニ放發セリ、六斤砲鎌田官兵衛等掌ル)、続ヒテ五ヶ所ノ砲台
我先ニト放發ス、櫻島横山・烏島モ同シク發砲ス、其
音突ニ百雷ノ轟クカ如ク山海ヲ震動シ、砲烟四方ニ蔽
ヒ、咫尺ノ間モ弁スルコト能ハス、各砲台ハ悉ク旗艦
(初ハ皆旗艦ニ向チ放發シタリ)ニ向テ放發シタリ、初メ距離遠キ故、多
クハ艦ニ達セス中間ニ落チ、或ハ高度ニ放チタルハ、
艦ノ上辺ヲ通過セシカ如クニ見ヘタリ、此時旗艦ヲ初
メ各英艦ハ、直チニ応發セス、稍暫時ク凡五六十分間ニシテ、
旗艦空砲四五發シテ運動ヲ初メタリ、小池村沖ニ碇泊
セル六艘ノ英艦モ又姑クアリテ運動シタリ(旗艦運動ヲ初メシヨリ凡三十分間)、茲ニ於テ、掠奪シタル我カ汽船三艘ニ烟ヲ揚ケ
タリ(燒滅ノ令旗ヲ見テ火ヲ指シタルナラン)、^(鹿兒島市)旗艦ハ拔錨シ、北方國分郷ノ方
ニ向テ進航、御船明神岬ノ前辺ニテ旋回シ、南方ニ向
テ航シ、^(同上)磯山神沖辺ヨリ斜ニ祇園台場ヲ砲撃ス、台場
ヨリハ益々連發ス、而シテ旗艦ハ順次両波戸・大門口・
砂揚場ノ各所ヲ攻撃シ、^(同上)荒田村沖辺ヨリ復タ北ニ回シ、

砂揚場・大門口・辨天・新波塘^(戸)・祇園台場ニ放チ、初
ノ如ク明神岬辺ヨリ回艦シテ、又各所砲台ヲ打ツコト
初メノ如シ、小池村沖ニ碇泊セル六艘ハ、旗艦ノ運動
ヲ初メタルヨリ後、旗艦ニ同シク北方ニ向テ運動シ、
^(鹿兒島市)花倉邸ノ前辺ヨリ方向ヲ南ニ転シ、磯灘近ク航シ、祇
園台場ヲ攻撃シ、而シテ各所砲台ヲ打ツコト旗艦ト同
シク、砂揚場沖ニテ回艦シ、櫻島横山又ハ烏島砲台ヲ
攻撃シ、而シテ花倉沖ヨリ回艦砲發スルモ旗艦ニ同シ
ク、其間ニ二艘ハ櫻島砲台ノ前面ヲ緩航放發セリ此日沖ノ小島ハス、斯クノ如ク七艘共南北一線ニ旋航シ、各砲台ヲ
攻撃セリ、砲台モ間断ナク砲撃シ、敵味方ノ砲声天地ヲ
震動シ、千百ノ大雷一時ニ墜落スト云フモ斯クコソト
思ハレ、悽マシキ形況ナリ、砲烟ハ海陸ヲ蔽ヒ、砲發
ノ照視モ定メ難ク、殊ニ東風烈シク、敵砲ノ烟ハ我カ
砲台ニ吹靡キ、標準ヲ付クルニ苦メリ、此日午ノ刻頃
ヨリ東方ノ大颯トナリ、如之雨ハ車軸ヲ流スカ如ク面
ヲ衝キ、颯ハ足ヲ止ムルコト能ハス、然リト雖モ我カ
兵ハ風雨ヲ厭ハス、烟霧ノ中ニ在テ砲發スルコト甚タ
猛烈、時シモ盛夏ノ候、炎熱燒クカ如ク、故ニ大肌拔
ニナリ、砲台ノ堤上ニ頭ハレ出装薬シ、敢テ敵陣ヲ恐

レサルハ、真ニ鬼神ノ荒レタルカ如シトモ云フヘク、敵艦モ大鷲ヲ恐レス回航シ、攻撃スルコト少隙ナシ、殊ニ祇園砲台ノ北方側面ハ塁壁ノ設ケナカリシ故、斜側面ヨリ砲台内ヲ攻撃セラル、ハ頗ル困難ナリ(此側面ニ設置ナキハ、築造家ノ欠失ト云フヘン)、斯ク側面ヨリ攻撃セラレタルニ依テ、該砲台ノ砲架或ハ砲体ヲ壊毀セラレタリ、初メハ敵ノ砲彈モ照準ヲ誤レルニヤ、或ハ暴風雨ノ為メ船動揺ノ故ナリヤ、彈丸皆高ク飛ンテ砲台ニ達セス、祇園砲台ハ多賀山ノ半腹ニ打込タリ、後ニハ彼モ注意セシニヤ、台場ノ土堤ニ達シタリ、其時ニ至リ同砲台ハ土砂石片飛ンテ雨ノ如ク、風ハ益々烈シク砂ヲ卷キ、雨ハ弥劇シク篠ヲ突クカ如ク、此ノ如ク我カ砲台ハ櫻島ト挾撃スルコト午ノ刻ヨリ申ノ中刻頃ニ至マテ、瞬間モ措カス戦ヒタリ、然ル処ニ申ノ刻過ル頃、敵ノ一艦(後ニ聞クハデスホルス)東風(ホルス)スカ故カ、將タ浅瀬ナルヲ弁知セザリシニヤ、祇園川尻ノ浅州ニ乗り揚ケ、艦体斜ニ傾キ危殆ニ迫マレリ、遙ニ見ル艦中大ニ困難ナル形況ナリキ、此時ハ我砲台モ稍崩壞、砲身車架モ毀損シ、放発心ノ如クナラサルモアリタリ(此時敵艦淺州ニ乗揚ケタリトハ認めス、上陸セン為メ近接シタリト思ヒ、短兵ヲ以テ斃殺セ、砲台ニ備補ラナセリ)、敵艦ハ傾覆ヲ保ント百方力ヲ尽シ、桅

上ノ檣ヨリ小銃ヲ放ツコト雨霰ニ等シ(小銃ノ彈ハ皆長尖形ナ初メテ、而シテアルキューズ艦走セラテ、索網ヲ懸ケ援見タリ)、(Archi)而シテアルキューズ艦走セラテ、索網ヲ懸ケ援ケ去レリ、実ニ危殆ニ逼リタルヲ認メタリ(淺州ニ傾撃セルテ、辛フツテ、挽キ去レリ)、是ヨリシテ敵艦ハ七艘共ニ戦ヲ熄メ、小池村沖ノ碇泊場ニ退去セリ、此時漸ク西ノ刻過キナリキ、是ヲ當日ノ戦況トス、

初メ砲發ヲ令セラレシヨリ、御軍役奉行・御側役等ハ各砲台ヲ走セ巡リ、命令ヲ伝へ、或ハ君側ノ吏ハ戦況ヲ巡視シ、上言スルコト尤モ力メタリ、太守公 國父公ハ御本營ノ物見台上ニ御將凡ヲ居ラレ、戦況親覽セラレタリ、

四〇八ノ四
七月二日

祇園砲台ハ殊ニ敵彈ヲ受ケタルコト多く、土堤其他砲器・車架等損壞セリ、斯ク損壞セルハ台場ノ北隅塁壁ノ設ナク、故ニ敵艦潮音院岬ノ方ヨリ斜面ニ放撃シタルニ因テナリ、元來此砲台ハ東南両面ニ向テ塁壁ヲ築キ、新波戸・辨天波戸及ヒ大門口・砂撈場ノ四所ト挾撃ノ設ナリシ故、敵ハ北隅ヨリ斜線ノ虚隙ヲ探知シタル者ナリ、彼カ戦爭ニ練熟セル、知ルヘキナリ(英艦ハ廿八日ヨリ)

明日ニ至ルマデ、脚舟ヲ以テ各所ヲ測量シ、或ハ小蒸氣船ヲ以テ固分シ、斯
福山辺マテモ回航シタリ、此時砲撃ノ要所ヲ視定タルモノナルベシ、
クノ如ク烈シク砲撃ヲ受ケタルニ依リ、大小数門ノ内
八十斤砲一門・五十斤臼砲ノミ依然タリ、其他六門ハ
砲孔ヲ打タレ、或ハ車架毀壞敵弾ニ打テ毀タレタノミ非ラス、
數十發シテ毀損シタルモアリ、
砲手ハ小銃ヲ取り、上陸ヲ俟ツノ外ナカリキ、

四〇八ノ五

七月二日

此時ヨリシテ小銃ノ火繩機、風雨ノ為メ用ニ供スルコ
ト能ハス、雷管機ナラサレハ軍用ニ供シ難ク、或ハ大
砲モ洋式ノ長尖彈ニアラサレハ、大艦ヲ撃壊シ得ヘカ
サルヲ覺リタリ(大小砲器ノ製、此ヨリ
リシテ一變シタリ)

四〇八ノ六

七月二日

西ノ刻夷人上陸セリト、新納次郎四郎(御軍役
奉行)・本田彌
(親達)右衛門(京都留守居)・兩人ヨリ届出タルカ故、応援ノ為メ
川上源十郎・高橋要人カ二隊(御城下守衛
ノ二隊ナリ)出張セリ、是レ
全ク斥候ノ誤認ニ出タリ、或ハ同日辨天波戸内へ夷船
乗込タリト一時騒然タリ、之レ政庁筆吏五代傳左衛門
誤見ナリキ(後日三名ハ誤認ノ罪ヲ以テ、本田ハ船奉行ニ貶セラ
レ新納ハ降職シ、五代ハ蔵方自付ニ転セテラタリ)

四〇八ノ七

七月二日

琉球船(大二艘)ハ、六月初メ例年ノ如ク入港シ、下町波
戸内ニ碇泊シケルカ、朔日開戦ノ内決アリシニ依リ、
同日昼頃三艘共ニ磯天神社沖ニ廻航碇泊ス、同時和船
二艘(十七八反帆二艘共、
二日州赤江船ナリ)、同所ニ碇泊セシニ、砲声轟クニ至
リ、乗込ノ輩吉野村ノ方ニ避ケ行キタリ、申ノ下刻頃
敵味方ノ砲声熄ミ、英艦ハ咸櫻島地方ニ退キ、暫時ア
リテ小汽船二艘(所謂
砲艦)来リ、琉球和船ニ向テ砲發スルコ
ト十余彈、而シテ却舟二艘ヲ以テ乗入り、焼キ立タリ、
英船ハ二三町許ノ処ニアリテ、集成館及ヒ鑄錢局或ハ
御邸ニ向テ放發スルコト數十、子ノ上刻頃ニ至テ櫻島
ノ方ニ退キタリ、琉和船ハ倏チ燃上リ、鑄錢局ノ海浜
ニ流レ来リ、恰モ焼キ船トモ云フヘキ形状ナリ、然ル
ニ海浜ニハ鑄錢局建築用ノ材木困ヒ木屋數十間建テ列
ネタルニ流レ寄り、直チニ燃ヘ移リ(昔木屋ナルカ故、
直ニ燃移レリ)、鑄錢
局ニ延焼シ、或ハ英船ヨリ火箭又ハ焼彈ノ類多ク打懸
ケ、数所ニ燃上リタリ、集成館ニハ數十ノ火箭・焼彈
或ハ種々ノ大小彈ヲ打込ミ、同シク焼キ立タリ、二局
共ニ稍同時ニ燃上リ、東風ハ烈シク、敵艦ハ絶ヘス放
發シ、暫時ノ間ニ灰土トナレリ、御邸(仙臺邸
ヲ云フ)ハ幸ニシ

テ恙ナカリキ、此時御邸ニハ始羅郡山田郷ノ兵百余名
警衛シ、上陸ニ備ヘタリ(這兵物主四本休左衛門、門談食後伊東仙大夫)、集成館ニハ
掛員行武下清右衛門・岩下新之丞等ヲ初四五名、職工數

十名、人足百余名アリテ、七百目ノ野戰砲二門ヲ以テ
上陸ニ備ヘタリ、同館ハ各砲台ノ器械要具ノ修繕、或
ハ彈丸製造等ニ晝夜兼業シタリ、鑄錢局ハ廿八日ヨリ
製造ヲ止メシ故、職工僅二三名、人足三四名、掛員ニ
ハ市來正右衛門(今四郎、下呼ヲ)・磯永喜之介弘・中原太郎三名ニ
テ、五百目ノ野戰砲一門及ヒゲヘール銃二三丁ヲ以テ
上陸ニ備ヘタリ、而シテ夜半頃迄ニ両局共悉ク燒燼シ、
集成館ハ鎔鉄・鎔鋁二炉ノ烟筒二基ヲ残スノミ(烟筒ハ煉瓦ナルカ

リ故ナ)
此二局ヲ彼新聞紙等ニ記スカ如ク、製造所及ヒ倉庫認
メタリヤ、砲放スルコト各砲台同シ、後日両局内ニ
止マリシ彈丸ノ數大小三十余個、其他破裂シタル者モ
數十個アリタリ(止マリタル彈丸ハ、實彈・破裂彈ノ二種ナリ、破裂彈不
發ノモノ半ハ以上アリタリ、諸彈皆長尖彈ナリ、○此時
鑄鐵局ニ於テハ、琉球通宝
凡三千七百両ヲ燒燼ス)

四〇八ノ八
七月二日

斯ノ如ク酉ノ刻頃、各艦小池村ノ沖ニ退去シタルカ故、

味方モ砲發ヲ熄メ、初テ休憩シタリ(味方砲發ヲ熄メタルハ敵艦退去シ、距離遠キカ故)
リ、其間ハ各砲台ノ兵、朝食ヲ喫ヒタル迄ニシテ鬪戰
シタリ、実ニ壯猛ト謂フヘキナリ、

祇園砲台ニ於テハ、潮音院岬ノ前面ヨリ斜撃セラレタ
ルニハ頗ル困メリ、其時二十四斤砲ノ覬役長伍所清太
風駕ハ照準ヲ付ルノ処ニ、斜撃ノ彈我カ砲ニ命中シ、車
架壞裂、其場ニ即死セリ(左ノ艦下ヲ)、元來稅所ハ三十六
斤砲ノ覬役ナリシカ、傍ニ裝置ノ二十四斤砲彈力勝レ
タルカ故、自ラ乞テ覬ヲ付ケタルナリ、年齡三十歳ニ
近ク、実ニ勇猛ナル人ナリキ、同彈ノ為メ砲兵脇岡猪
之助・落合四郎右衛門・家村幸之丞ハ重創ヲ被リ、平
田甚五郎・門松源之丞・平田九十郎ノ三名ハ輕傷ナリ、
此時味方ハ夷船打居タリト見テ、益々奮ヒタリ、又彼
デースボールス艦カ淺洲ニ乘リ揚ケタルヲ見テ、上陸
スルナラント陸兵ヲ繰出シタルモアリタリ、斯ク誤見
スルモ非常ノ暴風雨ニシテ、咫尺ノ間モ弁セサルカ故
ナリ、

水軍兵ハ輕艇ヲ備ヘ、波戸内ヨリ乗出サント百方力ヲ
尽シタリト雖モ、大颯波濤天ニ漲リ、港内ニ在ルモ動
揺、蹴ルカ如ナリシ故、遂ニ乗出スコト能ハサリキ、

兵士ハ牙ヲ嚙ムト雖モ、素ヨリ人力ノ成シ得ヘキニ非
ラサレハナリ、辨天波戸・大門口・砂揚場其外櫻島各
所ノ台場モ同シク放撃シ、中ニモ辨天台場ニ装置シタ
ル廿九寸臼砲ヲ以テ、ユリアラス号ヲ撃テ、敵ノ將校
二名・兵士数名ヲ一弾ニ斃シタルハ、天晴ノ功ナリ、
(戒田孝十郎照準ヲ付ケタリ、成田ハ元來在式砲術師範ナルカ故、其術ニ達シタ
ル如クヘキナリ、○エライニス艦ヲ撃テタルハ大ホシベン弾ナリシト、後日
松木カ説ナリ、海軍雜誌ニ、砲門ヨリ撃込タリ云々ハ誤レリ、甲板上下四尺許リ
ノ所ニテ破裂セリト云フ、味方ヨリ見ル所ハ甲板ニ落チタリト見ルヤ、破裂セリ)
其他各砲皆多少敵艦ヲ打チタリ、砲台又ハ諸所ニ於テ
死傷ノ人名、左ノ如シ、

即死

税所清太風篤

祇園砲台警衛島津登隊伍長役、七月二日烈戦中
照準ヲ定ルノ際、敵ノ破裂弾片左ノ腋下ヲ打抜

キ即死ス、六番組御小姓与ナリ、

即死

山下賢之丞

遊軍兵ニテ、磯邸及ヒ集成館・鑄銭局等守衛中、
同所龍洞院宮内ニ在テ、七月三日敵艦退去ノ時、
濫発セシ砲彈ノ為メ即死ス、始良郡山田郷ノ士
ナリ、隊長四本休左衛門、談合役伊東仙大夫、

即死

前田平右衛門

即死

帖佐金次郎

遊軍ニテ、下町ニ於テ七月二日烈戦中、敵ノ破
裂弾ノ為メ即死ス、阿多郷ノ士ナリ、隊長(マコ)

談合役

ナリ、

即死

染川五郎左衛門家来

川添喜右衛門

七月二日烈戦中、祇園台場郭外祇園社後永安橋
詰ニアリシカ、敵弾社ノ石ノ玉垣ニ来リ、川上
龍衛負傷、同弾ノ為メ首ヲ打抜キ即死ス、兵員
ニアラス、主人ニ從テ同所ニアリ、

重傷三四日ノ
後死ス

島津又八郎家来

西休兵衛

七月二日烈戦中、上町琉球館内ニ於テ死ス、戦
場ニ臨タル者ニ非ス、

重傷

川上龍衛久

七月二日、祇園砲台必援ノ為メ、谷山郷ノ兵ヲ率テ多賀山下ニ備ヘ、砲台烈戦中、敵艦砲台ニ

近接セシ故、上陸スルナラント永安橋詰祇園社

近傍マテ斥候ニ出タル際、敵弾社ノ石ノ玉垣ニ

来リ、石片左眼ヲ打チタリ、此ノ彈ヲ以テ染川

五郎左衛門家来川添喜右衛門即死セリ川上龍衛自記ニ拠ル

重傷

家村孝之丞

七月二日、祇園砲台税所清太ト偕ニ負傷ス、代

リ玉葉役ナリ、マコ組御小姓与ナリ、

重傷

脇岡猪之助

落合四郎左衛門

七月二日、祇園砲台ニ於テ税所清太ト偕ニ負傷

ス、六番組御小姓与ナリ、

重傷

井上直八

七月三日、沖小島ニ於テ負傷ス、敵彈ノ為メニ

非ラス、我カ砲車壞損ノ為メナリ、

重傷

マコ元舜庵僧某

七月二日、寺内ニ在テ流彈ノ為メ負傷、後日死

ス、

怪傷

平田甚五郎

重久甚太郎

平田九十郎

門松源之丞

七月二日、祇園砲台烈戦中負傷ス、十余日ニシ

テ癒ユ、

怪傷

大原新左衛門

七月二日、小銃隊兵士ニテ上町守衛中、敵弾破

裂片ノ為メ負傷ス、十日許ニシテ癒ユ、

怪傷

蘆谷藏右衛門

松崎仲四郎

有川善兵衛

藤崎新左衛門

七月二日、下町守衛兵ニテ怪傷、十日余ニシ平マコ

癒^乙ス、
輕傷

諏訪八郎左衛門

七月三日、沖小島ニ於テ輕傷、一七日余ニシテ
平癒ス、

輕傷

下町商賈

猪之谷利右衛門

七月二日、下町自宅ニ於テ流彈ノ為負傷ス、戦
場ニ臨タルニ非ス、

合即死五人

此内戰場ニ臨タル者四人、

合重傷七人

此内一名後日死ス、戦ニ臨ミタル者五人、

合輕傷十一人

此内戰場ニ臨ミタル者十人、

合計即死・重輕傷者二十三人

此内戰場ニ臨タル者十九人、

四〇八ノ九
七月二日

城下居住ノ士ハ、開戦ノ形況ヲ見テ、老若^{隊外}拳テ戎
器ヲ携ヘ出軍シタルカ故、遊^{軍脱也}ニ加ヘラレタリ、或ハ昨
年來譴責セラレシ輩、則チ諏訪數馬・三原藤五郎・吉
川源右衛門・重久佐次右衛門等ノ輩モ困難ニ方リテ、
何ソノ譴責ニ関センヤ、寧ロ後日罪セラルトモ敢テ辞
セスト出軍シ、国老ニ就テ意ヲ述ヘタリシニ、遊軍ニ加
ルヘキ命ヲ受、各奮戦セント競ヒタリ<sup>(後日各褒賞セラレ、
譴責赦宥セラレタリ)</sup>

四〇八ノ一〇

七月二日

彈藥運搬ヲ掌レル人員、左ノ如シ<sup>火藥局
掛リ員</sup>

郡奉行御勝手方御家老座書役

勤火藥局一往掛

吉村才之丞

御徒目附火藥局掛

磯永孫四郎^{徳周}

火藥局掛見聞役

伊集院四郎

木脇休五郎

寺師次右衛門^{道宗}

門司為兵衛

税所四郎左衛門

奈良原喜格

田實善之助

柏原孫右衛門

谷村武右衛門中純

矢野平八郎

西田源左衛門

沖直次郎

西俣清八

町田甚助

竹山正右衛門隆盛

伊勢仲左衛門

須田平次郎

藤崎新左衛門

四〇八ノ二
七月二日

櫻島ノ衛兵ハ、英艦再ヒ小池村ノ沖僅五六丁許ノ処ニ

碇泊シタルカ故、袴腰ノ頂上ヨリ砲撃スルトキハ、眼

下適宜ノ距離ナルカ故、同夜大山格〔編良〕ノ介担当シテ、洗

出砲台ニ在ル二十四斤忽砲一門ヲ運致シ、頂上ニ引キ

上ントスルニ、道路峻峻ナルカ故、三日午ノ刻頃ニ至

リ、漸ク半路ニ引キ上ケタリ、然ルニ英艦ハ拔錨シ、

谷山海第一碇泊場ニ進航シタルカ故、水泡ニ帰シタリ、

四〇八ノ二
七月二日

晩景ヨリ祇園砲台及新波戸・辨天波戸ノ三所ハ、烙丸

ヲ以テ悉ク焼キ沈メント準備セリ、

四〇八ノ三
七月二日

市街其他焼亡セシハ、上町向築地海岸ナル薬師甚左衛

門ト云ヘル商賈ノ土蔵ニ起レリ、此者硫黄商業ヲナシ、

数千俵ヲ土蔵ニ納メタリシカ、夷艦ノ破裂彈土蔵ヲ穿

チ、硫黄〔点カ〕ニ転火セリ、素ヨリ其家人男女拳テ避遁シ、

空屋ナルカ故消防スル者ナク、隣近モ皆空家ナレハ、

暴風ノ為メ倏チ各所ニ延焼セリ、

延焼セシハ薬師カ家ヲ初メ、隣近一円向ヘ町行屋橋ヲ

越シ、上町堅馬場通、北ハ小坂通干地蔵ノ辺、上ノ馬

場ヨリ内ノ丸坂下ニ止リ、西ハ滑川畠山主計邸ヲ限り、

或ハ滑川上流ニ向ヒ、不斷光院・浄光明寺・興國寺・

冷水通ノ中間ニ止リ、其戸数大小五百余戸ニ及ヘリ、

四〇八ノ一四
七月二日

彈丸及ヒ器械運搬ヲ掌ル人員ニハ集成館掛り員

竹下清右衛門方矩

岩下新之丞

田尻善左衛門

平田左右衛門

榎本十郎

小倉喜次郎

竹内十郎左衛門

堀喜左衛門

此二局ハ軍事根軸ノ職ナルカ故、昨年来今ニ至ル迄、砲器・彈藥或ハ火具ノ類昼夜兼業製造シ、許多ノ貯蓄アリ、幾十日ノ連戦ニモ欠乏ノ憂アルコトナシト雖、此時ニ方リテハ、運搬ノ便否ニ依テ勝敗利鈍ノ機ニ關スルカ故、右ノ人員各砲台ハ勿論、各隊ノ間ニ奔走尤モ力メタリ、

四〇九 (ママ) 全上 戦争当朝ノ報

昨夜ハ難路御大儀ト奉察候、扱今朝ニ至リ穩之向ニハ

相見得候へ共、曉方サクラ島前ニ碇泊之五艘、國分一方ニ乘行、帆影モ全相見へ不申、何方へ參候哉モ相知不申候、雲霧モ深ク候得共、忝式里之処ニハ相見へ不申候、此方蒸氣船カ、リ場辺へ參り候へハ、当局ヨリハ見へ不申候、併シ又サクラ島瀬戸之様通航帰帆軟モ難量、何分相分り不申候、分り次第為御知可申上候短カリニ、式艘共ニ公然碇泊、昨晚方三番目ノ柱ヲ下ケ候ヨリ、尔今上ケ不申候、蒸氣モ立不申、多分手出シハ致間敷被存申候、此旨早々奉得御意候、以上、

七月二日

(伝書) 市來正右衛門

(宗道) 寺師次右衛門様

四一〇〔舊邦秘録〕

四一〇ノ一

七月三日

祇園砲台ノ衛兵(鳥津登カ隊兵)ハ寺尾カ宅(庄兵衛宅ハ濱水馬場ニアリ)ニ於テ黎明ニ喫食シ、多賀山下濱田某・野村某カ邸ニ屯シ、斥候ヲ出シ、上陸否ヤノ形況ヲ候ハセケルニ、巳ノ下刻頃夷艦ハ悉ク蒸氣ヲ立テタル注進ニ依リテ、砲台ニ進隊シ戦備ヲナシタリ、各砲台モ同シク準備ヲナシ、本日ハ果シテ上陸スルナラント、専ラ陸戦ノ用意ヲナセ

リ、然ルニ七艘共ニ午ノ中刻頃南ニ向テ出航シ、初メ磯邸又ハ集成館・鑄銭局等ニ向テ放發シ、続ヒテ上・下町又ハ城中又ハ櫻島各所ノ砲台ニ向テ發砲シ、殊ニ洗出砲台ニ數十發シテ火薬庫燃發セリ、而シテ航道ヲ變シ、沖小島ニ向テ航シタリ、此時同島ヨリ放撃ヲ初メシカハ、各夷艦モ放發スルコト數十ニシテ通航シ、谷山沖ニ向テ通過セリ、此時夷艦ハ航行シ放撃スルカ故、暫時ニシテ距離遠ク互ニ放發ヲ罷メタリ、而シテ夷艦ハ谷山沖ニ退航セリ、此時大門口・砂揚場ノ兩砲台、又ハ櫻島・横山・洗出・烏島ノ四砲台ハ特ニ烈シク放發シタリ、夷艦ハ谷山沖ニ退キ、再ヒ旋航セス投錨セリ、味方ハ果シテ回航米侵スルナラント、各砲台場ハ準備ヲナシテ待チタリト躡トモ、碇泊シテ動カサリキ、或ハ谷山町辺ニ上陸侵来スルモヤアラント、要衝ニ兵ヲ配リ、陸戰短兵ヲ以テ懸シニセント備ヘタリシニ、夷艦ハ遙ノ沖(七ノ島沖ヨリ凡)ニ碇泊シ、船ノ修繕ニ着手セリト見受ケラレタリ(沖ノ小島ハ青山愚知父子、及ヒ門人数十名ニテ守衛ノ類リニ放發シ、夷艦モ損傷ヲ受ケタリト云フ、此時步兵并上直八ハ重傷、諏訪八郎左衛門ハ輕傷ナリ、)

四一〇ノ二
七月三日

斯クノ如ク夷艦ハ再侵セス、勝敗ノ局ヲ結バス退去シタルハ、必定長崎ヘ引キ退キ艦ノ修復ヲナシ、再ヒ大挙來侵スナラント、視察ノ為メ同夜江夏彦左衛門及ヒ足輕一名ヲ長崎ニ出サレタリ、同十八日帰虜ス、同所ヘハ英艦一隻モ立寄ラザリシトソ、
當時在港英國商船三艘碇泊セシカトモ、江夏着崎ノ時迄ハ戰爭ノ事実全く聞知セザリシト云フ、

四一〇ノ三
七月三日

前ニ記シタル如ク、申ノ下刻頃ニ及ンテ夷船モ砲發ヲ熄メ、櫻島小池村ノ沖ニ退キ(今朝迄碇、海ノ所)、尚ヲモ火箭ヲ發又ハ愛宕山ヲ越シテ放チタリ、昼過頃上町向築地薬師某カ土蔵ニ止リタル火箭ヨリ燃上リ、行屋橋ヲ越シ、堅馬場ニ延燒シ、淨光明寺ニモ燃カ、リ、火光天ヲ焦シ、懐シキ形況ナリ、東風烈シク、消防ノ人ナク、風ニ從テ燒立テ曉ニ至レリ、此時各砲台ノ守兵ハ上陸ニ備ヘ、殊ニ祇園砲台ハ苦戰一方ナラス、勞レタルカ故、応援兵阿多郷ノ一隊ヲ物主伊集院仲二率(兼也)ヒ來リテ交代シ、砲台兵ハ清水馬場ナル寺尾庄兵衛カ宅ニ引揚ケ、
蕙ハシメタリ(寺尾モ同シク、砲台兵ナリ、)

四一〇ノ四
七月三日

却説、英艦ハ昨日晚景櫻島小池村ノ沖ニ退キ碇泊シ、
本日朝ヨリ蒸烟頻リニ立チタルカ故、我カ各所砲台或
ハ各衛隊ハ、今ヤ拔錨來撃スルヤ必セリ、昨日ハ暴風
雨ニ会シ、加之彼放發ヲ止メ退キタルハ、祇園砲台ノ
前面ニ於テ我カ各砲台ノ烈發ニ依リ狼狽シ、航線ヲ誤
リ、淺洲ニ乘懸ケ、放撃スルコト能ハサルノミナラス、
艦ハ左舷ノ方ニ傾キ(遠望スルニ傾度約三十度ニ近カラ)タルカ故、施スニ術
ナキニ至リシヲ、援助ノ艦來リ挽キ退キタリ、我カ新
波戸・辨天・大門口・砂揚場等ノ砲台モ距離遠ク、放
發ストモ無益ナルカ故同シク砲發ヲ停メタリ、茲ヲ以
テ重テ來侵、昨日ノ恥ヲ雪クヤ必セリ、殊ニ波濤ノ為
メ照準ヲ定メ得サリシ故命中少ク、夫ニ反シテ今日ハ
晴穩ナルカ故、彼モ幸トシ我モ又幸トス、殊ニ水軍隊
ハ波濤ノ為メ乗スコト能ハス、一彈モ發セス空シク(握)
腕シタルカ故、彼來侵セハ直チニ乘出シ、砲擊セント
準備セリ、此時各砲台又ハ諸衛隊ハ必死ノ攻戰ヲ試シ
ト競ヒ、昨日ハ已ニ擊沈メントセシ時、早く引キ退カ
シメタルハ、甚タ遺憾トスル処ナリ、本日ハ海陸ノ戰

ヲ開キ捷聲ヲ挙シニハ、彼ヲシテ深く引キ入レ、挾撃
スルニアリト、諸所ニ兵ヲ配リ來撃ヲ待チタリ、然ル
ニ豈図ラン、英艦ハ未ノ刻頃拔錨シ、北方内海(御船沖)
ニヨリ(向テ)航シ、直チニ南方ニ轉シ、櫻島地方ヲ航シ、
同所砲台ニ向テ放發セリ、我砲台モ後レス發射シタリ、
而シテ英艦ハ磯邸或ハ集成館・鑄錢局等ニ向テ放發シ、
或ハ上・下町或ハ城中ニ放撃シ、或ハ南林寺・武ノ橋等
ノ諸所ニ濫發シ、南方沖小島ト神瀬ノ中間ヲ航シ(谷山沖)
タリ、此時沖小島砲台ハ近ツクヲ見テ放發ス、
英艦モ各處發シ、谷山沖ニ向テ通過シタリ、英艦ハ旗
艦先導シ、一列順次ニ航線ヲ定メタルカ如シ、拔錨ノ
前頃ヨリ天氣晴朗、浪波一点ヲ見サルカ故、各砲台ト
ノ交戰遠望尤妙ナリ、沖小島砲台ハ昨日ノ戰ニハ距離
遠クシテ、一彈モ發セサリシ故大ニ遺憾トシ、本日ハ
待チ設ケタルカ故、充分ニ砲發シタリ、我砲台ノ彈丸
モ許多各艦ニ命中シタリト雖モ、惜ラクハ砲身短ク、
加之鉛彈丸ナルカ故、適々命中シタルモ、艦体ヲ穿ツ
ノ彈力ナカリシト云フ、故ニ英艦ハ恙ナク通過シ、谷
山沖第一ノ碇泊場ニ投錨シタリ(七ツ島沖ヨリ瀬々串村ノ沖マテニ線ニ碇泊シタリ)
後日英人ノ言ニ、孤島ノ砲台ハ高地ニアリ、或ハ砲短

小、或ハ彈丸鉛錫ノ類ナリシ故、害ヲ被ムラサリキ、若シ鉄彈ニシテ、砲身長大且ツ砲台水平ナルトキハ、頗ル損害ヲ被ルヘキニ、幸ナリシト云々、実ニ然ルヤ疑ナシ、元來天山カ砲術ハ実場ニ試ミタルニ非ラス、加之夷艦ニ向ヒタルコトナキ座上論究ノ流派ナルカ故、然ルモ又理ナシトセス、殊ニ鉛彈ハ鉄艦ニ命中シ、壊穿ノ彈力ナキハ論ナキナリ、

此時我砲台又ハ衛隊ハ彼拔錨ノ形況ヲ遠望シ、來擊遲シト待タリシカ、南方ニ航線ヲ転シタルニハ頗ル遺憾トシタリ、然リト雖トモ谷山沖ニ碇泊セシヲ見テ、必ス彼地ニ上陸シ、同時ニ各艦來侵スルナラント、海陸交戦ノ用意ヲナシ、谷山ニハ沿海ノ衛兵設アリト雖モ、尚ホ応援ノ兵ヲ出シ、或ハ埋伏ノ兵ヲ備ヘ、同夜ヨリ次日四日退航ノ後マテ準備最モ嚴ナリキ（松島洗出砲台ニアシ、破裂砲不發ノモノ或ハ実彈ノ一種ナリ、破裂ノ裂片モ又多シ、此戦爭ニ火藥庫ヲ燒カレタルハ此レノミナリ、○英艦退帆ノ時放發シタルハ、砂場場、大門口、及び松島橋腰、洗出、鳥島、沖ノ小島六ヶ所ヨリ放發シタル、新渡戸、弁天波戸、祇園洲ノ三ヶ所ハ、上陸ヲ待テ放發セサリキ、○下町海岸ノ土堤ニ敵彈來ルコト許多ナリト雖、皆飛揚シタリ、大ニ市街ノ防禦ニ益アリタリ、此土堤半バハ毀テ新渡戸、弁天波戸砲台修復ニ用ヒタリ、此時ニ方リテ皆ハ錢糧セリ、此土堤ハ嘉永四五年ノ頃、照國公築造セラレタル者ナリ、詳ニ御事蹟録ニ記載ス）

四一〇ノ五
七月四日

我カ砲台又ハ各衛兵ハ天氣穩ナルカ故、必ス來擊スルナラント、準備ヲ嚴ニシ待設ケタリ、夷艦ハ昨日谷山沖ニ退キタル後ハ、每艦皆修復ノ形況ナルカ故、本日ハ必定再侵スルナラント視察怠ラサリシニ、投錨ノ後各艦互ニ往來シ、而シテ艦中鍛冶或ハ斧鉞ヲ打ツノ音終夜、本日ニ至テモ尚同シト云フ、果シテ昨日ノ戦ニ擊壞セラレタルヲ修繕スルナラン（後日聞ク処ニ毀レハ、果シテ修繕ナリトナラント）、

然ルニ未ノ刻頃ヨリ七艘共ニ蒸氣ヲ立タルカ故、再ヒ侵擊スルナラント、各砲台又ハ陸兵ハ戰備ヲ令シ待テタリシニ、豈凶ラン未ノ下刻頃拔錨シ、南方ニ向テ出航セリ、（榑宿郡）喜入沖辺ヨリ果シテ回旋、來擊スルナラント待設ケタリシニ、七艘ナカラ申ノ刻過ル頃ニハ帆影モ見ヘス退去セリ（此時七艘咸寬航ス、或ハ帆網ヲ附シ帆キタル）、茲ヲ以テ各砲台ハ勿論、（隊艦）諸皆大ニ失望シタリ、而シテ当日夕刻指宿・山川等ノ早馬來テ、夷艦七艘ノ内一艘小根（舟屬）郡（榑宿郡）占海ニ碇泊シ、外六艘ハ悉ク佐多岬ヲ旋リ出帆シタリト注進ス、此注進ニ依テ一艘ハ小根占海ニアリト雖モ、素ヨリ恐ルニ足スト、新兵（新兵トハ、二日ノ戰後各郷ヨリ來レル兵ヲ云フ）數隊ヲ海岸其他要衝ノ地ニ備ヘ、各砲台又ハ城下兵ノ諸隊ハ、本日晩景歸家休憩スヘキ旨令セラレタリ、因テ各持場

々々ニ於テ勝吐氣ノ式執行シ、帰家シタリ、城下警衛

隊・両御旗本其他遊軍隊ハ城下ニ集リ、勝声ヲ揚ケタ

リ、実ニ勇々敷形況ナリキ(賜暇ノ令ハ各物主ヲ本營ニ召喚シ、國老小松帶刀佐令且褒詞ヲ演進セリ、

○小根占申ニ碇泊ノ英船、四日ノ夜小根占蘆ヘ大砲ニ發・火箭三個・榴彈二個打掛ケ、五日ヨリ毎日訓練ハ奏ヲ奏シ、或ハ船ノ修復ヲナスノ形況ナリ)

四二一 英艦ト戦争長崎奉行へ届書

(番号四二二ノ三行目から同文により削除)

四二二 〔舊邦秘録〕

四二二ノ一
七月五日

本日夷人ノ死骸二個漂流シタリ、一個ハ谷山和田村海

浜ニ漂着ス、其結構帆布ノ囊ニ納メタリ、右ノ腋下ニ

弾痕一ヶ所、左足半バヲ打切りタリ、又櫻島小池村ノ

二個結着シアリタリ、此者ハ太ト股ヲ打破タリ、

此二個ハ鹿兒島廣小路ニ於テ実験式ヲ行ヒ、後縦覽ヲ

允サレ、而シテ後谷山境ケ瀬戸ノ刑場内ニ埋メタリ(死

者ヲ水葬スルニ、符校ハ戸ヲ毛布ニ包ミ布袋ニ納メ、彈丸三四個ヲ結着シ、而シテ水中ニ沈ム、兵卒ハ布袋ニ納メ、彈丸ヲ結着スルコトハ同シクシテ、水中ニ投

スト云フ、彈丸ハ海底ニ沈メ、流漂セサルヲ要スルカ為メナリトソ、紹述編ニ尸

体腹部ヲ穿チ、鉄弾ヲ填メタリト記セリト雖モ、然ルニ非ラズ、○同日晚景谷山

和田村ノ海兵ニ夷服一個流レ寄レリ、羅紗地ニ金色ノ肩給付キタリ、符校ノ服ト見ヘタリ)

四二二ノ二
七月五日

戦争ノ事由、飛檄ヲ以テ京都及ヒ幕府へ届出ラレタリ、

幕府へ届書左ノ如シ、

去ル廿八日英艦七艘城下海へ渡来、生麥一条ニ付公辺

へ御届申上、且案内船迄モ被遣ト之趣申出候間、是非

曲直為分解、未応接不首尾中、去ル二日手船蒸氣船三

艘引出、既ニ出航之形ニ見請候ニ付無抛砲発為致、翌

三日迄及掃攘、則日城下許出帆、十里許ノ処へ七艘之

内一艘碇泊致、外六艘ハ致出帆候、全体攘夷ノ期限モ

相過(編者曰、攘夷期限ハ五月十日ト)候得共、弥御決議未致承知

候(編者曰、幕府鎖港談判中ナル)ニ付、此節ハ応接ノ曲直ヲ正

シ差返賦ノ処、彼非法之働致候ニ付、無抛前条ノ形行

ニ相及候、委曲長崎奉行へ相達候(編者曰、長崎奉行へ達書、大同小異アリ、故ニ略ス)、

此段及御届候、以上、

七月五日

四二二ノ三
七月五日達

島津圖書殿久治宮之城領主

右ハ異国船来航之節御名代被

仰付候間、相図次第

島津彈正宅へ御出張、万端御指揮被成候様被 仰付
候、此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可申渡候、

七月五日 帶刀小松

四二ノ四
七月五日

国老川上式部美久ヨリ演達曰ク、

今度各隊死力ヲ尽シ、数艘ノ夷艦攘斥ノ段、御両殿
様不淺御感 思召候、尚此後再襲必定之事候ニ付、益
可抽忠奮御頼 思召候、且予テ出軍相図、二番早鐘又
ハ太鼓ヲ聞キ、四場へ出張可致旨被定置候得共、以來
一番相図ニテ、直ニ固メノ場へ出張可致被 仰出候間、
其心得タルヘキ旨、或ハ近日佐賀・福岡等御使者蒸氣
船ヲ以來港ノ模様ナリ、其節夷艦ニ不見誤様可相心得、
或ハ此際訛言流説ニ不惑様、一同可相心得トノ趣懇達
セリ、

四二ノ五
七月五日

各隊拜謁ノ後、太守公ハ各所砲台へ御出馬、修造又
ハ築増、或ハ装置砲種ノ事トモ指揮セラレタリ、

四二ノ六
七月五日

本日本宮千眼寺ニ在リへ各隊召喚セラレ、茂公 太守公 久光 国父公御
座候ニ於テ、拜謁ヲ允サレ、而シテ其場ニ於テ捷軍ノ
祝酒ヲ賜ヒタリ、物主ヲ初メ談合役・旗預・什伍長及
ヒ兵士諸役ハ順ヲ逐フテ拜戴セリ、

兵士ハ一番組ヨリシテ二・三・四・五・六番、水軍隊
等順次拜戴セリ（物上ハ公子方、談合役以下
ハ御小姓後酒瓶ヲ取レリ）
斯ク篤邁ヲ蒙リ一層奮起、感情益厚シ、
（遇立）

四二ノ七
七月五日

火薬局ハ夷艦再襲ノ予備ニ、諸火具・火管或ハ大小砲
彈ノ製造等忙シ、
火薬ノ貯蓄ハ百余万斤アリ、更ニ欠乏ノ患ナシ（弘化ノ初
ヨリ今ニ
至リ、速縮製）
造貯蓄セリ

四一三 大小砲製造

四三ノ一

集成館ハ焼亡セリト雖モ当時枢要ノ局ナルカ故、職工
場等直チニ仮造、大小砲ノ製造昼夜兼業シ、中ニ就テ
三十斤及二十四斤長砲鑄造シ、砲台毎ニ増置シ、其他
器械ノ製造等至急着手スヘキ旨モ令セラレタリ、

此時急製造スヘク令セラレタルハ、三十斤及二十四斤・十八斤三種ノ長砲各十門ナリ、是レ各所砲台増置、又ハ新築ノ台場装備ノ用ナリ、
(朱)
「七月五日達」

四二二
七月六日達

國分徒城被令候ニ付、御本丸御住居取毀引移サル、ニ付、本日ヨリ大奥解毀ニ着手、諸局城内ニアルハ、政庁ヲ初メ悉ク南泉院ニ仮設スヘキ旨令セラレタリ、

四二四 破壊英艦小根占海ニ止リ航行スルコト能

ハス

七月六日夜山川港へ向ケ彼処ニ錨ヲ止メ、青火灯ヲ掲ケ、夜七時過頃ニ一艘ノ迎船来リ此船ヲ率ヒ去レリ、鹿兒島ニテ弾丸ニ触レ、大損ト見得タリ、望遠鏡ニテ修覆ノ動作ヲ見タリ云々田原直、助記録、
着発弾ノ火ヲ発セサル者數十丸アリ、西田源左衛門・成田正之正右衛門其外山岡ヨリ掘リ出シタル長尖弾頗ル多クシテ、信管ニ火ヲ伝ヘサルハ三十二丸ヲ見タリ、此外ニモアルヘシ云々上、

英国アルムストーン砲製署ニテ聞ク、此時初メテ戦争ニ放発シテ、練熟セサリシコトモアリシト聞ケリ、後螺抜ケテ軽傷ヲ蒙リシ砲手アリシトソ(田原洋航ノ時間ク処ナリ)

四二五 (戦争ニヨル英国側死傷者)

六十七葉英国兵死傷左ノ如シ、

異本英人死傷数左ノ如シ、

即死 傷者

ユライユース 九人 二十三人内三人重傷

ペーアル 七人

コッケット 二人 四人

レイスポース 三人

ヘーシユース 一人 九人

アーカス 六人

ヘウブツク小舟○以上、艦名異向アリト雖モ訳者ニ依テ異ナレルカ如シ、

合計即死十九人

合計傷者四十五人

死傷合計六十四人

四一六 戦争ニ就テ我受ル所ノ損害

是ノ戦争ニ就テ彼カ為メ損害ヲ被レルハ、左ノ如シ、

第一汽船大小三艘ヲ奪ハレ、遂ニ焼滅セラレタリ、

第二我兵死スル者五人、重傷二人、怪傷八人ニ過キサ
ルナリ、

第三製造所・鑄錢局焼滅セラレタリ、

第四市街大小三百五十余戸、士街百六十余戸、合計五

百余戸焼滅セラレタリ、

第五寺院大小四ヶ所焼滅セラレタリ、

第六琉球船大小三艘、和船二艘焼滅セラレタリ、

四一七 戦争ニ就テ彼ノ損害

彼カ損害ヲ被レルヲ各新聞紙等ニ記ス処、或後日聞知ス

ル処、左ノ如シ、

第一ユライユース旗艦ヲ棄テタリ、

第二将校二名死シタリ、

第三兵員死スル者十三人、

第五兵員ノ傷者五十人、

第六大小艦六艘共多少ノ損害ヲ受タリ、

第七中艦一艘大壞、退去スルヲ得ス湾口小根占ニ三四

日間碇泊、後チ挽船来リ、夜中窃ニ挽キ去リタ

リ、

又援戰中顯然狼狽シタルヲ挙クレハ、左ノ如シ、

第一彼レ我カ汽船ヲ掠奪シタルニ因リ、開戦ノ令ヲ

下シ、放發シタルノ際彼レ錨ヲ揚クルニ違ナク、

遂ニ索ヲ切斷シタリ、

第二這錨退去ノ際揚ケ得スシテ退キタリ、

第三祇園砲台ノ前面淺洲ニ乘リ居へ、船体傾キ進退

困窘、援助ノ艦来リ挽ヒテ退キタリ、

第四初日ノ戦ニ二七日放發ヲ熄メタルハ、我ヨリ罷メ

タルニ非ス、彼初メニ止メテ退キタリ、

第五三日天候晴穩ナルニ再ヒ交戦セス、退去ノ航路

放發シ谷山海ニ退キ、再ヒ来侵ノ形況ナク、四

日ニ至リ横濱ニ向テ退キタリ、

第六三日・四日ノ兩日ハ一点ノ波濤ヲ見ス、海上盆

水ニ異ナラス、故ニ彼捷形アルニ於テハ、上陸

或ハ再ヒ各砲台ヲ攻撃スヘキニ、否ラサルヲ以

テ見ルトキハ、二日ノ戦ハ彼捷トセサルノ証左

ナラン、

以上記ス処、彼我ノ損害或ハ軍機ニ罹ル条件ナリ、宜シク比較シテ捷敗何レニアリヤ論者ヲ俟ツ、将タ我カ被ル処ノ損害モ又少々ナラスト雖モ、軍機ニ於テ失欠ナシト謂フモ誣言ニ非ラサルヘシ、奈何ントナレハ、我ハ將校ヲ失フコトナク、又死傷モ彼ハ六十三人ノ多キニ及ヒ、我レハ十七人ニ止マレリ、或ハ交戦ヲ罷メタルモ彼ニアリ、或ハ退キタルモ彼ニアリ、或ハ三日ニ至テモ来侵セス、勝敗ノ局ヲ結ハスシテ倉皇退艦シ、加之一艦ハ我カ砲撃ノ為メ機関ヲ壞ラレ、航海スルコト能ハス湾内ニ停リタルヲ、後窃ニ挽キ去レリ、是等ハ軍機ノ完全ナル者ト謂ヒ難カラシ乎、論者奈何トカスル、

四一八〔佳節拝賀ノ式停止〕

七月七日

本日ハ佳節拝賀ノ式モ戦争後雑沓、加之城中ハ稍々燒具ニ供セラレタルカ故、佳式受けサセラルノ場ニ至ラス、剩ヘ御両殿末々御在宮ナルヲ以テ、御式停止ノ旨布達セラレタリ、

四一九 戦争ニ就テ救恤

七月七日布達

今回兵火焼亡ノ戸々、家屋造建ノ費用恵与、或ハ材木低価払下アルヘキ旨布達セラレ、而シテ来ル十五日迄上申スヘシト令セラレタリ、

四二〇 再襲ニ備フル準備

七月七日

本日 太守公各所ノ砲台御巡覽ノ上、実地ニ当リタル物主・談合役・什伍長等カ上言ノ趣 聞召シ、旧台場修造ハ勿論、増築或ハ多賀山風月亭或ハ鶴江崎等ニ新築令セラレタリ、或ハ辨天砲台ハ下町海岸ヨリ僅百間許リ舟渡ナリシカ故、開戦前遽ニ舟橋ヲ架シタレトモ、暴風ノ為メ損壞シ、不弁ナリシカ故両方ヨリ埋築シ、歩渡ニ便ナラシムヘキ旨モ令セラレタリ、而シテ同所砲台及ヒ新波戸・屋久島波戸等修造シ、南北ノ両側ハ横撃防遮ノ罫ヲ築キ、或ハ火薬貯蓄ノ土庫、或ハ彈丸装用ノ土庫室、或ハ兵士屯所ノ家屋等建築スヘキ旨ヲモ命セラレタリ、

大門口砲台ハ背後ノ小銃射擲場五ヶ所(從來設アリ小銃射擲場
唱ヘタリ)ヲ毀チ、其土塁内ニ火藥貯蓄ノ土庫其他兵士屯
所等、辨天砲台ニ同シク建築令セラレタリ、

砂揚場砲台モ同シク増築、或ハ祇園洲・櫻島等モ悉ナ
同シ、而シテ同島ニハ燃崎(野尻村ト嶋ノ村ノ
間ニアル岬ナリ)又ハ横山・袴
腰ノ兩所ニハ新ニ築造、或ハ同所海岸ニアル旧砲台ヲ
増築シ、或ハ横山ノ海浜ニ新築スヘキ旨命セラレ、同
月八日ヨリ着手シ、昼夜兼業セリ(土石ノ業ハ郡奉行、木鉄ノ業
ハ御作事奉行担当ス、建築ノ
形状等ハ其分所ノ物主、談合後、仕伍長
ニ於テ指揮スヘキ旨モ令セラレタリ)

四二一 小根占海ニ碇泊シタル英艦引退

七月七日

小根占海ニ碇泊シタル夷艦ハ、六日ノ晩景挽船一艘來
リ、同夜退帆シタル趣山川・指宿又ハ大小根占・佐多
郷等ヨリ注進セリ、

這艦ハ去ル四日、各艦ト共ニ谷山七ツ島沖ヲ出航シ、
小根占海ニ至リテ六艘ハ出去リ、一艘碇泊シタルハ如
何ソノ事情ナリヤト、我ニ於テハ大ニ怪ミタリシニ、
六日ノ夜一艘ノ汽船來リ、索繩ヲ附テ挽キ去レリ、是
ヲ以テ我カ彈擊ノ為メ壞損シ、航スルコト能ハス、碇

泊シタル者ナリシヲ知レリ、去ル四日ヨリ六日ノ夜ニ
至ルマテ夜中折節空砲ヲ發シ、火箭或ハ烟火揚ケタル
ハ虚勢ヲ張り、白昼ハ依然何事モナク、或ハ脚舟モ御
サ、リシト云フ、

斯ク一艘碇泊シタルニハ、我ニハ大ニ疑ヲ起シ、但シ
ハ損壞シテ航スル能ハサルナラント云ヘリ、此時我カ
壯士輩ハ進撃シ撃チ沈メ、或ハ分捕セント議シ、上言
シタリト雖モ、僅一艘ヲ得ントスルハ策ノ得タル者ニ
アラス、再襲ヲ待チ、一挙ニ數艦ヲ碎クヘシト説諭セ
ラレタリ、此時壯士輩若シ窃ニ事ヲ為サンヲ慮リ、市
來六左衛門政序
筆吏ナル者指宿郷ニ出張シテ戒視セリ、

四二二 英艦放發シタル彈丸ノ數

七月七日

英艦ヨリ放チタル砲彈ヲ大礮製造所ニ集メタリ、其數
大小二百余个ニ及ヒタリ、種類ハ実彈・破裂彈ノ二品
ナリ(破裂彈ハ皆發セサ、
ルモノノミナリ)、悉ナ長実ニ彈ニシテ、円彈ハ一個
モナシ、

兩日ノ間彼ヨリ放チタル彈丸、悉ヲ破裂シタルニ非ス、
破裂シ或ハ各所ノ土堤・石牆等ニ打込ミタルハ、拾ヒ

得サルモ又多シ、或ハ碎片又多シ、是等ヲ以テ兩日ノ
間彼カ放発ノ大小弾、数百個ニ及ヘルヲ知ルヘシ(海軍
ニ、大小彈四百八十一個
空砲百八十七個記セリ)、又二日ノ屋後ヨリ各艦火箭ヲ飛セ
ルモ少カラサリキ、

四二三〔造士館員建言〕

造士館員其他建言セシ者寡カラサリシト雖モ、一二ヲ左
ニ記ス、

此節、御三役方(國老・若年寄・大目
附テ御三役ト唱フ)其外ヨリ再三願之趣有
之、無御扱一往國分御住居被仰出候条、神速ニ埒明キ
候様被仰出之趣、謹テ奉承知候、右ニ付近頃恐多奉存
候得共、一往國分御住居之儀ハ被為思召止候様有御座
度、謹テ奉願候、静謐之時ニ候得ハ、何方江被為成御
座候テモ、御差障リ相成廉ハ有御座間敷、此節之儀ハ、
又候英船不參トハ難申形勢御座候ニ付、若上様御当地
御迦シ相成候テハ、士風挫ケ候様可相成ト奉察候、数
代御養育之諸士ニ御座候得ハ、為一人必死ニ不志者ハ
無之賦御座候得ハ、士中モ強弱之差別有之、兼テ有志
ト申程之者治乱相替不申候得共、優劣一様ニハ無之候
ニ付、御当地モ多人數之儀ニ御座候得ハ、御床几被召

居、御下知時々不被為在候テハ、柔弱之者ハ頼少キ心
持ニ罷成リ、受持之場所粉骨ヲ尽シ候儀不相成、強剛
之者ハ國之為ニ死シ、左候得ハ職分相立候ト憤激之氣
分差起リ、死ヲ急キ可申、凡下女更ニハ特ニ多ク罷
成、一同氣先禿入候テハ、不可然形勢到來不致候トモ
難申上、私共ニモ甚タ心痛仕候、左候テ御住居之儀ハ、
草牟田ヨリ北方(同上)上伊敷村迄之間ニ、宜シキ場所御吟味
被為在候ハ、隨分御屋形可被召建所有之哉ニ奉存候、
旁不如意之御訳等モ可被為在候得共、已ニ戰場ニ臨ミ
候時節ニ御座候間、御不如意等ハ被為召忍、何卒御憤発
被為在度、此節就戰爭ハ台場受持之者ハ、実々粉骨碎
身死ニハマリ候由承リ候儀ニ御座候間、申上ル迄モ無
之儀ニ御座候得共、早ク御慰勞・御恩賞被召加度、左
候ハ一涯士氣相振ヒ可申、兎角士氣相振ヒ不申候テハ、
夷船再度渡來之節、全勝之程無覺束奉存候、台場并大
砲御取繕、集成館御修甫等之儀、最早御手モ付候筈ト
奉存候得共、當時緊要急々之要所御座候間、余事ハ被
召置、此方ニ混ト被仰付度儀ト奉存候、甚危キヲ申上
候様御座候得共、自古平安ニ安ンシ候得ハ、決テ及大
破、常ニ危懼ヲ抱キ、諸刃ニ心氣貫キ、上下一体ニ相

成候ハ、明代ト同様到来致候テモ、必ス太平ニ帰シ候例御座候間、此節國分御住居ハ世上之風分御国体ニ相障候儀ニ御座候、何卒被為思召止候儀誠一ニ奉懇願候、実ニ落涙仕候、此後争戦之節台場其外御備立之処ニハ、御一門方并御三役御名代ニテ御出張相成、進退掛引等御指揮有之度、左候ハ人氣モ自ラ相振ヒ、紀律モ相立候訳ニ可有御座候、已ニ先日台場発砲之折ハ、人数掛引等ハ唯物主一人ニテ被致候処モ為有之由ニ御座候間、此段モ奉申上候、誠惶誠恐頓首、

七月七日

山田 十介有松教授職

山之内作次郎助教職

兒玉源之丞

窪田新次郎

四二四 神瀬修築ノ建言

神瀬修築ノ建言左ノ如シ、

安政戊午ノ年、(鳥津若也)順聖院様深遠之尊慮ヲ以テ、神瀬江堡砦ニ類シ候砲台御造築之筈ニテ、既ニ少シハ御手モ付居候処御大変ニ相成、其後早々御取毀御座候、其時分之甚説ニ、神瀬ハ宇治瀨宮ノ領地ニテ、夫ニ砲台御築

造相成候ニ付、其妖怨ヲ恐多クモ及ボシ奉リ、且ハ祇園洲台場上之巖ヲ崩シ、砲台用之石ヲ取方被仰付候ニ付、是以神地故神仏激怒シ、御大変ニモ被為及候托ト、神職・僧侶之輩種々之妖言申触レ、凡俗ヲ惑候ノミナラス、神瀬ハ跡形モ不見様御取崩ニ相成候、神ハ元來聡明正直ニシテ、仁慈ヲ専トシ、国家之為メ妙慮靈顯有之ハ古今其例不少、国家動乱、万民苦候時ハイカニモ力ヲ尽シ、禍事ヲ除キ、正直ノ道ヲ補ハレ候モノニ可有之、然ルニ其領地ニ国家鎮衛ノ為砲台ヲ被為築候ニ、何ソ可怨可讎訳可有御座哉、タトヒ其領地ヲ崩シテ滄海トナシ、川沢ヲ埋メテ平地トナシ候トモ、国家万民之益ニ相成事ハ、分テ可被歎事ニ可有御座、殊ニ無用之暗礁ヲ築建シ、有用鎮護之地トナシ候ニハ、怨仇可有之事ハ勿論有之間敷訳ニ候処、全ク妖僧等凡俗ヲ迷シ候言語ニ御座候、順聖院様ニモ御国家之御為、御心力ヲ被為尽候御事ハ勿論、御入費ヲモ不被為厭、御手ヲ被召付候処、神職・僧侶之輩猥ニ妖言ヲ唱候ハ、実ニ可惡之至ニ御座候、神瀬ニ砲台御築相成候得ハ、御城下ハ別テ要害之地ニ罷成、夷狄猥ニ參港難致候間、早々御手ヲ被為付度、左様御座候ハ、乍恐御孝道ニ取

テモ不輕訛柄ト奉存候、既ニ先度與舶猥ニ乘入候儀モ有之、亦候禍心ヲ懷候船渡來候ハ、当分之御備ニテハ、於何方相支ヘ可申哉、山川ハ御城下ノ咽喉ニテ、開門同然之場ニ御座候得共、根占海岸トノ隔四五里程モ有之、如何ナル大砲ニテモ難遮、其内外海ハ猶更手広ニ有之、御城下海岸迄一走シテ乘入、万々一如何様之禍心ヲ懷キ居候半モ難測、妄リニ放砲ニ及ビ候ハ、陸地之戰ハ、元來御国士之長所ニテ、夷狄ヲ粉碎塵滅仕候ハ必定、無疑事ニ御座候得共、渠ハ冲中ヨリ放撃イタシ、進退出没ヲ不定時ハ上・下町ハ扱置、不祥之言ニ御座候得共、御大廓御大廓トハ御城ヲ云フモ僅七八町・拾町ニ過キ不申、能キ矢頃ニ御座候得ハ、焼打等之懸念モ不少、就中英吉利ハ一度參港イタシ、地形モ粗ハ遠見為仕筈候ニ付、暴慢ナル夷人共此方之御予備ヲ蔑視致シ候ハ、如何様之不法無礼可致モ難量、此方之武備充分行届、渠等之來ルヲ待ツテ試申度程之手当整候得ハ、人心モ動揺不仕、何程猖獗倨傲之夷艦幾十艘來撃仕候共、聊憂フルニ足ラス、タトヒ渡來仕候共、不法無礼ハ勿論得不致、恐敬シテ薪水等ヲ乞ヒ可申、其時此方ニモ礼義ヲ正ラシ、相当ニ与ヘ候ハ、其御威徳感戴敬慕シテ退港仕、

繁々渡來モ仕間敷、是則神武不殺之策ト申モノニ可有御座哉、兎角御手当向之御本意ハ無恃其不來、恃吾有以待之、無恃其不攻、恃吾有所不可攻ト申儀、確当之要語ト奉存候、如此之御意味合ニテ御手当相成候ハ、強ニ無礼難仕道理ト奉存候、四五年前松前侯御城築有之、海岸近く立派ニ有之候処、通帆之異船ボンペンヲ打掛走去リ候由、是ハ近く嘉永ノ度ニ御座候由、畢竟城築ノミニテ砲台之設無之処ヨリ蔑視致シ候、蛮夷ハ右通禍心有之者共ニテ、一彈撃之為ニ格別之儀ハ無之候共、御国威ニ相響、不輕事ニ可有御座、殊ニ御国ハ御手当向頗被為整候御聞ヘモ可有御座候間、方今ニ相成候テハ猶更御嚴整被為在度、神瀨江砲台御築造之儀ハ、順聖院様和蘭人ヘ吟味被相下、地理其他大砲之員数等ヲモ申上候趣モ為有之由、左候得ハ遠ク海外ニモ相響候御創業ニテ、此等之儀ヲ以テモ御英名相耀、御国力之強大ナル事、西洋各国ハ素ヨリ、世界一般ニモ相響候ニハ無疑、是則神武不殺之御大策御明慮之程何トモ無比肩、難有次第ニ御座候、因テ片時モ早ク御再興被為在度御事ト奉存候、乍併前件ニモ奉申上候通、當時内外御公私之御入費御繁多之折柄ニ御座候得共、愚昧賤

陋之私式スラ其職ニアラスト雖トモ、別テ苦心仕罷在
砲ニ御座候間、兎角經濟之道御充分被召付、其御余瀾
ヲ以、右ニ申上候種々之御用途ニ被宛行候様無御座候
テハ、今形御蓄財ヲ御費シ御座候テハ、非常之時ニ当
テ甚御差支可相成、尤古人之語ノ如ク富国強兵之四字、
実ニ方今ノ御要務ニ可有御座候間、何卒広ク言路被為
開、御生財之筋人々江建白モ被仰付、非常之御処置、
断然御果決被為在度御事ト奉存候、將又山川港内其他
近辺之海岸砲台之儀モ大切之場所柄ニ御座候間、今形
被召置候テハ難相濟、是以和蘭人江吟味モ被仰付候由
ニモ御座候、此所ハ御城下之咽喉ニ御座候間、神瀬ヨ
リ先ニシテ御手ヲ被為付度、其他下町海岸之土堤モ、
石燈^(籠)通リヨリ砂糖蔵之方ハ未御出来無御座候付、御
築添相成、沖中ヨリ市中之家不見透様、且ハ万一非
常之節ハ敵ノ彈撃ヲ凌キ候ニハ、別テ益可有御座、平
常ハ火防之為ニモ可罷成、亦大門口砲台ハ沖中ト下町
波戸之前涯迄ヲ打候射線之設ニテ、脚舟ヨリ波戸台場
ニ迫リ候防キ全無御座候間、大門口御番所辺江輕砲三
四門被備置度、是ハ横打之設ニ御座候、亦辨天波戸・
新波戸之両台場ニ脚舟ヨリ迫リ候ヲ、横合ヨリ打払候

ニハ、右両砲台毎ニ北之方一方ニ袖ヲ築添、三四門程
ツ、相備申度、又鶴江崎辺三方玉利之堤塙台御出来、
上・下町并ニ祇園洲台場へ脚舟ヨリ迫リ候ヲ、打払候様
有御座度、此等之趣ハ和蘭人モ建議為仕由、又上町新
築地御作事方下海岸へモ、下町同様土堤御築被成、堤
上ニ樹木ヲ植付、御城郭不見透様被仰付度御事ト奉存
候、

神瀬へ砲台御築造之上ハ、装置之大砲ハ八拾斤・六拾
斤之長砲百門程、少クトモ七拾門ハ是非御備相成度旨
和蘭人モ申上候由、山川江ハ六拾門程、櫻島洗出・烏
島・横山等へモ式拾門程ツ、相備、沖之小島ハ相除、
其土石ヲ神瀬ニ移シ、亦神瀬ト甲突川尻調練場トノ間
ハ淺瀬ニ築切り、大船通帆不相叶様ニイタシ、後々ハ
築切り候トノ趣共モ為申上由、右ハ中々不容易御功業
ニ可有御座、就テハ大砲之員數モ彼是式百門ニ過可申、
右ヲ御鑄造之御入費尅挺凡五百兩ト見賦、都合拾万兩
ニ相及候、五百兩ニテハ迎モ出来ハ無覺束、壹丁ニ付
纏テ千兩程ニモ可相及哉、是ニテサへ不容易御入用、
加之砲台御築造之御用途、旁一方ナラサル訳ハ必定ニ
御座候へハ、乍恐当分之御趣法ニテハ、拾年之後トイ

へトモ可難被調哉ト奉存候、依之何分一日モ早ク御手ヲ被召付度儀ハ、別段御軍備一般之方ニ御生財之道被仰付度御事ニ奉存候、

一 梵鐘御取揚之儀ハ、重キ

勅諭之御趣被為在、普ク天下ノ御触ニ相成候ニ付、去ル午年御領國中寺院之梵鐘御取揚相成、集成館・鑄製方等へ被相渡置候処、御大麥後前件妖僧等之妖言ニ依テ之訳ニモ有御座間敷候得共、夫々本々へ御返シニ相成、剩へ御取上之節ハ寺役ニテ差出候処、御返付之御ハ御物計之持夫ニテ御座候由、右之御処置振ヲ乍恐窃に勘考仕候ニ、重キ

勅諭ニ被為對、後世之評論如何可有御座哉、後世他邦之論評ニ罹リ候時ハ、実ニ無勿体次第可罷成ハ必然、当今之処ニテハ、皆人其時勢之情感貫通仕居候ニ付、氣付不申程ニ御座候得共、後世其時之事情取失ヒ、事蹟ヲノミ存シ候場ニ相成候ハ、別テ重大遺恨之論說ニ罹リ可申、梵鐘ヲ以大砲ヲ鑄造仕ハ聊之事ニ御座候得共、後世之論評ハ至重至大之事柄ニ御座候処ヲ、乍恐御遠慮被為遊、以前之如ク御取上有御座度奉存候、尤妖僧等時勢之弁識モ無之、仏陀之妙靈奇特ヲ唱、種々

可奉阻モ難計御座候得共、時態篤ト御諭解ニ相成、其上奉否鞞モ御座候ハ嚴重之御処置被為在候テ、少シモ御差支ハ被為在間敷哉ト奉存候、恐惶頓首、

文久三年亥七月七日

市來正右衛門四郎旧名

上

四二五 高橋縫殿ニ軍役奉行心添ヲ命ス

四二五ノ一

高橋縫殿種徳、御小姓与者頭職

右ハ当御役ニテ、御軍役奉行心添被 仰付、御軍役方江致出席、御用承候様被 仰付候、此旨表方江致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候、

七月八日

帯刀小松僧殿

四二五ノ二
七月八日達

急変之節、御軍役方役々柿本寺平ノ馬場町ニ在リタリ江早速出役致候様被 仰付候条、向々へ早々可申渡候、

七月八日

式部川上久美

四二六 佐土原侯兵ヲ率ヒテ來麿

七月八日

島津淡路守忠寬殿佐土來着セラレタリ、同君ハ英艦渡來ノ旨ヲ聞キ、二百余名ノ兵ヲ率ヒ、七日晩影(意)福山ニ着セラレシニ、夷艦退去ノ事ヲ聞キ、兵隊ハ同所ニ残シ、数十名ヲ從テ參向セラレ、応分ノ事ニ預ラン事ヲ願ハレタリ(卷)。(樺山久舒能勢直陳紀事参照)。

四二七〔砲台新築令〕

七月八日達

多賀神社ノ近傍及ヒ同所接続ノ地風月亭ノ二ヶ所へ、砲台新築令セラレタリ、

多賀神社ノ傍地ハ同所居住警力鷹頭才之丞カ所有、風月亭ハ當時今末川久馬ナル者ノ別業邸ナリ、何レモ買上ニナリタリ、此地ハ、祇園砲台背後ノ山上ニアリ、這所ニ砲台アラハ、英艦モ遁レ去ルコトヲ得サルヘシト、衛兵等実験上ノ旨言上セシニ仍リ、直チニ築造命令セラレタリ、

祇園砲台ノ困難ナリシハ、北方潮音院岬ノ沖ヨリ斜線ニ放撃シ、砲台稍横面ニ攻撃ヲ受ケタルカ故、此ノ所ニ翼臺築造アランコトヲモ上言シ、是モ同日允可セラレタリ、

四二八 癸亥七月八日英国ヨリ幕府へ差出書外国新聞

英国軍艦コロモラン、書状ヲ齎テ当港へ唯今着セリ、右去ル土曜日我七月第十二時刻午、軍艦鹿兒島港ニ碇泊シ在、大風吹ク、日本人ヨリ不意ニ砲発セリ、不幸ニシテ次ノ人員殺亡セリ、カヒタン(Captain)船將シウンスラリンク(Wainot)(人名)、コンマントル大将ウキルモット(Wainot)(人名)、九百人一ノ丸ニテ打殺サル、外手負・死人六十人、艦ハ多分損傷ス、英船当港へ歸來ル近ニアリ、書中ノ文巨細ニ記スルヲ得ス、其大略ヲ載ス、

第八月十五日我七月第十二時刻午台場ヨリ打出ス、水師提督直ニ合図ヲナス、日本船三隻ヲ焼ク、捻仕掛ノ蒸氣船也、(イソグランド)号ハ(エンケラン)・(サージョージグレイ)・(コンテスト)横渡入長崎ニテ、右日本船早朝軍艦ノ傍ニ碇泊セリ、台場ヨ買入タル薩州船、リ打掛ケタルヲ以テ軍艦碇ヲ上ケ、其射ルコト甚タ強ク、五百乃至六百エル余難シテ一列ニ連レリ、殊ニ大筒ニシテ、其内六十乃至七八十頃許ノ破裂丸、又尺余ノ実丸ナリ、カヒタン並ニコンマルトルハ午後第二時五分五秒ノ比、甲板ノ櫓上ニテ一彈丸ノ為ニ死ス、又千インチノ破裂ノ丸甲板ノ中央ニテ破裂シ、水夫七人即死ト五人手負、

ロイテナントチヨフスモ是カタメニ死ス（訳者云、右ハユラ、天氣悪ク雨フリ、風陸ノ方向ヒテ吹ク、午後第三時火府中ニ起ル、第三時三十分ニ発砲止ム、第九時二十分ヨリ造作場ニ打カ、ルコト終夜、翌十六日（我七月三日）午前第三時三十分ニ碇ヲ上ケテ港口ニ出掛ケ、府ノ台場ニ向テ打トイヘトモ、破裂丸又只答ルモノ台場ニケ所ノミナリ、碇泊セル処ハ丸ノ達セサル処ナリ（訳者云、第二次ニカ、府ハ夜半尚燒ケテアリ、リクルコトヲ脱ス）

手負死人目録

一、ユライス艦死人十人、手負廿一人内一人死ス、〇二、（Captain）ヘール死人七人、内一人士官、〇三、アルコス手負三人、〇四、コッケット死人一人、手負六人、内一人ロイテナント、〇五、ヘルシウスー死人一人、手負二人、内一人死、〇六、ライスホース手負二人、〇七、ワアック無之、英国鹿兒島ニ到リシハ本月一日ニアリ、戦争前二日計、同港ニ於テ薩ノ藩士モ参リ申立候コト、穩ニ済スヘキ談判モ有シニ、七月二日昼時不意ニ打掛候、軍艦明日ハ横濱へ帰港ノ由、此新聞ハ上海ヨリ薩州沖ヲ過候船へ申来ル、

四二九 英国艦隊横濱へ退去ノ報

七月九日横濱江到着、

六月廿二日横濱出帆之英船、薩州表江罷越、応接之上戦争ニ相成、相済テ亥七月九日横濱江到着、七艘之内壹艘ハ無事、跡六艘ハ打申候由ニテ損シ有之、即死六十人余、カピタン奉行之由・コンマンデール（差圖役之ヨシ）右即死、

一薩州方船異国形二艘、琉球船四艘被打候由、死人之数ハ不相分、鹿兒島台場市中二ヶ所之燒候由、一六月中英船出帆之節、左之役々廿四日頃出帆之処、此船之沙汰昨日迄無之候、

外国奉行支配調役
淵邊徳蔵
通詞

立石徳十郎
外国方同心
篠原傳十郎

四三〇〔舊邦秘録〕

七月九日

忠房

江戸飛報着ス、日夕、英艦鹿兒島ニ向テ出航セリ云々、
同報、同日晩景ニモ達ス、

斯ク同報アルハ、非常重大ノ事件ナレハナリ(六月三日出發セリト云)

了

四三一 久光公御上京ヲ促サル(近衛家御父子)

尚以、本文之次第異々分テ申入候間、屹度御承知可
在之存候事、

残暑難凌候、弥以御勇健候哉、尚承度存候、然ハ時勢
追々切迫、不容易次第ニ候間、最早此場ニテハ屹度々
々其許御上京ナラデハ不相濟ト決心仕、別紙之通建白
仕候、何レ再三再四アク迄申立候心組ニ候、呉々押通
シ申立候覚悟ニ候、弥被 召候上ハ、何卒々々自国防禦
之辺ハ修理大夫江御委任ニテ、急速々々御上京ニ相成
候様、呉々此場ニ至リ候テハ、屹度御登京在之候様深
々希入存候、何分御上京ナクテハ、於当家モ俗ニ申心
細ク存候、実ニ昨年来格別々々勤王之御事、何レニ致
セ早々今度ハ御登京之様、偏ニ存候事、

七月九日

(近衛)
忠照

嶋津三郎とのへ

三白、自然修理大夫殿被 召候節ハ、御申合セニテ
御上京之様存候、可相成ハ其許御上、京尚更ト存候
事、
(嶋津忠承氏藏本にて校訂)

四三二 「言路洞開ノ令ヲ布レタリ」七月十日

七月十日、言路洞開ノ令ヲ布レタリ、左ノ如シ、
今般英夷来舶、書翰差出候処無礼不義ノ文言等有之、
其俣難差置事候得共、可成丈是非曲直ヲ正シ分解為致、
未応接結局ニ不至中、此方之蒸氣船奪取候ニ付、終ニ
致掃攘候様申渡候処、一統粉骨碎身致防戦候段、別テ
頼母敷令感賞候、然処近頃ニ至リ浮説流言申立候族有
之哉ニ相聞得候、言路致壅閉候儀ニ無之候処、右次第
如何之至ニ候、就テハ上書籍為出置候ニ付、諸士以上
ハ勿論、郷士以下タリ共、不依何事存慮十分申出候様、
早々可申渡事、

七月

御別紙之通御筆ヲ以被 仰出、難有 御趣意之御事候
条、一統謹テ可奉承知候、右ニ付テハ無名之上書致間

敷卜之趣ハ、御先代様(御先代様トヨリ追々別テ被仰)出置候ニ付、以来銘々姓名相記奉差上候様可致候、上書箱之儀新上橋口江被差出置候、

七月十日大蔵島津 帶刀小松 但馬川上 式部久美

斯ノ如ク御親書ヲ以テ令セラレ、当日ヨリ新上橋詰ニ仮木屋建設、上書箱ヲ置レ、御徒目附兩人鑿視セリ、当時非常ノ際ナルカ故、意見上言スル者寡カラス、毎朝御本陣ニ於テ開カレシ由ナレトモ、誰某カ如何ナル事ヲ上書セシヤ、更ニ知ル者ナシ、

(御城當日ヨリ御
樓門ニ出サレタリ)

四三三 戦争中敵弾来レル個所

七月十日

鹿兒島中各所(砲台及ヒ上ノ下
町ヲ除クノ外) 敵弾来レル个所、左ノ如シ、

一 御城山内へハ其數幾何ナリヤヲ知ラス、多數打込ミタリ、

一 御本丸大奥御二階へ一個来リ、破裂ス、

一 同櫻之間御中門脇へ一個来ル、破裂セス、

一 御樓門ニ二個来ル、破裂ス、

一 二ノ丸庭ニ一個来ル、破裂セス、

一 二ノ丸浩然亭へ一個来ル、破裂セス、

一 御台所庭ニ一個来ル、破裂セス、

一 御城外護摩所内へ一個来ル、破裂セス、

一 祇園台場土堤ニ実弾及ヒ不破裂ノ彈等、大小二十

二個ハ拾ヒ取り、其他土堤又ハ石垣ニ打込タル者

ト破裂セシ者ハ、幾千カ知ルヘカラス、

一 新波戸・辨天波戸・大門口・砂揚場・櫻島三ヶ所

ノ砲台モ、実弾又ハ破裂セサルモノ數十個アリ、

一 集成館・鑄錢局其他天神社辺、又ハ田之浦通山神

辺ニ濫發セシ実弾・破裂彈等數個、其内破裂セサ

ル者四五個、鑄錢局内ニテ破裂セサル者三個、集

成館内ニ五個アリタリ、

一 又上ノ下町市街中ニ破裂セサル者十余個アリタリ、

編者曰、海軍雜誌ニ、彼ヨリ放ツ処ノ彈丸、壹個モ爆

發セサルハナシト記セリ、是レ誣言ノ尤モ甚シキ者ナ

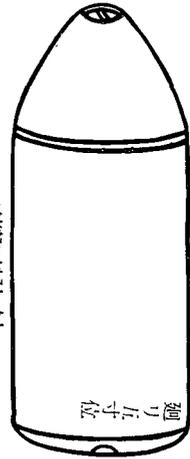
リ、以上記スカ如ク、不爆ノ彈許多アリタルハ衆ノ知

ル処、加之後過リ爆發シタルモアリ、實際各所ヨリ拾

ヒ得テ集成館ニアリシ者、大小凡ソ七八十個ニ下ラス、

衆人モ縦覽シタリ、又城内ニ落チタル不爆彈ノ凶写シ

タル者、左ノ如シ、



長巻尺寸位

四三四 再襲来準備達書

七月十日

各砲台警衛兵各持場へ出会スヘキヲ令シ、国老其他吏員出張、御軍役奉行^{折田}演達曰ク、

今後夷艦渡来、英国ノ標旗ヲ確認セハ、直チニ砲発掃攘スヘシ、其他ノ夷艦ハ命令ヲ待チ、敢テ妄動スルコト勿レト厳達シ、而シテ各国標旗図ヲ砲台毎ニ揭示シタリ、斯ク厳令ヲ下サル、所以ハ、過日已ニ打沈メントセシニ、暴風劇雨ノ為メ放発心ノ如クナラサリシヲ甚遺憾トシ、何レノ国モ論セス、夷艦ト認ムルトキハ直チニ放発シ、撃沈セント奮起セシ故、斯クノ如ク區別シ、厳令セラレタル者ナリ、

四三五 諸郷兵解散

七月十日達

夷船退去、穏静ニ帰シタルカ故、諸郷兵隊モ解宮凱陣スヘキ旨令セラレタリ、其中限之城・水引・高城郡高城・曾木・本城・馬越・湯之尾・山野等ノ八ヶ郷ハ本月中警衛、当直ヲ令セラレタリ、宿陣ハ大乗院・福昌寺・南林寺ノ三支坊ナリ、此外湾内沿海ノ諸郷ハ其隣郷ヨリ警衛シ、重富・帖佐・加治木・國分又ハ櫻島ヨリ^{肝屬郡}佐多迄ノ海沿ニハ、肝屬各郷或ハ諸縣諸郡無海ノ郷々ヨリ出衛セリ、

四三六 久光公仮棲買上

七月十日布達、草牟田村稻留カ邸宅買上、国父公仮リノ御棲居アルヘキ旨布達セラレタリ、左ノ如シ、草牟田御屋敷、

右ハ稻留八郎左衛門^庄宅御用地相成候ニ付、以来右之通相唱候様被 仰付候条、向々へ可致通達候、

七月十日

帶刀^{小松}

斯クノ如ク、国父公仮リノ御棲居アリシ所以ハ、兩丸共ニ海岸接近ノ構造ニテ、海上ヨリ彈擊ニハ好距離ナルカ故便宜ノ地、則チ稻留カ邸宅ハ一ツノ城山ヲ隔テ、背

腹ノ如キ地ナルヲ以テナリ、這ノ邸宅ハ故調所笑左衛門
廣郷、国老在職中建築シタル別業ニテ、没後本邸ハ島津
石見(久體)ニ売却シ(石見カ孫彌)別業ニ移住セリ、其構造仮棲セラ
ル、モ不便ナルコトナシ、仍テ本日 国父公ハ七ツ時御
供揃ニテ、千眼寺御本陣ヨリ草牟田御屋敷ヘ引移ラレタ
リ、去ル廿九日ヨリ千眼寺ナル御本陣ニ、御父子御一同
御在宮ナリシカ、夷船退去シ、追日平穩ニ帰シタルカ故、
国父公ニハ御陣扨、 太守公ニハ未タ諸外城兵在陣セシ
故、依然在宮セラレタリ、

四三七 (島津淡路転宿)

七月

島津淡路守殿ハ去ル八日来麿、大乘院支坊ヘ止宿セラ
レシニ、同所ハ諸郷兵營所トセシ故、本日武村長倉某
宅ヘ転セラレタリ(能勢直陳紀事参看)

四三八 英国艦隊戦況談 (宥益)

文久三亥年七月

以愚札奉啓上候、昨日ハ火急殊ニ途中ニオイテ相認、
甚以艦略文面、平ニ御仁免可被下候、扱薩州一条、昨

Es. S. 340. (W. 4111)

九日早朝英国軍艦エライリス壹艘帰港、サト及ウルエ
ス之式人帰濱、随テ及対面、色々聞糺居候処江異人数
多入来、委細ニ不及、午後再参委敷伝聞仕、則左ニ申
上候、薩州表江着船ノ日ヨリ段々応接仕、薩州ヨリモ
異船江出役使者入来、船ニテ及対談候由、双方共ニ和
談之儀無之、段々日延ニ可相成見候故、英国ヨリ薩州
之蒸気船三艘・琉球船或ハ日本船ヲ奪取候由、是ヲ見
ルヨリ、薩州之台場ヨリ大砲放チ、先ニ進ム所ノ英船
ノ船将及ヒ下輩四五人打殺サレ候ヨシ、右船将ト申者
アトミラールニテハ無御座、只壹艘之船将ニ御座候、
夫ヨリ英人モ相打ニ、大砲或ハ破烈玉ヲ台場江向テ発
シ候処、右台場上ニテ玉ノ破烈、誠ニ見事ニ御座候由、
段々乱放、其玉城下ニ飛行、城下川東ハ皆々焼失、国
民之騒動実ニ憐ムヘシト申候故、僕申候ハ、外国人ハ
タトヘ戦争ニ及候共、決テ国民ヲ騒シ、難渋ニ為及候
事ハ無之様兼テ聞及候ニ、何故今般ハ左様ニイタシ候
哉ト及尋問候処、サト申候ハ、敵方台場ハ城下ニ引続
有之候故、台場ヲ打外シ候ヘハ、必市中江飛行候故、
是非ナキ次第ト申居候、薩州ヨリハ百余数大砲ヲ発シ
候ニ付、英人之死亡十五人、手負四十余人也、敵方ノ

死亡ハ何程カ存不申候由、前ニ奪シ船ハ悉ク焼払ヒ、中ニ有之品ハ少々奪取候由、サト・ウルエス式人持帰候品、ガラス瓶大式本、尤宜敷品ニ御座候、姿見文ケ式尺七八寸幅壹尺四五寸、日本製鉄砲壹挺、陣笠壹蓋、書物壹冊、此内鏡ト瓶ハマトロスヨリ買取候ヨシ、鉄砲及ヒ書物・器ハ自身ニテ取候由、書物ハ六合論略ト題シ、嘉永酉之秋薩州相良蜻州著ト記シ御座候、則志見仕候処、ナチニール(Natchinier)キユンデ之訳書ト相見ヘ申候、ミニストル及ヒアドミラール未タ帰岸無之故、相尋候処、是ハ石炭ヲ切ラシ候故順風次第ニ帰濱、兩三日ハ延日及フベシト申居候、然ハ只一戰ニテ未タ勝負ヲ不決、尤英国軍漸ク惣人数六百人ニ不(ト)候故、此度ハ上陸ヲ致サス、船軍而已ニテ引取候由、僕サド江申候ニハ、君ハ戰場此度始テニ候哉ト相尋候処、真ニ始テト申候故、如何有之哉ト申候ヘハ、大ニ面白キ事ニ存候、以來又々参度ト存候、乍去大將ノ命ニ無之時ハ、徒ニ参リ若討死ニモ及候ハ、能人ノ笑ヒ物故、命ニアラサレハ決テ参リ不申ト申居候、愚案ルニ、一方計承リ候テハ不分明ニ候得共、薩州ノ禍モ所謂ナチニール(Natchinier)然然日日欽ト奉存候、右略々申上候、尚アトミラール・ミニストル

帰岸之上、又々委敷聞糺シ可申上候、当時フランス長州ヨリ償金差出候様致度旨、

公辺江申出候趣、専ラ風説御座候、実説ニ御座候哉、僕輩虚実不分明ニ御座候、以後又々薩州事六ヶ敷ト奉存候、乍去薩州ハ大薩程有之、船士十五人討取、其上四十余人之手負人随分気味能奉存候、余リモロク負候テハ、矢張日本之恥ニ御座候得ハ、一旦ハ打払度奉存候、大略乱筆御仁免奉願上候、謹言、

七月十日

究益拜

四三九 伊地知正治大久保一蔵へ与ル書翰

別紙唯今到来候内、越前侯献白、極テ疾ヨリ御存知ハ不知候ヘ共、流石又正直ナル風ニテ、御見合ニモ可相成カト存候ニ付上呈仕候、外ニ先刻御手帖之趣モ承知仕候、何分殺氣催立候御国ノ人氣込合次第、宜敷御鎮静奉願上候、恐々敬白、

七月十日

(伊地知)
正治

(大久保)

一蔵様

別紙相添

文久3年(1863)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久三年七月ノ二

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料
(紙数九九枚)」の記載あり

目録

- 城地移転布達
- 國分郷名改称
- 太鼓踊ノ形況
- 近衛公二條公久光公へ与ル書翰
- 近衛公御父子久光公へ御書翰
- 〔薩英戦争褒賞一〕
- 〔江戸ニオケル薩英戦争風聞〕

〔諸局平常開席〕

〔薩英戦争褒賞二〕

〔兵糧方達〕

〔銅器類俱出令〕

〔櫻島各所砲台ノ修築〕

水戸藩戸田外二名ノ書翰

中山仲左衛門書翰大久保一藏宛

中山仲左衛門免職

長州藩援助ヲ乞フ

太守公宇治瀬神社告祭式

大久保一藏へ小松帯刀ノ書翰

火巧製造所創設

和田九十郎中原猶介竹下清右衛門云々

越前藩老入薩ノ報

長崎通信

長崎奉行鹿兒島ニ探偵ヲ派遣ス小松帯刀報

太守公千眼寺御解陣

御一門四家初メ諸士軍勞褒詞

英艦鹿兒島灣ニ迫ル

戦争褒賞ニ就テ

川上龍衛自記

喜入攝津久高（名義カ）自記抜抄（當時江戸在邸
國老職ナリ）

紹述編年抄

四四〇 城地移転布達

四四〇ノ一

國分江一応御住居之儀被仰出置候得共、誠ニ不容易重

大之事柄ニテ尊慮難被決、此上ハ被任神慮候御趣意ニ

テ、大中公御闡御頂被成候処、御託宣有之候ニ付、弥

被仰出置候通御決定被為在候、尤諸士一統モ被召移、

征夷之御手当嚴重被相備度思召ニ候段被仰出候条、此

旨一統江不洩様可申渡候、

七月十一

式部（川上
久美）

四四〇ノ二 國分郷ハ古大隅國府ノ地ニシテ、鹿兒島ヲ去ルコト良位

八里余、大隅國嘯啖郡ニ在リ（海陸間、
里程）、東ハ敷根・福山ニ連

続シ、數里ヲ隔テ都城ニ連リ、北背ハ高千穂ノ大山連亘

シ、其後ニハ日向諸縣郡小林・飯野等ノ地アリ、西ハ加

治木・溝邊・横川等ニ接シ、或ハ北方數里ノ外ニ菱刈諸

外城アリ、東北ノ間ハ日州去川ノ嶮ヲ拘ヒ、三面ノ陸路

悉ナ天嶮ノ地ナリ、南面ノ一方海ニ望ミ、則チ神瀬又ハ

砂揚場・櫻島洗出シ等ノ諸所ニ砲台ヲ築キ、或ハ龍ケ水

三船明神岬又ハ櫻島藤野・武両村ノ対岸ニモ數十門ヲ備

へ、而シテ帖佐（給良郡）・加治木ノ要地、或ハ櫻島瀬戸・垂水ノ

両岸ヲ扼スルトキハ頗ル要害ノ地ナリ、茲ヲ以テ照國公、

安政戊午ノ年ヨリ遷城ノ尊慮アラセラレタル者ナリ、斯

クノ如ク速ク見ル処アリテ、神瀬試築ハ戊午ノ夏ニアリ、

茲ヲ以テ今回國老等モ照國公ノ先見卓識現ニ感スル処ア

リテ、徙遷セラレンコトヲ頻請シタルニ依リ、上ニハ又

先公手ヲ下サレタルヲ親クセラレ、加之英夷再侵遠キニ

非ラサルハ、愚夫愚婦モ予メ知ル所ナルカ故、頻請ニ応

シ玉ヒシモノナリ、此地ニ城地ヲ徙シ、各所ニ砲台ヲ築

キ新式ノ大小煩ヲ備へ、或ハ軍艦ヲ置キ、海軍ヲ練リ追

撃ニ備へ、海陸挾撃スルトキハ幾十艦隊ヲ以テ侵来スト

モ、敢テ恐ルニ足ラサルナリ、○今回國分ヲ國府ト唱フ

ヘキトノ令ハ、茲ニ記ス処ノ古蹟ニ依ラレタル者ナリ、

○是ノ布令ニ依リテ城中ニ在ル家屋ヲ毀チ、転築セラル

ノ準備ナルカ故、即チヨリ御家老座其他諸局モ南泉院内

ニ仮設シ、南泉院ハ小野村ニ在ル末寺へ引移シ、而シテ

城内大奥等ハ当日ヨリ解毀ニ着手シ、御二階等ハ二三日

ニシテ毀チタリ、○斯ク城地徙転セラル、ハ、海岸ニ接

近シ、海上一望ノ中ニアリテ、砲撃ニハ其距離適宜ナルカ故、英艦ノ彈丸ヲ受タルコト許多ニシテ、焼燬セサルハ燒悴ト云フヘシ、然ルニ彼潰走シタリト雖モ、遠カラス再侵疑ナク、若シ彼カ為メニ燒燬セラレ、而シテ後遷徙スルハ、汚名ヲ残スノ遺憾アリ、今回ハ我ニ捷アルヲ以テ、此機ニ遷転スルヲ良シトス、照國公ハ安政戊午ノ春予メ手下サレ、或ハ和蘭軍官ハントウエーン來麿ノ際、海防ノ一班諮問セラレ、内海測量ヲモナサシメ玉ヒシニ、当城地ハ海岸一砦堡ニ類シ、国主在住セラルヘキ構造ニ非ラス、其他治乱ニ就テ上言セシ条アリ御言行録、ニ詳記ス、或ハ今回鬪戰実験ノ事實ヲ挙テ、遷城アランコトヲ建言スル者アリ、然リト雖モ容易ノ事ニアラサルノミナラス、諸士モ遷転セサルヲ得ス、從テ經費モ莫大ナルハ無論、陸海ノ軍備モ迅速修造セサルヲ得ス、加之市街焼亡或ハ汽船燬滅セラレ、此時ニ方リテ遽然城地遷遷セハ、恐ラクハ怯膽ノ名ヲ負ハンモ亦知ルヘカラスト、何レモ断決ニ困ミ玉ヒシカトモ、遷徙論者ハ頻リニ建論頻願シ熄マサリシ故、已ム事ヲ得玉ハス、遷否如何ンハ神明ノ断ヲ仰カレント、公子島津周防忠殿ニ命セラレ、大中公ノ宣託ヲ仰ラレシニ、遷徙ヲ可トスルニ出タルカ故、斯ノ如

ク布令セラレタル者ナリ、然リ而シテ又非論者アリ、曰ク、此際城地遷転ハ再侵ヲ恐レタルニ似タリ、或ハ近ク長州ハ馬關ノ戰爭ニ敗潰シ、砲台ヲ奪ハレ器械ヲ掠取セラレ、剩ヘ衛兵遁走大ニ国名ヲ隕シ、加之萩城ヲ棄テ山口ニ遷転シタル怯膽ノ名、天下ノ嘲談ニ罹レリ、我カ藩人モ茶談トセシハ、今尚舌乾カス、本藩ハ一般勇奮教艦ヲ擊掃シ、猖獗倨傲ノ英夷モ再戰ノ力ナク、倉皇遁走シタリ、実ニ數百年來培養ノ士氣茲ニ於テ顯ハレタリ、然ルニ彼ノ怯懦ナル長藩ノ轍ヲ踐ムハ、君臣俱ニ何ノ顏アツテ他邦人ニ対スルヲ得ンヤ、今ニシテ先ンシ忽ニスヘカラサルハ、海岸ノ守備或ハ士氣養成ノ二ツニ止ル、海岸守備ハ照國公ノ計画ニ出タルハ衆ノ知ルカ如ク、神瀬ヲ修築シ、數十門ノ大煩ヲ備ヘ、或ハ櫻島洗出ニ砦堡ヲ設ケ、其他軍艦ヲ製造シ、而シテ海陸挾擊或ハ追擊ノ備ヲ急務トス、是モ亦照國公既ニ手下サレタルハ、遷城目論見ノ前ニアリシハ衆ノ知ル処ナリ、遷城素ヨリ不可ナルニアラスト雖モ、先末寬急ノ別ナクンハアルヘカラスト、此時ニ方リテ寬急ノ別ナキ時ハ、敵目前ニ有ルニ同シ、再襲必ス近キニアラ、脱力加之長藩不名ヲ取レル覆轍アリ、鑑ミサルヘケンヤ、慮ラサルヘカラサルナリト頻論スル

者亦甚タ多シ、故ニ尚可否論者ノ多寡ヲ以テ裁断セラレ
 ント、汎ク諮詢ノ令ヲ下サレ、上書函ヲ出サレ、上下ノ
 意見ヲ求メ玉ヘリ、而シテ遷城尤モ可ナリト雖モ之ヲ寬
 ニシ、神瀬修築ヲ速ニシ、再侵ノ急ニ備ラレンコトヲ要
 スルノ冀望者多数ナルカ故、同月十七日ヲ以テ、国府遷
 城ハ重大ノ事業ナルカ故寬ニシ、神瀬及ヒ櫻島燃崎砲台
 築造、或ハ軍艦製造・海軍設立等迅速着手スヘシトノ令
 ヲ布カレタリ、○斯クノ如ク令セラレ、即日神瀬築造方
 吏員数名ニ命セラレタリ、左ノ如シ、

御勝手方掛御用人	中村 新助
同上	伊地知宗之丞 <small>貞</small>
御軍役奉行	折田 平八
同上	伊地知正治
御軍賦役	大山格之介 <small>良綱</small>
同上	坂元 廉四郎
郡奉行	猿渡彦左衛門
同上	山口 市二
同上	山口 九十郎
御徒目附	有川 彌九郎
地方検者	樋口休右衛門

同上	野崎半兵衛
同上	石原直左衛門
同上	日置十兵衛
同上	野崎 清吉
同上	西郷猪左衛門
同上	草道覺右衛門
石工頭	小野村之 権太郎

又築修方法ハ、石川正徳確太郎及ヒ折田年秀要蔵ナル者特命ヲ蒙
 レリ折田カ履歴ハ後ニ記スルカ如シ、而シテ修築ノ土石ハ、磯天神社背後ノ
 山字櫻谷磯邸ヨリ一望ノ地ニシテ桜樹多ク、初ヨリ山神ノ辺潮音院
 存ハ満山皆花、殿府第一ノ勝地ナリ
 岬迄ヲ崩シ充ヘキヲモ令セラレタリ、斯ク令セラレタル
 ハ英断ニ出タル者ニシテ、当時一般感賞セシ事ナリキ、
 ○此地ハ本府第一ノ勝景ニシテ、春候ニハ貴賤観花ヲ允
 サレ、海陸俱ニ繁賑、雅俗必ス杖ヲ曳キ、瓢ヲ携ルノ地
 ニシテ、君公モ必ス仙巖ノ邸ニ興ヲ停ラレ、一門其他ノ
 人ヲ集メ玉ヒ、観花ノ宴ヲ開カレ、貴賤男女花ニ酔フノ
 椽モ御覽セラレ、実ニ偕楽ノ地ナリ、桜樹ハ吉貴公仙巖
 邸ニ隠棲セラレシ際栽培セラレ、其後逐次栽次シ、保護
 怠ラサルカ故、大ナルハ一圃以上ニ及ヒタルモアリ、斯

ク由縁ノ勝致ヲ毀チ、修築ノ用ニ充テラル、ハ、国家枢要ノ事ナレバナリ、

四四一 國分郷名改称

國分郷名左ノ文字ニ改称

國分

右ハ以来国府之文字ニ被召替候旨被仰出候条、此旨不洩様可申渡候、

七月十一

式部川上久美

四四二 太鼓踊ノ形況

七月十一日諏訪社神事太鼓踊、例年ノ如ク本日ヨリ興行ヲ允サレ、頭屋ノミニ興行シ、各寺院巡踊ハ戦争後ノ事故停メラレタリ、○二日開戦ノ当日頭屋ハ興行セシカトモ、砲声ヲ聞テ中止セリ、例歳二日ヨリ十二日ニ至迄、各村又ハ櫻島等興行セリ、然ルニ戦争ニ依リ中止シ、本日第二番踊ノ興行ナリ、

四四三 近衛公二條公久光公へ与ル書翰

残暑之砌愈御多祥令万寿候、尚又承度候、抑今般其許

上京之儀、表向被仰出候ニ付テハ早々御登京ニテ、何卒御尽力御頼申入候、尤連署之銘々ヨリ建白候処、朝議符合ニ相成、表向被為召候次第二候、何卒々々此機會不失、早々御上京之義分テ、御頼申入候、且表向之御書取ニハ御親征御用ト有之候得共、決テ御治定之訳ニ無之、尚其辺御上京之上、巨細ニ御話可申入存候、尤連署之銘々モ承知之事ニ候、其上内実ハ上ニモ親征御好不被為在候御時宜伺居候間、何分其許急々御上京ニテ、御判断分テ御頼申入度候、何モ委細之次第ハ御家来江申含差下候間、篤ト御聞取可給候、実ニ格別之

思食ニテハ被 召候儀ニ付、不失此期是非々々早速々々御登京ニ相成候様存候、尚又厚御依頼被遊度儀モ伺候、旁早々御上京之儀呉々御頼申入候、扱如何敷事ナカラ、御不審一件ハ追々消散之事打明申入候、何分早々御上京之様ト存候、真実思召之処ハ、一刻モ不遲滯様御待被遊候事伺候間、弥以急速ニ御上京之様偏ニ御頼申入候事、

七月十一日

(近衛)

忠房

(同上)

忠熙

二卷
齊敬

嶋津三郎殿

〔久光〕
〔島津忠承氏藏本にて校訂〕

四四四 近衛公御父子久光公へ御書翰

七月十一日、近衛殿御父子及ヒ二條右大臣齊敬公御書翰ヲ以テ、国父公速ニ御上洛アラン事ヲ頻請セラレタリ、御書翰左ノ如シ、

尚以此書中早々投丙可給候也、

〔親題〕

残暑難凌候、弥御勇猛珍重尚承度候、抑本田彌右衛門下国後未何等之左右モ不承、甚安心不成候、如何之御模様哉、御登京之儀此頃ニ至リテハ、是非々々待入候計ニ候、誠ニ切迫、実ニ不容易形勢ニテ痛心候、此別紙之通久留米水天宮神主牧和泉守トカ申者建白致、議奏・参政迎専心推、今モ建白之ケ条欲被行場合ニ至リ、実以一大事之事ニ候、
主上ニハ御承引不被遊御様子故、弥強情ニ相成、
叡慮ヲ押ヘテ忽被行様之計略ニテ、扱々心配之至ニ候、
三條并参政之人々、毎度々々二條右府公・徳大寺内府公・下官等へ責付ケ、イツレニ被行候様吃度取計ヒ候様ト、日々入来ニテ責付ケニ候、忠熙・中川官等ニハ薩

へ洩シ候トテ大ニ忌ミ候様子、併ハブキ候テハ却テ悪敷ト申工合ニテ、全ハブキニモ不相成候事ニ候、実ニ親征ナトハ存不寄大變候ト存候、夫モ列国一和シテ主上御親征被遊候事ナレハ兎モ角モ、方今之形勢ニテハ、天子自親征被遊候テ成功無之、実ニ不容易大變眼然ニ招候事ト、右府公・忠熙・中川官・内府公・下官等ニハ存上候事ニ候、夫故彼是ト申居候事ニ候、併中々三條ヲ初参政之人々不採用之事故、何レ押付ケ親征之場合ニ可相運哉、実々痛心無涯候、先初ハ石清水迄、夫ヨリ浪華城へ還幸ト申事ニ候、扱々大變至極之事ニ候、実以天下之安危此時ニ差迫リ候、依之其許御上京之儀、分テ〜待入申事ニ候、未彼是議論最中ニテ候、為皇国深々御賢考在之度、偏ニ〜存候事、

七月

忠熙

嶋津三郎殿

極密々啓
御下投丙

忠房

〔同上書にて校訂〕

四四五 〔薩英戦争褒賞一〕

四四五ノ一
嶋津権五郎久馨後登ト改メ、又慶應後九良野一ト改称ス 祇園砲台ニ於テ戦功衆ニ抽タルカ故、左ノ褒賞ヲ賜ヒタリ、

島津 登久

一御鉄砲

一挺(杖丸)

一御陣羽織

一(杖丸)

右ハ今度英夷侵入之砌、為御先手物主祇園洲台場相

堅、夷艦數艘引受、砲台相壞(被脱丸)迄苦戰致、終ニ一艘打

居候段 御満足之至(被脱丸) 思召候、為 御褒美右之通拝

領被 仰付候条、愈可抽忠勤旨被 仰出候、

七月十二

帶刀小松

(旧記難録追録卷百六十八にて補註)

四四五ノ二 七月十二日、各砲台談合役・旗預・仕伍長等御本營へ改

服出頭スヘキ旨達セラレ、而シテ各通ヲ以テ、左ノ如ク

褒賞ヲ賜ヒタリ、

金幾兩十兩・八兩・五兩・三兩

職掌又ハ戦功ニ依テ差アリ 「受賞者各人名略ス」

右ハ今度英夷侵入之砌、何方台場各持場何ヤト相固メ、

必死相働キ、為戦労右之通拝領被仰付候条、猶又可

抽忠勤候、

右御格之通可申渡候、

七月十二

帶刀小松

斯ノ如ク仕・伍長ノ総人員へ下賜セラレタリ、○兵士ハ

同十三日物主宅へ召喚シ、右同文ヲ以テ賞セラレタリ、

○仕・伍長ハ各金貳兩、兵士ハ各壹兩、兵糧・玉菓等ノ

諸役者ハ兵士同文・同金員ナリ、

賞賜ハ各砲台水軍隊仕伍長・兵士ニ止リ、其他兩御城下

警衛隊等ハ賞詞ノミ下サレタリ、

四四五ノ三 祇園洲砲台ニ於テ戦死税所清太、恩賞左ノ如シ、

一金三拾兩(祭和料丸)

一御切米八石

祇園洲台場

二拾四斤砲什長

税所清太風篇

右ハ今度英夷侵入之砌、祇園洲台場相堅、請持之大

砲ニテ致打方候処、請砲丸相損不用立処、代之大砲

相手江致加勢、懇ヲ付候砌、逢手疵致即死候段被

聞召上、拔群之働 御満足之至(被脱丸) 思召、為軍賞右之

通拝領被 仰付候、右御格之通可申渡候、

七月十二

帶刀小松

(同上書にて校訂)

四四五ノ四

一金拾兩各自拾兩、褒賞書

青山弓太郎長男

中江八左衛門

諏訪八郎左衛門

福崎伊三次

野津七左衛門雄

津留八之進

竹之内喜藤太谷山丸

宮原清右衛門

右ハ今度英夷侵入ニ付、沖小島砲台相固、数艘引受

拔群相働候段被 聞召上、御満足之至被 思召候、

為軍賞右之通拝領被 仰付候条、愈可抽忠勤候、

右御格之通可申渡候、

七月十二

帶刀小松清藤

四四五ノ五
七月十四日達

一金拾五兩

一御切米四石

一十匁鉄砲一挺

沖ノ小島台場受持

青山愚知

右ハ今度英夷侵入ニ付、沖小島砲台相固数艘引請、

拔群相働候段被 聞召上、御満足之至被 思召候、

仍為軍賞右之通拝領被 仰付候条、愈可抽忠勤候、

右御格之通可申渡候、

七月十二

帶刀小松清藤

四四六〔江戸ニオケル薩英戦争風聞〕

七月十二日、江戸邸南部矢八郎（秘）、御城坊主木村宗三ヨリ

洩聞ノ趣、左ノ如シ（南部ハ留守居、附屬吏アリ）

今朝五ツ半時頃、薩摩ヨリ英国軍艦不残当港（横）へ歸リ

来リ、早速尋問トシテ幕役右船へ罷越、一先戦争ノ次

第承候処、日本六月廿八日鹿兒島へ着、早速書翰差出

候処、此儀ハ政府へ可申立事故、一応評議之上償金等

モ差出シ、罪人（編者曰、罪人トハ斬殺者ヲ云フナラン）モ可相渡旨、薩摩ヨリ申

通り、評議一決之上ハ長崎港へ可差越、右湊ニ於テ返

翰相待候様申聞候ニ付、直様薩摩ノ蒸気船三艘ヲ取り

占メ、乗組ノ人数ハ陸へ上ケ、積入ノ品ヲ奪ヒ取り、

右三艘ノ蒸気船ハ可燃捨命ヲ下シ、既ニ焼ントスル処

ニ、薩摩ノ台場ヨリ致砲発候処、早速其船ヲ焼立候ニ

付、薩摩ノ方ヨリ強ク致砲発、右火ニテ鹿兒島府中へ

火起り編者曰、右火ニテ鹿兒、島市中火、起云々、台場モ大ニ損所出来、尤モ台場モ損所有之、台場ハ十ヶ所所有之候由、其内六ヶ所之台場強ク致放発、外四ヶ所ハ損所モ無之由、英船ノ方即死傷人共ニ六十一人編者曰、死傷共六十一人ハ六十四人ノ誤ナリ、有之、アドミラル船帆柱ノ中央ヲ打レ、船ノ損所數ヶ所、甲板等モ諸所損シ、甲板ニテ破裂彈発シ、其時一時ニコンマダ丹比即死シ、驚愕シテ指揮違セス、アドミラルモ薩ヨリ蒸氣船三艘ヲ奪ヒシハ、英ヨリ差出シタル書翰之通、薩摩ヨリ所置有之候様ニト威シノ謀計之由ニ候、アドミラルカ処置悪シキトテ、兵卒ナドコホツキ甚シキ由、薩摩ノ軍配ハ意外ニ行キ届キ、初メノ聞込ミトハ甚タ相違致シ、夫故英船士官・兵卒等再度ノ軍ハ難渋ニ申居候由、又鹿兒島ノ市中焼候事終夜ニテ候由、薩摩ノ方大砲ノ備方ハ、大砲ヲ置キ其間ニ小砲ヲ置キ編者案スルニ、其間ニ小砲ヲ置キ、其間ニ小砲ヲ置キ、其間ニ小砲ヲ置キ、其間ニ小砲ヲ置キ配列ノ組方宜シト申居候由、戦争ハ二日之間之由、

アドミラル船ニ当リタル彈丸、未タ三ツハ貫キ居候由、其外船將部屋へ彈丸当リ、損所甚シキ由、
 士官・兵卒等アドミラルヲ誹ル事甚シク、アドミラルモ今度ノ軍ハ大拙策故、威權モナキ程ノ事ニ候由、

此度ノ戦争ハ英ヨリ手出シ致シ、薩摩ノ方ヨリ初メサル事ナカラ、談判中ニ蒸氣船ヲ奪ヒ候ニ付、薩摩ハ戦ハ不好モ止ム事ヲ得ス放發致候由、英ノ兵卒二人ヲ薩摩ノ方ニ生捕候由、横濱ニテ評判致候由、編者曰、生捕ハ一名、モナシ、誤聞ナラン英船一艘ハ、薩摩ノ砲台ヨリ打チ沈候由評判致候、其訳ニハ、初メ当地横濱ヨリ薩摩ニ向キ候時ハ大小七艘ニテ、此度ハ六艘歸り来候、尤モ薩摩ヨリ直チニ当地ニ歸り来り候由、決テ一艘ハ打沈ラレ候半トノ評判ニ候編者曰、打沈タルニアラス、七艘ノ内六艘歸り来ルトハ、一艘我カ弾ノ為破損シ、小根白海ニ残シ、後日引キ去リタル故、六艘横濱ニ帰港シタルヲ云フナラ、

英船六艘ノ内三艘、大船ノ分ハ皆大破損ニテ、水平ヨリ上ノ方彈丸ノ通り候痕諸所ニ有之、帆柱・繩梯子・綱具ノ損所數十ヶ所相見得、修甫モ可也ニ致シ候様子ニテ、当地へ着、翌日ヨリ大修甫ニ取掛候由、
 今度ノ戦争ハ不手涯ト相見得、当地へ着致シ候兵卒ノ上陸休息モ、兩日ハ差止候由、
 右通ノ事ニテ、幕役共ニモ薩摩ノ勝軍ニ相違無之ト申居候、薩摩ハ砲台其外手当行届候ト申スハ年久シキ事候処、強國ト申ス英國人モ早々引キ取り候ニハ、威光モ落候トノ評判ニテ候由、

幕役人共アドミラルルニ相尋ネ候ニ、定テ英国ノ武威ヲ薩摩ニ残シ、勝軍ナラント申候処、アドミラルルハニガ笑シテ、此後ノ戦ハ見事ニ打破リ御覽ニ入レント申シ、勝敗ノ咄ハ取り合不申、以後ノ戦ニハ陸兵・海軍二ツナカラ備、一時ニ打破ルト申シ居候由、此ノ咄ヲ以テ不手涯ノ証拠トノ評判ニ候由、

士官・兵卒ノ咄ニハ、負ケ軍ニテ能キ甲比丹モ死シ、船ハ打破ラレ、早々引取り候ト申居候由、幕役共長州ト強弱ヲ尋候処、長州ヨリハ十倍強ク、手当モ十倍相調候ト申候由、

幕役人共ハ薩摩カ手当アリトモ、英国七艘ノ武備ニハ困マルヘシ、二十降伏スヘシト存シ居候処、此節ノ評判ト、英船ノ損所ヲ見テ驚キ候由、

以上

此書面七月末鹿兒島ニ達シ流布セリ、誤謬多シト雖モ、當時横濱等ノ形勢ヲ知ルノ一端ニ供ス、

四四七〔諸局平常開席〕

七月十三日、本日ヨリ平常ノ如ク諸局開席ス、国老其他モ城内旧局ニ開席セリ、然テ此際諸局俱ニ国老退出迄ハ、

局長・筆吏四五名居残ルヘキ旨令セラレタリ、○元來諸局ハ四ツ時出頭、八ツ時退出、当番ノ者一二名国老退城迄在局ノ例規ナリシカトモ、此際急遽ノ用アルモ難量トテ、右ノ如ク令セラレタリ、

四四八〔薩英戦争褒賞二〕

四四八ノ一 御陣羽織

砂揚場台場

御先手物主

島津織之介直久

右ハ今度英夷侵入之砌、為物主出軍砂揚場台場相堅、(被脱カ)尽粉骨致指揮候段被 聞召上、御満足之至思召候、仍テ為軍賞右之通拝領被仰付候条、愈可抽忠勤旨被仰出候、

七月十四日

式部川上久美

四四八ノ二 御陣羽織

新波戸台場

御先手物主

川上右膳久賢

文久3年(1863)

辨天波戸台場

物主

相良治部發長

大門口同

關山糺生

水軍隊

物主

仁禮舍人信仲

右同文各通、

七月十四日

式部川上久美

祇園洲台場戦兵

四四八ノ三

金八兩宛

右前文ニ同シク金員モ同数各通、

砂揚場台場戦兵

大門口台場戦兵

辨天波戸台場戦兵

新波戸台場戦兵

水軍隊戦兵

右同文、金員モ同数各通、

四四八ノ四
一金八兩各自八兩、發賞書各通同文ナリ、

谷山勇右衛門

東條正之進

指宿正右衛門

尾上伊之助

川南新八

春山正兵衛

野間金左衛門

岩城喜八郎

土持十之助

竹下仲之丞

湯池次右衛門

田中金兵衛

山田市十郎

江島喜左衛門

伊地知市左衛門

東條玄白医師ナリ

四四八ノ五

合計

右ハ今度英夷侵入云々、前同文各通、

七月^{十四日}

帶刀^{小松清麻}

四四八ノ六
七月十五日達

一金八兩

櫻島横山台場什伍長

同所烏島台場什伍長

同所赤水台場什伍長

一金貳兩

右三ヶ所戰兵

右前文ニ同シ、

右之如ク褒賞ヲ賜ヒ、其人員總計五百人ニ余レリ、

四四九〔兵糧方達〕

四四九ノ一
御本陣兵糧方へ達左ノ如ク、

是迄詰人数江、御台所仕出ニテ御賄被成下^来候得共、

御殿同様之事候ニ付、来十八日迄ハ被成下、十九日ヨ

リ御引取被仰付候条、此段申達候、以上、

七月十五日

山口直記^{御側}

去ル二十九日、御本陣ヲ千眼寺ニ居ラレシヨリ以来、御

旗本隊兵糧方ニテ給セシト雖モ、逐日平穩ニ帰シタルカ
故、如此達シタルモノナリ、

四四九ノ二
御将机廻兵糧方人名左ノ如シ、

橋口次郎<sup>太物奉行職ニ
テ兵糧奉行</sup>

三原藤五郎^{同上}

三原次郎左衛門<sup>經世、御事役
掛御合所頭職</sup>

坂元喜左衛門^者

富田傳之丞^{同上}

佐土原郷左衛門^{同上}

山本半之丞^{同上}

大山新兵衛^{同上}

牧仲之助^{同上}

足輕玉利甚左衛門

野崎傳次

池端助太郎

岩下吉十郎

松木嘉右衛門

四五〇〔銅器類供出令〕

七月十五日令

海岸防禦之御手当向、精々御手相付タル事候得共、現時十分之御備トモ難申候ニ付、神瀬并櫻島燃崎へ台場造立被仰付候ニ付テハ、大砲製造地金致不足候ニ付、諸寺院ハ勿論、大身之面々ヨリ諸士末々郷々ニ至迄、所持之銅器類早々差上候様被仰付候、当時節御兩殿様深被遊御配慮、不容易御用途相備候儀ニ候間、御趣意克々奉汲受、日用之品タリトモ差上候様被仰出候条、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方へモ相達、諸郷・私領へモ不洩様可申渡候、

七月十五日

帶刀小松清廉

此ノ如ク令セラレ、御所藏ノ銅器・花瓶・燭台・釜鍋ノ類ヲモ出サレタルニ依リ、一般時勢必要ノ品ナルカ故、釜鍋其他銅製器物ヲ献呈スルモノ夥シク、数万ノ斤数ニ及ヒタリ、

四五一 櫻島各所砲台ノ修築

神瀬及ヒ櫻島燃崎兩所砲台修築、及ヒ国府遷城ハ後ニスヘキ布達此布達ハ六月十六日発布セラレタリト雖、茲ニ蒐載スルハ、便閱ヲ要シテナリ、

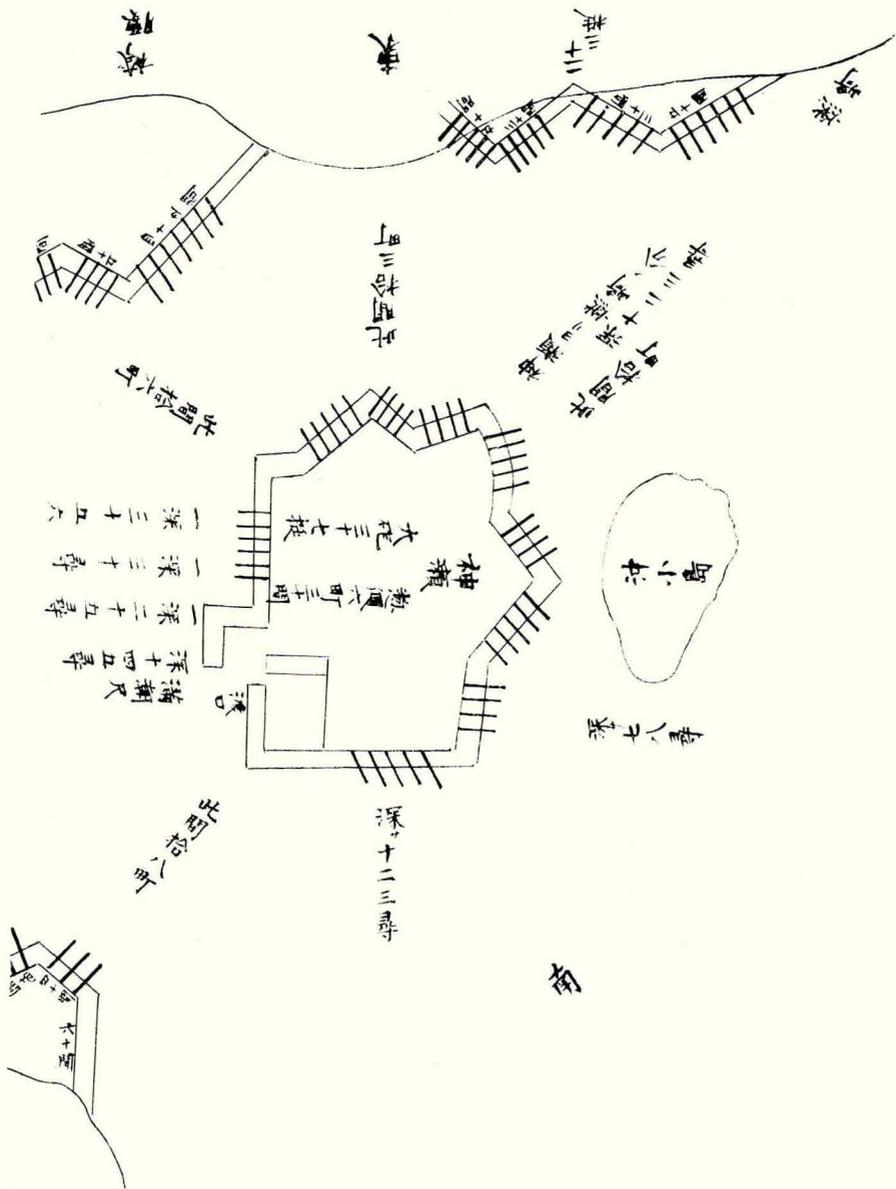
国府江御住居ニテ追々諸士一統モ被召移、防禦之御手

当向嚴重御手ヲ可被為付段被仰出置候得共、何分急速之運相付兼候ニ付、御熟慮之上神瀬并櫻島燃崎へ台場神速ニ御造築、守備十全之術ヲ被尽思召ニ候、就テハ國分御住居之儀御延引被遊御帰城、諸事御指揮可被為在旨被仰出候、此旨表方へ致通達、奥掛・御勝手方掛へモ相達、向々へモ早々可申渡候、

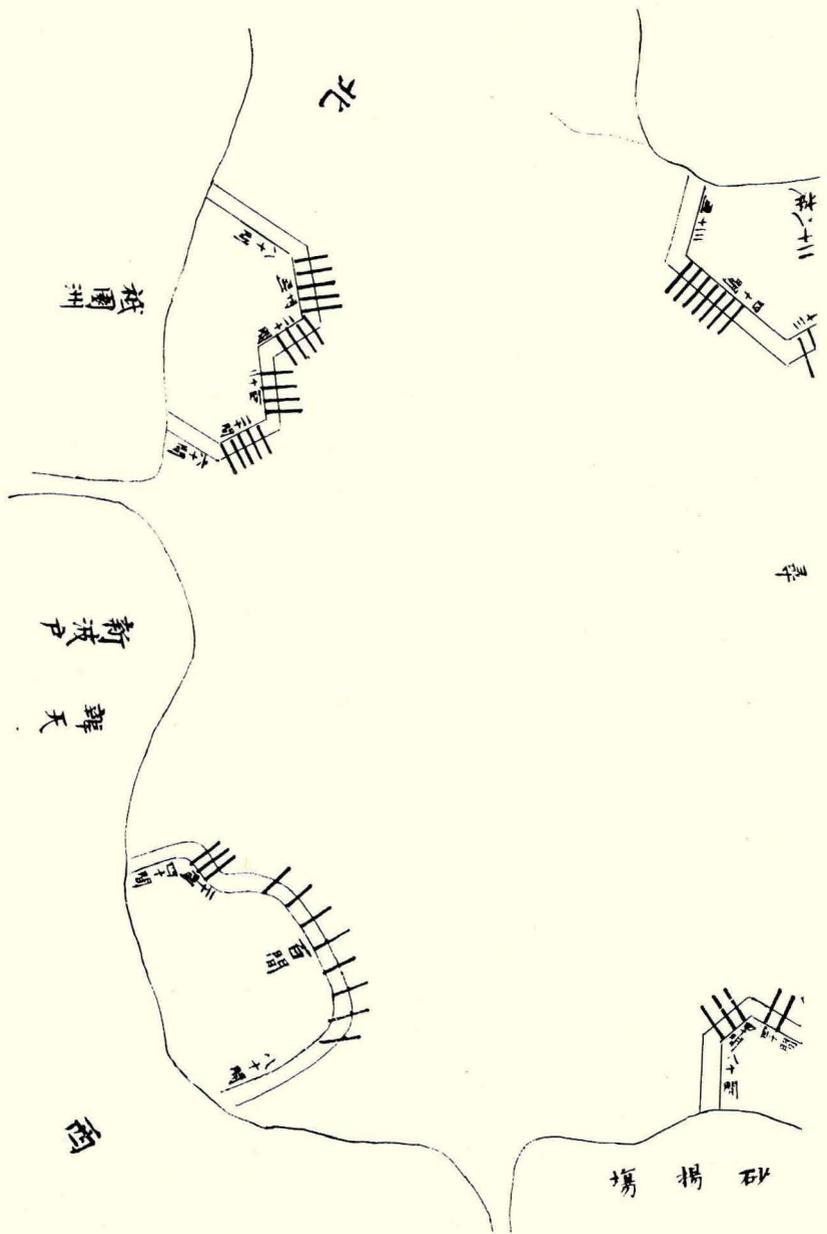
七月十六

帶刀小松清廉

斯ノ如ク布令セラレ、七月十八日ヨリ起工セリ、当日ハ国老其他軍役方等ノ吏員出張、築造ノ形状確定シタリ、而シテ昼夜兼業百日間ニ概功ヲ揚クヘキ旨嚴令セラレタリ、又土石場磯櫻谷モ同日ヨリ数百ノ工夫ヲ集メ着手セリ、実ニ盛ナリト謂フヘシ、○神瀬及ヒ櫻島燃崎砲台築造ノ事ハ、照國公ノ尊旨ニ出タルカ故、太守公・国父公継紹シ玉ヒ、修築ノ予定ハ文久二年十一月十六日、御親書ヲ以テ令セラレ、而シテ同十七日御父子御一同汽船ニ召サレ、御巡覽アラセラレタリ、然ルニ英艦侵来ノ形勢切迫ナルカ故、急遽ニ応セント、仮リニ沖ノ小島ニ築カレ、神瀬ニ換ラレタル者ナリ、斯クノ如ク既ニ数箇月前ニ予定セラレシ事ナルニ、今回衆望モ茲ニ帰シタルカ故、盛大ノ業ナルモ直チニ可決セラレタル者ナリ、○前二記



文久3年(1863)



シタル折田(年秀)要蔵ナル者ハ、嘉永ノ初江戸ニ遊学シ、兵学ヲ講シ、佐久間象山(修聖)呼フラ、等ノ人ニ交リ、外夷事件ニ就テ幕府ノ嫌疑ニ触レタルニ依リ亡命ノ届ヲ為シ、下臈セシメ入牢セシニ、在檻砲声ヲ聞ヒテ慨嘆シ、種々海防ノ策ヲ建言セシメ、其説宜キヲ得タルヲ以テ救出檻、修築関係ヲ命セラレタリ、○修築図ハ照國公・和蘭人ハントウエーンナル者、鹿兒島湾内守防ノ図ヲ製シ、捧呈セル者ニ則レリ、則チ左図ノ如シ此時洋学者石川確太郎、専ラ製図ニ関シタリ

四五二 水戸藩戸田外二名ノ書翰

一筆啓上仕候、弥御堅剛可被遊御座奉恐賀候、然ハ先日ハ夷船御国元江罷越候由、散々負軍ニテ逃去リ候様(總)風節承申候、嗚々御配慮御察申上候、乍併負軍ニテ逃去候儀、誠以於私共モ大慶ノ至候、下ノ關辺へ其後廻船不仕候、長州様江ノ(監禁使)御勅使正親町少将様、昨日下ノ關へ御着、同所御台場等御見分御座候由、一両日中ヨリ肥・筑御順覽御下向ノ由、且ハ御国迄ハ御下向相成候哉取沙汰仕候、段々聞合仕申候得共、御立時分ナラテハ速ニ確ト難申上候、併肥・筑ニハ御出ノ由ハ相違無御座、御用意等モ御座

候由承申候、爰許ニモ段々御取繕等、他事火急ニテ仕掛居申候、イヨク御発足日限、且御国元様御下向有無聞出候ハ、直様態々仕立ヲ以テ御注進可申上候、今日便宜ニ付右ノ様内々申上候、宜御汲取可被下候、正親町様ヨリ御使者ハ一昨日小倉へ御着、段々御応対御座候処、攘夷打払ノ御啻合ノ由、小倉ニモ深御存念ニテ、御打払ノ思召ノ様成御返答御座候哉ノ風節仕候、御使ノ人数左ノ通名前御座候、

本文正親町トイフ此三人、イカナレハ宿所杯江御座候哉、毛頭浪人ニテ相分候事ニテハ無之哉、何分可本ノマ、濟候、

水戸御藩

松平忠大夫

肥後御藩

河上彦助

姫路御藩

萩原強六

右三人正親町様御供ノ内、御使者ニ參リ被申候由、右ノ外相替儀無御座候、御内々御注進申上候、已上、

亥七月十六日

村上銀右衛門

中村吉兵衛様

追啓申上候、昨廿三日四ツ時分長州本山沖へ異舟一艘
繫舟、夫ニ付長府下ノ關当所田ノ浦・門司浦又々小倉
海ノ台場ヨリ相図ヲ打、小倉様ニモ三番手ト張出ニ相
成、然処右ノ船ヲ 公義御船ニテ相図烈敷候故見合、
今朝下關廻船仕候処甚騒敷、誠以迷惑ノ時節ニ御座候、
公儀ノ御船モ速ニハ進ミ不申、長州ノ我慢世人ノ知所
御座候、万事御推察可被下候、

御勅使正親町様モ廿一日下ノ關御出立、山口ノ様御出
相成候間、九州路ニハ御越有御座マシク哉ト噂仕候、
自然相替儀モ御座候ハ、御注進申上候、已上、

七月廿四日

村上銀右衛門

右ニ付、先達テ喜入攝津殿被乗廻候 公義蒸氣船入津
ノ節取沙汰イタシ、長州ニテ 公義ノ蒸氣船へ相掛候
大砲ハ、前件ノ舟ニテ候半、

四五三 中山仲左衛門書翰

貴翰之趣細々承知仕候、イヨ／＼ニクキ返答御座候、
最此上ハ右様之勢ヒニ御座候得ハ致方無御座候付、
一橋へ御書被遣候ヨリ外ニ道ハ有御座間敷奉存候、タ

トへ右御書付御差出相成候トテ、御仕損シト申ハドコ
迄モ有御座間敷奉存候、最早疾ク御寝後之御事、且御
互ニ奉伺候通之御趣意ニ候得ハ、外ニ思召ハ被為在間
敷、御評議通御決定相成可然ト私ニハ奉存候、シカ
シ重大ト申候得ハ重大ニ御座候間、可奉入 御聴歎、
決テ外ニ御道筋ハ有御座間敷奉存候、私之所存丈御請
申上候、以上、

七月十六日夜

中山仲左衛門

大久保一蔵様

(中山実善書翰(大久保利謙氏所蔵甲東巻紙)にて校訂)

四五四 中山中左衛門免職

七月十七日達、中山中左衛門御側当職ヲ罷メラレタリ、
元来性質粗暴、我意ニ募リ僻説ヲ以テシタル事寡カラス、
職務上有功、殊ニ志ニ於テハ実着ナル者ナリト雖モ、衆
説ヲ容ル、ノ度量ニ乏シキ故人望ナク、遂ニ黜斥セラレ
タリ、

四五五 長州藩援助ヲ乞フ

四五五ノ一

七月十八日ヲ以長州藩ヨリ来書、左ノ如シ、
(成脱カ)
弥御堅固被御座珍重被思召候、然ハ此度

叡慮遵奉・幕議隨順之趣意ヲ以テ、御領内ニ於テ米・佛・蘭ノ夷舶被掃攘候処、素ヨリ兵備手薄ク、軍政不整ニハ候得共、義之所重力之限り可尽誠忠候処、微力独任ニテハ

皇国御持堅ノ目途難相立、甚以奉畏入候次第ニ付、御応援ノ御手段ハ有之間敷哉、御尊慮被成下度、此段以御使者被仰進候トノ事、

七月十八日

秋良敦之助(貞通)
御役職ナ
リト云フ

坂上忠助上

右ノ兩名ヲ使者トシ、尚口上ヲ以テ援助ノ兵ヲ乞ハレタリ、其言ニ曰ク、彼国情或大小礮器・彈藥ニ乏シク、士氣振ハサルカ故、攘斥心ニ任セサル等ノ事ヲ演、多少ノ兵ヲ出サレ、彼藩ノ模範タラシメ、隣藩藝・備ノ二大藩アリト雖モ士氣振ハス、軍備不整頼ムニ足ラス、九州ニモ福岡・佐賀ノ如キモ長藩ニ戻レル士氣、兵備モ整ハサルカ故、是モ又懇ムニ足サル者演説シ、懇願セリト雖トモ、本藩ニ於テモ英夷ト戰爭ノ後ニシテ、他藩応援ノ余力ナキノミナラス、又内情アリテ謝絶セラレタリ、其文左ノ如シ、

御内へ米・佛・蘭等ノ夷舶渡来、被及討攘、右ニ付

御応援之儀預御示致承知候、則御人数御差出相成筈候得共、既ニ先達此領海へ英夷軍艦七艘渡来、及掃除候ハ為御知申越候通之儀ニ候得ハ、此末何時侵入ノ儀モ難計、殊ニ御領手広ノ海面ヲ受候儀ニテ、直様御使者ノ趣ニ難被応儀ニ候間、不惡御承知可有之トノ事、

七月廿三日

大久保一蔵通利

島津主殿久

因ミニ記ス、同時ニ熊本へモ援助ヲ請ハレシカトモ、左ノ返翰ヲ以謝絶セラレタリトソ、
残暑之節弥御堅固被成御座、珍重思召候、然ハ今般叡慮御遵奉・幕議御隨順之趣ニテ、米・佛・蘭之夷舶御討掃候処、御独任ニテハ、皇国御持堅之御目的難相立候ニ付、御応援之儀委細御使者ヲ以被仰越趣被成御承知、前後如何計乎被成御心配趣、深ク被成御察候、就テ早速御相談ニ可被応之処、根元攘夷之一条ハ

皇国之危急ニ致關係、最モ至重之儀ハ不申及、其措置ニ至リ候テハ、愈以各国一致無之候テハ、御成功モ無覚束事ト思召候処、方今天下之御政道先ツハ二

四五五

筋ニ相成、上下共ニ疑惑ヲ懷キ、往々之形行甚以御
憂慮被成候ニ付、(細川慶順)於越中守様ハ御存慮之次第、猶亦
朝廷・幕府へ被仰上、御伺之筈御座候間、其模様相
分り候迄ハ重畳乍慮外、先ツ御応援之儀如何様ニモ
難被及御返答候間、此段不悪御聞取被下候様ト之事、

七月 日 日詳ナ
ラヌ

困老二名名詳ナ
ラヌ

細川家ハ元来幕府ノ制令ヲ喜ヒ、勤王ノ趣意ナキノ
ミナラス、本藩ニ於テ尊王ノ基ヲ開カレタルハ、幕
府ト同シク内情好マサルカ故、政道ニ途ニ出ル等ノ
文ヲ以テ、其底心知ルニ足レリ、且ツ近頃
朝廷ニハ薩・長ニ御依頼、其威力漸ク恢復ノ結ニ就
キタルヲ忌ミ、(ママ)稍其隙ヲ候フノ形勢アリ、故ニ応援
出軍ハ素ヨリ思モヨラサル処ナリ、茲ヲ以テ遍辞ヲ
設ケ、或ハ表ニ条理ヲ飾リ、内ニ忌避シテ謝絶シタ
ル者ナリト云フ、長州ノ使者来藩、曰ク、熊本へモ
同シク使ヒセリ、然レトモ彼ハ元来幕論ニシテ、薩・
長ヲ悪ムノ甚シキハ聞ク処多シ、本意憑ムニ足ラサ
ルヲ知ルト雖モ、薩藩ニ請フテ彼ノ藩ヲ措クトキハ、
又其害アランコトヲ慮リ、同シク援助ヲ請ヘル者ナ

リシト云へリトナン、

四五六 太守公宇治瀬神社告祭式

四五六

七月十八日、太守公四ツ半時御供揃、五本御道具ニテ草

(龜尾島市)

牟田宇治瀬へ御社參、今般神瀬ニ砲台御建設ニ付テ、告

祭式行ハレタリ、祭司本田三位親ニ命セラレ祝詞ハ後欄既修次郎撰ミタリト云フ

祝詞左ノ如シ、

宇治瀬皇神乃 広前尔 源朝臣茂久源朝臣久光畏美 畏美 申
須 近年頃遙支 西方乃 夷等荒比 来々 皇大御国乎 宇加乞
布 尔 依里 其防禦乎 成之 先年此処乃 前乃濱乃 冲奈神瀬
尔 砲台乎 築止為之時 尔 彼処 古里 由緒有天 皇神乃 所
知食処止 語流多 故奈礼波 台場築事皇神乃 御心 尔 叶波様
尔 御諭如 事乃 有 礼波 畏 畏美 其事止 止 今度夷乃 軍
艦七艘前之濱 尔 乘入 天 漫 志加波 物言事乃 得堪 良礼 物良終
尔 戰乃 端乎 開之 尔 多乃 武士等乃 命 毛 身乎 願 奴 伊佐美 尔
依里 且 波 皇神達乃 御力 尔 依 天 夷等辛目見 天 退 礼波 此
端 一度開 留 介 上 波 弥堅 免 固 成 止 為 尔 何 毛 与 利 第一 尔 神
瀬 尔 台場築 波 加 有 良 須 然 波 云 皇神達乃 折節 尔 出 給 比
遊 比 給 波 尔 妨 奉 良 無 礼 畏 志 然 波 有 毛 礼 止 国 乃 守 乃 佳 良
処 乎 夷 乃 為 尔 污 左 礼 神 乃 御 国 乃 光 乎 損 尔 当 里 止 事 乎 得

奴事奈米今強天 皇神乃御許乎乞天急天事起志 築建奈

止思給布礼巢里給波答米給受神直比大直比平良計聞

志召志給比將築建平台場乎疾速尔事畢志給与比天然波彼

所乃吉地乎卜定天清久麗久御社乎新造里鎮座奉里年

々乃御祭母嚴尔仕奉天殊仁又皇神波昔利鹿兒島地主

神止齋礼加給比仰礼給布神尔座畏止引礼寇須奈夷等乃懼惑

久布倍弥益々尔御稜威乎顯志給比堅盤尔常盤尔台場乃神

母成座天穢依船々乎千里乃遠尔攘比給比逐布倍守

里幸倍給倍申須事乃由乎熟尔聞志米佐信止源朝臣茂久

源朝臣久光畏美畏美申須、

文久三年癸亥七月十八日

四五六ノ二

大風雨

七月十九日大風暴雨本日ハ、驟ニ云フ、本日ハ、驟ニ云フ、本日ハ、驟ニ云フ、鹿兒島其他損害多シ、

穀作ニハ害ナシ、清水〔風分也〕〔給良郡〕・日當山・國分〔國分也〕・敷根等ノ各郷ハ

洪水、田畠ノ損害多シ、

四五七 大久保一蔵へ小松帯刀ノ書翰

於其御地

上々様御機嫌克被為入、恐悦奉存候、於爰元

一両公子御安康、昨今共ニ御警衛御勤、何モ御別条無之、

御安泰被為成候間、御安心被遊度奉存候、嘸此方ノ變

事御承知ノ上ハ、御而殿様御高配ノ程何共奉恐入候、

折角御遵奉之道相立候様ニハ、精々尽力仕候含ニ御座

候間、左様御承知可被成候、御機嫌相同度奉存候間、

可然様御執成可被成候、貴様ニモ御安泰被成御勤奉珍

重候、無異罷在申候間御休意可被下候、先々此段如斯

御座候、以上、

七月廿日

小松帯刀

大久保一蔵様

四五八 火巧製造所創設

七月二十日達、郡元村ニアル伊集院平カ別荘地ヲ買上ケ、

火具製造所火巧製造建設ノ旨達セラレタリ、従来火具製造

ハ火葉製造所〔稻荷川字商〕ノ上ニ在リ設ケアリシニ、戦争ノ際近隣ニ敵

ノ火箭或ハ彈丸落チタリシ故、以来同局ニ於テハ製造ノ

ミヲナシ、火葉及彈丸其他ノ火具ハ、坂元村及ヒ草牟田

村龍泉院ノ境内ニ倉庫創建、貯蓄スヘキ旨モ令セラレタ

リ、

四五九 和田九十郎中原猶介竹下清右衛門云々

和田九十郎義御内用有之、爰許へ被差越、去ル十九日
夜到着仕、被仰含候御用向之義委細承知仕、大砲御取
入方之義、竹下清右衛門并中原猶助へモ申談、精々手
続探索仕候央、猶又九十郎へ細々被仰含越候付、同人
モ得卜申談、此節亜米利加人へ談判仕候形行、一先早
々九十郎立帰、可奉伺意味合之義御座候間、今日爰元
急ニテ出立仕候間、委細之形行ハ同人ヨリ御聞届可被
下候、尤先達ヨリ被仰越置候銅之義モ、会所ヨリ拾万
斤位相請取置候付、雇船ヲ以早々其御許之様差廻申答
ニ御座候、跡残三拾万斤之儀ハ未廻着不仕候間、早目
相廻候様、是又精々御内意等申込置候儀ニ御座候間、
回着之上ハ早速相請取差上候様可仕候、此段申上越候、
以上、

長崎在勤

亥七月廿二日

蓑田傳兵衛

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

四六〇 越前藩老入薩ノ報

松平越前守様ヨリ御使者 御国元江被差越候由ニテ、
彼方御手船蒸気船江一統乗組ニテ、去ル十九日爰元江
着船相成候処、右御使者之内三岡八郎ト申人、御屋敷
江差越度卜之事ニテ、引入面会仕候処、此節御使者被
差越候段ハ、高崎左太郎ヲ以、前広御内通申上置候得
共、御国元之儀彼是不取馴之儀ニ御座候間、此方ヨ
リモ御案内申上呉候様承、別紙之通御使者姓名并惣人
数書相請取申候、尤昨廿一日爰元出立ニテ、茂木之様
差越、夫ヨリ乗船ニテ、肥後熊本モ同断御使者相勤、
彼方御用濟次第、陸地ヨリ御国元之様罷越候段承申候
間、此段御届申上候、以上、

但常式取扱之儀ハ、御用人江向ケ御届申上管ニ御座
候得共、此節柄之儀ニ御座候間、各方江向御届申
上越候、

長崎在勤

亥七月廿二日

蓑田傳兵衛

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

家老

岡部豊後

上下八人

側用人

酒井十之丞

上下三人

奉行

三岡八郎

上下四人

同侯士分拾貳人

同家来貳人

人数ノ式拾九人

〔義田伝兵衛書翰(大久保利謙氏所蔵)にて校訂〕

四六〇ノ一

一 西洋七月廿三日、佛帝ナンシー(Nancy)名地ト云ヘル所ノ本陣

ニ出張セリ、

一 普魯西亞ノ兵、ケール(Kehl)名地ト云ヘル所ノ蒸氣車橋蒸氣車道ヲ

毀損シタリ、

一 魯西亜国ハ普・佛両国ノ戦争ニ係セヌコトヲ報告セ

リ、所謂局外中立ナルヘシ、

一 サルブロック(Sarbruck)名地ト云ヘル所ニ近キ国境界ニテ、合戦

ヲ始メタリ、

一 普魯西亞ノ兵ハ国境界ヲ打越シ、佛国ニ進入シテ、

サーレクミン(Sarrebruck)名地及ヒハグナラ(Hagenau)名地ノ間ノ蒸氣車道毀

損セリ、

一 佛軍ハストラスボルク(Strasbourg)名地ヨリチヨンウイール(Chonville)名地迄配

軍セリ、

一 イタリヤ国ハ局外中立シテ、自国ノ防禦ヲ嚴密ニシ

タリ、

一 同廿五日、普魯西亞カーニー(Chalons)名地ノニウボルフード(Neuchateau)名地

迄襲来シテ、佛ノ一城ニ攻撃シ、佛軍之ヲ防戦シテ

互ニ勝負ヲ別チ難シ、

一 普魯軍ハ屢々攻撃シ、用意ヲ為スト見ヘタリ、

一 同廿八日、今朝佛帝戦争ニ出張セリ、

一 佛帝ヘツウ(Verdun)名地ニ到着シテ、配下ノ陸軍江軍議ヲ施シ、

剩ヘ敵軍ノ勢ヒ甚シク、且ツ城地堅固ニシテ容易ニ

成シ難ク、以テ長ク对阵ニ及ハン事ヲ自ラ述タリ、

是全ク我軍士ヲ励サン為ナルヘシ、

一 英国ハ守護センカ為、自ラ兵備ヲ為シ、又議事院ニ

衆会シテ海軍ノ廟算ヲ定メリ、

一 皇国七月十一日第八月七日附、佛ノ都解巴里斯(Paris)ノ新

報ボレベ一ニ達シ、其報ニ曰、佛軍ニ取囲レン有様ナリ、故ニ歐羅巴全州之戦争トナラシコト近キニアルヘシ、
(編集進いカ)

四六一 長崎通信

最早御聞及モ難計候得トモ、和蘭本國ヨリホートイム氏江報知有之、同人并言学教師佛國サミー氏ヨリ(語字敬)昨今兩日致伝承候ニハ、兼テ御承知之通、佛ト孛孛生積年互ニ不和、既ニ一昨冬已來兵端相開之勢、其俛双方一時鎮靜、然ルニ西洋第七月十五日、我六月廿一日之決談、弥以互ニ兵馬ヲ交、曲直判然、追々歐羅巴動搖ヲ醸、魯西亞・トルコ・伊太利・米等ニテ、総テ孛孛生ニ屬シ、英國・オースタリタヤ等ハ佛ニ附キ、全州兩主東西ニ分リ、実ニ龍虎之合戦、和蘭ハ小國ニシテ強國之中央ニ位置シ、只農兵等ヲ集メ、嚴重國界ヲ守衛スルノ外他事無之ト評議一決、其他小國ハ地之遠近ニ寄り兩立之由、此節ハ追々兵端相開候事ト異人共顔色ヲ変シ、心苦相頭候、此一戦ニテ強國ハ益盛大、弱クシテ備ナキ國ハ滅亡旦夕ニ在リ、所謂歐羅巴開化文明之極ニ至リ一変之秋ト

ナリ、昨日之知音今日之敵タルモ、全ク時勢之然ラシムル所ナランヤ、將又此大動ニテ、支那ハ等閑打過事ト推察候処、豈謀ンヤ英・佛・魯ニケ國之強兵打合シ、サイゴント申処ニ陣揃、不日天津ヨリ打入、北京マコ都火攻スルコトニ一決、既二十日計リ前新聞ヲ見ルニ、右サイゴン支那ノ地ニ仏屬千余佛ノ強兵集屯、魯・英兵ノ来ルヲ待トノ事、弥以地球上大乱之勢ヒ、今ヤ一日モ不可愈ハ兵制之大基礎、万国公法之行ルモ治世之時、斯ル乱世ト相成候テハ、互ニ兵力強弱ニ歸スルモ又当然、実ニ魯國之士タル者、一日モ安眠スルヲ能ハス云々、

右七月廿四日、林何某ヨリ有馬某へ送ル書状ナリ、
(德左衛門殿)
(編集進いカ)

四六二 長崎奉行鹿兒島ニ探偵ヲ派遣ス (小松帶刀報)

其許御奉行所ヨリ御領内へ、調役之内一人、地役人三人為隱密方昨今御差出相成候儀ハ無之旨、調役山本友輔ヨリ服部清左衛門へ極内申聞候段、去ル九日付ニテ申越趣承達候、右付テハ此節柄吟味之訳モ有之候付、千田傳左衛門儀早々阿久根・出水辺迄被差出、探索為致候得共、右体之者手掛全無之段追々申越候、就テハ

弥其地出立相成候哉、今一往極内承合早便何分可申越候、此段以御内用申越候、已上、

亥七月廿四日

小松帯刀

蓑田傳兵衛殿

四六三 太守公千眼寺御解陣

七月二十五日、太守公千眼寺御解陣、御帰城アラセラレタリ、国父公ハ草牟・田村御茶屋へ、去ル六日御仮棲ナリシカ、本日二ノ丸へ御帰城アラセラレタリ、姫君方ハ城内大奥解毀セシ故、依然玉里邸へ棲セラレタリ、

四六四 御一門四家初メ諸土軍勞褒詞

七月廿八日、御一門四家大身分其他諸士・諸組与力等登城、各席々ニ於テ、左ノ褒勅書拝聞ノ式執行セラレタリ、

(寫件度久)
松平修理大夫

去二日英艦渡来之処、及砲発血戦候趣達

叡聞候、布告之奉

御趣意無二念攘斥候段、

叡感不斜候、弥勉励有之、

皇国之武威海外ニ可輝様

御沙汰候事、

七月

此ノ

勅書ニ対セラレ、左ノ如ク達セラレタリ、

今般英夷掃攘之趣達

天聴、不容易蒙褒

勅、不肖之身、只々奉恐入次第二候、全体掃攘ニ付テ

ハ指揮不行届之事候処、一統粉骨碎身決戦有之候故ヲ

以不至敗走、是以右様

御賞美之

勅命致承知候儀、一統尽力之訳ト不感賞候、若此末襲

来之節ハ、折角心ヲ用ヒ可致指揮候条、一心同力

皇国之御為御武威不致失墜様、忠戦有之度頼存候、

七月廿八日

右拝聞ノ後、太守公・国父公江恭慶ノ式執行、而シテ尚

ホ布告セラレタリ、○諸郷・私領へハ地頭・領主ニ於テ

拝聞ノ式ヲ行ヒ、或町・濱・寺門前へハ、各其頭役ヨリ

一拝聞セシメタリ、

四六五 英艦鹿兒島灣二迫ル

文久三癸亥六月廿七日、大鐘時分相図打掲^(揚カ)上リ候得共、格別気モ不相付候処、暫時スルト大迫市蔵被參、異国船到来ノ由ニテ市中大騒動、柵門杯モ打候由被中間、其時分ヨリ追々世間騒々敷成立候、拙者ニハ壹番御先手兵糧方被仰付置候得共、此節勤場差支候付、先達テ被成御免候間、則御納戸へ罷出候、追々諸役場出役御手当人数ハ銘々支度イタシ、相図ノ早鐘相待居候、兼テハ相図ノ早鐘・太鼓等ヲ以、夫々備場所へ罷出、令被仰渡置候得共、此節ハ早鐘・太鼓等ノ相図ハ不致候間、銘々受持ノ場へ罷出候様、夕方陳触^(傳)ニテ被仰渡候、則靈府堂へ上リ見候得共、慥ニ見留カネ候、夜入時分ニモ上リ見候へ共、全ク不相見得、谷山沖夜焚舟余多ニテ、夷船イカ、考へ候ヤト申事ニテ候、マツ六七艘トハ申事候へトモ不相分候、今晚御納戸へ出役ニテ止宿ノ人数、^(奉行)本城源七郎殿・^(伊之)仁木七郎右衛門殿・伊集院周八殿、書役竹下助太郎・中原七之丞・吉留平右衛門・^(道島正亮)拙者ニテ候、御腰物方ハ野村助七、御持筒方ハ兒玉嘉次右衛門、其余ハ皆御手当人数ニテ候、今晚前ノ濱へ

到来モ難計ト、皆々用心候トヨリ啮合候事、

一同廿八日朝早^(晴カ)朝靈府堂へ上リ見候得共、異船不相見得、

護摩所へモ御小人遣候得共不相見得、五ツ過^(二丸御用部屋書院)竹下猪之丞靈府堂へ參り、沖島ヨリ式里計差越候得共、不相見得

トノ咄ニテ、是ハ不思議也ト皆々案内ニ存居候処、靈

府堂ヨリ東之方御納戸上之方ニ高見有之、其所へ登リ

見候処、谷山七島ノ辺へ七艘共ニ碇泊イタシ居、蒸氣

モ相立、此方へ向候様ニ相見得候由ニ付、我々共ニモ

差越、猶又見候処イヨ、此方へ向ヒ漸々近寄、四ツ過

ニハ前之濱台場ノ前四五町内外ノ所へ大小七艘碇泊、

其内壹艘ハ腰ノ廻リ白ク、砲門モ片面三拾挺位モ相居

候ヨシ、白壁トテ此モノ差越候処ハ、何分六ヶ敷難題

成舟ニテ候ヨシ、

但バッテラ舟三四艘ニテ諸所漕廻リ、天保山・沖カ

島辺へモ差越、測量イタシ候筋へ相見得候、沖島

へハ上陸不致形勢ニ付、守衛人数ノ内可打取申人

モ有之、マタ令ナキニ楚忽ノ儀致テハ不相濟ト申人モ有之、何分難決候、ソウ、スル内ニ上陸イ

タシ、上ノ段へ上リソウニ付、眼ヲ見出手ヲ広ケ候へト直ニ舟ニ帰候由、何分可憎之至ニ候、

今晚モ御納戸へ止宿、夕方本ノア七刻罷帰候テ、彼是諸道具等ノ下知ヲイタシ、直ニ罷出候、明朝六時限り、御手当人数銘々役場へ建付候様被仰渡候由、此節ハ早鐘相凶ノ令ハ無之旨被仰出候、

一同廿九日晴、今日モ無事異変無之、矢張昨日通バツテラ舟ニテ櫻島ノ辺沖島・砂揚場等へ漕廻り候、昨日ヨリ今日迄之間、応接等有之候ヤ不相分候、

今日名差ヲ以御用被仰渡、銘々二丸へ罷出候処、西瓜壳ノ体ニテ舟ニ乗付、相凶ノ空砲可打出候間、其機會ヲ以飛込々々差殺候様被仰渡、御料理等被下、御庭付ノ様相廻候様トノ事ニテ、御中門ヨリ相廻候処、庭上ニ薄縁ヲ敷、皆蹲踞イタシ居候処、御尊様縁類へ御出御目見被仰付、威儀堂々タル有様ニテ候由、夫ヨリ御暇ニテ罷帰、相凶ノ刻限集会ノ場所へ差越候由、正使町田六郎左衛門其外奈良原喜左衛門・海江田武次(眞徳)・鈴木源五右衛門・古川直二郎・是枝萬助・小川小次郎・千田壮右衛門・石原直左衛門・淵邊直右衛門・川上助八郎・木藤市助・吉田清右衛門(眞徳)・赤塚源六(眞徳)・川北十兵衛・野添七次・谷山彦右衛門・房村猪之次・黒田了助(眞徳)・西郷信吾(眞徳)・木場傳内・森元休五郎・岩元勇助・久留助

四郎・床次正藏・春山越右衛門・弟子丸翁助・和田五左衛門・山口仲吾・帖佐彦七・千田喜之次其外ノ名ハ不存、都合七拾人、足輕モ七拾人、壹艘ニ士足拾人ツ、ノ賦ノ由、追テ名前承合次第可記事、

一昨日今日ノ事軟応接可致候間、上陸イタシ候様掛合有之候得共、上陸ハ相断候由、応答ノ書状ハ奥ニ可記、左候テ上陸不致コト、ハヤ術計尽果候ニ付、刺客ノ命被仰渡候由、右被仰渡相濟候テ、御両人様御乘廻可被遊旨被仰出、二丸御門ヨリ御五人様御両公並周防殿・宮之城殿、今和泉殿被爲入候御馬ニテ御出、中辻番所ヨリ御下り、御旗ハ卷キ、城下ノ備場御通行ニ付定テ台場へ御出、諸御下知モ可被遊、一統勇々敷拜見イタシ居候処、思ノ外加治木前ヨリ枡形ヲ御廻り、市成ヤシキへ御立寄、此所ニテ刺客ノ御左右御待被成候由ニテ、御両公其外ニモ山へ御上り、今ヤ〜ト御被成候体ニテ候由、拙者ニハ大鐘時分一刻御暇イタシ罷帰、其序ニ御金一件ニ付、吉留平右衛門御供ニテ市成ヤシキへ被居候ニ付、口合イタシ候処、今日刺客ノ御手数有之筈也ト被申候間、拙者ニモ御殿ニテ誰カノ嘶ニテ承居候、是ハ不容易御手数、敵船モ容易ニハ乗付申マシト申入候処、果シテ其通ニ

テ候、今晚市成屋敷へ御止宿、刺客ノ手数ヨリ夷舟モ少シ遠サカリ、櫻島ノ地方ノ様相直リ候由、

一今日七ツ時分ニモ相成候哉、皆々西瓜壳ノ体ニテ、脇差老本差候テ七艘相分レ、異船七艘へ西瓜ヲ可遣候間、乗付候様申入候得共、異人モ其挙動ヲ見候也不乗付、白壁舟モ暫時ハ不乗付候得共、是非乗付候様再三申入候処、暫ク吟味イタシ候テ乗付候由、皆銘々主居ノ方へ居付、銘々劍筒ヲ前ニ置、スハトイハ、打放ス様ニ、至極嚴重ノ体ニテ、中々手ヲ下ス様ノ透モ無之、上使ハ町田六郎左衛門ニテ、書面並言語等能ク分リ兼、中原尚助トノハ被居ヌカ、此人ナラハ随分可相分ト為申由、左候テ惣テ乗付候ハ、台場ヨリ空砲ヲ打、其相圖ニ飛込々々刺殺候様ニトノ手筈ニテ候由、外六艘ハ何様申入候テモ吾人モ不乗付、台場ヨリハ味方ノ人数ヲ見ナカラ、(命脱力)仮令君トハ申ナカラ実ニ不忍議也ト、皆々片唾ヲ吞テナカメ居候処、終ニ不乗付有様ニ付、少シハ安心イタシ候由、然処又思召モ相替候哉、直ニ立婦候様申来候由ニテ可罷帰申入候処、此方ヨリノ返答モ不申内ニ返ス事ハ不相成ト引留候へトモ、主命モ有之候間、是非可罷帰旨再三申入、左様ナラハト申テ差返候由、

彼是イタシ内ニモ別テ馴々敷モノニテ、大砲杯モ為見、手数等モイタシ、何モ可隱体ハ無之、誠ニ大器成モノニテ候由、拾二三歳ノ女子居、膝ノ上杯へ上リ、殊之外馴々敷可愛等敷有之候由、罷帰候上如何可仕懸体ニ候ヤト誰カ相尋候処、中々手強キト申人モ有之、又ハ随分可仕懸ト申人モ有之候得共、四五百人ノ乗組、纒カ廿人位ニテハ実ニ無理成手数也、殊ニ此乗組ノ衆カ眼着ニテモ、異人可相察候間、決テ油断ハ不致、左様成時ハ菱ヲ時候得ハ、素足ニテハ一寸モ不歩行之由、異人ハ始終クヅヲハキ候由、中々危キ手数也ト段々ノ評判有之候、

一七月初日晴、東風ニテシケ立候、

御姫様方玉里ノ様御ハツシ被遊候様、御側役ヨリ被仰出候処、障姫様ノ仰ニハ、太守様ハ何方へ御出陣被遊候ヤ、御帰陣有之迄ハ御武連長久ヲ奉祈、爰ヲ去ルヘキニアラスト被仰候由、誠ニ御女子様ナカラ御勇壯ノ被仰、実ニ感涙ニテ候段申事ニ有之、サレトモ醜夷輕蔑マス、相寡候ヤ、追々御逃相成、夕方迄惣テ老人モ不殘御逃相成候、

一御両公方ハ今日七ツ時分、市成屋敷ヨリ千眼寺へ御移

リ相成候、二丸ノ御姫様方モ玉里へ御被逃、マコト兔姫様ト

貞姫様妙谷寺國ニ候、

一御軍賦役折田平八・御小納戸伊地知壯之丞応接ニ被遣候処、夕方迄不罷帰候ニ付、決テ捕籠ニ相成候半トノ思召ニテ、水軍隊一番・二番・三番ノ三艘ニテ夜打ヲ掛候様御下知ニテ、則其用意イタシ居候処、クレ時分罷帰候間、夜打ノ儀ハ取止メニ相成候由、何ソ異変ハ無之候得共、東風強候テ漸ク罷帰候由、

但夜打ノ手段ハ有之候半、過分ノ梯子出来候様御下知為有之候由、

一前条通御殿惣テ御逃ニ相成候間、市中ハ勿論武士小路ニ至ル迄、近在諸所へ逃方大混雑、人馬賃錢ノ算等限リナク、誠ニ前代未聞ノ有様ニテ候、

一昨日ヨリ今日迄ノ間カ、蒸氣船蒸氣ヲ立、國分小村ノ辺迄差越、又櫻島ヲ相廻リ候共イフ、此方ノ蒸氣船三艘ハ重留意ノ前へ相逃居候、決テ夫ヲ奪ニ差越候半ト申事ニテ候、

一同二日五ツ過迄ハ東風ニテ雨降様ニナリ、四ツ時分ヨリ段々風モ強ク雨降出、風雨甚烈シク、後ニハ南風ニ直リ横ツレニ成リ、終日終夜吹通ナリ、

今朝未明異舟式艘重留ノ蒸氣船へ差越、人々過半不起内ニテ夷人乗込、早ク立逃候様相達、猶予イタシ手向等イタシ候ハ、可打果旨、六挺カラミノ短筒ヲ押当、稠敷セキ立候ニ付、皆々大ニ驚キ候内ニドロノト乗込、其内ニハ脇差ニ手ヲ掛候者モ有之候得共、乗頭ヨリ無理ニ兵端ヲ開クマシク旨頻ニ制シ、何分異人共ノ勢ヒ強ク、凡下水主ノ者共ハ大ニ恐懼イタシ、周章狼狽シ海中へ飛入ヲ、異人共此方へ舟ヲ渡シサヘスレハ殺ハ不致、静ニ上陸イタシ候様バツテラニテ上陸為致、海へ落入候者ハタブノ様成モノニテスクヒ上ケ、重留・龍ケ水或ハ櫻島ノ方へヲロシ候由、右之内吉留何某ハ肩ニ手疵ヲ負、重留へ上陸イタシ、岩次郎弟本田何某ハ海へ飛入死体不揚、乗頭ノ鎌田諸右衛門ハ重留へ上陸イタシ、早打ニテ右之様千眼寺へ注進イタシ、三艘共ニ奪ヒ取レ、五代才助・友厚松木安右衛門ハ異船へ乗移リ候由、右ノ趣五ツ過ニ相達候ヨシ、

松木安右衛門 五代 才助 川上源右衛門

鎌田諸右衛門 渡邊彦兵衛 同 吉十郎

上野 彦助 藁田時之丞 和田彦兵衛

本田彦十郎 海江田清之丞 郷田吉兵衛

木村鐵次郎 吉留直次郎 細工入 岩切仲左衛門

坂元 與一 和田 市藏 其外ニモ多クアルヘシ、名前不承候、

但宇宿彦右衛門ハ一兩日前水雷火仕掛ニ付、櫻島ノ地方へ上リ候ニ付、此難ハ通レ候由、

一御讓御道具等引直可致、一時日方ヨリ御用部屋へ相窺候得共、マツ見合候様、度々ノ事ニ候ヘトモ、モフハ止事ヲ不得、御納戸計ニテ格別成御道具、昨日ヨリ尾畔へ差遣候、過分ノ御品ニ付 本ノマ、(クレカ)モ相掛リ、御道具

方ノ御品ハ惣テ其俣被召置候、夫ト申モ前以ヨリ運方イタシ候へハ、随分可出来事ニ候へ共、マツ見合々々

ト計ニテ、夫故急埒不致候、其外御手許御道具御 (箱)□ノ御道具等、今朝ヨリソロソロ格護方有之、鉄砲相聞

候時分ハ持運方最中ニテ、格別不重立分ハ (上カ)銅藏へ御格護相成候、殊更考候得ハ誠ニ危キ致方、併御運ノ強キ事ニテ候、

一四ツ時分ニモ候ヤ、野村傳左衛門アハタ、シク御納戸

へ被差越、今ハ致方ナク、黒土ニ成ルトモ不打払候テハ止ナント被申候間、本城氏夫ハ何事ヤト被尋候処、御存シハ無之、(脱カ)蒸氣舟ハ被奪取、重留モ焼打ニセラレ

候段申サレ候間、拙者杯モ夫ハ存外成事、弥ノ事ニヤ

ト申候処慥成事也ト被申候間、甚言語同断也ト、則御小人ヲ靈府堂へ登セ見候処、矢張昨日ノ所ニ舟カ、リ居、風モ追々吹出、此方ノ蒸氣船老艘ハ櫻島ノ地方へ

引來候筋ニテ、当分ハ八艘相見得候由申事ニテ、其外ノ舟ハ磯ノ地方へ居候ヤ不相見得候、然処右通無体ニ奪取候間、可打果命令有之候哉、砂揚場ヨリ大砲打出候ニ付、台場毎ヨリ銘々打出候処、二十発計ハ異舟ヨリハ不出、

松木・五代ハ異舟へ引取候計ニテ召置候処、大砲打掛候ニ付、混々ト繩掛個 (牢脱カ)へ禁錮イタシ候由、風説ニ

此兩人異舟ト往復シテ、生麥一条ツクノヒ銀等彼是ノ儀申入候処、却テ醜夷ニ随心イタシ候様ノ疑惑ヲ受ケ、夫故熟談モ不相調、迎モ急埒可致形勢ニ無之故、質物ニ取候考ニテ引取候由、然トモ此方ヨリハ実ニ奪取ラレ候ト心得、大砲ヲ打掛候由、実ニソモ可有之ヤト申人モ段々有之候、

夫ヨリ異舟ヨリモ打出候、則拙者ニモ靈府堂へ駈上リ見候処、異砲漸ク台場辺へ落入、又ハ二三町ノ所ヨリトベリ、ハカカ敷儀モ不相見得、此方ヨリ拾発モ打

候得ハ三四発モ打様ニテ、遠方ヨリハ此方ノ玉葉ヲ費
ヘサスルカトヲモフ程ニ有之、我々共モ片ツヲ吞候様
ニ有之候跡ニテ承候得ハ、台場ニテモ折
角費成打方不致様ニ心得居候由、夫ヨリ段々ト夷舟ノ
大砲モ強ク、其勢ヒ別テ烈シク誠ニ迅雷ノ如ク、殊ノ
外淨光明寺ヲ見当ニ打掛、御殿ノ方ニモ過分玉來候へ
トモ、淨光明寺程ハ無之、下方ハ郡元辺ヨリ上之園・
柿本寺辺へ過分飛來リ、拙者隣リ寺田氏ノ石垣ニ玉來
リ、其音ニ驚キ、草牟田ノ萩原氏所へ相ハツシ、子供
ハ虚空屋ノ上へ見物ニ差越候処、迎ヒヲ遣シ原良村迄
逃、又萩原氏へ差越候由、上方ハ福昌寺・瀧之上・菖
蒲谷ノ辺、又ハ上之原辺遠方迄玉届キ、玉ハ大小百斤
已上又ハ五六拾斤位ツ、掛リ、徳利ノ様成アリ、丸キ
モアリ一様ナラス、段々形モ相替、殊ニ祇園ノ台場受
手ニテ、東之方潮音院ノ鼻ノ辺ヨリ横打ニ打込、八時
分上ノ口本ノマ、(刻迄)祇園台場モ持コタヘ打合候得共、鉄砲モ台場
モ打崩レ、其上雨風ハ強ク、此台場トノ争ヒハ打止候、
櫻島袴腰下ノ台場ハ纔四丁位ニテ、殊之外矢比近ク候
故、打テ可尽軟ト為申由ニテ十分ニ打込候処、此時船
将杯余多死亡イタシ候由、夷舟ヨリモ稠敷打込候へト
モ、台場ハ崩レ候へトモ志人モ不損候由、物主ハ肝付

兼四兵部別テ手強ク下知イタシ候評判ニテ、援兵ハ國分ニ
テ候得共、櫻島衆中計ニテ打方イタシ、別テ評判モ宜
ク、其内八ツ前ニテモ候ヤ、夷舟ノ小舟風波ニ漂ヒ、
祇園州ノ乱杭ニカ、リ、暫時ノ間猶予難儀イタシ、舟
ヨリ小銃ヲ強ク打出、此内ニバツテラヨリ段々人数ヲ
繰出、漸クニシテ引出候由、祇園ノ台場志挺ニテモ慥
成鉄砲有之候ハ、随分可打取ヲ、又遊軍力愛宕山へ經
上リ、拾弍廿目位ノ鉄砲ニテ打候ハ、困窮可致ヲ、誠
ニ遺憾也、辨天波戸ヨリ三四ツ打候へトモ、遠方ニテ
不打当候由、旁殘多次第二候、此時分互ニ打合候折、
櫻島地方ノ蒸氣船焼立、殊之外煙リ上リ候ニ付、敵舟
ヲ焼打ニイタシ候ト心得、此方一統勢ヒ立吐氣ノ声ヲ
上ケ候ニ付、拙者ニモ夫ハト又靈府堂へ経上リ、能々
見候処、此方ノ舟ヲ焼候体ニテ、煙ノ中ヨリ敵舟漕出
候ニ付、今迄ノ勢ヒヌケ、興ノ醒メタル次第ニ候、夷
舟ヨリ鉄砲打初ルト、外式艘ノ蒸氣船ハ直ニ焼捨、磯
ノ地方ニ付不相見得、外ニ琉球舟式艘、日州辺ノ舟壹
艘、都合七艘焼捨候由、左候テ新台場辨天波戸・大門
口・砂揚場等ヨリ頻ニ打立候へトモ、何分遠方ニテ届
兼、大方志挺ニ付拾五六発ツ、ハ打候由、一、台場七八

挺ツ、ハ相打居候半、七ツ過ニハ五ニ大砲打止、風雨
 ハマス、強ク、八ツ時分ヨリ上築地薬師カ硫黄蔵へ
 玉来リ、夫ヨリ火起リ、小坂通ヨリ西之方都之城館内・
 種子ヤシキ・平佐島山家トナリ迄ニテ、其外冷水谷惣
 テ焼失、興國寺・浄光明寺・不斷光院・般若院杯惣テ焼
 失、夫ヨリ両上家焼失、今和泉・重留屋シキ杯ハ残り候、
 六ツ時分暫シ火事場見分ニ冷水谷差越候処、其火勢
 ノ盛ナル事甚烈シク、時々異舟ヨリ火矢ヲ打出、其音
 ニ段々ト火勢モ強ク成リソウニ相見得、人カラトテ身
 ノ毛モヨダツ様ニ有之候、殊ニ男子ハ廿七日曉ヨリ上
 下共大方出陣シ、女子ハ夫々相ハツシ彦人モ残り居候
 モノ無之故ニ、ヤケホウダイニ焼廻リ候ニ付、大形丸
 焼ケニテ目モ当ラレヌ有様、其内場合ニヨリ罷帰候テ、
 手ノ廻リ候処二三軒ハ打消シ候所モ有之候由、下町ハ
 四五ヶ所ニ煙上リ候ヘトモ、火消シ能廻リ惣テ打消シ
 候由、然共如何ナル人ノ下知ニテ候ヤ、松原通ヨリ上
 手ノ方廣口角ヨリ南林寺花屋迄惣テ打コハシ、浜付ハ
 新築地ヨリ浜手ノ方打コハシ、四五尺ノ所ヨリ鋸ニテ
 引切、万力ニテ率倒シ、殊ノ外大騒キニテ目モ当ラレ
 ヌ有様、誰カ下知シタルトイフ事モ又何様ノ訳テ打コ

ハシ候儀モ不相知、珍敷所置也、尤七ツ時分ニテモ候
 ヤ、二丸御小納戸ヨリ下町家打クツシ方ニ付、小細工
 方ノ大工耆人モ不残差出候様問合有之候間、是ハ珍敷
 事也ト返答ニモ不及、大工耆人モ不遣候、其内二心掛
 タルモノハ、二三枚敷ノ家ヲ纒カ式三兩位ニテ取入候
 方モ段々為有之由、

但祇園ノ台場ニテ、後迫ノ住人税所清太大砲ニ当リ
 即死、外ニ耆人手負イタシ候迄ニテ、川上龍衛殿
 ハ祇園ノ辺へ被扣居候処、玉石垣へ当リ、其石ノ
 カケニテ眼辺へ被打当、殊ノ外相痛、十月初方ヨ
 リ漸ク出勤之由、家来耆人即死ノ由、同所ニテ染
 川五郎右衛門下人モ、石垣ヨリ異舟ノ方ヲソキ
 見候所へ玉飛来リ、目ノ辺ヨリツント打切候由、
 此台場ノ当リ殊ノ外玉来リ、神明社ノ内ハ幾等ト
 イフ数モ不知、誠ニ仰山ナルモノニ候、御釣宿酒
 匂庄右衛門所ニテ飯ヲ喰候碓玉来リ、微塵ニナリ、
 天井其外へ飛散、目モ当ラレヌ次第二候、其外南
 林寺ノ内へモ玉飛来リ、(日置郡)阿多・川邊ノ守衛廟下辺
 ニテメシヲタへ候所ニテ、式人ハ即死式人ハ手負、
(マコ)源昇庵ノ和尚モ即死、鹽屋ノ松崎何某ハ大門口ノ

堅メニテ候処、大砲ニヲソレメシカヒタルトテ、南林寺へ馳出候処、右ノ玉ニテ足ノツフシ辺ヨリ打切ラレ、是モ死候由、其外ニハ格別手負・死人モ無之ヤニ候、此玉ハ徳利ノ様成形ニテ奇妙ニクルヒ廻リ、珍敷玉ニテ候、

但税所へハ御内々金五拾両、表向切米八石被成下候ヤニ承候、龍衛殿ハ御定ノ場ニテ無之故、跡立テ何ノ御褒美モ無之由、賞罰不明之事也ト段々評判、

一夕方暫時御暇イタシ、中原氏ト竹迫岩右衛門列立、上ケ谷ノ辺有之候火事場見ニ差越候、中原氏宅へ差越候処、隣迄只今焼失ニテ、既ニ焼ントスル勢ヒ也、諸道具杯少々差出候テ引取候、直之丞ニハ跡ニ残り、焼ル迄被見置候由、其火ノ勢アル事肝ヲ消シ、時々火矢ヲ射カケ、舟ニハ楽ヲ奏シ居ヨシ、一兩人人足テモ召列差越候ハ、中原方家モ焼タリ、マシテフルキ我々共家モ不残焼打ニ逢ヘク候間、火消所テハ無之候事、一夜入前御用部屋ヨリ御用有之、罷出候処、御宝蔵ノ金ヲ直方可有之候間、鍵ヲ差出候様トノ事ニ付、此鍵ハ前以差図ヲ受ケ、御納戸蔵御金苞所ニ御出先キへ遣候

段申出候処、以ノ外不興ニ候得共、差図ニ付閉口ニテ、左様ナラハ差掛ノ事ニ付、如何致シテ可然ヤトノ事ニ付、鍵前ノ所打崩スヨリ外ハ手数有マシク申出候処、左様ナラハ其通トテ、小細工方ノ大工又ハ御廐出張ノ大工ヲ招呼、俄ニ戸前打クツシ、御金ハ御進物蔵御金ト一所ニ、御納戸側ノスキノ穴へ御格護相成、御納戸御小人不寝番相付候、

但御用部屋ハ、山口直記殿・伊集院助右衛門・和田九十郎・吉原平蔵ニテ候、

戦争央八ツ時分ニテ候ヤ、御殿ノ上又ハ御納戸ノ上へモバラ玉ニツ三ツ来リトサメノ飛立様候ニ付、与力ノ二才共タマリ兼、サアモノハ出候半ト立寄行ニ付、大ニ叱付、コ、ヲ一寸モ立去ヘカラス、奉行ノ御下知無之内ハ、何方ヘモ出テハ不相成、外ニ不出内ニ相図リ可罷在旨、拙者ヨリ申入候処、皆内ニ来リ相円リ候、左候テ七ツ時分ニモ候ヤ、御小人岩右衛門・次兵衛杯御殿へ差越見候様、何方ノ御座如何候ヤト申付、兩人共ニ差越相窺候処、御座ハ何方モ不明、御家老座・大目付座・御用人座・御勝手方御趣法共ニ、一兩人ハ御出候ヤニ候ヘトモ、実ニ空殿同様也ト申事ニ付、皆々

一統アキレ果、偕々残念也、城中ニハ重留カ宮之城カ御名代テモ被仰付、御家老座ノ如ハ相堅メラレ候儀、勿論ナラント評判ニテ候、

一同三日、五ツ過迄ハ風不止、雨ハ時々降候、昼時分ヨリ西風ニナリ、少シハ静ニ罷成候、未明ヨリ度々御小人ヲ靈府堂又浜手ニ遣候処、夷舟蒸氣ヲ立候迄ニテ、昨日ノ所ヘカ、リ居候間、^(テカ)何モ異変ノ姿モ無之、何様ノ訳歎ト一統疑惑イタシ居候、

四時分、御側御用人座ヨリ御用有之罷出候処、^(符)國座府ヘ御引移可有之筈ニ付、何篇手当イタシ候様追々仰出置候得共、其内手当イタシ候様トノ事ニ付、承知イタシ罷帰候テ、是ハ珍敷仰出、戦争央俄ニ國分ヘ御引移ハ如何ニ候事ヤト申テ、御小人頭杯ヘモ中渡、御蔵^口並尺筵其外荷作具等ノモノ俄ニ手当イタシ候処、御通達モ参リ、神速ニ手当イタシ候様ニト有之候間、此文言ニ付テハ極々大急キ也ト申テ、急々手当イタシ候、

四六六 戦争褒賞ニ就テ

夫レ史類ハ正史野乗トモニ事実ノ誤謬ナキヲ要トシ、文章ノ巧拙ヲ論スルハ抑モ末ナリ、然リト雖モ必ズ誤リ易

キ、其例寡ラサルハ和漢歴々多言ヲ要セス、今此ノ稿ヲ起スニ方リテ、僅々廿五年前ノ事実ニシテ、編者ガ曹モ親シク其事ニ預リ、親シク見聞スル処ナリト雖モ、其顛末恍トシテ始終記憶セザルモ又多シ、特ニ戦況ノ如キハ各砲台毎ニ於テ異同アリ、或ハ人ニ依テ規定スル処異リ、或ハ動作ノ差異アルハ素ヨリ論ナシ、故ニ此稿ヲ起スヤ、事実ノ錯誤脱漏ナキヲ要トシ、敢テ文章ノ鄙拙ニ関セス、或ハ重複ニ近キモアリト雖モ、其人ニ就テ親シク質シ、親シク記録ヲ乞ヒ、以テ事実ノ証左ニ供ス、即チ祇園州砲台ノ物主九良賀野久馨ナル者ノ自記ヲ初メトシテ、実場ニ臨ミタル人ノ説話或ハ謾筆ノ類ヲ蒐メテ後証ニ供ス、或ハ嘉永癸丑以来ノ事実ニ於テハ、近世出版ノ書充棟甚シキニ至テハ、附会ノ妄説モ又ナシトセス、是ヲ後世ニ伝フルハ遺憾ノ尤モ大ナル者ナリ、故ニ諸書ニ記ス処ヲ抜抄シテ、誤脱顛転或ハ妄説附会ノ如キハ撤註ヲ加ヘテ、後者ノ惑ナカラントヲ要スル事、左ノ如シ、

九良賀野久馨自記抜抄

前之濱ヘ英国軍艦七艘侵入、戦争之砌、私受持祇園州台場物主被仰付置候、左ノ通相違無之候、

文久三年癸亥六月廿七日夕方、沖小島・櫻島・祇園州備

付打揚^{狼烟}之相凶ニ依リ、早速受持祇園州台場へ出張致

シ候処、追々受持人数悉ク走来リ、然ルニ夷艦ハ谷山^(鹿兒島市)・

喜入境^(福留郡)ノ^{谷山平川村七}前ニ碇内セシ由ナリ、此時御家老小松

帯刀殿ヨリ受持場所ニ出張シ居ルヘシトノ達アリ、此夜

御軍役方書役田中治右衛門来、玉葉類手抜無様員数等調

査シ置クヘシトノ旨、帯刀殿被達タル趣ヲ述ラレタリ、

今夜ハ良英寺^{祇園州砲台後}ニ屯集シテ、夜ノ明クルヲ待タリ、

同廿八日朝、夷艦七艘蒸気ヲ立、前ノ濱大抵十町内外ノ

沖ニ悉ク碇泊ス、為応接御軍賦役折田平八・伊地知正治、

助教今藤新左衛門外ニ重野厚之丞乗付ノ由ニテ、彼ノ方

ヨリ書簡差出シタル由ナリ、此日玉葉木管仕込等ノ手当

ヲナシ置キ、夷船ヨリバツテラヲ卸シ、内海方々ヲ乗廻

リ測量ヲナセリ、日入前バツテラ二艘ニ帆ヲ掛ケ、國分

ノ方ニ翔リ行キシガ、黄昏ニ及比ニハ歸り来レリ、

同廿九日、此御方ヨリ御返翰御遣シ相成ル筈ニテ、其時

壯士七十人^{七十七人、外}ヲ撰ハレ、一艘二十一人ツ、乗込ミ、

於舟中夷人ヲ殺戮シ、船中騒動ニ乗シ陸上ヨリ発砲スヘ

キ手筈ニテ、七十人ノ面々ハ各必死ヲ究メ、親族知音ニ

永訣ヲナシ、蓋シ九ツ時辨天波戸辺ヨリ各小舟七艘ニ打

乗テ、西瓜又鶏ナド送リノ体ニナシテ、夷艦七艘ニ漕寄

セタレトモ、唯返書関係ノ衆ノミヲ乗セ、余ノ人ハ一人

モ乗セサリシトゾ、我台場ニモ其時ニ乗シテ、既ニ兵端

ヲ開クヘキノ時ニシアレバ、各自受持ノ大砲ニ役々ヲ配

立シ、沖ノ方ヲ望ミ見テ待チヌレト、夷艦七艘ハ重富ノ

方ニ乗り行キシカ、間モ無ク歸り来リ、一艦我台場前近

ク乗通り、新波戸前辺ニ暫ク掛リ、夫ヨリ沖ノ方櫻島ノ

方ニ碇泊セリ、今日ニナリテハ市中ナドハ老幼ヲ携へ、

家財ヲ持運シテ、近在遠方ニ兵難ヲ避ルコト夥シク、夜

中迄モ騒シト聞ヘタリ、

同七月朔日、雨降り出テ風モヤ、急ニ吹キ出シヌ、此日

九ツ時分ニモヤアリケン、御旗本備ノ物主島津右門馬上

ヨリ駈ケ来リ、只今重テ応接ノ処、彼方ヨリ大ニ嘲リタ

ル様ノ返答ヲナシ、既ニ砲門ヲ開キ鞆端ヲ開ントスル形

勢ナレバ、其用意スベクト告ケラレ、急ニ歸ラレタリ、

於是皆々急ニ受持ノ大砲ニ玉葉ヲ籠入レテ、スワヤト言

ハ打発ツノミニシテ、今ヤノト待チヌレト、又戦争ヲ

開クヘク模様ニモ及ハテ止ミス、尚玉葉ノ用意嚴重ニ致

シ置クヘシトノ事ニテ、銃薬方集成館ヨリ運送セリ、実弾

榴弾トモ合テ九十発ノ用意ナリ、此ノ夜ニ至リテハ殊更

ニ戒警ヲ嚴ニシ、各自大砲ノ下ニ蓬茸ヲナシ、替ルル

番ヲナサシメ、或ハ陣屋ニ仮寝スルニ、風ハ東方ヨリ吹クコト益急ニシテ、雨ハ篠ヲツクカ如ク、布屋ヨリ洩リ来ル滴ヲ凌キ兼ツ、夜ノ明クルヲ待タリ、

同二日風雨益急ナリ、各々兵糧ヲ使ヒ受持ノ砲場ニ配列シ居リタリケルニ、四ツ時分ニモアリケン、重富ヨリ飛脚ナリトテ、兩人息ヲ限りニ来リテ申ス様、今朝重富脇本浜ニ異艦来リ、此所ニアリシ御召船、此ノ方ノ蒸氣三艘ヲ取廻シ都テ奪ヒ去レリ、乗組ノ士吉富某手負ナル由、因テ早々早打ニテ駈来リ、既ニ御軍役方ニモ其段御届ニ及ヒシトノ趣ナレバ、皆奮激ニ堪ヘズ、斯ル折柄夷艦七艘磯ノ沖ヲ此方ノ蒸氣ヲ引列レテ、櫻島地方近ク過キ行キケレハ、矢比ニ及ハ、砲發セントノ勢ナレハ、先ツ機ヲ見合セテ指揮ヲ加ヘ、折リ柄天保山台場ヨリ大砲兩發響カセタリ、暫時アリテ夷艦ヨリモ空砲二發ヲ放シタリ、繼イテ櫻島台場ハ間近クシテ打掛クレハ、天保山・大門口・辨天波戸・新波戸・我祇園州凡五ヶ所ヨリ數発ヲ放チ掛タレトモ、矢比遠クシテ舟ニ達セサレハ、砲發ヲ猶予セリ、夷艦ハ奪ヒ取りタル我蒸氣船二火ヲ放チ焼捨テ、台場近ク進ミ寄スルニ、乃チ方々ヨリ玉葉ヲ込替々々打掛ケル、此時五ヶ所ノ台場砲數大概四五十挺計リナラン、

破裂彈実弾取交ヘ頻リニ放チ掛ケ、ルカ、初ノ程ハ矢先高クシテ、台場後ノ岸壁ニ当リケレトモ次第ニ低クナリテ、台場ニスリ掛ケ、打付ケル勢ニ、砂土石片ヲ飛シ、降り掛ルコト亦雨ノ如シ、風ハ益々強ク吹キ卷クリ、雨ハ尚ホ甚シク降り、此暴風雨ニ海浪烈シク卷クリ立チ、巨大ナル堅艦モ動揺高低シテ、運動ニ苦シム様ニソ見ヘニケル、尚愈砲發ニ力ヲ尽シ戦ヒタリ、後ニハ敵船我台場ノ大砲ノ砲身ヲ射損シ、或ハ砲台ヲ打壞サレ、或ハ砲口ヲ射ラレ、此戦午ノ刻頃ヨリ始リシカ、戦之央ニ大目付川上龍衛手負ス、同長男川上直衛斥候トシテ參ラレ、余程苦戦ノ段相聞ヘ、尚又玉葉・兵糧等ノ手如何ト尋問被致候故、先ツ当分ノ所ニテハ何モ差支ヘ無之段相答、其外御側役大久保一藏巡視トシテ參ラレ、口達ニテ此方台場余程苦戦ノ段褒詞有之、其場直チニ引取ラレ、彼是レトスル処ニ、二十四封度規役伍長税所清太折角砲台ニ立乘リ、口葉相守リ颯リ方ノ折、砲彈左ノ腋下ニ当リ即死ナリ、眩岡猪之介・落合四郎右衛門・家村幸之丞深手ニテ、平田甚五郎・門松源之丞・平田九十郎此三人ハ浅手ヲ受ケタリ、懸リケル所ニ終ニ夷艦一艘打居候得共、最早申ノ刻許リトモ覺シキ比ニハ、大砲半ハ損シ、於是

損砲ノ戦兵ハ皆々為方ナク、土手ノ隠〔隠カ〕ニ伏兵ヲナシ、若シヤ上陸セバ手結ノ動ヲ為ントソ扣ヘ居タル所、已ニ日モ黄昏ニ及ヒケレハ夷艦モ遠ク引退テ、磯ノ前櫻〔島脱カ〕ノ方ニ近寄りテ碇泊セリ、尚火矢ヲ高く飛シテ射掛ケ、ル前キニ、上町ヨリ燃上リタル火愈熾シニ燃広マリ、既ニ浄光明寺ニモ燃付テ、火光天ヲ焦シ、地ヲ輝カシ、又磯ノ集成館鑄造所モ燃上リシ、火焰東風ニ吹靡カサレ、後追ノ上ニ立掛リ夥シク、言ハン方ナシ、然ルニ皆共夜半頃迄台場ニ居リシカ、伊集院中〔兼道〕ニ阿多郷一手ノ物主ニテ、昼頃ヨリ加勢トシテ来リ居レケルカ、戦兵ハ今日ノ戦ニ勞カレタラン、明日モ又戦フヘキナレバ、台場ノ守リ伐リ〔伐〕シテ居リケルニ、夷人上陸ノ模様モナケレバ、寺尾庄兵衛宅近ケレバ此ノ家ニ衆皆休ミケリ、庄兵衛モ同シ固メノ衆ナリ、

同三日、今朝ノ朝飯ハ衆皆寺尾氏ニテ食シ、雨未タ止マス、我台場ノ砲過半ハ用ニ立タス、且又布屋ナトモ、砲丸ニ損シテ屯シ難ケレハ、多賀坂ノ下ナル濱田某ト野村某ノ家ヲ屯所ニシテ、斥候ヲ出シ模様ヲ伺ハセ置キケルニ、櫻島前ニ碇泊セル夷艦七艘共蒸氣ヲ立テタリトノ報知ナレハ、速ニ台場ノ辺ニ繰り出スニ、夷艦ハ七艘共ニ

南ヲ指シテ乘行キサマニ、御城ノ方ニ向ケ数發ヲ放チ掛ケ、猶南ヲ指シテ出テ行キシカ、初メ来リシ時ノ碇泊場喜入・谷山境ノ前ニ繋リタリ、此夜屯所ニ宿ス、此時沖小島台場之固メハ青山某、天山流砲術家ノ衆ノ受持ナリ、此時大門口・砂揚場又ハ沖小島・櫻島ノ台場ヨリ烈シク打掛ケタリ、

同四日、多賀山ニ上リ遠望スル、午下刻頃ニ夷艦ハ七艘共昨日ノ碇泊場ヲ発シテ、南山川口ヲ指シテ出去レリ、此日濱田・野村二氏ノ家ニ屯ス、夕方島津二十郎〔二十郎ハ島津重正カ旧名ナリ〕宅ヨリ拙者へ御用申来リ、致出頭候処、御家老小松帯刀殿ヨリ仰達ニハ、此節戦争ニ付テハ皆々粉骨碎身ノ働、別シテ

御感悦被 思召候、今夜先ツ御暇被下候間、何レモ於台場勝吐氣ヲ揚ケ、引取候様ニトノ御沙汰ニ候旨承知イタシ、直チニ台場へ罷歸リ惣戦兵へ右之趣相達、エイ〜声ノ勝吐氣ヲ揚ケテ勇ミ喜ケリ、尚御奉行新納次郎〔久徳〕四郎殿ヨリモ台場ノ働キヲ賞セラレ、皆々此夜自家ニ帰ル、一戦争後〔七月五日〕忠義公御乘廻ニテ、台場戦争跡御覧相成リ、於台場私へ御直ニ御詞ノ御褒美蒙仰付候事、

一御鉄砲 一挺

一 御陣羽織

島津樞(久壽)五郎

右ハ今度英夷侵入之砌、為 御先手物主祇園州台場
相堅、夷艦數艘引受、砲台相壞候迄致苦戰、終ニ一
艘打居候段、 御満足之至 思召候、 御褒美右之
通拝領被仰付候条、愈々可拙忠勤旨被 仰出候、

七月 帶刀小松 清廉

右文久三年癸亥七月十二日拝領被 仰付候、

一同戰爭後、島津淡路守殿台場物見御出、品々咄共有之
候、右久馨自記抜抄ナリ、

四六七 川上龍衛久自記

英艦侵入戰爭之節手負候次第左ノ通、

文久三年六月廿日昼七ツ半頃、注進ニ依リ早速出殿川上ハ當時若年寄、大目付ノ職ナリ、同廿八日早朝下会所 旭日通商社、議所ノ地ナリ江御殿ヨリ
差越、夫ヨリ津畑并市中巡回致シ、尤同所へ同席ハ御家老、若年寄ヲ云フ席同
付ラレ差越、当日異議ナシ、同夜御本丸へ帰ル廿七日英艦渡来ヨリ国老等城中ニアリ、故ニ帰ルト記セリ、七月一日昼過 御両公御出張御出張トハ、御出陣先ヨリ御用有之罷出ル、御側役大久保一蔵ヲ以テ、

入来之英艦取締方、最早悉ク引取へク旨承知致シ候ニ
付、則夫々ノ向へ申渡ス、夜入御側役中山中左衛門参
り参トハ御家老座、ハ来リシヲ云フ候テ、六日町上手ノ片側、都テ火防ノ為
メ取壊シ候様御吟味ニ付、御作事方へ申達スヘク承り、
則御趣法御用人中村ヲ以テ相達ス、今夜諸御役席等皆
々請持堅メノ場へ出払、殿内誠ニ人少ク、尤モ御殿内
外火防ハ勿論、取締向キ川上(久通)但馬御家老 職月番申談シ、嚴重手
当申渡ス、夜明け候テ猶又タ但馬相共ニ殿中其他行廻り、
検査ノ折柄、砲声相聞へ、戰爭初り候様子故拙者ニハ地所者ニハ、地
越ク仰付ラレ候得共、前兵へ乘入跡越、但馬へ相断リ、御軍役奉
行新納刑部次郎四郎ト記ス、同人ナリへ引合候得ハ、刑部申候ハ、何方
ニテモ難戦ノ場所見受候ハ、差越然ルヘクト承り、則
チ向フ築地中通リヨリ祇園州砲台へ參候処、砲戦最中、
戦死等是アル央ニテ候、此台場物主島津登ニテ、守衛
ノ人心必死ニ相成働居候、仍テ彈藥等細々相尋候処、
未タ沢山有之、差支ナク承り届、拙者ニハ祇園社脇へ
隊ヲ建テ扣へ居候、此時風雨倍々烈シク面ヲ向クヘキ
ヨウナク、携へ持チタル手銃ハ、羽織ヲ以テ火口ヲ包
ミ雨ヲ凌キ、然ル所確ト船ヨリノ発砲静カニ相成、皆
口々ニ田ノ浦ノ方ヨリ敵上陸致スト頻ニ取沙汰シ、左

ニ於テハ一發ノ下ヨリ直ニ切入ヘク、一統差ハマリ候
得共稍何事ナク不安ニ存大風ニテ敵船一艘合場前ニ吹付ラレシ、
船中大混雜ノヨシ後日承リ事候、

拙者斥候致スヘク存シ、隊ハ其俛立置、一人祇園社後
ノ川涯ヘ參リ懸リタル時、磯ノ方ヨリ第三ノ大船ヨリ
打タル砲丸社ノ玉垣ニ当リ、石抹ニテ左右ノ目ト胸ニ
打込、夫形リ倒レ氣絶致シ候此時樂川五郎左衛門家來、居合習ヲ、
引抜即死ノ由、其時ハ不在、後日承ル
直ニ家來共馳キタリ、戸柱橋脇家ヘ介抱シ、出シ駕籠
ヲ持チ來リ、夫ナリ引取申候、

一副物主ニ階堂源大夫ヘ相托シ引取候、

一當時谷山郷地頭故、一手ノ人数引列出張致申候、

一御側御側トハ君
側ヲ云フヨリ医師遣サレ候、同八日ニテ御座候、

疵口苦痛ノ砌ニテ御医師ノ姓名承置不申、其後夫ナリ
大形ニ御座候、四十余日両眼共全ク明ヲ得ズ、百日余
ニシテ快氣罷成候、

右覺ノ次第前書之通御座候、

一戰爭之年五十六歳ニテ御座候、

明治十八年十一月十五日

川上龍衛久

右川上カ自記抜抄ナリ、

四六八 喜入攝津久高隱名カカ自記抜抄
當時江戸在邸
又山カカ自記抜抄
國老職ナリ

六月廿三日、一橋公慶喜公
ヲ云フヨリ御用有之、罷出候様御達
有之參殿候処、御直達ノ趣ハ、此節異船薩州鹿兒島ヘ
向横濱致発船候、就テハ着船ノ上諸事穩便ニ取計候様、
御上御上トハ将
軍ヲ云フニ於テモ被遊御配慮候付、呉々モ平和ノ
所置有之候様、訳テ 御両所御両所トハ、太
守
國父公ヲ云フヘ申上候様
承知致候、尤幕船船名
不詳ヘ乗付、明日可致出帆致致承知
候、勿論閣老井上河内守様御宅ヘモ御用有之、罷出候
様御達有之候、一橋邸日入時分退館、直ニ井上様ヘ罷
出候処、井上候ハ勿論、外ニ閣老一名外一名ノ
名不承御列席ニ
テ御口上、一橋公同断、明日汽船ヨリ御国許ヘ罷下候
様致承知、翌廿四日講武所ヘ差越、品川沖本舟ヘ暮前
乗付、直チニ出帆、諸所汐掛リ又ハ滞船ニテ、漸ク七
月十四日日州細島ヘ着船候処、御国許戰爭ノ段相聞得
候、同所ヨリ上陸夜白通行、同十七日英艦退去後十
四日ニ充ソ鹿兒島
着、久光公御儀園牟田稻留草牟田御
屋敷ナリ處ヘ被為入候ニ付、
直チニ罷出、成行言上仕、太守様御儀ハ千眼寺御本堂
ナリ
ヘ被遊御座候ニ付、參上成行言上仕候、最早戰爭後ノ
事ニテ無詮方候処、拙者鹿兒島着以前異船襲來ニ関ス

ル事件ニテモ候半、岩下佐次右衛門・堀直四郎出府被仰付候由、拙者儀ハ帰府ニ不及旨被仰付候、然ハ右ノ幕船前ノ濱へ回艦相成、御小人目付幕史ナリ乗組居候ニ付、旧御春屋客屋ノ総唱ナリニ於テ御振舞、且御品物被遣候、専ラ田畑平之丞政庁筆吏關係ニ候、

但

異国船鹿兒島へ向ヒ発船ノ義ハ、横濱へ探索差出置候付、疾ク御邸御邸ハ江戸芝濱ヲ至テ相知レ候付、即チ御国元へ飛脚此飛脚報十日ニ着ス差立申候、別ニ幕吏へ引合候儀無御座候、

前之濱戦争ノ儀ハ、前文ノ通汽船ヨリ罷下ル中途ユヘ、相分リ不申候、尤其後ノ儀ハ小松帯刀専ラ取扱ニ付、悉皆取覚無之候、

右喜入久高カ自記抜抄ナリ、

四六九

紹述編年抄(此書ハ伊地知貞鑿カ著シタル者ナリ)

折シモ我国ニハ英夷来航ノ事起ル、今春三月、英夷ノ関東ニ難題申立シ頃、二條ノ城ヨリ我ノ御家老小松帯刀ヲメサレ、一橋殿及ヒ御老中板倉周防守殿・水野和泉守殿膝ヲ并へテ申サレケルハ、去秋生麥ノ事ニヨリ

精山形藩主

(勝戦備中松山藩主)

(忠)

テ、英夷頻リニ養育ノ金ヲ関東ニ求ム、如何ニ存スルヤトアレハ、帯刀コタヘシハ、此事ノ基ヒ我国ヨリ起ヌレハ、アハレ英夷ニ告ケ、我国へ船ヲ廻サセ玉ヘカシ、

サアラハ直チニソノ曲直ハ明カニナルベキ物ヲト陳シケレハ、三人ハ此由ヲ聞セラレ、筋アル申振ナレト、願ヒノ旨ハ叶ヘ難シ、此後ハ関東ニテ如何ニモヨキニ御取計ヒアルヘシト仰セケル、其後チ英夷遂ニ金ヲ関

東ヨリ受取り関老小笠原圖書頭専断、價金ヲ渡シタル云フ、マタ我国ニ向ント謀ル、六月廿二日、御老中井上河内守殿我ノ江戸御留守居ヲ招テ申サレシハ、近頃英夷薩摩ニ赴ク事ヲ謀ル、ヨツテ是レヲ押留レトモ、更ニ聞入ル体モナシ、急キ此由ヲ告知ラセ侍ルトナリ前卷ニ記シタルカ如ク、井上河内守、方平ニ鹿兒島廻艦ヲ促シタリ

告ケラレ、明廿三日マタ御家老喜入攝津ヲ招テ仰セケルハ、英ノ軍艦去ル十七日ニ横濱ヲ出シトキ、ヌ、サレトモ彼ハマツ長崎ニ立ヨリテ、薩摩へ向ントノ結構ナリ、一艘ノ火船ヲ借ス程ニ、急キ乘リ帰リテ主君へ

申スベシ、関東ニテモ今鎖港ノ事評議ノ央ナレバ、必ス穩カニ事ヲ謀リ、軍ノ端ヲ開カルナトアリカクマテノ手厚キ御事ナレトモ、其廻船ノ事ハ幕府ヨリ審セシトカヤ(原註)、攝津ハ其翌廿四日遽カニ火船ヨリ

ハセ下リケレト、遙々ノ海路風波心ニマカセズ遅着シ、英艦モマタ長崎へ入ラスシテ直ニ向ヒ来レリ、同月廿七日申ノ刻過キ、山川ノ方ニ七艘ノ火船見ヘシカハ、沿海ノ烽火ヨリ烽火アガリ、船ハ程ナク谷山七ツ島ノ灘ニ至ル、急キ来意ヲ尋ヌレハ、英国ノ使節ト答ヘ、明日国書ヲ捧クヘシトイフ、廿八日巳ノ刻、前ノ濱ニ入ルヲ待チウケ、御軍役奉行折田平八・伊地知正治、助教今藤新左衛門、御庭方重野厚之丞四人ヲハ、英ノ全権官(John Mearns)ニールガ乗ルトコロノユラユス艦ニ乗入ラシム、彼マツ国書ヲ伝ヘ捧ク、其大意ハ生麥ニテ害ニ逢フ者ノ下死人并ニ其遺家ヲ養フノ金十二万トルステレンリングヲ求メ、我ノ報書ヲ彼ノ二十四時ノ内ニト期シ、マタ関東ヨリ案内ノ船イマタ来ラサル事ヲイブカル、我ノ答ヘニ、今ヤ 太守公霧島ノ温泉ニヨハシマス、往反ノ道近カラネハ、一日ノ間ニ報書スル事叶マシ、御留守ニハ御家老モ侍ルナレハ、徐カニ対面シテ論判セン、速ニ陸ニノボリ来レトイフ(編者曰、上陸ヲ促シ、ノ策ヲ用ヒタル者ナリ、應接所、ハ御眷屋内客屋ニ設ケタリ、)彼レハ陸ニ上ルコトヲ恐レシニヤ、使命タヒカサナレトモ従ハス、七艦ノ前ノ濱ニ至ルヤ府下并ニ諸郷ノ勢ハ、ミナ々兼テ定リシ陣所ヘ

ヒシ々ト備ヘ、唯一戦ニ打碎ントカタツヲ吞ンテソ勇ミケル、此日全権官ヨリ、薪水魚卵及ヒ果物ナトヲ望ミ乞フニヨリ其品ヲ贈ルニツケ、一ツノ謀事ヲ定メ、壮士数十人(編者曰、壮士七十七名、足輕六十名ナリ、)ヲスグリ、七艦ニ分ケ乗入り、手コトニ短兵モテ斬マクリ、是ヲ相凶ニ諸方ノ砲台ヨリ打ハナチ、一戦ニミナ殺シセントス、廿九日ニハ壮士数十人ヲ二ノ丸へ召出サレ、御杯ヲ賜フ、斯クテ壮士ハ皆打死ト思ヒ極メ、果物ウリニ身ヲヤツシ、小舟ニ打ノリテ七艦ニ向ヒケレバ、英夷ハ怪シミタル体ニテ近附ケズ、唯ユラユス艦ノミ登ルコトヲ得タリシカハ、此謀コトハ果ザリケリ、コノ日暮程ニ御家老川上但馬花押ノ報書(編者曰、報書ハ第十之卷ニ記ス)ヲ、町田六郎左衛門ヲシテ差渡サル、大意ニ人命ノ輕カラヌ事、素ヨリ汝カ言ノ如シ、サレバ生麥ニテ汝ノ國人ヲ害シ逃ルモノハ、今ニ四方ヲ搜セトモ求得サルヨイカニセン、若シ搜シ得ナハ速カニ汝カ許ニ送り、下死人トナスベシ、養育ノ金ハ渡スベキ筋アラハ、望ミニ任セツヘケレドモ、今ニ始メヌ我國ノ定メ、諸国トモ幕府ノ下知ヲ受テコソ定ル事ナレ、今はヲ渡スベクハ、如何ニモ関東ノ沙汰アルベキニ、其儀ナキコソ疑フベシ、汝等ヨク此旨

ヲワキマヘ、シバシカ程長崎・横濱ノ間ヘ歸リ待テ、
イソキ関東ヘ此由ヲ申入レ、イカニモ取扱ヒノ道ア
ラン、且ツカノ生麥ノ地、関東ヨリ汝等ニ遊行ヲ許サレ
シ事ヲ聞カサルヲ、馬ニ打乗リテ猥リ二人ノ行粧ヲ侵
ス事、如何ナル心ニヤトナリ、英夷ハ此書ヲ見テ安カラ
又体ニソミエタリケル、明レハ七月朔日東風ヤ、吹キ
起リヌ、カサネテ御側役格伊地知壯之丞堀次郎、故アリテ
姓名ヲ變ヘシナリ

伊地知正治ヲ遣サレ、猶モ理ハリヲ尽シテ其曲直ヲ論

セシカトモ、更ニ受カフ体モナシ、爰ニ我ノ火船天祐

丸・白鳳丸・青鷹丸ノ三艘ハ、重富(給良郡)ノ脇元浦ニカ、リ

シカ、英夷ハ望ミヲ失ヒシ折柄ナレバ、遽カニ三艘ヲ

目ニカケ、是ヲ質トナシ、我ヲ揺カサントノ巧ミニテ、

夜中ニ編者曰、夜中ニ非ラス、朝未明ナリキ、挽キ出シ軍艦五艘モテ

櫻島小池ノ前ニ引キ掠ム、御船奉行添役五代才助・松

木安右衛門ノ兩人ハ船ノ頭官ナレバ、余ノ人々ヲ陸ニ

卸シ、彼ノ船ニ乗リウツリ、兎角争ヒシカ、明ル二日

ノ朝編者曰、本書誤レリ、五艘ノ英艦重富海ニ進航シタルハ夜中、則三日ノ晩

員ヲ卸シタルハ、巴ノ中刻頃ナリ、本書ニ記ス如

クハ夜中ノ如ク見ユレトモ、然ニ非ラザルナリ

ニヲヨヒ、風雨イヨ
ハケシク、我ノ軍兵等ハ雲霧ノタヘ間ヨリ、初メ
テ彼力奪ヒシヲ知テ怒リニタヘス、重富ヨリモ早打ニ

テ此由ヲ報シ、タマハク攘斥ノ仰セ降リケレハ、内地

ノ天保山ヲハシメ、櫻島諸所ノ砲台ヨリ一度ニ挾ミ打

ケレハ、英夷ハ以ノ外ニアハテフタメキ、碇引揚クル

隙モナク、中ヨリ切テ捨テ、引掠メタル三艘ニ火ヲカ

ケ、此ノ方磯ノモトヘヒラキ、七艦ヲ一行ニナシ、台

場々々ヲ繰リ撃ニシケリ、サシモ烈シキ風雨ノ内、敵

味方力ヲ尽シテ戦ヒ合ハセ、午ノ刻ノ初メヨリ申ノ刻

ノ末ニ終ル、中ニモ祇園州ノ砲台ハ磯ノ地ト接シケレ

ハ、此手ノ軍勢ト殊ニハケシク戦フテ、伍長ノ役税

所清太討死セリ、其外陣亡セシ者僅ニ七人(死傷ノ數ハ旧邦
秘録ニ詳記ス)

ニハ重久甚太郎、始羅ノ郡山田ノ侍山下賢之丞、阿多ノ前田平右衛門、結佐金次

郎、島津新八郎カ家来西休兵衛、染川五郎左衛門カ家来川添馨右衛門、其外僧ノ

源舜菴ナリ、手負ノ人御家老川上重衛、侍ニハ家村幸之丞、平田甚五郎、英

脇岡探之助、平田九千郎、門松源之丞、井上直八ノミナリ(原註)

夷ニハ船將ジョスライン、次官指揮役ウイルモットヲ

始トシ、死傷合セテ五十三人編者曰、海軍雜誌記ス如、死及

等ニ抛レルカ故ニ、詳ラサレナリトソ聞ヘタリ、戦ヒナ

カハ過ル頃、一艦デスホルストイヘルハ祇園ノ州ニテ

打傾ケラレ、既ニ危ク見エタリシカ、此手ノ大砲モハヤ

連發セシ後ニシテ破レ損シケレバ、撃放ス事叶ヒ難ク、
兎角スル隙ニアルキースト云フ艦ハセ来リ、繩カケテ
援ケ去ル、其外ノ艦モ大カタ破レ損ヒケレハ、日ノ暮

頃ニ皆小池ノ方ヘ引退ク、コノ日申ノ刻スキ築地ノ町

ヨリ火起リ町人薬師何某カ硫黄貯ヘタル庫、市街仏寺等多ク焼

失セリ、翌朝冷水ノ里ニイタリハシメテ熄ミス、其外

集成館并ニ琉球ノ船三艘モ、兵火ノ為メニ焼テケリ編者曰ク、燒亡ノ數、三日ニハ風雨モ次第二ヤミ、未ノ刻午ノ中刻

等第卷ニ詳記ス、頃ナ

ハカリニ、七艦ハ大砲炮々ニ打カケ、南ニ向ヒ歸

リ去ラントス、我ノ軍勢モ是ニ応シテ放チ撃ツ、其夜

英艦ハ七ツ島ノ灘ニ泊リ、夜明ルマテモ船ノ損所ヲ修

メ造リ、四日ノ午ノ刻過ル頃、皆トモ遙カニ乗出ス、

其中一艦ハ小根占ノ灘ニ留マリ、猶モ損所ヲ繕ヒシカ、

六日ニ至リ一艦南ヨリ走り来リ、夜ニマキレテ援ケ出

ス戦ヒ終リシ後ニ鹿兒島近キ浦人トモ多ク、浦人共夷人ノ屍ノ海ニ浮ヒタルヲ取

テ差込ル、多クハ其胸ヲ切りサキ、鉄丸ヲ中ニ籠メテ沈メタル体ニ見ユ(原

註)編者曰、多クニ非ラス、二個ナリ、広小路ニ於テ実験ノ後、堺ヶ瀬戸刑場ノ

傍ニ埋メタル胸ヲ裂キ、鉄丸ヲ壞メタルニ非ラス、彈片籠リタルナリ、蓋シ此彈

片ノ為メ、死シタル者ト認メタリ、二(公)編者曰、二公トハ太守

ヘシト 思召シケレハ、公達 編者曰、公達トハ幼齡ノ公子及ヒ姫

地尾畔ニ在陣セラレタリ、若ハコトノク辺鄙ニサケ行カシメ玉フ、此時御側ニ

侍ラフ人々ハ、余リニ御城ノ海チカク、砲丸ノ及フヘ

キヲ慮リ參ラセ、アナカチニ勸メ奉リテ、廿九日編者曰、

國父公諸所御所御巡見、御出陣アラセラレタル事實 第十一卷ニ記シタルカカ如シニ島津彈正力宅ヘ御徒ラセ

編者曰、島津彈正力宅ニ御本陣ヲ、明ル朔日ヨリ千眼寺ヘ転座編者曰

居ラレタル者ナリ、本書ハ誤レリ、朔日ニ至リ、御本陣ヲ千眼寺ニ遷サレタ

マシノ、此所ヨリシテモ

ロノノ軍事ヲ指揮シ玉フ、程ナク英夷ハ遁レシカト、

必定再寇ノ患ヒアレハトテ、新タニ神瀬ノ砲台ヲ築キ

立、マスノ諸方ノ備ヘヲ御整ヘ、同シキ二十五日、

初メテ御城二十五日御亂陣アリタリ、第ニ入ラセ玉フ、此時ニ

大隈ノ國府ヘ御遷リヲ謀リ奉ル者アリテ、二公モ始

メノ程ハ御許シアリケレトモ、大戦ノ後カタノ然ル

ヘウモ侍ラスト、留メ奉ル人多ケレハ、終ニ此議ハヤ

ミテケリ、

[紹述編年 (東京大学・県立図書館所蔵) にて校訂]

文久3年(1863)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

文久三年七月ノ三

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」の記載あり
(紙数九五枚)〕

目録

久光公御上京御沙汰

久光公御上京ニ付訓諭

久光公外夷処分ノ建言

戦後ノ困却

当時ノ米価

青山愚知略履歴 天山流師範

英船入港見聞記

道島正亮紀事抄開戦前ノ形況

〔道島正亮家記鈔〕

鹿兒島戦争始末新聞記事

四七〇 久光公御上京御沙汰

四七〇ノ一

〔久光〕
嶋津三郎

夷賊之義ハ雖為小醜、一般之人心ニ関係候ニ付、此節御親征之儀御用モ被為在候、就テハ去春已来忠誠ヲ尽候儀、御依頼被遊候儀ニ候間、急々上京候様

御沙汰候事、

七月

〔嶋津忠承氏藏本にて校訂〕

四七〇ノ一

嶋津三郎儀兼々蒙厚

勅命、当春上京有之候処、於自国海岸武備之急務指加リ候趣ニテ、俄ニ帰国有之候後、今以再応上京無之、方今時勢段々不容易切迫之折柄ニ候得ハ、自国武備之義ハ修理大夫へ相任置、三郎儀ハ速ニ上京候テ、鞏下誠忠之諸藩申合可奉安

宸襟之旨、御沙汰被為在候様奉願度存候、但近頃薩藩御不審之事状モ有之候処、前条願候儀ハ深恐入存候得共、

方今切迫之時勢ニ候ヘハ、何分三郎儀ハ急速上京、於
聲下励勤之候様御沙汰之程伏テ奉願度、吳々恐入存候
得共、前件之儀偏ニ願存候事、

(近衛)

七月

忠熙

(同上)
忠房

本文ニハ、当春上京之続ヲ以三郎ト認置候得共、修
理大夫・三郎ト両人之内被召寄候様奉願候事、三郎
被召候ハ、尚更ト奉存候、以上、

(久光公親話記参照)

四七一 久光公御上京ニ付訓諭

方今之勢不容易御時節、御上京ニ付テハ御供之面々一向
謹慎、各職掌ヲ相守可申儀当然之事候、然ハ多人數御先
キニ被差越候付テハ、殊更前後熟考、諸事勘弁ヲ加ヘ、
聊モ取違無之様指揮專要之事候条、御趣意深奉汲受、
日夜工夫、奉安 尊慮候様心掛、大目之事ニ候、

但雖為知音他藩人面念可為無用候、

右之趣 御沙汰モ被為在候付、拙者ヨリ申達置候事、

七月

(小松藩廳)
帯刀

四七二 久光公外夷処分ノ建言

去ル丑年亞米利幹人渡來、諸夷來舶種々願望申出候処、
乍恐於 公辺

叡慮御伺ニ不被為及、条約御取究相成、終ニ

公武之御間御隔意被為成、一統之人心モ是カ為ニ不穩
趣伝承仕、甚危急至極御座候、三百年來 御代々様之

御累恩ヲ奉蒙、且當時 (島津齊彬) 御内縁モ有之義ニ御座候得ハ、

旁觀難仕、殊ニ亡兄薩摩守、平素 公武之御為抽忠勤

度存慮ニ御座候処、不幸ニシテ志ヲ空シ、遺憾不少儀

ニ御座候、臨終之節私一人へ委曲遺命之趣モ有之候ニ

付、其以來忘寢食、朝夕苦慮罷在候処、去々春以後爰

故不一方、其俛 御改轍無御座候テハ、如何成場合ニ

起候モ難量、家督ニモ無之身ニテ、甚憊越之到ニ御座

候得共、是迄之

御政事振觀察仕候処、

天朝御尊崇之道不相立、正邪之弁致表裏、冤魂之愁声

草野ニ滿、御外政ニ於テハ因循苟且之四字ヲ不被為

免故ヲ以テ、虚実ハ不奉存候得共、乍恐被為惱

宸襟候御模様モ奉伝承、外患ハ扱置、内憂日ニ迫リ、

奕端墮下ニ生スル之勢顯然ニ御座候間、旧臘家来差出、久世氏へ存慮之趣致献白候得共、迎モ御取用相成候御模様無之、遷延之中不可救之勢ニ罷成モ難量奉存、此上ハ是非出府仕存慮十分言上仕度含ニテ、修理大夫申談、去ル三月中旬国許発足仕候折柄、京攝辺へ諸浪士蜂起、且家来之内、私趣意心得違候者共致与力、不容易形勢相成、迎モ無事通行難仕候ニ付、無抛一往大坂屋敷へ取押置キ、四月十六日 近衛家へ参殿成行入御耳候処、恐多クモ達

叡聞、当日浪士鎮撫之蒙

御内命、誠以テ冥加之至、恐入難有奉存、御請申上滯京罷在候内、奉存浪士共推テ上京仕、騒乱相企候段相聞得候ニ付、早速家来差出取押方精々申付、乍漸静謐之形ニ相成申候、然処於

朝廷 思召之御詔被為 在

勅使被差立候ニ付、私ニモ引続出府周旋可仕旨、別紙之通被 仰付、重疊恐入難有奉存、五月廿二日京地発足、先月七日出府仕候ニ付テハ、直様表通形行献言仕度奉存候得共、此度ハ非常出格之
叡慮ヲ以テ、

勅使被差向候御事故、

勅使之奉 命不被為濟内、私ヨリ献言仕候テハ、

勅使ヲ差置候場ニ相当リ、越^祖阡之罪ト奉存、態ト差扣

罷在候処、内々承知仕候得ハ、

勅諭御奉行被為在候 御内定之由、無此上御慶事、恐悦至極ニ奉存候、從來私持論ハ、天下之人心帰嚮仕候御方要路ニ御出職、 公武之御間大道相立、無内外表裏真実之御一和二被為成、邪正明白、下草莽之匹夫ニ至ル迄 御盛徳ニ敬服仕候、御政事ノ基本定リ、上下一致

御国体堅実之上、

叡意ヲ被為 伺、時世ニ応シテ天下之公論ヲ以テ外夷御処置、永世不朽之良法被召建度存慮ニ御座候処、於公辺早其辺へ御着眼被為在、先月朔日之御書付拜承仕、誠以感佩之至ニ不堪義ニ御座候、乍去実際施行之処、古来ヨリ難シトスル事ニ御座候得ハ、非常之時節御衷事不致齟齬様能々 御了得、要路之御役々正邪綿密ニ御評議ニテ、黜陟被為在度奉存候、是迄
御威光トカ申候テ、善惡無御構御庄服之御手段ハ、乍恐近来之御弊政ニテ、弥人氣激發之基ト奉存候間、右

等之御氣味御一洗、寛永已往之御政事ニ被為復、
公武 御合体之大基本被為立候上、義理上ヨリ生シ候
真実之 御威光被為在度偏奉懇願候、右申上候如ク、
内外非常ノ世態、殊ニ当時 御賢明ニ被為在候由モ粗
奉承知候得ハ、愚考之趣胸臆ニ秘シ候時節ニ無御座ト
奉存、不肖之身ヲ不顧、虚飾ヲ去リ忌諱ヲ犯シ奉献言
候、若シ 御採用之義ニ御座候ハ、猶又存慮趣可奉申
上候、以上、

七月

島津和泉(久光)

四七三 戦後ノ困却

戦争後十余日ノ間、一般困却セルハ米穀ナリ、本年春ノ
頃ヨリ匱乏、加之高価、近国ノ輸入ヲ仰キ飢饉ヲ凌キタ
リシニ、各郷ヨリ数万ノ兵員屯集シ、消耗夥多、剩ヘ市
街ノ人民ハ諸方ニ避遁シ、売米ナク困却一層セリ、依テ
藩庫ノ貯蓄ヲ開キ、賑救セラレタリ、○金錢ノ通融ハ頗
ル滑沢ニシテ、困頓ノ形況ナシ、

四七四 当時ノ米価

七月中旬頃、米価白米壹升貳百六拾四文ニ内外シ、壹石

ノ現米拾八貫六百元、酒一盃貳百元、塩壹升四拾八文位、
或ハ銅錢一枚寛永通宝ヲ以テ、鉄小錢四文ニ交換スルコト、
ナレリ、前代未聞ノ事ナリ、銅錢高直ニ騰リシハ、外国
貿易開ケタルニ由レリト云フ、

四七五 青山愚知略履歴(天山流師範)

一文久三年亥六月廿七日、英夷軍艦七艘谷山沖江碇泊ス、
一同廿八日、七艘共ニ前之濱江航海碇泊ス、

一七月三日、沖小島砲戦、手負諏訪八郎左衛門・井上直

八、

一同四日、喜入沖江退船ス、

一同四日、山川沖ヨリ出船ス、

一百目砲拾挺(荻野流式車砲ト通唱ス)

一三貫目砲五挺(洋式折衷ノ車台)

一沖小島居付二十人(門人住居)

一駆付三十人

一遠見番一人

折田七郎

青山愚知

沖小島駆付

中江八左衛門

文久3年(1863)

一 沖小島駆付戦兵

右小頭

青山弓太郎
 諏訪八郎左衛門
 福崎伊三次
 野津七左衛門（鎮雄 旧名）
 津留八之進
 竹之山喜藤太
 宮原清右衛門
 井上直八
 竹内十郎太
 青山兵次郎
 柴七郎左衛門
 四元源五左衛門
 柴助十郎
 法元雄蔵
 高橋金次郎
 諏訪左右衛門
 國分次郎兵衛
 竹内新兵衛

醫師
 東條玄伯
 伊地知源四郎

一 御軍賦役

指揮方トシテ桜島各所砲台ニ出張
 全上
 五代競太

春山正兵衛
 土持十之助
 谷山勇右衛門
 野間金左衛門
 湯地次右衛門
 指宿正右衛門
 岩城喜八郎
 江島喜左衛門
 川西新八
 竹下仲之丞
 山田市十郎
 東條正之進
 田中金兵衛
 伊地知市左衛門
 尾上伊之助
 大山格之助

一金拾兩

諏訪八郎左衛門

右ハ今般英夷侵入ニ付、沖小島砲台相固數艘引受、抜群相働候段被 聞召上、御満足之至被 思召候、為軍實右之通拝領被仰付候条、愈可抽忠勤候、

右御格之通可申渡候、

七月 帶刀

一御切米四石

一拾匁鉄砲一挺

青山愚知

右拝領也、右書略ス、

一金八兩ツ、戦兵人数江

右ハ今度英夷侵入ニ付、沖小島台場相堅、數艘引受相働候為戦勞、右之通拝領被 仰付候条、愈可抽忠勤候、

右御格之通可申渡候、

七月 帶刀

四七六 英船入港見聞記

一癸亥六月廿七日、大鐘時分相図打揚上リ候付、則聞合候処、異国船到来候由、拙者正亮ニハ壹番御先手兵糧

方被仰付置候得共、先達テ勤場差支候付御免被成候間、則御納戸へ罷出候処、追々諸役場出役ニテ世間騒々敷相成、御手当人数ハ銘々支度イタシ、相図ヲ相待居候、兼テハ相図ノ早鐘等ノ令有之候得共、此節ハ早鐘・太鼓等ノ相図ハ不致候間、銘々受持ノ場ニ罷出候様被仰渡候由、御納戸へ出席人数、奉行本城源七郎殿・伊木七郎右衛門殿・伊十院周八殿、書竹^{（役殿カ）}下助太郎・中原七之丞・吉留平右衛門・拙者、御腰物方ハ野村助七・關山七郎、小細工ハ兒玉加次右衛門、其外御小人頭并御仕立物与力・御小人等追々出席、当番ハ御納戸へ止宿、左候テ靈府堂へ上リ候得ハ、山川口迄スツト見通候得共、異国船ハ慥ニ見へ兼、夜入過ニハ毎ノ通、谷山沖夜タキ舟余多ニテ、異国船モイカ、考候ヤト噂イタシ候、マツ異舟ハ六艘位ト申事ニテ候、

一同廿八日晴、早朝靈府堂へ上リ見候得共、異船不相見得護摩所へモ御小人遣候得共不相見得、五ツ時過二丸御用部屋書役竹下猪之丞靈府堂へ參リ、沖島ヨリ式里計差越候得共不相見得トノ咄ニテ、是ハ不思議也ト皆々案外ニ存居候処、靈府堂ヨリ東之方御納戸上ノ方高見ニ登リ見候処、谷山七島ノ辺へ碇泊イタシ居、蒸氣

相立、此方へ向候様ニ相見得候由ニ付、我々共ニモ差越猶又見候処、果テ此方へ向ヒ漸々近寄候、四ツ過ニハ前ノ濱台場十四五町内外ノ所へ大小七艘碇舶、其内老艘ハ白壁ニテ、砲門片面三拾挺モ相見得候、此船差越候ハ、何分六ヶ敷難題ナル舟ニテ候ヨシ、シカレトモイマタ何ノ異変モ無之、

但ハツテラ舟三四艘ニテ諸所漕廻リ、測量等イタシ候半、天保山・沖島辺へモ差越候、則ち接等モ有之候ヤ、何分不相分候、尤沖島へハ上陸イタシ、守衛人数打取ヘク談合イタシ候得共、楚忽ニ兵端ヲ開キ候テハ難題到来可到トテ、其手段不相調候由、

今晩モ皆々御納戸へ止宿、夕方^七刻罷帰候、尤明朝六ツ時限人数受持場へ銘々立付相成候様被仰渡、此節ハ早鐘等ノ相凶ハ無之旨被仰出候、

一同廿九日晴、今日モ無事、矢張昨日通りハツテラ舟ニテ、櫻島ノ辺、沖島、砂揚場等へ漕廻リ、今日七ツ時分奈良原・海江田初メ七拾人、足輕七拾人、西瓜売ノ体ニテ刺客ノ命有之候得共、六艘ハ不乗付、白壁舟ハ暫時不乗付候得共、是非乗付候様再三申入候処、暫ク

吟味ニテ士・足輕廿人乗付、主居ノ方へ居付、銘々劍筒ヲ前ニ居付、嚴重ナル体ニテ、中々手下ス様成透モ無之応答イタシ、此節ノ上使ハ町田六郎左衛門ニテ候ヨシ、書面並言論等能ク分リ兼候付、中原尚助トノハ居レヌカ、此人ナラハ随分可相分ト為申由、左候テ乗付候ハ、台場ヨリ空砲ヲ打、其相凶ニテ刺殺候様ニト

ノ手筈ニテ候ヨシ、然処又思召相替リ候哉、直ニ立帰候様申来故、罷帰様イタシ候処、此方ヨリノ返答モ未申内ニハ、返ス事不相成ト引留メ候得共、主命モ有之、是非可罷帰旨再三申入、左様ナラハト申テ差返候由、但罷帰候跡ニテ、如何可仕果体ニテ候ヤト誰カ相尋候処、右之内ニ手強^{コハ}キニ申人モ有之、又ハ随分可

仕果トイフ人モ有之候得共、四五百人ノ乗組、殊ニ此乗手ノ衆ノ眼着ニテ、異人モ可察候間、決シテ油断ハ不致候様ノ時ハ、菱ヲ時候得ハ、素足ニテハ一寸モ不步行モノ、由、此等ノ手数ヲ不致候ハ、中々仕応スヘキ事ニテハ無之候半ト存、^又段々ノ評判モ有之候、

今朝六ツ時ニハ惣テ御手当人数、銘々受持ノ場所へ備付有之タル由、御両公様御乗廻トノ御事ニテ、二丸

御門ヨリ御五人様西公・重富・官之城・今和泉 御馬ニテ御出、中辻番所

ヨリ御下リ被成候間、台場へ御出被遊致ト一統難有、

勇々敷拜見イタシ居候処、加治木ヤシキ前ヨリ枳形御

廻リ、市成屋敷へ御立寄、此所ニテ刺客ノ御左右御下

知有之候半、山へ御上リ御遠見為有之由、拙者ニモ大

鐘時分暫時帰、其序ニ御金一件ニ付、吉留平右衛門御

供イタシ居候間、御合イタシ候儀有之、市成屋敷へ取

合候節、平右衛門申ニハ、今日刺客ノ御手数數有之候旨

チラト相洩、拙者ニモ其内御殿ニテ誰カノ咄ニテ承居

候、イヨく仕果スレハ宜シキカ、是ハ敵船モ心得候

半、中々不容易事也ト申入候処、果テ其通ニテ候、今

晩御止宿、刺客ノ手数ヨリ夷舟モ少シ遠カリ、櫻島ノ

地方へ相直リ候由、

但名差ヲ以御用被仰渡、二丸へ罷出候処、前条西風

売ノ体ニテ舟ニ乗付、相図ノ空砲打出シ候ハ、

其機会ヲ以飛込々々差殺候様被仰渡、御料理等被

成下、御庭口ノ様相廻候トノ事ニテ、御中門ヨリ

庭上ニ薄縁リヲ敷、皆蹲踞イタシ、御二方様御縁

頬へ御出御目見被仰付、威儀堂々タル御事ニテ候

ヨシ、人数名前追テ可相記事、

一 七月朔日晴、今日東風ニテ殊ノ外シケ立候、折田平八、

伊地知壯之丞応接ニ被遣候処、夕方迄不罷帰、定テ捕

籠ニ相成候半トノ事ニテ、水軍隊一番ヨリ三番迄三艘

夜打ニ抑寄候様被仰付、則其用意イタシ候処、クレ時

分罷帰候間、夜討ノ沙汰ハ相止候、東風益々強ク候故、

漸ク罷帰候由、

今日七時分千眼寺へ御一統御転陣、

一同二日風雨、五ツ過迄ハ東風ニテ雨模様ニナリ、四ツ

過ヨリ漸々風モ強ク雨モ降出、風雨甚タ烈シク、後ニ

ハ南風ニ直リ横ツシ(レカ)ニナリ、終日終夜吹通シ也、

此方ノ蒸氣船ハ重留(レカ)ノ前へ廻シ居候処、今朝末明ニ夷

舟式艘差越、人々過半イマタ不起内ニテ夷人乗込、早

ク乗移候様相達、万一猶予イタシ、手向等イタシ候ハ、

可打果旨、六挺カラミノ短筒ヲ指向ケ、稠敷セキ立候

ニ付、皆々大ニ驚キ候内ニ、多人數ドロくト乗込、

然処此方勇氣ナル士族ハ最早不遁儀トオモヒ、切刀ニ

手ヲ掛候者モ有之候得共、乗頭ノ者ヨリ無理ニ兵端ヲ

披クマシク旨頼ニ制シ、何分夷人共ノ勢ヒ強ク候ニ付、

水主共ハ大ニ恐懼イタシ、周章狼狽皆抑落レ、水主共

ハ海中へ飛入ヲ、夷人は見テ此舟ヲ此方へ相渡サへ

スレハ殺不致、静ニ上陸イタシ候様、皆々ハツテラニ
 テ上陸為致、海へ飛入候者ハタブノ様ナルモノニテス
 クヒ上ケ、龍ケ水或ハ櫻島杯へ卸シ候由、右ノ内吉留
 某ハ手疵ヲ負ヒ、重留へ上陸イタシ、本田何某^{岩次}
 海へ飛入死体不相知、乘頭ノ鎌田諸右衛門ハ重留へ上
 陸イタシ、早打ニテ右之趣注進イタシ、重留ヨリモ同
 断、五代才助・松井幸蔵^{不妄右衛門ノ説}ハ生捕イタシ、其外ハ上陸為
 致、三艘共ニ奪取、右次第ノ事共五ツ時分千眼寺へ御
 届相成候由、

四ツ時分ニモ候ヤ、野村傳左衛門^{御小納戸}アハタ、シク御
 納戸へ被參、今ハ致方無之、黒土ニ成ルトモ不払候テ
 ハシミナント申サレ候間、本城氏夫ハ何事ヤト申サレ
 候処、御存ハ無之ヤ、蒸氣船ハ奪取ラレ、重留モ焼打
 ニセラレ候段申サレ候間、拙者ニモ夫ハ存外ナル事、
 弥ノ事ニ候ヤト申候処、慥成事也、甚言語同断也ト、
 則御小人ヲ靈府堂へ登セ見セ候処、矢張昨日ノ所ニ舟
 掛リ居、風モ追々吹出方^{龍腕カ}ノ蒸氣船毛艘ハ、櫻島ノ地方
 へ引來候筋ニテ、当分八艘相見候由申事ニテ、其外ノ
 船ハ磯ノ地方居候半、不相見得候、然処四ツ過ニモ候
 ヤ、砂揚場ヨリ大砲打出候ニ付、台場毎ニヨリ銘々打

出候、廿發計迄ハ夷舟ヨリハ不打出、夫ヨリ夷舟ヨリ
 モ打出、則拙者ニモ靈府堂へ駈登リ見候処、夷砲漸ク
 台場辺ニ落入、又ハ二三町ノ所ヨリスベリ、ハカク
 シキ儀モ不相見得、此方ヨリ拾發モ打候得ハ三四發モ
 打様ニテ、此方ノ玉葉ヲ費ヘサスル欵トヲモフ程ニ有
 之、我々共ニモ片ツヲ吞候様ニ有之候<sup>台場ニテモ、折角費成
 打方不致様見得候由</sup>、
 夫ヨリ段々ト夷舟ノ大砲強相成、其勢ヒ別テ烈シク、
 第一淨光明寺ヲ見当ニ打候様ニ相見得候由、

御殿ノ辺ニモ過分玉來ル、下ハ郡元辺ヨリ上之園・平
 之馬場辺、上ハ淨光明寺辺ヨリ福昌寺・瀧ノ上辺、或ハ
 菖蒲谷ノ辺迄玉來ル、玉ハ大小八九拾斤計モ掛ルヘシ、
 徳利ノ様ナル玉モアリ、又ハ丸キ玉モアリ、段々形ハ
 相變リ候ヨリ、祇園台場受手ニテ、東ノ方潮音院ノ方
 ヲリ横打ニ打込、八ツ時過迄祇園台場モコタヘ打合候
 処、大砲モ台場モ打クツサレ、其上雨ハ強ク降出し、
 此台場トノ争ヒハ打止候、其内八ツ前ニテモ候ヤ、夷
 船ノ小船風波ニ漂ヒ、祇園ノ州ノ乱杭ニカ、リ、暫ク
 カ間猶難渋イタシ候得共、舟へ小銃ヲ殊外強ク打掛、
 漸クニシテ引出候ヨシ、其内此方ヨリ大砲ノ手当イタ
 シ、陸地ヨリ打出候ハ、大丈夫可打取候処、何分下

知不行届遺憾之至ニ候、此時分櫻島地方ノ蒸氣船殊之
外焼立候筋ニ相見得候間、敵舟焼打ニイタシ候ト相心
得、味方一統勢ヒ立、吐氣ヲ揚候、拙者ニモ夫ト存、
靈府堂へ駈上リ能見候処、此方ノ船ヲ焼候火ニテ、煙
ノ中ヨリ夷舟漕出候ニ付、敵船ニテハ無之、味方ノ船
也ト大物笑ヒニテ引取候、夷舟ヨリ鉄砲打初ルト、外
式艘ノ蒸氣船モ焼捨、外ニ琉球船式艘、日州辺ノ船壹
艘、都合七艘夷舟ヨリ焼捨候事、左候テ新台場・辨天
波戸・大門口・砂揚場所ヨリ頻ニ打立候得共、何分遠
方ニテ屈キ兼、辨天台場ヨリハ砲挺ニテ五六發ツ、モ
打候由、七ツ過ニハ互ニ大砲打止、風雨ハ益々強ク、八
ツ時分ヨリ上築地薬師トイフ者カ硫黄蔵へ玉飛入り、
夫ヨリ火起リ、小坂通ヨリ西ノ方都之城館内・種子屋
敷・平佐北郷家残リ、其外冷水ノ谷総テ焼失、興國寺・
浄光明寺・不斷光院・般若院無殘灰燼ト相成、其火
勢ノ盛ナル事甚タ烈シク、殊ニ男子ハ上下共ニ出陣ノ
跡、女更子(マコ)共迄ニテ、大形丸焼ケニテ、実ニ目モ当ラ
レヌ有様ニテ、下町へモ四五度焼立候へトモ、火消ノ
手能ク廻リ総テ打消シ候由、シカレトモ如何ナル者カ
下知ニテ候ヤ、松原通り上手ノ方、広口ノ角ヨリ南林

寺ノ花屋マテ総テ打コハシ、浜付ハ新築地ヨリ浜手ノ
方打コハシ、四五尺ノ所ヨリ鋸ニテ挽切、万力ニテ牽
倒シ、殊之外大騒ニテ候ヨシ、跡ニテハ誰下知シタル
トイフ事モ、又何様ノ訳ニテ打コハシ候儀モ不相知、
珍敷所置也ト専ラ評判ニテ候、
祇園台場ニテ税所清太砲ニ中リ即死、御内々ニテ金
五拾兩、表立テ御切米八石被成下候由、外ニ台場ニテ
何某壱人手負イタシ、川上龍衛殿(久齡)ハ祇園社ノ辺へ被扣
居候処、彈丸石垣へ飛来リ、其石ノカケニテ眼ノ辺へ
被打当、殊ノ外痛ミ、十月初旬方ヨリ漸ク出勤相成候
由、家来壱人即死ノヨシ、染川五郎右衛門下人、同所
ニテ石垣ヨリソキ見候処ニ玉来リ、眼ノ辺ヨリツツ
ト打切候ヨシ、其外南林寺ノ内へ玉飛来リ、阿多・川
邊ノ兵共、廟下辺ニテメシヲタへ候処ニテ二人ハ即死、
外式人ハ少シ手負、源昇菴(マモ)ノ和尚モ即死、鹽屋ノ松崎
何某ハ大門口ノ堅メニテ候処、大砲ニ恐レテメシカヒ
タルヒトテ、南林寺へ馳出候処、彈丸カ飛来リテ、足
ノツフシ辺ヨリ打切ラレ、是モ死候由、
拙者カ正亮子共虚空屋ノ上へ見物ニ差越候処、七ツ時
分ニテモ候ヤ、前隣ノ寺田氏カ石垣ニ玉来リ、其音ニ

タマカリ夫ヨリ相迦シ、草牟田ノ萩原長州所へ暫時ノ寓居□、櫻島袴腰ヨリ打候大砲ニテ、夷人殊ノ外死人多く、碇ヲ引揚ル事モ不出来、綱ヲ打切漸ク出候ヨシ、櫻島ノ兵ハ余リ近ク候間、ケ様ニ近キヲ打候テヨロシカルヘキヤト為申程ニテ候ヨシ、

一同三日風雨、五ツ過ハ風不止、雨ハ間々降候、昼時時ヨリ西風ニナリ、少々静ニ相成候、今朝ヨリ度々御小人ヲ靈府堂又ハ浜辺ニ遣候処、異船蒸氣ヲ立候迄ニテ、昨夜ノ所ヘカ、リ居候テ異変ノ姿モ無之、何様ノ訳カト一統疑惑イタシ居候処、七ツ時分ニ相成火矢弐ツ、壹ツハ御殿ノ上ヲ、壹ツハ下町ノ方ヘ響渡リ、打出ノ音ハ無之、シユ／＼トイフ音甚烈シ、夫ヲ聞テモハヤ大砲カ始リ候半ト申入候内ニ、夷船ヨリ打出大砲其音別テ烈敷、我々共ニモ則仕度イタシ候内ニ、御城山ニ五ツ六ツ、御樓門ニ壹ツ、其音殊ノ外稠敷、下馬ヘ壹ツ、其外二丸辺へ幾等モ飛来リ、祇園ノ台場・新台場・辨天台場ヨリハ打方不出来、砂場場ヨリ打候迄ニテ候ヨシ、今日ハ御城モ下町モタマリ兼候半ト、皆々一途ニヲモヒ候処、思ノ外大砲ヲ打々、山川ノ方ヘ向ヒ蒸氣ヲ立、出船ノ姿ニ相見得候段追々申来候間、夫ハ不

思議也ト、則靈府堂へ登リ見候処、イヨ／＼其通ニテ、壹艘ハモハヤ上瀬ノ辺迄差越、追々沖島ノ台場へ掛リ、燒先^{（煙崎）}ノ方ヘ舟ヲ向候処、沖島台場ヨリ大砲打出候処、無抛夷舟天保山ノ方ヘ舟ヲ凡ソ四丁位モ可有之、能矢比ニ付、沖島前ノ方ハ纒力五挺程車台ノ大砲相備リ居候付、青山能キ比相囮イタシ打セ候処十分ニ打込、壹艘ハ湯壺ヲ打破リ候ト相見得、白キモノ多ク上リ、平木ノ様ナルモノモ多飛散リ、多勢ノ声ニテ殊之外騒キ立候筋ニ相見得、夫ヨリ燃出^{（マ）}ノ台場・砂場場ヨリモ打立候処、夷船ヨリモ殊ノ外強ク大砲打立候、我々共ニハモハヤ沖ケ島ハ一タマリモイタシマシク、空ク討死スヘク、寔ニムサンナル事也ト、退船スルナラハ、夫形ニ捨置カ上計ナラント申入候得共、不屋^{（扇）}シテ互ニ打合候処、最初ハ夷舟ヨリ打玉八合目位ニ打留候得共、後ニハ峠ニ打スリ、後ニハ大砲居付ノ所ニ打当候得共、幸ヒナル哉壹人モ怪我等無之、井上何某ハ人ノ大砲ニ打当、鉄砲倒レ候付、足ノモ、へ鉄砲疵被負、帯刀大小共ニ鉄砲ノ台ニテネチレ候様ニ相成、外ニ諏訪八郎左衛門少々怪我イタシ、外ハ何事モ無之、夕方ニ相成候故互ニ鉄砲モ打止、谷山七島ノ辺へ碇泊、終夜修補

ノ音イタシ居候ヨシ、何様ノ訊ニテ退船イタシ候ヤ不
相分、此方ニテ初ハ沖島ヲ打立、夫ヨリ又前之濱ヘカ
、リ焼立候半策ナラントヲモヒ候得共、何分七ツ時分
ヨリノ初リニ候ヘハ、是モ不審成ト咄合ヒ、人々疑惑
イタシ、決シテ廻打ニイタシ候形勢也ト、一統恐駭ノ
心アリトイヘトモ、決テ左様ニテハ無之ト本城氏抔
合候、トウ／＼夜入、何モ異変無之少ハ安心イタシ候、
今日四ツ後、御側御用人座ヨリ御用有之、拙者正亮罷
出候処、御用人平田伊兵衛ヨリ、至急國分新城へ御移
城ノ筈ニ付、当用ノ品々手当イタシ候様被相達候付、
夫ハ何様ノ訊ニテ、ケ様ノ仰出有之候ヤト申候処、
大中公ノ御占ニ出候ヨシニ付、之ハ不思議也ヲセンニ
テ、左様ノ事仰出候ハ、鹿兒島中猶更動揺可致ト申
入候処、夫ハ尤也、我々共致方無之トノ返答也、
右ノ御転城ヲ聞、段々土地見立候人モ有之候得共、其
后何トナク右ノ御沙汰ハ相止候、
一同四日晴、今朝六ツ半時分靈府堂へ登セ見候処、不
相見得、東ノ方御納戸ノ上へ登セ見候処、入津之節カ
、リ居候七島ノ辺へ碇船イタシ、少シハ蒸氣モ相立候
筋ニ相見得候得共、何分委シクハ不相分、昼時分二度

々出候処、同前ニテハツ過ニモ候ヤ、蒸氣モ強ク相立、
此方へ向ケ候様ニモ相見得候トノ事ニ付、拙者ニモ登
リ見候処、イヨ／＼出帆ノ姿ニテ候ヘトモ、此方へ相
向キ差入ト申人モ有之、マチ／＼ノ評判ニ候処、漸々
ト遠クカスカニ相成、イヨ／＼出帆ニテ大安心イタシ
候、今夕千眼寺ニテ勝吐氣ノ御式有之、夫ヨリ諸隊共
ニ吐氣ヲ揚、一勢々々引取被仰付候由、拙者共ニモ今
晩四ツ時分掃宅イタシ候、
御本二番・三番ノ備、此方近辺陣場ニ相成、拙者宅へ
ハ高橋要人組・川上源四郎組立宿ニ相成、両三日ハ立
込相成候、其外竹下壮右衛門・四本休左衛門・有川藤
左衛門・篠崎七郎左衛門・寺田平右衛門・竹下清右衛
門所立宿ニテ候ヨシ、
惣物主抔其外役々々市成屋敷ノ由、
一同五日晴、今日承候得ハ、（所屬郡）根占ノ地方へ壹艘碇船、六
艘ハ午未ノ方へ向ヒ出帆ノ由申事ニテ候、長崎へハ六
日迄ハ不来トノ事ニテ候、根占ノ夷船時々流火ヲ揚、
地方へ火矢抔打込候由、決テ舟損セシナラント申事候
得共、実否不相知候、

但拙者或人ニ、此夷舟ニ付テハ此方ヨリ丸木船壹艘

仕立遣シ、何故ニテ滞舟イタシ、万一破船イタシ候歟、又ハ薪水ノ乏キ故カ、破損ナラハ随分修復

イタシ、又ハ長崎ノ様率船ニテモ手便可致申聞候

ハ、夷舟ノ破損モ明白ニ相分り、又礼讓ノ厚キ

志モ表シ、凶變返テ吉事ニ可相成、昔關羽カ黃忠

ト戰ヒシ時、黃忠落馬シタルヲ、羽落馬ノ將ヲ不

切ト助ケシ事アリ、又清正カ本田忠隣ヲ助ケシ事

モアリ、武士ノ勇ニ誇ラサルヤサシキ志ハ、後世

ノ今ニ到リ美談トセリ杯トイヒケレハ、尤也トテ

ウナツキケリ、

今日八ツ後東郷長州所へ寄候、平川抱地ノ者差越、夷

人ノ裝束又ハ椅子杯ノ様ナルモノ段々流レ寄、其上終

夜修補イタシ候ヤ、タ、キ付音イタシ、何分舟相損候

半ト中事ニテ候、殊ニ筒袖杯上リ千眼寺へ御届ニ相成、

皆々見候処、黒羅紗ノ裝束立派ニ有之、乳ノ下ノ辺へ

老尺廻リ計ノ鉄砲ノ玉疵ト相見得、血モ付居候ヨシ、

八木正平(稱)へ見セ候処、此裝束ハ士已上ノ衣服ニテ候ヨ

シ、

一七日夕方夷舟式艘山川へ差入候得共、夜入根占ノ夷舟

船不相知候故ニ、ノロシヲ揚候処、根占ノ地方ノ夷舟

ヨリモノロシヲ揚候由、夜中ニ引出候カ、八日朝見候
得共夷船不相見得候ヨシ、

今朝夷人老人廣小路へサラシ物ニ相成候、櫻島ノ網舟

ニカ、リ上候間、則御届ニ相成、廣小路へサラシ物ニ

相成候、見物人夥敷、乳ノ上ヲ打通、胸ヨリ臍ノ下迄

断割リ腸ヲ取、能縫ヒ有之候ヨシ、翌八日谷山(鹿兒島)ニテ仕

置相成候、其外六人カラケ、又ハ二人三人カラケニテ

段々流レ寄候ヘトモ、サシテ御褒美モ無之候間、勞シ

テ功ナシ迎、突流ニテ不取揚候由、下々ノ者共ハ少シ

ノ苦勞銀被下候ヘハ、別テ難有モノニ候ヘトモ、左様

ノ令無之故自慙ニ突流シ、残多モノナリ、

一八日、是迄牢舎被仰付候折田與右衛門御赦免ニテ、御

軍賦役被仰付、集成館掛被仰付候ヤニ承候、此折田牢

屋ノ頭ニ相成候ハ、此夷舟ノ内白キ壁ヲイタシ候舟ニ

テ無之ヤ、又小舟ノケ様成舟居候半ト申候ヘハ、成程

左様ノ舟居候ト申候ヘハ、其舟カ世界三艘ノ内ニテ、

其小舟殊ノ外強キ候由杯色々為申ヨシ、千眼寺ニ相聞

得被召出候ヤニ世評ニテ候、尤先日廣小路へ晒ニ相成

候夷人カ鼻ハ無之、是ハ不思議成者ニテ、夷人ハ死候

得ハ、鼻ハベックハリ候者ナラント皆々噂イタシ候処、

此折田カ噺ニ、其様鼻ナキ国一種有之、此国殊之外強
悪成生質ニテ、死スル事ハナニトモ思ヌモノ共ニテ、
尤舟モ砲術モ別シテ達者ナルモノ共ニテ候由、是モ折
田カ咄之由、

一 蒸気船へ乗付居候人数大略左之通、

川上源右衛門 渡邊彦兵衛 同 吉次郎

上野庄次郎^(ママ) 前田時之丞 和田彦兵衛

本田彦十郎 五代 才助 松木安右衛門

鎌田諸右衛門 海江田清之丞 郷田吉兵衛

吉留直次郎 木村韜次郎^(ママ) 其外岩切仲左衛門

坂元 與市 櫻田^{梅カ} 市藏類ヒ多可有之候得共

右ノ人数承候、其内吉留ハ肩ノ辺ニ疵ヲ負、重留^(富)ノ地
へ上リ、夫ヨリ罷帰候由、本田モ手疵ヲ負海へ落人、

夫ヨリ死休不揚、松木ト五代ハ彼方へ召捕候ヨシ、七
月十六日方皆慎被仰付候ヨシ、

一 初日ノ応接ニハ今藤新左衛門・重野^(安藤)孝之丞ヲ被遣、上

陸ノ上彼是応接可致候間、是非上陸^(豊)イタシ候様トノ事

ニ候へハ、上陸ハ相断候ヨシ、二度目ニハ伊地知正治
ト孝之丞カ今藤カヲ被遣候ヨシ、三度目ハ西瓜売ノ手

数ニテ、正使ハ町田六郎左衛門其外奈良原・海江田、

士七拾人、足輕七拾人、七艘ノ舟ニ士足拾人ツ、乗付相
成舟ニ乗付候ハ、台場ヨリ空砲相圖ヲ打候間、其節
飛込々々差殺手筈ニ候へトモ中々不乗付、白壁ノ舟計
漸ク乗セ付候得共、短筒ヲ前ニ居付、一人々々立向ヒ、
中々手出シモ不相成様ニ為有之由、右応接央ニ立帰候
様御下知有之、皆々引取候由、跡ニテ夷人カ噂ニ、其
時ノ日本人ノ眼色サナカラ虎眼ノ如ク有タル由、千田
喜三次・内山伊右衛門杯其内ニテ候処、至極氣ノ体
ニ相心得候得共、必死ノ事ニ付左モ為有之筈ト、跡以
之直咄也、

一 松木ト五代ヲ被遣、彼是ノ談合被仰付候処、兎角生麥

一条ニ付テハ、理害得失相考候得ハ、イツレノ筋理義

此方へ有之候間、是非此方ノ相談ヲ聞届有之度、跡家
内女更子^(マコ)共ニテ実ニ取続モ出来兼、其上相手ヲモ不受

取候テハ孝養ニモ不相成、是ハ何方ノ国ニテモ道理ハ
一樣ナルモノニ付、聞分無之儀ハ有之マシク、是非共

ニ拾貳万兩程モ^{日本金ニテ六}可被遣、左候得ハ無難ニ引取、

若此相談承引無之候得ハ、終ニハ戦争ニモ相成候ハ、
相互ニ面白カラヌ世上ニ成立、此方ハ天理ニ不背候間、

決シテ追々御難題到来可致候間、此所ヲ能々勤弁有之

候様、分テ松木等へ申入、誠ニ無余儀訳合ニ候付、成行申出候処、甚御機嫌不宣、却テ疑ヒヲ被掛、彼方へ内通ニテモイタシ候様ヲ初メ近習ノ輩不機嫌散々ニテ、松木・五代モ実ニ詮方ナキ次第ト申事モ粗承候、勿論此返答ハ長崎ニヲヒテ可申入候、出帆イタス様杯ト申事モ為有之由、兎角英人モ埒明事ニテハ無之見受候ニ付、此上ハ致方ナク候間、何分迄之間蒸気舟三艘質物ニ可相受取、何ソ此方ヨリ強氣ニ奪取事ニテハ無之、此方ヨリ相願候儀ヲ聞入、無抛右ノ始末ニ相及候トノ事ニテ候処、此方ニテモハヤ奪取ラレ、甚タ言語同断也、モハヤ彼方ヨリ兵端ヲ開候故、砲発ヲ初メ候様被仰出、砂揚場ヨリ打初メ候ヨシ、

櫻島赤水ノ沖へ箱入ニテ夷人式人ヲ沈メ候ヲ、網ニカ、リ引揚候由、上官ノ者ニテ候半、金ノ金物ノ衣服着イタシ候由、是ハ則船將・次官ニテ候ハン、

一七月十九日、重野孝之丞長崎ヨリ帰候テ咄ニハ、英舟四艘江戸へ差越候由、中途ニテ魯西亞ノ船ニ逢、薩州ニテ戦争ニ及候処、船將二人鉄砲ニ打レ、其外一緒ニ廿五六人相果候由、三艘ハ何方へ差越候ヤ全ク不相分ト、吉留平右衛門・野村助七兩人ヨリ承候、

一七月廿七日喜入攝津殿着、攝津ハ江戸詰ニテ候処、去月廿二日英船薩州へ差越トノ趣、市橋殿ヨリ喜入殿へ被達、喜入殿ハ其時大圓寺へ御代參ニテ被差越居候処、一橋殿ヨリ御用申来リ、ケ様ノ事ニ候間兵端ニ不及様、英舟へ追付平和ノ取計可致旨、公役ト共ニ同廿五日、蒸気船ヨリ浦賀辺迄ト被存出帆被致候処、行ケ共く不追付、畢竟、公役人共恐懼セシ故、不追付儀ニテモ可有之ヤト被存候、夫故殊ノ外遲着ニテ、廿二日方出帆漸ク細島へ着被致、夫ヨリ陸地ニテ着被致候、公義船廿日朝前ノ濱へ着イタシ候、即日乗頭三人御春屋ニテ御馳走有之候由、蒸気船へハ此方ノ丸木船多ク取廻候ニ付、外乗組ノ者共恐懼セシ故カ、七ツ時分乗頭ノ三人ハ捨置、早々出帆イタシ候ニ付、丸木船六挺立ニテ差留方イタシ候得共、中々不追ニ付、右式故山川へ滞舟ノ儀モ無覚束、乗頭三人ハ翌廿一日阿久根迄差越、夫ヨリ船ニテ長崎へ差送候ヨシ、

一去ル二日ノ晚八ツ時分、肝煎ノ兒玉源五右衛門・川路正藏其外面三人、中辻番所辺へ扣へ居候処、矢来御門ノ方ヨリ城付ヲ、白狐老疋躰ニ御楼門ノ方ニ差越候ヲ見届、誠ニ不思議ニ存候間、当番ノ田中仲次郎へ相届

候由、全体肝煎共ハ御兵具方内へ、朝鮮ヨリ御持越ノ
稻荷社御建立ニテ、互肝煎ヨリ花香ヲ取心仰イタシ候
間、猶更不思議ニヲモヒ、神靈新タナル儀本ノマ、存候
半、去ル朔日方御納戸藏手伝ノ大伝筋カノ大山市太郎、諸所
ニテ官香壺把ケ様々ノ事ニテ頼具候様トノ事ニテ、
市中へモ全ク無之、実ニ心配イタシ候段申事ニ付、左
様ノ事ナラハ何把ニテモ可為頂候間、折角御祈願イタ
シ候様トテ遣候、其外段々不思議之事候間、聞マ、ニ
是ヲ記ス、隆盛院へハ 大中公御迦シニ相成候由、上
ノ山ヨリ火三ツ四ツ飛入、寺内鳴渡リ候由、其火ヲ現
ニ見候人モ有之、夫方杯ハ在番所隆盛院ヨリ南面ニ
テカヤンキ相直殊ノ由殊之外相
騒キ候由、八幡新田宮ニテ御祈禱イタシ候折柄、大丸
ノ様ナル火空中ニ相顕レ、其外御神殿動揺イタシ、段
々不思議モ有之、此節ノ大風ハ神風ニ疑ヒナシト申触
シ候由、又飯野ノ夫方共、阿ヲ田ノ川上左大夫所へ同
月二日ニテモ候ヤ差越候哉、昨晚中途加治木ノ辺ヨリ
見候得ハ、霧島嶺ノ火数限リモナキ様ニ相見得、誠ニ
不思議事ト申タル由、又一説ニ御厩ノ馬草払底ニ付、
朔日ノ夕方ニテモ候ヤ、伊集院居住ノ中間老人ニ藁取入
テ候由方ニ伊集院へ被遣候処、其晩夢ニ妙圓寺様鹿兒島ニハ

大変到来イタシ候ニ付、早々馬ノ沓ヲ可差上旨被仰付
候夢想ヲ蒙リ候付、直様沓ヲ用意イタシ、妙圓寺へ差
越候、御神殿動揺イタシ、直ニ其身モ出足イタシ候
処、中途ニテ大砲ノ音聞へ候ニ付、馳付候ヨシ、其外
様々異説有之候、

一櫻島ヨリ夷砲ノ玉ヲ持運候事凡七八俵ニテ候ヨシ、櫻
島ノ物主ハ肝付兵部殿兼西、別シテ働キ宜候、談合役ハ郡
山市人、大臆病ニテ、子ノ病氣ト名付罷帰度再三申入
候得共、軍役ノ事ニ候へハ誰モ人返答モ無之候得共、
抑々ニ被帰評判殊之外不宜、其後金山奉行ヨリ山奉行
見習ニ転役之由、旗預リ佐々木真兵衛、是ハ余程勇氣
モ強ク見へ称美ノヨシ、

一七月七日佐土原侯御出ニテ候、武ノ長倉所へ旅宿、上
下四五百人、五百目位ノ大砲・小銃銘々携へ、兵糧・
味噌等モ御持参ニテ候ヨシ、供方ハ大乗院坊主中ニテ
候ヨシ、候ヨリ御軋城ノ事頻ニ御留メ被成候由、昔寛
永ノ時分鹿兒島へ御引移ノ節、御城ハ八ヶ年程ニ御成
就、諸士其外色々ノ事相居候事、凡式拾年程モカ、リ
為申候由伝候承候、夫程ノ事ニ候得ハ、容易ニ御成就
ノ事モ六ヶ敷、殊ニ鹿兒島ヨリ大隅國へ御引移ト申候

得共、現在ニテハ纒力計ニ候ヘトモ、遠方ヨリ承候ハ、殊之外奥深ク御引込被成候筋ニ相聞ヘ候テハ、御外聞別テヨロシカラス、殊ニ御城ニ於テ彼是ノ御指揮モ可有之処、御城ヲ御迦シ、御陣宮ヲ被替候儀、是以心外ニ存程ニ御座候間、御移城之儀ハ決テ不宜儀ト類ニ被相止、夫迎モ御移城ニ御極メ被成候ハ、鹿兒島ノ御城ハ私ニ御預ケ可被下、相堅メ可申ト演説被致候処、三郎様御返答モ無之、小松杯ハ猶又一言モ得不被申、暫時黙念ト氣絶モ被致程ニ相見得候由專尊有之、佐土原侯ノ英名三ヶ国ニ轟キ候、又日置殿・諏訪殿其外有名ノ衆、或ハ御先代武功相立候姓名等御尋被成候由、右等之事ニテ殊之外御而殿ノ御機嫌不宜、毎々被召呼候儀ハ無之、別シテ籠末ノ御取扱ニ相^{見カ}得、何分君子ノ交リヲ不被存、遺憾トイフヘシ、

一拙者御納戸へ相詰居候処、御側御用人座ヨリ御用申来候間罷出候処、御側御用人平田伊兵衛殿ヨリ、只今國分へ御軛城ノ儀被仰出候ニ付、諸事手当イタシ候様被相達候ニ付大ニ驚キ、夫ハトフイフ事ニ候ヤ、今更ニ相成御軛城ハトウモ解シカタキ事也ト申候得ハ、我等モ其通存候得共、思召ノ事ニ付テハ迎モイ

タシ方無之、是ハ大中公ノ御託宣ニテ候ヨシノ事ニ候、左様ナラハ第一荷作具、其外諸紙類輿向ニ相拘候御用分ハ手当可致ヤト申入候処、其通可致旨承候、則御納戸藏役人へ相達、彼是取シラへ為致候、詰合ノ衆ヘケ様ノ事也、マツ珍敷事ニテ無之ヤ、山川迄御出陣可被成トノ御託宣出候ハ、則御出陣可被遊ヤト、打寄ソロノ物笑イタシ候、

一同廿三日、園田仁右衛門咄ニ、初テ英府へ応接ニ差越候人ハ今藤新左衛門・重野幸之丞、此者共ヨリ上陸ノ上応接可致旨再三申入候得共、上陸ハ相断候ヨシ、夫ヨリ廿九日西瓜売ノ手数ニ相成候得共、是以不相調、最初術計尽果候由、二度目ハ伊地知正治・折田平八被差越、三度メハ伊地知宗之丞・折田平八ニテ候由、七月朔日右宗之丞・平八夷舟ヨリ不帰来候ニ付、決テ捕籠ニ逢候半、水軍一番・二番・三番ノ三艘ヲ以夜打ニ可致旨被命、内々其用意イタシ候処、クレ時分被帰候由ニ付、夫故夜討ノ事ハ御取止ニ相成候由、二日大砲打合ノ時分、又々^{二番ヨリ三番迄カ}一番三迄沖ケ島危ク可有之候間、救援トシテ差越候様被仰出、出舟イタシ候得共、風波強ク中々一寸モ不被出、夫故我々共不難ニ助リ、千辛万

苦中々為恐入次第二ニ候由、仁右衛門直咄也、

一 戰爭後横濱ニヲイテ和睦相成、其後ノ応接役ハ岩下佐次右衛門・岩元太右衛門・重野孝之丞杯ニテ候ヨシ、殊之外出来^マ□ル風説ニテ、英船壹艘ハ和睦ノ印ハ此方ヘ為相渡下ノ事ニ候ヘトモ、全ク左様ニテ無之由、七万兩此方ヨリ為差出由、此金子ハ公辺ヨリ取替ニ相成候、其后長崎ニ於テ竹下清右衛門・堀清左衛門其外英館ヘ差越、殊之外馳走ニテ、十文字御紋所ノ灯炉ト、彼方ノ灯炉ト尙挺越ニ掛并ヘ、打解タル有様ニテ取持イタシ候由、

但此等之事ヲ聞、有志ノ面々突ニ不被忍次第也トノ評判也、

四七七 道島正亮紀事抄（開戦前ノ形況）

一 未申内ニハ返ス事ハ不相成ト引留候得共、主命モ有之候間、是非可罷帰旨再三申入候ヘハ、左様ナラハト申テ返候由、其内ニハ手強キト申入モ有之、随分可仕応ト申入モ有之候得共、四五拾人ノ乗組候ヘハ、中々六ヶ敷候半ト存候、段々評判ニテ候、

但今朝六ツ時分ニハ、惣テ御手当人数備付有之候由、

御両殿様御乘廻シノ御事ニテ、二丸御門ヨリ御五人様^{重富・官}之城^{ニモ}御馬ニテ御出、申述ヨリ御下リ、加治木前ヨリ枳形ヨリ御上リ、市成屋シキヘ御立寄、此所ニテ刺客ノ御左右御下知有之候半、山ヘ御上リ御近見有之候由ニ候、大鐘時分尙罷帰、御金一件吉留平右衛門ヘ御合イタシ候儀有之、市成屋シキニテ取合、今日刺客ノ御手数有之候旨チラト被申、拙者ニハ其内御殿ニテ誰カノ嘶ニテ承居候、イヨ^{本ノマ}レハ宜ク、是ハ敵舟モ心配候半ト申入候処、果テ其通ニテ候、今晚市成屋シキヘ御止宿ニテ候、

刺客ノ手数テ、異舟櫻島ノ地方ヘ相直リ候、

一 七月朔日晴、今日東風ニテ少シケ立、此方ヨリ度々舟ヲ被遣候得トモ、相応ノシケニテ寄事不相成候由、

一同二日、五ツ過ヨリハ東風ニテ候処、四ツ時分ヨリ漸ク風強ク、後ニハハエニテ横ツシニテ相止候、

此方ノ蒸氣船重富ノ前ヘハツシ居候処、今朝未明ニ異船式艘差越、皆人々不死内^{起力}ニテ誰カ乗入、早々卸候様申事ニテ目覚見候処、異人共ニテ、皆々大ニ驚キ候内ニテロ^レト乗移リ、六挺カラミノ鉄砲ヲ押当、ヨイ

ラスンハ可相殺ト其勢ヒ甚烈シク、其内ニハ勇氣成士ハ最早不遁儀トヲモヒ切、脇差二手ヲ掛候者モ有之候得共、乗頭ノ者ヨリ無理ニ兵端ヲ開マシクト頻リニ制シ候処、何分異人共ノ勢ヒ強ク、此方ハ^{本ノマ}ヲスカシ、殊ノ外狼狽イタシ、皆押落レ、水主共ハ船ヨリ海中ヘ飛入候由、異人共夫ヲマタ制シ、此舟此方ヘ相渡サヘスレハ殺ハ不致、静ニ上陸イタシ候様、皆々バツテラニテ上陸為致候由、右ノ内吉留某ハ手負、本田某ハ飛入夫ヨリ如何相成候哉、死体不揚候由、右ノ形行故重富ヨリ早打ニ、右ノ形行注進イタシ候半、

一四ツ時分ニモ候ヤ、御小納戸野村傳左衛門御納戸ヘ差越、蒸気舟モ異人モ被焼、決テ兵端トモ可相成、甚言語同断成者共^(マ)相成候、迎モ御打果可有之儀ニ被申候、夫ハ存外成モノト皆々申入、又靈府堂ヘ登セ見セ被成、矢張昨日ノ所ニ船掛リ居候、風モ追々吹出、此方ノ蒸気船壹艘ハ櫻島ノ地方ヘ引来、当分都合八艘相見得候由申事ニテ候、然処四ツ過ヨリ砂揚場ヨリ鉄砲打出ニ付、此方ヨリ台場ヨリ組々打出^{此發計}、異舟ハ不打、夫ヨリ異舟ヨリモ打出候処、靈府堂ヘ拙者ニモ^(馳)繼登リ候処、異船ノ大砲ハ漸ク台場辺ニテ落チ入、又ハ舟ヨ

リ二三町ノ所ニテ打込候モ有之、ハカ／＼敷儀ニモ不相見得、其上此方拾開モ打所ニテ、漸ク三ツ四ツモ打様ニ相聞得候、決テ此方ノ玉薬ヲ焚カサセル手筈ナラヌ、夫ヲ不知メツタニ打候テ、決テ玉薬モ費ニ可相成ト評義イタシ事ニテ候^{已後承候ハ、第一、其所ニ吟味イタシ候}、風雨ハマス／＼強ク^{先達テノ風言、追々異船ノ大砲モ強ク、如何成事ニテ強クリモ強ク有之}、追々異船ノ大砲モ強ク、如何成事ニテ候哉、御殿ヨリ浄光明寺ヲ目當、殊ノ外打込候由、祇園ノ台場東ノ方ニ異舟上リ、横打ニ打込互ニ烈シ敷打合候処、終ニ此方鉄砲悉ク打クツサレ、此上雨ハ強ク、終ニ八ツ時分ニ相成候得ハ、此台場トノ争ヒハ打止候、其内八ツ前ニテモ候ヤ、異舟小舟少々相痛候ヤ、風ニモ被犯候ヤ、祇園洲ニ打揚ラレ横様ニ相成、別テ難儀ノ体候ヘトモ、陸地ニ大砲ノ手當無之、夫ヲ打取事不能、彼舟ヨリハ其様ニ相成候得トモ、大砲モ打出、劍筒モ殊ノ外打出候由、此時分ニテ候ヤ、蒸気船壹艘殊ノ外煙立、決此方ノ鉄砲ヨリ打移リ燃付候半ト、一統吐氣ヲ揚、^{本ノマ、(放カ)}候処段々煙ノキ候得ハ、異船ニテハ無之、重富前ヨリ率來候此方ノ舟ニテ、皆今迄ノ喜ヒ打サメ、與サメタル事ニテ候、コノ方鉄砲打初ルト、外式艘ハ燒捨候由、琉球船式艘モ燒捨候由、左候テ新

台場・辨天波戸・大門口・砂揚場ヨリ打候得トモ、何分ニ遠方ニテ、辨天波戸ヨリハ壹挺ニテ拾五六発ツ、モ射候半ト申事ニテ候、七ツ過ニハ互ニ大砲打止、カノ方ニハ異舟ヨリ打揚花火等揚候由、

但祇園台場ニテ税所清太人戦死、其外手負ハ無之、川上龍衛殿祇園ノ後ニ被扣候処、宮ノ社ノ石垣ニ玉当リ、石ノカケニテ目ノ辺へ手疵ヲ被負、クニく被廻漸ク被罷帰候由、家来モ老人死候由、染川五郎右衛門下人頭ヲ出候処玉飛来リ、目ヨリ上ヲ打切即死ノ由、其外南林寺内へ川邊郷士其外ニ三人、免々タヘ居候処玉飛来老人即死、〔志〕ノ僧杯手負、其外ノ手負ハチンく有之候得共、拾四五人位ノ手負ニテ候半ト申事ニテ候、

八ツ時分ニテモ候ヤ、築地辺火起リ候由、炮煙ノ様纒ニ相見得候ヘトモ、大砲殊ノ外烈シク、御城ノ山ニモ幾度モ参リ候半、御納戸ノ辺ニモナンベンノハリ落来リ、皆々恐懼イタシ候ヲ漸ク相静メ候、夜入時分城ケ谷ノ口迄差越見候処、其火ノ勢ノ烈シキ事、肝ヲ消候様ニ有之、終ニ冷水谷ハ一家モ不殘、興國寺モ〔本ノマ、〕毛惣テ焼失、大形丸焼ノミニテ目モ当レヌ次第ニ候、

夜明時分ニハ惣テ鎮火相成候、

但上ハ福昌寺通廣馬場ヨリ東ノ方ハ残り、上ノ馬場ハ今和泉屋シキ・重富屋シキ刃片類ヨリ北手ノ方残り候、

一同三日五ツ過迄風不止、雨モ間々不降止候、昼時分ヨリ西風ニナリ、少シハ静ニ相成候、今朝ヨリ度々御小人ヲ靈府堂又々護摩所濱島ヘ見セ候処、蒸氣ヲ立候テ、異変モ無之トノ事ニテ候、夷船ハ矢張是迄通ノ所ヘ府カ、リ居候、七ツ前ニ相成、火矢式ツ計御殿ノ辺ヘ相開キ候間〔此大打出ノ音ハ無之、西ノ方ト御殿、モハヤ初リ候半トノ方ニテラウトイフ言計イタシ〕申入候内ニ、賊舟ヨリ大砲打出、我々共ニモ則仕度イタシ、御城山ニ五六ツ、御棧門ヘ壹ツ、其外殊ノ外稠敷下馬辺ヘ壹ツ、其外二丸辺ヘ幾等モ来リ候、今日ハ御城モ片時モタマリ兼候半ト、皆一途ニヲモヒ居候処、夫ヨリ段々山川ノ方ヘ向ヒ出船ノ姿ニ候段、物主ノ者共ヨリ追々申来候、夫ハ不思議ニ候、則靈府堂ヘ登リ見候処其通ニテ、壹艘ハモハヤ天保山ノ辺ヘ皆出帆ノ体ニ候、追々沖ケ島ノ台場ヘ掛リ、凡四丁位モ為有之由、能矢比ニ付、五挺程相備居候故打立候処、相応ニ打込、壹艘ハ湯銅壺ヲ打破候半、白キモノ多ク出、平

木ノ様ナルモノ多ク飛散、多勢ノ声ニテ殊ノ外夥數音
 イタシ候由、夫ヨリ燃出^{マカ}ノ台場ヨリモ打立、天保山ヨ
 リ打立候処、異船ヨリ殊ノ外強ク打立、沖ケ島ヘハ最
 初ハ八部目位ニ相当候得共、其後ハ峠ニ打コスリ候様
 ニ来候得共、何分舟ヨリハ高ク候間、玉ハ空ク飛行、
 其内壱丁ノ鉄砲ニ打当リ、井上^次トイフ人ヘ右ノ鉄
 砲スレ、足ノモ、ヘ鉄砲疵被負、自分ノ大小刀共ニ鉄
 砲ノ台当リ候ヤ、ネラレ候ヨリ外ニハ怪我人モ無之、別
 テノ無難ニテ候、暫時ニ沖ケ島モユルク様ニ有之、夫
 ヨリ夕方ニ相成、互ニ鉄砲モ相止候、何様ノ訳ニ出帆
 イタシ候儀モ不相分、初メハ沖ケ島辺ヲ打立、又前ノ
 濱ヘ寄来候半ト人々疑惑イタシ候得共、拙者ト本城ハ
 モハヤ決テ来ル事ニテハ無之、無故石炭ヲ費シ、玉粟
 ヲ損失スル訳ニテ無之ト断合候、

一同四日晴、今朝六ツ半時分靈府堂ヘ登リ見セ候処不相
 見得、東ノ方御納戸上高見ヨリ見候処、最初参リ候辺
 ヘ舟カ、リイタシ、少々ハ蒸氣モ相立候筋候得共、何
 分不相分トノ事ニテ、昼時分迄度々見候得共、矢張同
 前ニテ、八ツ過モ候ヤ蒸氣モ強ク立、此方ヘ相向候様
 トモ相見得申トノ事ニ付、拙者ニモ登リ見候処、追々

出帆ノ姿ニ候、夕方ニ相成候ヘハチリンノ辺ヘカスカ
 二相成、人々安心イタシ候、

一同五日晴、今日承候ヘハ、根占ノ地方ニ壹艘碇泊、六
 艘ハ午未ノ方ニ向ヒ出帆ノ由申事ニ候処、長崎ヘモ六
 日方迄ハ不来トノ評判ニテ候、根占ノ沖ノ異船時々ノ
 ヲロシヲ揚、又ハ地方ヘ火矢ヲ打込候事共モイタシ候
 由、決テ損候舟ナラヌト申事候得共、此方ヨリ被遣候
 儀モ無之候ヤ、何モ不相分候、

但拙者或人ニ断ニハ、此異船ニ付テハ此方ヨリ丸木
 舟ヲ遣、何様ノ訳ニテ滞船イタシ候ヤ、破損等モ
 イタシ候ハ、随分修甫イタシ可遣、又薪水等モ
 尽果シ候ハ、可遣ト申聞候ハ、異船ノ破損モ明
 白ニ相分リ、又此方不懼ノ人モアリ、彼^{本ノマ、辰}ヲ^{服之}サ
 スルノ意モアルヘシ、右付此方ヨリ不見廻ノ儀モ、
 稍失策ナラヌト申聞候ヘハ、尤也ト申事ニ候、

一五日ノ日東郷長州所ヘ寄候処、平川ノ抱地ノ者差越、
 異人ノ装束又ハ椅子ノ様ナルモノ、或ハフトンノ様成
 モノ段々流寄、其上終夜タ、キ音イタシ、何分舟相損
 候半ト申タル由、殊ニ鉄砲袖杯上リ、千眼寺ヘ御届ニ
 相成、皆々見候由、八木昌平^巻ヘ為見候処、此装束ハ士

已上ノ衣服ニテ候由、羅沙ニテ装束等モ宜候由、乳ノ上ノ辺ヘ壹尺廻リ計鉄砲玉疵相見得、血モ付居候由、一同七日方異船式艘山川ヘ差入候得共、夜入根占ノ異船ノ所不相知候故、ノヲロシヲ揚候得共、根占ノ舟ヨリモヲロシヲ揚候テ、夜中ニ引出列帰候半、八日ノ朝異船出帆ノ由ニ候、

一同七日ニ異人壹人櫻島ノ網舟ニカ、リ上リ候間、則御届ニ相成、廣小路ヘ持出、皆々見物イタシ候由、乳ノ上打返シ有之、胸ヨリ臍ノ下迄断ワリ腸ヲ取候テ、能ク縫ヒ候筋ニ相見得候由、一日サラシモノニテ、翌日谷山ニテ御仕置被仰付候由、其外死体六人カラケモ谷山沖ニテ網ニカ、リ候ヘトモ、クサレ候由、皆突流シ候由、外ニモ又荒田浜杯ヘモ流寄候由候ヘトモ、不取揚候由、死人モ殊ノ外多ク候半ト取々評判ニ候ヘトモ、未慥成儀不相知、追テ可相記候、

但八日谷山ニテ御仕置ノ節、先年牢舎被仰付候折田與右衛門御赦免ニテ、御軍賦役被仰付、鑄製方掛被仰付候ヤニ評判有之候、此折田牢屋ノ頭ニ相成候ハ、此節ノ異船白キ胴巻ヲイタシ候舟ニテト無之ヤ、又小舟ノケ様成舟居候半ト申候ヘハ、丁度

其通ト申候処、此大船カ世界三艘ノ内ヨリ第一、此小舟別テ働キ候由扨ト色々為申由、此方千眼寺ヘ相聞得、直ニ被召出候由、

但異人ノベツクハリ居候処、イカ様ニテ此様成鼻ニ候ヤ、異人ハ死候ハ、鼻ハベツハリ候モノナランカト人々中候処、此折田申ニハ、此鼻ナキ国一種有之、此モノ国砲術モ船モ別テ違者ニテ、殊ノ外強惡ノ国ニテ、西瓜売ノ衆モ其鼻ナキ者ハ不見候ヤ、又出席不致ヤト為申由、

一御舟蒸氣船ヘ乗付居候人数川上源右衛門・渡邊彦兵衛・同善四郎・上野彦次郎・前田時之丞・和田彦兵衛・本田彦十郎・五代才助・松木安右衛門・鎌田新右衛門・海江田清之丞・郷田吉兵衛・吉留直次郎・本ノ次郎其外岩切仲左衛門・坂本與市・梅田市藏、外ニモ多ク可有之候ヘトモ、右通承候、其内吉留片ニ手疵ヲ負、重富ニテ療治方イタシ、少々快候故罷帰候由、本田モ手疵ヲ負海ヘ落入、夫ヨリ死体不揚候由、松木ト五代ハ彼方ヘ現在被召捕候由、七月十六日方皆共逼塞慥ニ被仰付候ヨシ、

一初テノ応接ニハ今藤新左衛門・重野厚之丞被遣、二度目ニハ伊地知正治・折田平八ヲ被遣、三度カ西瓜売ニテ、其節ハ町田六郎左衛門被遣、其余ハ惣テ西瓜売候半、追テ名前可書記候、

一松木ト五代被遣、後々ノ談合被仰付候処、兎角生麥一条ニ付、諸家内女童子供等ニテ取続モ実ニ出来兼、其上相手ヲ不取候テハ、先祖ノ孝養モ無之トノ事ニテ候半、是非金拾貳万兩此方金ニテ六万兩位ノ由可被遣旨無余儀申入候得共、御承引無之、終ニハ松木坏彼方ノ最負ヲ可致坏ト、却テ嫌疑ヲ受候体ニテ別テ込入、左様ナラス英人ノ方モ今ハ致方無之候間、何分可相分迄ノ間蒸氣船ヲ質物ニ可相取儀ト、此方ヨリ強氣ニ奪取候ニテハ無之、此方ヨリ相願儀ヲ御聞入無之故、無抛右ノ始末ニ相及候トノ事ニテ候、此方ニテハモハヤ右通奪取候上ハ、モハヤ彼方ヨリ兵端ヲ開候故、鉄砲ヲ打初メ候様被仰出候トノ風説ニテ、確トシタ事ニテハ無之候得共、承候マ、記置候事、

一櫻島赤水ノ辺ノ沖へ、箱入ニテ異人ヲ沈メ、網ニカ、リ候ヤ引揚候ヨシ、殊ノ外上官ノモノナラス、金ノ重モノ様付居ヨシ、

一七月十九日、重野厚之丞長崎ヨリ罷歸候テ申事ニハ、異舟四艘江戸へ差越候由ニテ、ヲロシヤ中途ニテ逢、薩州ニテ戦争ニヲヨヒ候処、船将式人初砲ニ打レ、ボンベン玉来リテ、一所ニ廿六七人相果候由、三艘ハ何方へ差越候ヤ、全ク不相知トノ段承候故、廿日ニ吉留平右衛門・野村殿ヨリ承候事、

一喜入攝津殿江戸詰ニテ候処、去月廿三日英船薩州江差越トノ趣、市橋公被承、喜入殿ハ大圓寺へ御代參ニテ差越候処へ、市橋殿ヨリ御用申来、ケ様トノ事候間、是非兵端ニ不及ケ様可取計、英船へ追付平和ノ取計可致被申付、夫故浦賀刃迄ト被存、公義船へ乗付、公役人ト共ニ出帆被致候得トモ不追付、終ニ細島ヨリ去ル十七日御当地へ着有之候、江戸ヲ廿五日ニ出帆ニテ、浦賀刃迄ト被存候間、石炭灰モ格別用立無之、夫故殊ノ外遲着ノ由、同廿日朝、公義舟前濱へ差入候処、七ツ時分丸木船多ク取廻候故、直ニ蒸氣船出帆イタシ候由、二日ノ朝御殿本ノマノ辺へ、白旗ノ様ニ相見得、其下ニ白帆出現、御兵具方肝煎二三人慥ニ拜見イタシ、余リ不思議ニ付、当番ノ物頭田中仲二郎殿へ届申出候由、当日承候、勿論朔日方ニテモ候ヤ、手伝ノ大山市郎太

ヨリ願ノ儀御座候、拙者親類ノ者御兵具所へ、高麗御持越ノ稻荷社有之、夫ヲ預リ居候者ヨリ、当分官香切レ候テ別テ込入申候間、忝把相願呉候様申来候段申出候間、夫ハ尤成事、忝把ニテモ拾把ニテモ可相願候間、折角御祈念イタシ候様申付候、其外隆盛院ニハ、

大中公モ御迦シ被遊候故カ、上ノ山ヨリ火カ三部位モ飛入、又ハ寺内動揺イタシ、其火ヲ現ニ見ル人モ有之、夫方杯ハ殊ノ外相騒キ候由、妙圓寺モ其通、南林寺ハ異国人數万人、大炮劍筒ヲ松樹寄来候程ニ、小僧共マホラニ相見得、皆々戸々ヲ立候処、法位何事ナラント出ラレ候得共、何モ無之、又御春屋ニテモ夜ノ内二三度モ騒動イタシ候儀モ為有之由、隆盛院ノ儀ト慥成事ニテ候、其外ノ儀ハ慥ニト不承候得共、聞置マ、記置候事、

一 櫻島ヨリ玉ヲ持出候由、七八位位トモ又ハ拾七位位トモ申事ニテ候、物主ハ肝付兵部殿ニテ別テ被相働候由、談合役ハ郡山市助ニテ、余程相後レ候由ニ相聞候、夫程玉来ルニ、忝人モ輕我人無之事、不思議成モノニテ候、

一 湯ノ浦ノ百姓赤水ノ台場ニ駈来リ、四挺ノ大炮ニ忝人

ニテ玉竿ヲ取大働キ、後ニハ鉄砲ヲ打事遠ク相成候付、沖ケ島差越御加勢ヲ致度再三申候得共、何分海上ヲ隔テ候ヘハ夫モ不叶、別テ殘多ク体ニテ候由、此等砌ニ畠ケヲ被貫候由、人々郷士ニ相成候トモ申事候得共、未慥ニ不相知候、士ノ子ニテ貫、赤子ノ時百姓ヘクレ候由承候、

一 國分ノ御軀府一件ニ付、大中公ヘ御クシヲ御取被成候処、忝反迄ハ御合廻無之、十一反毎ニ抑々ニ御託宣有之候ヤニ取沙汰イタシ、皆々物笑ニテ候、

一 佐多ノ沖ヘ蒸氣船壹艘、彼ノ七艘ノ類船ニテモ候哉、廿八九日ノ間碇舶イタシ居候処、何方ヘ差越候哉不相見得候様相成、如何様ウツ杯卷候処有之候間、卷込候半カト申事ニテ候、又ハ帆柱相見得、段々舟ノ木杯モ上リ、鶴丸金之進・伊集院平治殿ヘ相付、根占表ヘ守衛方ヨリ差越居候処、此金之進ヨリ佐多ノ辺江夷人百人位モ打寄候段申来候由、十六七日ニタカ杯召列被差越候由、水入イタシ候ハ、本ノマ、〔光石カ〕可相分候、又去ル十七日方肥前米ヲ積来候水主大門口番所ニテ、甌島ノ沖ヘ夷船三艘、二艘ハ帆柱計相見得、壹艘ハ半方ハ水入候ヲ現ニ見候テ罷通候様、大概是ハ慥成事ニテ候半ト、

大山市郎太ハ七月十九日嘶也、未慥成事ニテ無之候、
〔島津忠寛〕佐土原侯へ去ル七日方被差越、上下四五百人五百目位
 ノ大砲并銘々小銃携へ、兵糧等モ持下候テ、此方御左
 害ニト少シモ御成不被成候由候ハ、武ノ長倉所へ御滯
 在、供方ハ大乗院坊中へ罷居候由、

但候ヨリ御移城ノ事涯々被成候由、昔寛永ノ時分鹿
 兒島へ御引移ノ節ハ伝へ承候得ハ、御城ヲ八ヶ年
 程御カ、リ御成就、諸士廿年程モカ、リ候由、ヨ
 シ夫程ノ事ニ候得ハ、左候得ハ容易ニ御成就ノ儀
 モ六ヶ敷可有御座、殊ニ鹿兒島ヨリ右端国ニ御移
 城ト候へハ、遠国ニ相決候テハ、殊ノ外與ニ御引
 込被成候筋ニ相響、御外聞別テ宜マシク、其上御
 城ニヲヨヒ彼是ノ御挨拶モ可有之所、御城御廻御
 陣營ヲ被替候儀、是以私ニハ人外ニ存程ニ御座候
 間、御移城ノ程ハ決テ悪シク可被止、是非共ニ御
 移城被成候ニ付テハ、鹿兒島ハ私へ堅メ可被仰付
 旨演説有之候処、三郎様御一言ノ御答モ不出来マ
 シクニ、小松杯ハ一言モ無之候ヨシ、佐土原侯ノ
 英名三ヶ国ニ轟レ候、

但日置殿・諏訪殿勤方、或ハ御先代様ノ御代御

軍役等相勤、名前等御尋被成候由、右等ノ事
 ニテ殊ノ外御両殿ノ機嫌不宜、兼テ御取極籠
 末有之候由、何分小人ニテ君子ノ交リヲ不被
 知、遺憾ノ至ニ候、

一 応接ノ次第猶又慥ニ承候間記置候、上陸イタシ候ハ、
 何分応接ニ被申越候処断申出候間、廿九日西瓜売ノ手
 數ニ相成候得トモ、是モ不相調、夫故術計尽果候、

一 七月朔日、今度重野杯応接ニ差越、二度メニハ伊地知
 正治・折田平八杯差越、三度目ニハ伊地知宗之丞・折
 田平八ニテ候由、伊地知・折田帰り方、別テ送相成候
 付、決テ捕ハレニ逢候半、水軍隊一番・二番・三番ノ
 船ヨリ夜打ヲ掛候様被仰渡、既ニ打立候処、クレ時分
 漸ク罷歸候由ニテ、夫故夜打ノ事モ御取止被仰付候由、
 二日打初メ有之時分、沖ヶ島別テ危ク候間、水軍隊一・
 二・三番差越候様被仰出候得共、風雨ニテ進ミ兼候由、
 千辛万苦中々込入候由、園田仁右衛門七月廿三日嘶也、
 一 船頭ヨリ此官ノ諸事働キ宜、度々軍功モアリモ々、惣
〔比也〕
 都督ニモ相成程ノ人物ニテ、蒸氣船拾艘トモ易カタキ
 者ノ由、夫故後難如何可有之カ、ヲロシヤモ別ニ危ミ
 居候由、矢張英ナニカツハートカ何トカイフ廿七八ノ

者、余程宜人物ニテ、此節ノ騷動ヲ承リ、再ヒ事ヲ起
ス事不可然、自分ニ可差留旨申入、長崎ヲ出帆イタシ、
江戸表へ差越ヨシ、又此方ヨリ長崎ニテ魯西亜ト応接
ヲ可致旨申入候処、国許へ殊ノ外急キ事有之、其儀不
相調旨申事候得共、ケ様戦争ニヲヨヒ候間、是非逢度
トノ事申入候処、左様ナラハ迎、暫時逢候ヘトモ余程
急成事ニテ、シハシノ事ニテ互ニ相分レ、早々出帆イ
タシ候由、英国ニ^{本ノマ}□ノニテ候ヤノ評判ノ由、亥七月
廿六日承候事、

但此英^{本ノマ}□モ申入トハ相見得候ヘトモ、是モ矢張ツク
ノヒ銀ヲ取ル候故ナランニ、何分疑敷事也、

一九日ニ夷船横濱へ着イタシ、江戸表へ相知、十二・三
日兩日飛脚被差立、江戸表ノ評判^{本ノマ}□レ候由、夷
舟モ殊ノ外相痛、四艘差イタミ候由、白カヘノ舟ハ未
不承候、

但晦日晚ニ飛脚着イタシ候由、

四七八 道島正亮家記鈔

先年隠謀ニテ、山田・近藤カ一列井上右京・木村仲
之丞其節欠落イタシ^{仲之丞カ兄輝山仙斷落、度ニ付切腹被仰渡候}、兩人共ニ筑前

候へ隠レ居、昨年 三郎様御上京ノ時分兩人共ニ被
召出、京都ニテ色々奔走イタシ、彼是御都合相成、
井上ハ藤井良節ト改名イタシ居候処、去ル亥四月方
御当地へ着イタシ、悴迄モ召列、家内ハ跡ヨリ着可
致トノ評判、京都ニテハ評判余リ不宜トノ聞得有之
候得共、直ニ又々上京イタシ候由、馬場助ノ進殿嘶
ナリ、亥五月廿五日御広敷御用人へ転役、子四月於
京都御納戸奉行へ転役ノヨシ、木村殿当分京都御留
守居方書役ニテ候ヨシ、

但亥七月英船七艘渡来ノ節、良節カ説アリ、余リ
ヲカシク説ニ付、之ヲ略記ス、夷船入侵属々計
略アリトイヘトモ不計故、其時良節カイフニハ、
早ク上陸イタセハヨヒ、アカレハツンアカレハ
ツン、ア、上陸セザルニヨリ氣ガモメルト頻ニ
慨歎セシカ、俄ニ兵端ヲ開キ互ニ大砲打立シカ
ハ大ニ驚キ、我ハ御姫様ヲ守護スル役ナリトイ
フテ、今迄ノ広言ハ不顧振シ、垣ヲ漸ク駈ケ登
り候ヨシ、此ヲ聞テ片腹ヲ抑へサル者ハナシ^{明治}

<sup>三年春ノ比ヨリ木村ハ大中公ノ村司、藤井ハ新町宮ノ村司、
兩人共ニ不淨ノ身ヲ以神靈ニ付ケルハ、神靈ヲ輕蔑スル</sup>

タリ、然レトモ其者其所ニアル間ハ砲発頻リニシテ、其砲發甚タ善ク法ニ合ヘルカ故ニ、我カ為ニハ大ニ妨ケトナレリ、就中我前隊ノユライリス船ハ、其彈丸ニ中リテ大ニ傷害ヲ得タリ、第二時三十分^{我ハツ}ニ至リテ、実丸并破裂丸雨霰ノコトク我船ノ近傍ニ飛來リ、船將チヨスリンオヨヒ指揮官ウイルモツトハ、同一ナル破裂丸ニ中リテ死セリ、又一丸ハ甲板ニ落テ、爰ニ居リ合セタル士官并ニ大砲掛リノ者共死傷アリテ、無事ナル者ハ只一人ノミ、此後程ナクシテ諸台場多クハ砲發ヲ止メタリ、諸船ハ其処ヲ離レス、レエシユホース船ノミ直ニ一ツノ台場ノ下ニ來リテ砲發シケレハ、之カ為ニ台場ノ者トモ退クニ至レリ、アルクス船并コツケツト船ハ此レエスユホース船ヲ助ケンカ為ニ^(事實)其処ニ至リ、斷ヘス市街オヨヒ台場ニ向テ砲發セリ、レエシユホース船ハ凡ソ五時半頃^{我夜七ツ}ニ其所ヲ去リ、コツケツト船・フアーホツク船ハ晩景ニ至ル迄、市街ニ向テ斷ヘス破裂丸ヲ砲發ス、我船ノ此ノ如キ砲發ヲ為セシカ故ニ俄ニ市街ニ火災起リ、諸物ヲ悉ク焚燒セリ、フアーホツク船モ又日本ノ大船五艘ヲ焚キ、製造所ヲモ燒ケリ、夜ニ入りテ風益烈敷、第十時頃^{凡我夜四時頃}

其火熾ニシテ、闊サ一里余ニ延燒セリ、其火ノ響モ烈シカルヘケレトモ、其処ヲ去ルコト遠ケレハ聞ヘス、諸物ヲ燒失スルノ夥シキハ、定テ人ヲシテ驚カシムルニ至ルヘシ、日曜日^{我七月三日}ノ朝ニ至リテモ、市街及ヒ製造所ノ火猶未タ消ヘス、薩摩ノ蒸氣船并ニ日本船燒失シテ海ニ沈メリ、其内一艘ノ蒸氣船ハフアーホツク船之ヲ打沈メタリ、午前十時^{凡我四時}ニ至リテ、天始テ晴ル、ヲ以テ、戦死シタル士官ヲ葬レリ、午後二時半過頃^{我八ツ時}船隊再ヒ碇ヲ上ケ、徐々ニ進行シ、台場并ニ市街ニ向テ破裂丸ヲ打放シタレトモ、台場ヨリ実丸ヲ打放スルコト二十箇^(事實)ニ下ラス、且其実丸我船ヲ傷害スルニ至ラス、市街ノ火ハ漸々四方ニ燒広リ、^(停光明寺ヲ云ナラン)堡塞モ又其災ヲ受ケタリ、其後モ我諸船ヨリ打放スル砲彈ノ勢ハ甚タ盛ナリ、夜ニ入りテ我船鹿兒島ヨリ二里ヲ隔テ、小村落アルトコロヲハナレテ碇泊ス、

第二

同断

^(隊邊)一英國軍艦ノ一割、六月廿七日未中刻鹿兒島港ニ至ル、其港口ノ幅凡三里、舟路ノ水底深クシテ三四十尋ニ至レリ、其城下南向ニシテ、夫ヨリ凡三里ヲ隔テ、戌中

刻水底十七尋ノ所ニ碇泊スレトモ、台場一ヲモ見ス、
二十八日卯中刻碇ヲ起シ、鹿兒島城下ニ向ケ進入ス、
船路ノ深サ水底凡十五尋ヨリ二十尋ニシテ、(マゴ)鳥嶋トイ
フ城下ノ南ニ当ル出崎トノ間ニ、棒桁ヲ以テ小州ヲ表
シタル所ノ左ヲ經テ、城下ヲ少シ過キ、辰中刻水底二
十尋ノ所ニ至ル、

一城下ノ備嚴重ニシテ堅固ニ見ユ、台場コトニ薩州ノ旗
ヲ飄シテ、人充滿セリ、其場ノ傍ニ五隻ノ唐様ノ船
恐是ラクハ琉球、オヨヒ數艘ノ日本大船アリ、

一我等城下ノ前ニ投錨セシニ、薩州士官二人小舟ニテ来
ル、公使英國ヨリ難題ノ望ヲ述ヘタル書簡ヲ、彼等ニ
送ラシム、其決答ノ時限七月三日未上刻迄トス、即日
未中刻、又薩州ノ副使警衛四十人ヲ率ヒテ来レリ、然
ルニ彼ノ警衛ヲモ副使ト共ニ上船ヲ許サ、レハ、上船
セサルヲ怒リシ体ナルヲ以テ、之ヲ許シ上船セシム、
程ナク又一隻ノ小舟来ルト見ヘシカハ、副使ヨリ公使
ニ云フ、持来リシ返簡ニ誤錯アレハ還サルヘシ、又再
ヒ何日ニ回答スヘキヤ、今定メルコト能ハスト云、由
テ我等不意ニ襲ヒ有ラハヤト慮リ、碇ヲ起シ、敵ノ砲
丸達セサル所ニ至リテ備ヲナス、

一戌上刻右士官再ヒ来テ、一封ノ返簡ヲ達ス、此書日本
文ヲ以テ記シケレハ、速ニ解スルコト能ハス、由テ公
使彼ニ向テ云フ、明朝使ヲ送ラハ、我書翰ノ意ヲ許諾
スルヤ否ヲ知ルヘシト、

一七月朔日辰上刻、一隻ノ船来リテ其回答ヲ請フニ、我
等慮ル所、薩州ヨリノ返簡其意尤モ許諾シ難ケレハ、
以後白旗ヲ建テ来ラスンハ、白旗ハ和親、通信イタシ難シ
ト答フ、

一巳上刻、水師提督及ヒユライリス船長ハ、マルクト共
ニフアーホツク船ニ移リ、六月二十六日ニ於テ見出シ
タル薩州ノ蒸氣船三隻ヲ見、且其辺ノ深淺ヲ量ラン為
メ港口ニ進ムニ、右蒸氣船水底三十尋ヨリ四十尋ニ至
リ、陸ヨリ五十間ヲ隔テタル所ニ、猶未タ碇泊セリ、
未中刻水師提督ユライリス船ニ帰来シテ、アルクス・
コツケツト・レエヌユホー・フェール・フアウホツク
船將等ニ、我明朝彼蒸氣船ヲ掠奪セント、旗章ヲ以テ
合図ヲナセハ、酉ノ下刻各船起碇シ、翌二日寅中刻彼
所ニ発向ス、
巳上刻コツケツトハコンテスト船、アルクスハシルシ
オルシケレー船、レエシユホースハインケラント船

奪ヒ来ル時、海岸ニ於テ国民聚集シテ此体ヲ見居タリケレハ、必驚キシナラン、彼ノシルシオルケレー船ニ

於テ、或人ヲ俘獲ス、一人ハ姓柏ト称ス、元医者ニシテ善ク横文ヲ読シ、西音ヲ能クシ、此人日本使節ニ從ヒ

歐羅巴各国ニ至ル者、今薩州ニ仕テ船司トナレリ是松木広庵

(弘安ノ惡)、又一人ハ小谷ト称ス、同州ノ海軍提督或一

等ノ船司タリト云、彼等我掠奪ヲ拒マサルノ上ハ、陸

地ニ送ラレシヨリ、寧ロ我等ヲ英国水師提督ニ渡サレシヤト請求スレハナリ此二人、七月十一日夜神奈川ニ上陸セシムト云、疑フヘシ

一午刻已前、各台場中ニ備禦ノ体ナリ、同刻風東南ノ間

ヨリ吹キ、退潮ノ折ナレハ風力愈加リ、颯風ノ勢ナル時、出崎ノ台場ヨリ一声ノ合図ヲ放ツト、他ノ台場ヨ

リハ実丸・破裂丸ヲ我各船ニ連射ス、其弾丸僅ニ我船

ノ表ヲ越ユ、三四ノ破裂丸ハ船傍ニ飛来シテ、又臼砲

ニ破裂丸ヲ込メ、我カ各船ヲ打碎ントス、我船幫モ又

一列ノ大砲ヲ打放スレ共、当時海風烈シク、我舟大ニ

動揺スレハ、我砲モ又功ヲ奏セス、水師提督前ニ掠奪

セシ彼ノ蒸氣船三隻ヲ焼キ、而シテ各船共ニ我カ船ニ

随行スヘキ号令ヲナセハ、彼ノ船忽チ灰燼トナル、是

ノ形状見ルニ忍ヒスト雖トモ、止ムコトヲ得サレハナ

リ、右蒸氣船三隻ノ貨物ヲ除キ、船ノミノ価三十万ト

ルラルニ至ル、

同刻各船共起碇シテ列ヲ備へ、未上刻第八番ノ台場ニ

向ヒ、樞軸砲名砲ヲ打放セルニ、此破裂丸悉ク功アリ、

未ノ中刻我カ各船、右側一行ノ大砲ヲ彼ノ台場ニ打放

セルニ、実丸・破裂丸トモ悉ク功アリ、アームストン

砲名ニ於テハ最モ精功アリ、此時敵ノ打放モ又甚シク、

弾丸頻リニ飛来シテ綱具ヲ断絶ス、我カ橋上ヨリ眺望

セシニ、我砲丸彼ノ台場ニ備ヘシ大砲四門ノ台ヲ打碎

ケハ、其台場ヨリ遁レ去ル者多シト云フ、時ニ強風陸

手ニ吹クニ随ヒ、尤モ大ナル台場ニ近寄り、硝煙四面

ヲ蔽ヒタレハ、我船彼ノ台場ヲ去ルコト幾程アルヤ知

ルヘカラス、凡五六丁ノ隔ナラント察スルノミ、

ユライリス船ハ、敵陣三十七砲門ノ烈シク連発スルニ

敵対セルトキ、未下刻船將シヨスリン・副將ウイルモ

ツトノ二人船中ノ橋上ニアリテ、一弾丸ニ射殺セラレ、

水師提督及ヒ船司ハークルモ又同シク其橋上ニアリシ

カ、僅ニ此危ヲ免レタリ、

水師提督ハ此騷擾ニ動カス、從容トシテ自若ナルコト

敬服スヘキナリ、併シ事静カナル後、傍ニ彼等ノ斃タ

一 已上刻、第七番・八番ノ台場甚タ荒レ居タリ、巳ノ中刻、昨日戦死セシ者ノ尸ヲ收斂ス死者・傷者委シク別記ニアルヲ以テ、要ニ略ス、

一 午刻城下及ヒ製鉄場烟火猶収マラス、未ノ中刻我海軍ノ一隊備ヲ為シ、起碇シテ駛進シ、兩岸ノ台場ヲ攻撃シ、城下ニ破裂丸ヲ射放ス、凡未中刻、第十一番及ヒ出崎(後島洗七出)ノ台場中ノ火薬庫ヨリ砲火劇發セリ、初メ出崎并

ニ櫻島ノ台場ヨリ打放スレトモ、申中刻ニ至リテ止ム、一同刻城下ノ南方ニ放火ノ發スルヲ見ル、申ノ中刻七島ヲ過キ、城下ノ南ニ去ルコト凡三里余、水底七尋ノ処ニ碇泊ス、戌中刻シヨースハルテレク死ス、是昨日ノ傷害甚シケレハナリ、

一 七月四日、我海軍ノ一隊港口ヲ離ル時ニ、城下猶焼ケテ、七八里隔ツルマテ其煙熾ンナルヲ見タリ、

第三

横濱新聞

千八百六十三年第八月二十六日、我文久三年七月

十三日

一 不利太尼亞海軍船(隊カ)、鹿兒嶋ニ於テ戦争ノ最委細ナル事情ヲ記シ、近日出港ノ伝信船ニ託シテ、之ヲ四遠ニ達セント欲ス、依テ他之商用新聞開板二三日遅引スレ

トモ、我等ノ罪ニ非ス、

一 不利太尼亞海軍總督ノクーブルハ、天俄ニ変シ、暴風相起ル際ニ当テ、不意ニ敵砲ノ連射ヲ受ルト雖トモ、聊驚動ノ意ナク整々堂々ノ勢ヲ張り、一戦大功ヲ奏スルコトハ、又之ヲ撰挙シタル女王政府ノ大幸タリト謂ツヘシ、而シテ又水士・水夫等ノ總督ニ於ルヲ見ルニ、之ヲ愛敬シ、之ヲ畏服スルコト至レリト云ヘシ、亦以テ總督ノ人トナリヲ知ルニ足ル、

一 海軍船幫及ヒ英公使ト其屬官ノ諸士ヲ乗セテ、六月二十二日鹿兒嶋ニ趨クノ途中、日向灘ニ於テ上海ヨリ来リシ蒸氣商船一隻ヲ見ル、

一 七月八日コロモラント船ニ係ルノ新聞ヲ得テ、後チ十一時ヲ経ス、其戦争ヲ公ニセント我等既ニ周旋シ、其大意ヲ記シテ、同日之レヲ開板ス、

一 右海軍一幫六月二十七日午下、繁華ナル鹿兒島港ニ入津、海岸ヨリ凡三里余隔テ、南方ニ碇泊セシコト等ヲ後ニ細記ス、又港内ノ針路等箇中ニ詳ナリ(迭ス)

一 海岸ニハ數艘ノ日本船ト四五艘ノ琉球船ヲ繋ク、英國船幫ハ其朝辰刻碇泊ノ後、薩州ヨリ四五人ノ士官小舟ニ乘来リ、何国ヨリノ船、何様ノ用アリテ来ルヤヲ尋

問ス、

一 英國公使ヨリ、大事件ヲ日本文或ハ和蘭文及ヒ英文等ニテ記シタル書翰ヲ此士官等ニ託シ、国守又ハ鹿兒嶋ノ長官ニ贈ル、其決答ハ同廿九日未ノ上刻ヲ以テ限トナス、

一同未中刻、副使ト号シテ一士官衛卒四十人ヲ率ヒテ、惣督船ニ来ル、然ルニタシカナラスシテ、右士官衛卒ニ指揮シテ共々帰ル、之如何ナルコトニヤ、俄ニ事ノ變スルコトアリヤト疑フ、

一同夜戌ノ上刻、右士官再ヒブレツキ船ニ来リテ、薩州長官ヨリノ日本文ニテ記シ、英公使江贈ル書簡ヲ出ス、(川上信馬ノ名テ爾書簡ヲ云)

一 其書翰ヲ翻譯シ、後又英公使存意ヲ述ント欲スル故ニ、和戦ノコトハ明日之ヲ談スヘキト答ヘリ、其返簡ノ意英國ノ主意ニ違フト雖トモ、甚タ理アルヲ以テ又明朝之ニ再答セントス、依テ明朝再来スヘシ、若来ラスンハ兵端ヲ開クノ旨ヲ告グ、

一 今薩州ノ返書ヲ写シ、以テ諸君ニ示サントス、

薩州ノ答書大略

一 左ノ諸条只風説ヲ記スルノミニシテ、未タ其証ヲ得ス、依テ諸君一見ノ後火中ヲ請フ、

一 此海軍一幫鹿兒嶋港ニ至ル前、英國ヨリ嘗テ望ム事件

ニツキ、江戸政府ヨリ薩州へ告命ナシト云、

一 償金一条ニ付テハ、江戸政府ノ宰相ト談決セサレハ、彼レ此条ヲ決シ難シ、依テ薩ノ長官江戸政府ニ趨クヘシ、

一 東海道ニ於テ、リチャルトソンヲ殺害セシコトハ、嶋津三郎ノ指揮セシコトニ非ス、又日本ニオイテ、故ナク他ノ人ヲ殺スモノハ之ヲ死刑ニ行フ、又薩公其殺害セシ人ヲ捕ント探索スルト雖トモ、遠ク隠レテ其居所ヲ知ラス、

一 若シ薩州ニオイテ外国人ヲ欺カン心アラハ、他ノ罪人ヲ出シテリチャルトソンノ殺害人ト称シ、惣督ノ手ニ渡ストモ其信偽ヲ知ルヘカヲサレトモ、彼ニオイテモ後日詐偽ノ露ハレンコトヲ怖レテ、斯クハ爲サ、リシ、一 外国人ト 大君トノ約条ハ、彼レ大ニ不快トセリ、如何トナレハ、 東照宮ノ遺法ニ反スレハナリ、

一 大君外国人ト和親貿易スルコトハ、日本ノ政府ニ背ケリ、則外国人等日本列侯ノ通路ヲ妨クルコトヲ許セシハ、是 大君一大難事タルヘシ、若シ如斯セハ、日本諸侯其領国ニ往来スルコト能ハサルヘシ、又リチャル

トソノヲ襲撃セシハ、日本国律ニ反セサルナリ、故ニ薩州ノ不直ト云フヘカラス、之ニ依テ彼レ何ソノ英国ヨリノケ条ニ服従センヤ、

一前ニ述ル所ノモノハ、薩州ヨリ回答シテ最モ重大ナル事件ノ大意ニシテ、我等ノ伝聞セシ所ナリ、

一薩港大船八隻之内三箇ノ蒸気船ハ、外国ノ造製ニカ、ル、之ニ數種ノ積荷アリ、其俵之ヲ焼ク、

一火薬庫數ヶ所ヲ焼キ（一ヶ所焼ク、即チ桜島洗ヒ出シニアリ）、及ヒ砲台數ヶ所ヲ撃破ス、

一鹿兒嶋城及ヒ市中或ハ製鉄場ヲ焼ク（鑄鉄局モ）

一砲台中及ヒ數所ノ死人ト、傷ヲ負フ者其數ヲ知ラス、又材器ノ損失之ニ從フ（死傷者ノ名後ニアリ）

一ブリッキ船ニ至ル薩ノ長官告ケケシニ、我國主總督及ヒ公使其他諸高官ヲ城中ニ誘引シ、彼ノ地ニ於テ此事件ヲ談判スヘキヲ云ヘトモ、英国諸官背ヒテ行カス、

一前条ハ英国ノ諸官ヲ誘引シテ、或ハ縲絏ニ繋キ、或ハ刎ネントスルノ策ナラン、

一下ニ記載セル右船幫中ニ有リシ知音ノ人ヨリ得タルユライリス船ノ大ナル長官ハークルノ手記セル戰場圖ヲ以テ、此諸条ノ不足ヲ見ルヘシ、

(Barradas)
ユライリス船死傷人名

一シヨスリンク 船將

年三十七

右ハ大砲ノ彈丸ニテ、額ヨリ以上ヲ打飛シテ即死ス、

一ウエルモット 副將以下各船長各艦軍ナ
ルヲ以テ、其官ヲ略

年三十

右ハ脳部ヲ打飛ハシテ即死ス、

一ヘアーテー

年二十二

右ハ頭骨ヲ打碎カレテ即死ス、

一フレミン

年二十三

右頭ノ中央ヲ打摧カレテ即死ス、

一ハイテスユイ

年二十二

右同上、

一ウワレン

年十九

右頭顱ヲ打碎カレテ即死ス、

一スミチ

年二十二

右同上、

一 ヤアーテレー
(Yardley)

年二十四

右同上、

一 ヘーウンキス
(Hawkins)

年十九

右両股ノ骨ヲ碎カレテ死、

一 ヘアーテン
(Harding)

年十七

右破裂丸ニテ腕及ヒ筋骨ヲ摧キ、肺ヲ引キ裂カレテ

死ス、

一 シヤヒリン
(Jepson)

年二十二

右破裂丸ニテ右肩ヲ打撲シ、顔ヲ火薬ニテ燻燻ス、

一 シヲネス
(Owen)

年二十九

右砲丸木材ニ触レ木片ヲ散セルニ、右腿ヲ傷ル、

一 ケンネト
(Kenich)

年二十八

右破裂丸ノ火薬ニテ顔ヲ燻燻ス、

一 ヒトメン
(Hittman)

年二十二

右同ク火薬ニテ顔面ヲ燻燻シ、木片ニテ同所ヲ傷ル、

一 エハアト
(Ahnert)

年二十二

右両眼ノ外頬ヲ木片ニテ傷ツキ、左股ノ肉ヲ火薬ニ

テ燻燻ス、

一 スキンネア
(Skene)

年十九

右火薬ニテ顔ヲ燻燻ス、

一 ミーチェル
(Micheal)

年二十二

右カスリ疵

一 レート
(Reath)

年二十三

右左臂ヲ火薬ニテ燻燻ス、

一 フラクス
(Foss)

年二十二

右両肘及ヒ外股小腹ヲ火薬ニテ燻燻ス、

一 (Oam)
ヲアーム

年十九

右ハ左ノ外股ヲ打撲ス、

一 (Kempert)
トウヘリイ

年十九

右ハ木片ニテ左足ヲカスリ疵ス、

一 (Barock)
ハアヤマク

年四十

右左肘及ヒ左脇ヲ火薬ニテ燻焦ス、

一 (Howan)
ホーデン

年二十六

右破裂丸ニテ顔ノ右頬ヲ打碎キ、下顎ハ頷ノ半ヨリ

左ノ方奥歯迄、医者ヲシテ切り放タシム、

一 (Leary)
レーリ

年二十一

右ハ右股ヲ破裂丸ニ傷リ、眼及肘ヲ火薬ニテ燻焦ス、

一 (Gard)
サル

年二十七

右ハ左肘及ヒ指ヲ打撲ス、且顔ヲ燻焦ス、

一 (Kend)
ニール

年二十四

右木片ニテ胸ヲ打撲ス、

一 (Smit)
ステフ

年二十三

右木片ニテ左足ノ肉ヲ捻り取ラル、

一 (Bartlett)
ハアトレート

年十九

右火薬ニテ顔ヲ破傷ス、

一 (Alexander)
アレクスセンテ

年十九

右内股ヲ打撲ス、

一 (Michelet)
ミッチェル

年二十二

右足ヲ木片ニテ傷リ、顔ヲ火薬ニテ燻焦ス、

一 (Fryer)
フエール 船傷者人名

一 (Amstrong)
アームストロン

年二十八

右額及ヒ足ノトリコノフシヲ木片ニテ打傷ス、

一 (Brent)
フリエント

年四十四

右顔及ヒ左股ヲ木片ニテ打傷ス、
一フエレル
(Pencil)

年十八

右ハ左股ヨリ臂ヲ木片ニテ打傷ス、

一メリー
(Merry)

年二十六

右ハトリノコフシヲ木片ニテ打傷ス、

一ロヒンソン
(Kammasan)

年二十一

一タフソン
(Oaton)

年三十一

右ハ指ヲ木片ニテ打傷ス、

一ミッチェル
(Mitchell)

年十六

右ハ顔及ヒ外股ヲ木片ニテ打傷ス、

一コツケット船死傷人名
(Copet)

一フイン
(Fin)

年二十七

右ハ両股ノ骨ヲ破碎シテ即死、

一ゲール
(Gale)

年二十九

右ハ右股ノ骨ヲ打碎ク、後ニ死ス、

一デニー
(Denny)

年二十六

右ハ左ノ膝ヲ砲丸ニテ傷ル、

一ヘーリス
(Harris)

年三十

右ハ左股ヲ砲丸ニテ傷ル、

一ユエンフラト
(Manford)

年二十五

右ハ股ヲ打撲ス、

一ウエララー
(Vernon)

年十七

右ハ左脇ヲ打撲ス、

一フェルシース船死傷人名
(Perry)

一ヘート
(Heat)

年十九

右ハ両股ヲ所々打碎ヒテ死ス、

一ヒイト
(Pitt)

年二十二

右ハ左腿ヲ破傷シ、右股ヲ打撲ス、

一キイルヒテ
(Cairn)

年三十九

右破裂丸ニテ右手ヲ破傷ス、

一コーク
(Cook)

年四十

右ハ右手ノ三指ヲ破傷ス、

一エーレン
(Ayer)

年十七

右ハ木片ニテ右脇ヲ打撲ス、且突傷ス、

一ビクス
(Beers)

年二十九

右ハ右腕ノ肉ヲ所々破裂ス、

一ナイト
(Knight)

年二十五

右ハ右腕ノ肉ヲ破傷ス、

一スユイトウス
(Sutors)

年二十九

右ハ左ノトリコノフシヲ木片ニテ衝キ傷ル、

一キイソン
(Cairson)

年二十一

右ハ両腕ヲ木片ニテ打撲ス、

一カスル
(Cale)

年三十五

右ハ右腕及ヒ右腿ヲ木片ニテ所々打傷ス、

一アークス船傷者人名
(Arms)

一ハアネス
(Barnes)

年三十一

右ハ木片ニテ股ヲ傷ル、

一フヨンテン
(Fontain)

年二十九

右同シク頭ヲ傷ル、

一ケンネット
(Kennet)

年二十

右同シク股ヲ傷ル、

一ラーテネル
(Lardner)

年二十二

右同上、

一トウイン
(Daynes)

年二十

右同シク腕ヲ傷ル、
(Cooper)
一クウヘウ

年四十

右同シク頭ヲ傷ル、
(Reichoweg)
レエスホース船傷者人名
(Chiron)
一チエイロン

年二十八

右ハ左腕ヲ截断ス、
(Keenan)
一キーマン

年二十八

右ハ左手ノ大指ヲ引裂ク、
(Chen)
一ヒユア

年十九

右ハ右腕ヲ打撲ス、

以上各船ノ死傷合セテ六十三名

第四

横濱新聞

千八百六十三年第八月二十六日

即我文久三年癸亥七月十三日

薩州鹿兒島ニ於テ英国船隊戦争ニ及ヒタル諸事件、近

頃我輩之最モ感スル処ニシテ、交易会社其戦争ノ便信ヲ待チ兼ネタル故ニ、定式ノ新聞ヲ開板スルコトハ一両日ヲ延シテ、此別段緊要ナル新聞ヲ開板スルコトニ至リ、是レ止ムヲ得サルニ出ルコトニシテ、実ニ当然ノコトナルヘシ、

鹿兒島ノ戦争

今茲ニ記スルハ、英国ヨリ薩摩侯ニ詰問シタル始末ノ事件ナリ、但シ近頃嚴重ニ固メタル、鹿兒島ニアル処ノ君(官人)并ニ不幸ニ逢ル住民数千人、若シ此後ニ至リテ我兵力ニ堪ルコトヲ得ルニ至レハ、我輩反リテ困難ヲ受クルニ及ヘシ、今義ト理トヲ兼具セル盛戦ニ於テ、勇闘シテ死セルモノ等ノ朋友、是レヲ悲傷スルハ勿論、我輩モ亦大ニ是レヲ悲シムト雖トモ、此戦争ノ終始ヲ觀察シ、我損亡ヲ以テ敵ノ損亡ニ比スレハ甚少ク、其功績又意外ニ出ルヲ以テ、少シク心ヲ慰ムルニ足ル(死傷ノ数ニ於テ損亡比較ハ如何シ)

是ノ如ク教護ニシテ且無類ナル讐敵ノ所行ハ、東方ノ人支那・日本等ヲ云フヲ惑シ、遂ニ自分困難ヲ招クニ至ラシムヘシ、但シ縱令当今ノ勢実ニ如此也ト雖トモ、今ヨリ後若シ是ヲ悔、其罪ヲ改ムルニ至ル時ハ、此人亦直ニ怜

惻ノ人トナランハ、敢テ疑ヘキニアラス、是事我輩亦大ニ希フ処ナリ、但シ今度敵ノ暴業ニテ、自ラ大ナル損亡ヲ招キシカ故ニ、日本ニテ英国提督コーフルノ名ト、且其船隊ノ名大ニ盛ナルニ至レリ、英国船隊第一等ノ頭タル提督コーフルノ幸運ヲ、我輩亦英国政府ノ為ニ祝スルナリ、其勇猛銳敏ニシテ、最モ烈シキ敵砲ニ向ヒ、且ツ悪シキ天氣ノ機會ニ乗シテ戦ヒタルハ、我兵東方ニオイテ海軍ノ勢ヲ顕ハシ、名譽ヲ得タリトイフヘシ、我輩戦争ノ模様ヲ諸船ニ問ヒタルニ、人皆頗ル此提督ノ勇猛銳敏ナルヲ賞美シテ、此將ハ既ニ以前モ此ノ如キ偉功ヲ顕シタル事アリトイフテ、大ニ是ヲ崇敬セリ、我輩又大ニ是ヲ喜ヘリ、

英国ミニストルコロネルニールハ、船隊ノ全権ヲ握リ（公使陸軍大佐）テ、本月六日（即我六月廿二日）当港（横浜港）ヲ出帆シテ鹿兒島ニ赴ケリ、但シ夫ヨリ二十二日（我七月八日）迄ハ我輩其戦艦ノ事ニツキテ、何事モ聞サリシカ、交易蒸気船一二隻追々上海ヨリ当港ニ到着シタルカ故ニ、此蒸気船玄海灘（日向灘）ヲ過ル時、右ノ船隊ヲ見受タリトイフ事（ノミ）ヲ承知セリ、又当月二十一日（我八月一日）コロモラント船到着セシ故此船中ノ人ヨリ珍シキ新聞ヲ得テ、大ニ是ニ感スルコ

トアリ、是故ニ我輩速ニ之ヲ開板シテ、世ニ公布セント料リシニ、右ノ船来着ヨリ一時（半時）ヲ過スシテ、又最肝要ナル報告ヲ得テ、之ヲ別段ニ開板スルニ至レリ此事我輩総会社中ノ大喜悅トイフヘシ、我会社ノ鹿兒島ニ赴ケル者ヨリ差越シタル報告ノ様子ニ寄レハ、英ノ船隊壯麗ナル鹿兒嶋港ニ赴キタル事ニ付テ、種々ノ美談モアル様子ナレハ、速ニ之ヲ世ニ公布セン事ヲ大ニ樂ミ居レリ、鹿兒島トイフ事ハ、鹿兒ノ栖止スル嶋トイフ事ナリ、何故ニ如斯ク名付タルトイフ事ニ、古昔其近辺ニ、鹿兒ノ盛ニ居タルヲ以テナリ、

本月十一日（我六月廿七日）午後、我船隊市街ヲ距ル事南八里（一我八里五十五間、八里）ヲ隔テ碇泊セリ、碇泊ノ形状ハ港ノ図ヲ見テ知ルヘシ、又十二日（我六月廿八日）ニ至リテ、戦隊港ヲ測量スルハ容易ナリシカトモ、其深サ甚大ナルカ故ニ、碇泊所ヲ探ルニ数丈ノ綱ヲ用ヒテ、遂ニ市街ニ近ツキタレトモ、其甚タ深キカ故ニ碇泊ノ妨ケトナリタリ、但シ海岸最近ノ処ニ数隻ノ日本船碇泊セリ、尤モ其内ニテ最大ナル者ハ、琉球船ナリ、○英国ノ船隊ハ、廿八日水曜日ノ朝第八時半過（我五時半過）頃、提督ノ意ニ任セテ碇泊シタルニ、間モナク薩摩ノ役人二三輩来リテ、英国

ノ船隊ハ何故アリテ此処ニ来ルヤ、且外国人ハ何ヲ求ルヤト尋問シタリ、是ニ於テコロネルニールハ、兼テ日本語・和蘭語并英語等ニテ認メタル英国ノ詰問書ヲ此役人ニ渡シテ、之ヲ鹿児島ノ重役ニ達シ呉レヨト述ヘタリ、但シ之ヲ渡時、其答書ハ十三日我六月廿九日午後第二時我八迄ニ指越スヘシトイフ事ヲモ云贈リ、然ルニ十三日ニ至リテ、午後第三時我八時頃ニ執政ノ次席ト称シ、衛士四十人ヲ卒ヒテ提督ノ船ニ来レリ、是蓋戦争ノ以前ニ、提督船ノ容子ヲ探索セントシテ、多人数ヲ率ヒ来リタル者ナラン、然ルニ右重役ノ跡ヨリ、一隻ノ端舟ニテ使者来リタレハ、重役ノ者ハ立帰レリ、但シ此使者来ルト、直ニ事ノ模様變セシト見ヘ、重役ハ立帰ル時、衛士一同此端舟ニ乗移ルヘシト命シテ立帰レリ、然ルニ又使者ハ何角心ニ插ムコトアルニヤ、暫クノ間ハ、答書ヲ差出スヘキヤ否ヤヲ考居ル体ナリキ、此夜第八時我五時頃、其重役ノ者再ヒ提督ノ船ニ来リテ、薩摩薩摩侯及ヒ上座執政ノ書簡ノ日本語ニ認メタル者ヲ、コロネルニールニ渡シタリ、但シ此書ヲ翻譯スルニハ、多少時刻ヲ費スカ故ニ、右公書ニ就テニール我存念ヲ述ルニ、已ヲ得スシテ翌日マテ延引スルニ至レ

リ、扱其後ニールハ此公書ヲ見タルニ、其中ニ認メタル趣意、英国ノ詰問書ニ対スレハ、尤モ不当ナル者ニシテ、頗ル重大ナル事ト見ヘタリ、扱テ其翌日ニ至リテ、前日ノ答書ヲ受取ラントテ、薩摩ノ役人又船ニ来レリ、此故ニ此役人江毛前日ノ書簡、重大ノ事ナル事ヲ屢申聞ケ、此後此船ニ来ル時ハ、必和睦ノ旗白旗ヲ其船ニ樹テ来ルヘシト告ケ置キタリ、
一我輩薩摩ノ答書ノ写シヲ今茲ニ記載シテ、看官好新ノ意ヲ喜ハシメント欲ストイヘトモ、未タ之ヲ得サルヲ以テ、之ヲ他日ニ送リテ、唯人々ノ談話ニテ聞ケル大略ヲ茲ニ載ス、
一薩摩ノ執政書簡中ニ認タル処、蓋シ左ノ意味ナルヘシ、
一今度貴国ヨリ贈ラレタル詰問書ノコトニ就テハ、幕府ヨリ未タ我高貴ノ君薩摩侯ニ報告セラレシコト、決シテ之ナシ、償金催促ノコトハ、足下之レヲ幕府ニ申立ラルヘシ、其所以ハ、我君ハ幕府閣老ヨリノ証簡ヲ受ケ取ルニ非サレハ、如斯事件ニ付テ彼是取計ラフヘキコト能ハサルハ、日本ノ法度ナリ、且ツリCharles Lenox Richardsonチャルトソンヲ東海道ニテ殺害シタル者ノコトニ就テハ、我輩能ク之ヲ知ルトイヘトモ、其時島津三郎久光

其事ヲ如何取計ヒタルヤ否ヤ、我君之ヲ知ラス、但シ日本ニ於テハ、故ナクシテ人ヲ殺セシ者ヲ、嚴科ニ処セラル、ハ勿論ナルカ故ニ、速ニ其者ヲ穿鑿セント力ヲ尽シタレトモ、如何シテモ是ヲ尋出ス事難シ、是レ決シテ外国人ヲ欺罔スルノ意ニ非ス、若シ其罪人ヲ捕押ル事モアラハ、直ニ其者ヲ引出シ、リチャルトソンヲ殺害セシ者ナリトテ、提督ノ手ニ渡スコトモアルヘシ、足下等ヲ欺罔スレハ、我君ノ榮名ヲ汚ス事故、決シテ右様ノコトハ為サ、ルナリ、然レトモ我君ハ大君ノ外国人ト取り結ハレタル條約ニ関ラス、右ノ條約ハ權現様ノ法度ニ背キタル事ナレハ、如是場合ニ至リテハ、唯大君一人ニテ其処置ヲナスヘシ、如何トナレハ大君古來ノ法度ニ背キテ、外国人ノ日本ニ渡來スルヲ許容シ、且ツ自在ニ歩行スルヲ許シテ、日本諸侯ノ通行ヲ妨ケシムレハナリ、若シ之ヲ久シク許シ置ク時ハ、遂ニ日本ノ諸侯旅行スルコト能ハサルニ至ルヘシ、又リチャルトソンヲ襲ヒタルハ、日本ノ法律ニ背キタルコトニ非サルカ故ニ、我君ノ過ニハ非サルナリ、是レニ因テ考レハ、足下等ノ詰問、一トシテ採用スヘキコトニ非ス、

是ヲ以テ我輩察スルニ、此薩摩ノ答書ハ最モ重大ナル事ニテ、此事遂ニ大戦争ヲ起スノ源トナリ、夫ヨリ又^(砲艦ヲモ合シテ)大船八隻ヲ燒打スル事ニ至レリ、扱其中二三隻ハ外国製造ノ蒸氣船ニシテ、砂糖等ノ如キ高価ノ荷物ヲ積ミタル者ナリ、又二三ノ火薬庫ヲ打飛シ、台場數ヶ所ヲ破壞シ、殆ト鹿児島ノ市街ニアル諸産物オヨヒ其製造所・鋳造所等、其外城郭迄^(城郭ニ非ス、寺院ナリ)モ悉ク灰燼トナセリ、此破壞セル諸物件等ノ員數ハ量ルヘカラス、

又戰爭中市街ニ於テ死傷セルモノ、其數拳テ數フヘカラス(市街流彈ニ中リテ死傷、合計四五名ニ止ル)

一始メ薩摩ノ士、提督ノ船ニ來リテ言ヒケルハ、我上役ノ者ヨリ、全權ノ提督コープル并ニ全權コロネルニール等ヲ招待スルノ役ヲ蒙リ、殿堂又ハ城中ニ招キ、薩摩ニ促シタル詰問書ノ取扱ヲナスヘキ旨ヲ命セラレタリト云ヘリ、然レトモ此事ハ遂ニ全ク空クナリタリ、後ニ考レハ、此事恐ラクハ提督并ニニール等ヲ陥弇ニ入レントスル策ナルヘシ、若シ提督等此策中ニ陥リテ、其招ニ応シ上陸スル時ハ、釣橋ヲ落シテ之ヲ生捕ルヘシ、其時船隊大ニ憤リテ市街ニ向ケ砲發セハ、其生捕タル者ノ首級ヲ刎ヌヘシト、船隊ニ申送ルハ必然ナル

ヘシ、且此策成就シタル時ハ、其生捕ヲ霧島ニ禁固スルナルヘシ、霧島トイフハ、堅固ニ備ヲ立タル薩摩市街ノ一ニシテ、周囲五十里ノ島ナリ(地理ヲ知ラサリシハ、此事ヲ以テ知ルヘシ)、次ニ記載セル事件ハ、我会社船隊中ニアリテ記載セル事ナリ、最モ勤功ヲ顯シタル善良ノ士ハルクルノ、我等カ為ニ設ケタル絵図アリ、之ニ照シテ以テ見ル時ハ、悉ク了解スルニ足ル、

右両新聞同文ニシテ訳文異リ、故ニ参考ノタメ姑ク合記ス、

(薩州紀事(国立公文書館所蔵)・鹿児島戦争横兵新聞(八戸市立図書館所蔵)にて校訂)